大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

1983年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

1983年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡西地区出土の古墳時代土器

長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ　正誤表

本文

頁	行	誤	正
47	8	3°である。	35°である。
170	9	長原4B層内	長原4B層基底面
185	20	共伴している。	共存している。

図表・図版

頁	図表	個　所	誤	正
3	表1	番号5の発掘調査	KR89－1	KR89－2
114	図86	水糸高	TP＋8.8m	TP＋10.0m
172	図135	最下	長原4B層内	長原4B層基底面
図版	34	下写真	左右逆転	
図版	36	下写真説明文	長原4B層内柱列	長原4B層基底面柱列

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

Ⅲ

1983年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1992.3

財団法人 大阪市文化財協会

序　　文

1981年に始まった「長吉瓜破地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査は、この地区に埋もれていた多くの貴重な歴史資料をこの世に知らしめることになったが、本書はその報告書の３冊目となる。

本書で報告する地区は「瓜破台地」と呼ばれる台地上を中心としたもので、おもに古墳時代から平安時代の集落遺跡の報告であり、長原古墳群の発掘報告を中心とした前二書とはやや趣を異にする。

とくに長原遺跡における古墳時代の集落については、本書で初めて報告する機会を得たことになる。これらは前二書で報告した長原古墳群を造営した人々の集落跡であり、この地区の古墳時代を考えるうえにも古墳とならぶもう一つの重要な資料であるといえよう。

また、奈良時代の建物は長原遺跡の発見当初から注目されていた古代の水田を開発・経営した人々と密接に係る資料であるし、平安時代の建物は古代から中世への変動期の資料として重要なものである。

このように本書収録の資料は、これまで報告してきた古墳群や水田などの代表的な資料についての研究を、新たな視点から一層深めるものとなろう。今後、続刊の刊行に向けてさらに努力を続け、研究成果をできるだけ報告していきたい。

財団法人　大阪市文化財協会
理事長　　佐治　敬三

例　　言

一、本書は1983年度大阪市都市整備局長吉瓜破地区区画整理事務所施行の大阪市平野区における土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。

一、発掘調査の作業は財団法人大阪市文化財協会調査課長代理（当時）永島暉臣愼（現調査課長）の指揮のもとに、下記の担当者と期間で行った。

NG83－ 9次（109㎡）	平野区長吉川辺３丁目	黒田慶一	1983年４月20日～1983年５月26日
NG83－23次（120㎡）	同　長吉長原１丁目	木原克司	1983年７月７日～1983年８月４日
NG83－32次（2810㎡）	同　長吉長原西１丁目	京嶋　覚	1983年８月23日～1983年12月９日
NG83－44次（1200㎡）	同　瓜破東８丁目	黒田慶一	1983年11月１日～1984年２月８日
NG83－46次（200㎡）	同　長吉川辺２丁目	植木　久	1983年11月４日～1983年12月15日
NG83－52次（260㎡）	同　長吉川辺１丁目	植木　久	1983年12月12日～1984年２月４日
NG83－53次（720㎡）	同　長吉長原西２丁目	京嶋　覚	1983年12月16日～1984年３月12日
NG83－70次（750㎡）	同　長吉長原西２丁目	京嶋　覚	1984年２月21日～1984年３月22日

一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市都市整備局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社）・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。

一、本書は、当協会調査課長永島の指揮のもと、同課の木原（現鳴門教育大学助教授）・植木（現調査課長代理）・黒田・京嶋・趙哲済・高井健司・清水和明・松本百合子・久保和士が分担・執筆し、編集は京嶋・高井が行った。執筆者名は担当個所の最後に記し、文責を明らかにした。巻末の英文目次の作製には調査課岡村勝行があたり、ケンブリッジ大学大学院生Simon Kaner氏の御協力を得た。また、発掘調査および資料整理・図表作製などの作業は多くの補助員諸氏の援助を得た。さらに、蛍光Ｘ線分析は調査課伊藤幸司が奈良国立文化財研究所保存科学室肥塚隆保氏の御協力を得て実施し、石器遺物の検討にあたっては奈良国立文化財研究所松沢亜生氏、地層および動物遺体の鑑定では大阪市立自然史博物館那須孝悌・樽野博幸両氏の御指導・御協力をいただいた。記して深謝の意を表したい。

一、遺構名の表記は、溝（SD）・土壙（SK）・掘立柱建物（SB）・竪穴住居（SB）・井戸（SE）・ピット（SP）の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を順に付した。ただし、古墳に関しては、当協会刊行『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱで決定し、その後改訂した番号を用いた。

一、地層名は、第Ⅲ章第２節を除いて、第Ⅱ章に掲載した長原遺跡標準層序に対比したもので、長原１層・・・と表記する。また、遺構検出面の認定・呼称は『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲにしたがう。

一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標（第Ⅵ系）の値に換算した。水準値はＴ.Ｐ.値（東京湾平均海面値）を用いた（本文中ではTPと略称）。

一、本書で使用した写真は、遺物については徳永囡治氏が、遺構は当協会調査員が撮影した。

一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。

本　文　目　次

序文

例言

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の調査……1
　第１節　瓜破台地の考古学的環境……1
　　１）はじめに……1
　　２）瓜破台地上での発掘調査……2
　第２節　調査の経過と概要……7
　　１）長原遺跡西地区……7
　　２）瓜破遺跡東南地区……9
　　３）長原遺跡南地区……10
　　４）長原遺跡中央地区……11
　　５）長原遺跡東南地区……12

第Ⅱ章　長原遺跡の地層……15
　第１節　長原遺跡の地形と地質の概要……15
　第２節　長原遺跡の標準層序……19
　　１）完新統……19
　　２）上部更新統および完新統の下部……25

第Ⅲ章　調査の結果……33
　第１節　長原遺跡西地区の調査（83－32・53・70次調査）……33
　　１）西地区の層序と遺物……33
　　２）弥生時代以前の遺物……39
　　３）古墳時代の遺構……61
　　４）古墳時代の遺物……76
　　５）奈良時代の遺構と遺物……94
　　６）平安時代の遺構……99
　　７）平安時代の遺物……116
　　８）鎌倉時代以後の遺構と遺物……127
　　９）小結……129

第２節　瓜破遺跡東南地区の調査（83－44次調査）……139
１）東南地区の層序と遺物……139
２）飛鳥時代の遺構と遺物……142
３）中世の遺構と遺物……148
４）時期不明の主要遺構……150
５）近世の遺構と遺物……152
６）小結……153
第３節　長原遺跡南地区の調査（83－46・52次調査）……155
１）南地区の層序と遺物……155
２）古墳時代の遺構と遺物……157
３）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物……162
４）小結……166
第４節　長原遺跡中央地区の調査（83－23次調査）……167
１）中央地区の層序……167
２）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物……169
３）平安～室町時代の遺構と遺物……170
４）江戸時代以後の遺構……175
５）小結……175

第Ⅳ章　遺構と遺物の検討……177
第１節　長原遺跡の地層をめぐる諸問題……177
１）長原遺跡の地層の年代……177
２）長原遺跡の遺構・遺物の年代論に係る層位学的知見……183
第２節　古墳時代後半期における土師器の器種構成……187
１）はじめに……187
２）土器資料の概要……187
３）土師器の器種分類……188
４）器種と調整手法の消長……197
５）まとめ……198

引用・参考文献……201

あとがき
索　　引

図版目次

1　長原西地区　Ⅰ・Ⅱ区全景
左：Ⅰ区
右：Ⅱ区
2　長原西地区　Ⅰ区北部全景
上：Ⅰ区北部（南から）
下：Ⅰ区北部（西から）
3　長原西地区　Ⅰ区南部全景
上：Ⅰ区南部（北から）
下：Ⅰ区南部（南から）
4　長原西地区　Ⅱ区全景
上：Ⅱ区（北から）
下：Ⅱ区南部（西から）
5　長原西地区　Ⅲ区全景
左：Ⅲ区北部（東から）
右：Ⅲ区南西部（東から）
6　長原西地区　古墳時代建物
上：Ⅱ区　SB13（北西から）
下：Ⅱ区　SB16・SK09（南西から）
7　長原西地区　古墳時代建物
上：Ⅱ区　SB15（北東から）
中：Ⅱ区　SB17（南東から）
下：Ⅱ区南部　SB23（東から）
8　長原西地区　古墳時代建物
上：Ⅲ区南部　SB31（西から）
下：Ⅲ区北東部　SB35（南東から）
9　長原西地区　古墳時代井戸
上：Ⅲ区北部　SE01（南西から）
下：Ⅲ区南部　SE02（南から）
10　長原西地区　古墳時代土壙
上：Ⅰ区北部　SK01（南西から）
中：Ⅰ区南部　SK04（北東から）
下：Ⅰ区南部　SK05（南東から）
11　長原西地区　古墳時代土壙
上：Ⅱ区　SK10（北西から）
中：Ⅱ区　SK11（南西から）
下：Ⅱ区　SK12（南西から）
12　長原西地区　古墳時代土壙
上：Ⅲ区東部　SK39（南から）
下：Ⅲ区東部　SK39（東から）
13　長原西地区　古墳時代溝
上：Ⅲ区北部　SD18（南から）
下：Ⅲ区北部　SD19・20（東から）
14　長原西地区　古墳時代溝
上：Ⅲ区南部　SD28（西から）
下：Ⅲ区南部　SD31・32（西から）
15　長原西地区　古墳時代溝
上：Ⅲ区南部　SD33～35（北から）
左下：Ⅲ区　SD33（北から）
右下：Ⅲ区　SD35（北から）
16　長原西地区　古墳時代溝
上：Ⅲ区東部　SD36・37（東から）
下：Ⅲ区東部　SD38・39（南から）
17　長原西地区　奈良時代建物
上：Ⅰ区南部　SB08（西から）
中：Ⅰ区南部　SB09（西から）
下：Ⅰ区南部　SB11・12（西から）
18　長原西地区　平安時代建物
上：Ⅰ区　SB01・04（北から）
下：Ⅰ区　SB02（南から）
19　長原西地区　平安時代建物
上：Ⅰ区　SB05・06（南から）
下：Ⅰ区南部　SB10（西から）
20　長原西地区　平安時代建物
上：Ⅱ区　SB14（北から）

下：Ⅲ区西部　SB24（南から）

21　長原西地区　平安時代井戸

上：Ⅱ区　SE01

下：Ⅱ区　SE01

22　長原西地区　平安時代土壙

上：Ⅱ区　SK08（西から）

下：Ⅱ区　SK13（北から）

23　長原西地区　平安時代土壙

上：Ⅲ区北部　土壙群（西から）

下：Ⅲ区北部　SK21～24（北から）

24　長原西地区　平安時代溝

上：Ⅰ区北部　SD01・03（東から）

下：Ⅰ区北部　SD03（北から）

25　長原西地区　平安時代溝

上：Ⅲ区　SD16（北から）

中：Ⅲ区　SD17（北から）

下：Ⅲ区　SD24（南から）

26　長原西地区　平安時代土器埋納遺構等

上：Ⅱ区南部　SP01

中：Ⅱ区南部　SP02

下：Ⅱ区南部　SP04

27　長原西地区　鎌倉時代以後の遺構

左上：Ⅱ区南部　長原4B層上面水田（北から）

右上：Ⅲ区西部　長原4B層上面水田（西から）

下：Ⅱ区南部　水田畦畔の断面と実測図

28　瓜破東南地区　Ⅰ・Ⅲ区全景

左：Ⅰ区（東から）

右：Ⅲ区（西から）

29　瓜破東南地区　Ⅲ・Ⅳ区遺構

上：Ⅲ区　SD06南壁断面

下：Ⅳ区　SD11・SK07～09（北から）

30　瓜破東南地区　Ⅴ区遺構

上：SD24（西から）

下：SD24遺物出土状況（西から）

31　瓜破東南地区　Ⅴ区遺構

上：SD21(上)・SD22(中)・SP12・13（北から）

下：SD26（西から）

32　長原南地区　Ⅰ区古墳

上：90・91号墳（西から）

下：90号墳（南から）

33　長原南地区　Ⅰ・Ⅱ区遺構

上：Ⅰ区　長原6A層上面水田（西から）

下：Ⅱ区　SD01

34　長原南地区　Ⅳ区遺構

上：93号墳（南から）

下：長原6A層上面水田（南から）

35　長原中央地区　Ⅰ区遺構

上：SK07（東から）

下：長原6B層上面水田（東から）

36　長原中央地区　Ⅱ区遺構

上：長原2層下面遺構（南から）

下：長原4B層下面柱列（南から）

37　長原西地区　石器遺物

上：石鏃・石錐・尖頭器

下：クサビ

38　長原西地区　石器遺物

上：ナイフ形石器

下：石核

39　長原西地区　石器遺物

底面をもつ剥片・打面調整剥片

40　長原西地区　石器遺物

縦長剥片・剥片

41　長原西地区　石器遺物

剥片

42　長原西地区　古墳時代柱穴・井戸・土壙出土遺物

SB31、SE01、SK09～11

43　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物

SK12

44　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物

SK12

45　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物

SK39

46　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物
SK39
47　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物
SK39
48　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物
SK39
49　長原西地区　古墳時代土壙出土遺物
SK39・41、SK39～41検出中
50　長原西地区　古墳時代溝出土遺物
SD09・11・15・18・19
51　長原西地区　古墳時代溝出土遺物
SD28・29・32・33・35・39
52　長原西地区　古墳時代溝出土遺物
SD28～32、谷斜面
53　長原西地区　古墳時代土壙出土動物遺体
54　長原西地区　奈良時代遺物
Ⅰ区南部、SK02、Ⅰ区南部ピット
55　長原西地区　平安時代柱穴出土遺物
SB01・02・14
56　長原西地区　平安時代柱穴・井戸出土遺物
SB26・28、SE03
57　長原西地区　平安時代井戸出土木製品
SE03
58　長原西地区　平安時代井戸枠材
SE03
59　長原西地区　平安時代土壙出土遺物
SK08・15・16・28・31・32・38
60　長原西地区　平安時代溝出土遺物
SD01・24・25
61　長原西地区　平安時代ピット出土遺物・鎌倉時代以後の遺物
SP01～04、Ⅲ区北部ピット、Ⅱ区北部溝状土壙群
62　瓜破東南地区　包含層出土遺物
第２層、第３a層、第３b層、第４層
63　瓜破東南地区　Ⅳ区遺構出土遺物
SD09・10、SK06
64　瓜破東南地区　Ⅳ・Ⅴ区遺構出土遺物
SK06、SD21・24
65　瓜破東南地区　Ⅳ・Ⅴ区遺構出土遺物・石器遺物
SD20・24、SK13、Ⅳ区北部犂溝
66　長原南地区　Ⅰ・Ⅱ区遺構出土遺物
９０号墳、SD01
67　長原中央地区　Ⅰ区出土奈良時代遺物
68　長原中央地区　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
Ⅰ区長原３・４B層、Ⅱ区長原３・４A層

挿　図　目　次

図1　瓜破台地上の谷と調査地……2
図2　区画整理事業施行範囲と地区区分……6
図3　長原西地区調査位置図……8
図4　瓜破東南地区調査位置図……9
図5　長原南地区調査位置図……10
図6　長原中央地区調査位置図……11
図7　長原東南地区調査位置図……12
図8　83－9次Ⅰ区断面実測図……13
図9　83－9次Ⅱ区遺構実測図……13
図10　地下鉄谷町線に沿う地質断面図……16
図11　長原遺跡東南部付近の地層の対比……26
図12　長原西地区の調査区分……34
図13　「馬池谷」付近のパネルダイアグラム‥35
図14　各層出土遺物……38
図15　弥生時代以前の遺物……39
図16　石鏃・石錐・尖頭器……41
図17　クサビ……44
図18　ナイフ形石器……46
図19　石核……48
図20　底面をもつ剥片……50

図21　打面調整剥片 ……52
図22　縦長剥片 ……54
図23　剥片（1） ……56
図24　剥片（2） ……57
図25　西地区Ⅱ区遺構配置図（古墳時代） …61
図26　SB13・15・16実測図……62
図27　SB17実測図……63
図28　SB21・22実測図……63
図29　SB23実測図……64
図30　西地区Ⅲ区南部遺構配置図（古墳時代）
……64
図31　SB31実測図……65
図32　SB31土器出土状況……65
図33　SB32実測図……66
図34　SB33実測図……66
図35　西地区Ⅲ区北東部遺構配置図（古墳時代）
……67
図36　SB35実測図……67
図37　SE01実測図……68
図38　SE02実測図……69
図39　SK01実測図……69
図40　SK04・05・07実測図……70
図41　SK10実測図……71
図42　SK11実測図……71
図43　SK12実測図……72
図44　SK39・SD40実測図 ……73
図45　SD33断面実測図……75
図46　柱穴出土遺物（古墳時代） ……76
図47　SE01出土遺物……77
図48　Ⅰ・Ⅱ区土壙出土遺物（古墳時代） …77
図49　SK12出土土師器……79
図50　SK12出土須恵器……80
図51　SK39出土土師器（1） ……81
図52　SK39出土土師器（2） ……82
図53　SK39出土土師器（3） ……83
図54　SK39出土須恵器……85
図55　SK40・41出土遺物……87
図56　溝出土遺物（古墳時代）（1） ……89
図57　溝出土遺物（古墳時代）（2） ……91
図58　石製品 ……92
図59　西地区Ⅰ区遺構配置図（奈良時代以後）
……94
図60　SB08実測図……95
図61　SB09実測図……95
図62　SB11・12実測図……96
図63　SB18実測図……97
図64　Ⅰ区出土奈良時代遺物 ……98
図65　SB01実測図……99
図66　SB01遺物出土状況……99
図67　SB02実測図……100
図68　SB02土器出土状況……100
図69　SB03実測図……101
図70　SB04実測図……101
図71　SB05実測図……102
図72　SB06実測図……103
図73　SB10実測図……103
図74　西地区Ⅰ区南部・Ⅱ区北部遺構配置図（奈
良時代以後） ……104
図75　SB14実測図……105
図76　SB19実測図……106
図77　西地区Ⅲ区北部遺構配置図（平安時代）
……106
図78　SB26・27実測図……107
図79　SB28・29実測図……108
図80　SB30実測図……109
図81　SE03実測図……110
図82　SK08実測図……111
図83　SK13実測図……111
図84　SK31実測図……112
図85　SD03断面実測図……113
図86　SD16断面実測図……114
図87　SP01～03実測図 ……115

図88　Ⅰ・Ⅱ区柱穴出土遺物（平安時代）……117
図89　Ⅲ区柱穴出土遺物（平安時代）……119
図90　SE03出土遺物……120
図91　SE03出土木製品……121
図92　土壙出土遺物（平安時代）……123
図93　溝出土遺物（平安時代）……125
図94　土器埋納遺構・ピット出土遺物（平安時代）……126
図95　水田遺構実測図……128
図96　鎌倉時代以後の遺物……129
図97　西地区における奈良時代以後の遺構配置図……132
図98　奈良時代以後の建物分布……135
図99　Ⅰ区北部遺構実測図（1）……折込
図100　Ⅰ区北部遺構実測図（2）……折込
図101　Ⅰ区南部遺構実測図……折込
図102　Ⅱ区北部遺構実測図……折込
図103　Ⅲ区北部遺構実測図……折込
図104　Ⅱ区南部・Ⅲ区西部遺構実測図……137
図105　Ⅲ区南部遺構実測図……138
図106　Ⅲ区東部遺構実測図……折込
図107　各層出土遺物……140
図108　瓜破東南地区遺構配置図……折込
図109　調査地の層序……折込
図110　クサビ・石核……141
図111　Ⅳ・Ⅴ区遺構実測図……折込
図112　Ⅳ区主要遺構実測図……143
図113　Ⅴ区主要遺構実測図……144
図114　SD24・25実測図……146
図115　Ⅳ区出土遺物……147
図116　Ⅳ・Ⅴ区出土遺物……148
図117　Ⅰ区主要遺構実測図……149
図118　近世前期の灌漑水系と調査地……153
図119　調査地の層序……156
図120　長原4層出土遺物……157
図121　Ⅰ区周辺古墳配置図……158
図122　90・91号墳実測図……159
図123　90号墳出土遺物……160
図124　Ⅲ・Ⅳ区周辺古墳配置図……161
図125　93号墳出土遺物……162
図126　Ⅰ区水田遺構実測図……163
図127　Ⅳ区遺構実測図……164
図128　Ⅳ区周辺水田遺構（長原6A層上面）……165
図129　SD01実測図……166
図130　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物……166
図131　調査地の層序……168
図132　Ⅰ区水田遺構実測図（長原6B層上面）……169
図133　Ⅰ区出土遺物……170
図134　Ⅰ区遺構実測図……171
図135　Ⅱ区遺構実測図……172
図136　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物……173
図137　古墳時代と飛鳥時代の杯・鉢……188
図138　高杯の変遷……190
図139　調理用土器の調整手法……折込
図140　把手の変化……194
図141　各器種の変遷……196

表　目　次

表1　瓜破台地上の調査地一覧……3
表2　長原遺跡の標準層序1992……30
表3　石器遺物計測表……60
表4　Ⅲ区北部土壙群一覧表……111
表5　平安時代の時期区分（B期）……116
表6　SE03井戸枠材計測表……122

表7　長原西地区建物一覧表……130
表8　条里関係遺構の座標値……134
表9　瓜破東南地区溝一覧表……154
表10　瓦器椀の編年（C期）……174
表11　土師器資料一覧……199

写　真　目　次

写真1　長原・瓜破遺跡遠景（西から）……1
写真2　83－32次調査地の発掘前風景（北から）……7
写真3　保護砂による建物遺構の保存状況……7
写真4　83－23次調査地遠景（東から）……11
写真5　83－9次Ⅰ区東壁　SD01断面……12
写真6　83－9次Ⅱ区全景（東から）……14
写真7　各層出土遺物……36
写真8　Ⅰ区出土瓦……37
写真9　弥生時代以前の遺物……39
写真10　熱を受けたもの・その他……58
写真11　SB34（南から）……66
写真12　SK34（北から）……73
写真13　高杯蓋天井部の文様……86
写真14　石製品……92
写真15　SB09柱穴断面……95
写真16　SD20（南から）……150
写真17　SK07出土遺物……174

第Ⅰ章　長原・瓜破遺跡の調査

第１節　瓜破台地の考古学的環境

１）はじめに

羽曳野丘陵西縁を北流する現東除川の流れる谷地形のさらに西側には、河内台地と呼ばれる中位段丘が広がっている。そして、大阪市に属するその北端部は瓜破台地とも呼ばれている。本書で報告する調査地区はいずれもこの瓜破台地の東縁に立地しているが、長原遺跡南・中央・東南地区（図2参照）はこの台地が沖積平野に埋没していく地点にあり、長原遺跡西地区・瓜破遺跡東南地区に比べて、沖積層上部層Ⅰに相当する地層がよく遺存

写真1　長原・瓜破遺跡遠景（西から）

している。

瓜破台地には北でやや西に振る方向の小規模の埋没谷が三つある（図1）。一番西にあるのは「西谷池」「下之池」の灌漑用水池として利用された谷で、そのすぐ東側には字名に「東谷」「東谷池」として残るやや小規模の谷がある。そして、さらに東には「馬池」として利用されている谷がある。これらの谷を西から「西谷」「東谷」「馬池谷」と呼ぶことにしたい。次項にこの瓜破台地を中心とした発掘調査の成果をまとめてみたい。

2）瓜破台地上での発掘調査（図1）

1940年、山本博氏によって瓜破遺跡西南部の大和川河床で採集された弥生土器が学会に発表され、初めて瓜破遺跡の存在が明らかになった［山本博1940・1941A・B］。これとほぼ同時期に市営瓜破霊園建設に際して、弥生土器や瓦が採集され、のちに瓜破廃寺の存在が想定されることになった。また、1953年には日本考古学協会によって発掘調査が実施され［杉原荘介・神沢勇一1961］、瓜破遺跡は弥生時代前期から後期の著名な遺跡の一つになったのである（註１）。

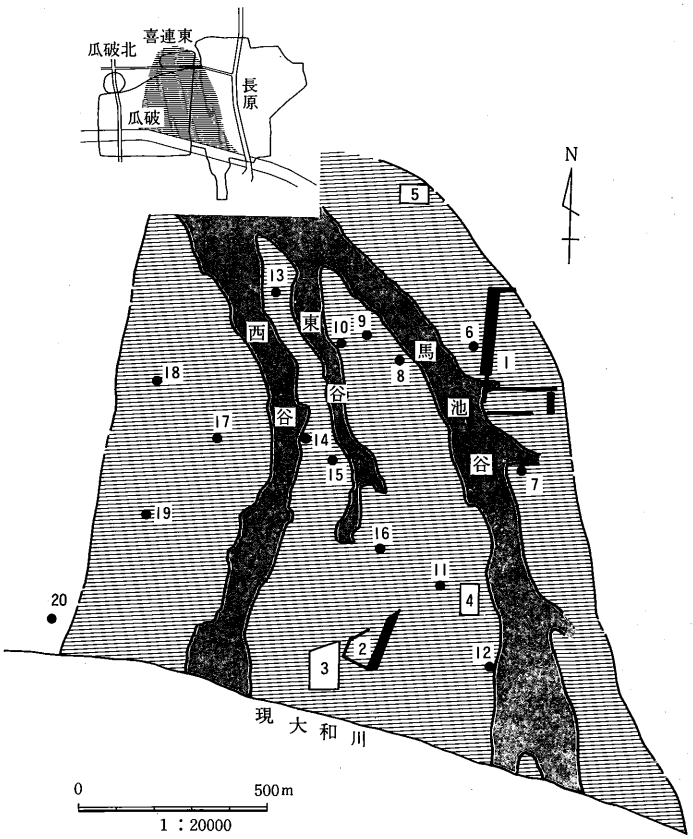


図1　瓜破台地上の谷と調査地

その後、1976年に阪神高速道路松原線の建設に伴う橋脚部分の発掘調査が瓜破台地の西外縁部で実施され、さらに、高速道路の側道部分での共同溝・下水・ガス工事などに伴う発掘調査が1981年度までに集中して実施された。この一連の発掘調査を通じて瓜破１・４・６丁目、瓜破西２丁目など瓜破遺跡の西部、すなわち瓜破台地の西外縁部における考古学的な知見が飛躍的に増加した。上記地域の調査では弥生時代前期か

ら古墳時代前期の方形周溝墓や竪穴住居、環濠と推測される大溝のほか、貨泉・中国前漢代の銘帯鏡や新代の方格規矩鏡片・後漢代の内行花文鏡片など大陸からもたらされた遺物が出土し、注目された［大阪市文化財協会1980・1981・1983A］。

一方、瓜破台地上に位置する瓜破遺跡東部は瓜破霊園および旧東瓜破村内の住宅地となっているため大規模な開発がなく、下水工事やマンション建設に伴う小規模な発掘調査に留まっている。以下にこの地域の発掘調査の概要を時代ごとに記述する。

ｉ）旧石器～縄文時代

旧石器時代の資料は瓜破台地東部の長原遺跡西および南西地区（1・12）や瓜破遺跡東南地区（2・11）でナイフ形石器や石核などが出土している。当該期の遺構は台地上では検出されておらず、これらはほとんどが遊離遺物であり、所属する層位も不明であるが、形態や製作技法からみて当該期の遺物と判断できるものである。

縄文時代については瓜破東２丁目の下水工事に伴う発掘調査（10）で縄文時代晩期の深鉢が「東谷」東斜面に堆積した包含層中から出土している。また、本書で報告する長原遺跡西地区（1）では縄文時代晩期の土器片や石鏃などが出土している。

ii）弥生時代

瓜破霊園内（16）とその西側（14）の下水工事で蛤刃石斧や弥生時代後期の土器片が、

表1　瓜破台地上の調査地一覧（番号は図1中の地点）

番号	考古資料等	発掘調査	参考文献
1	古墳～平安時代集落	NG83-32・53・70	本書報告
2	古墳～飛鳥時代溝	NG83-44	本書報告
3	飛鳥時代建物群	NG84-24・ＵＲ86-11	［南秀雄1987］
4	飛鳥時代建物群	NG89-67	［大阪市文化財協会1989］
5	飛鳥～室町時代建物群・井戸	KR89-1	［京嶋覚ほか1990］
6	弥生時代後期竪穴住居・溝	UR88-5	
7	古墳時代建物群・井戸	NG86-41	［藤田幸夫1987］
8	花塚山古墳、直径30ｍ？		
9	古墳時代竪穴住居、奈良時代？建物	UR83-17	
１０	古墳時代土器群、奈良時代溝・瓦	UR1	
１１	古墳～室町時代建物・溝・土壙	NG83-23	［大阪市文化財協会1990］
１２	旧石器、古墳時代集落（長吉野山遺跡）	大阪府教育委員会調査	
１３	「宇利和利城」？		
１４	蛤刃石斧、埴輪、奈良時代土器	UR2	
１５	ゴマ堂山古墳、直径40ｍ？		
１６	弥生時代後期土器	UR8	
１７	奈良時代建物・瓦	UR82-22	
１８	飛鳥時代溝	UR89-27	
１９	平安～室町時代寺院？	UR83-3	
２０	貨泉	UR3	

また、「馬池谷」内（1の1984年度調査部分）の堆積土中から石庖丁が出土している。1988年度になって、長原遺跡西地区に接する「馬池谷」東肩部における調査（6）で、弥生時代後期の長方形竪穴住居や溝が検出された。これで弥生時代後期後半の集落が瓜破霊園を中心とする区域に形成されていたことが確実となり、前述のように周辺で石斧・石庖丁が出土していることから、それは中期までさかのぼる可能性も考えられる。

iii）古墳時代

従来から瓜破霊園内に現存する花塚山古墳（8）・ゴマ堂山古墳（15）がよく知られている。花塚山古墳は直径30mの円墳と推定され、大阪市顕彰史跡になっている。1980年になされた外周の排水工事に際して、黒斑を有する埴輪が採集されており、長原古墳群における１期の古墳と考えられる。また、墳形については、一部確認された周溝から方墳の可能性もあることが指摘されている。

瓜破霊園内の下水工事に伴う調査（16）では無黒斑の小型円筒埴輪の破片数点が出土していることから、長原古墳群の２・３期の古墳も存在することが推測しうる。「馬池谷」東側に位置する長原遺跡西地区や喜連東遺跡でも小古墳が検出されている。

集落遺構としては、瓜破霊園北側の「東谷」と「馬池谷」に挟まれた地点（9）で５・６世紀の竪穴住居と思われる遺構が検出され、（10）の調査では「東谷」斜面の堆積層中から大量の須恵器・土師器などが出土した。（11・12）の地点でも５・６世紀の遺構が検出されている。また、「馬池谷」東側では、本書報告の長原遺跡西地区（1）やその北方にある喜連東遺跡（5）でも、製塩土器を含む５世紀代の遺物を出土する遺構が確認されており、古墳時代中・後期の集落が形成されていたと考えられる。（7）の地点では５・６世紀の竪穴住居や掘立柱建物と井戸が検出され、井戸から須恵器の製作に使用する叩き板や当て具が出土した［藤田幸夫1987］ことから、「馬池谷」斜面やそれにつながる小開析谷斜面に須恵器焼成窯が存在したことはまちがいない。

iv）飛鳥～奈良時代

飛鳥時代の遺構としては瓜破遺跡東南部の（3）で７世紀前半から後半の柵と溝で区画された建物群が、その北で７世紀後半の建物と井戸などが発掘されている。これらの遺構がさらに北の瓜破霊園内にも及んでいたことは確実で、前記の下水工事に伴う調査（16）でも当該期の遺物が少量ながら出土している。本書報告の瓜破遺跡東南地区の調査地は当該集落の縁辺部に位置することになる。また、「馬池谷」東側の長原遺跡西南地区（4）でも７世紀前半の建物群が調査されており、「西谷」の西側の旧高野街道に面する瓜破３丁目

の調査（18）でも、７世紀後半の土器を出土する溝が検出されている。

奈良時代の遺構としては「西谷」とその西側の旧高野街道との間（17）で、奈良時代後期の軒瓦を出土した建物が検出されているほか、「馬池谷」東側では長原遺跡西地区の奈良時代建物群や中央地区・東南地区の建物群、喜連東遺跡の８世紀初頭から８世紀後半の建物群がある。また、瓜破台地を中心とする地域では飛雲文の軒平・軒丸瓦をはじめとする瓦が多く出土しており、これらは長原遺跡南部から西部、喜連東遺跡にかけての広い分布範囲を示している。

ｖ）平安時代

『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ［大阪市文化財協会1983D］で報告した長原遺跡東南地区の９世紀代にさかのぼる建物群を除けば、長原・瓜破遺跡における９世紀代の遺物は少ない。しかし、10世紀の後半に属する屋敷地は各地区で確認されており、現代まで遺存していた条里遺構もこの時期までさかのぼりうると考えられる。

10世紀から11世紀の屋敷地は瓜破台地東縁部に沿って南東から北西に屋敷地の分布があり、「馬池谷」と平行するような分布状況を呈する。また、喜連東遺跡では平安時代後期に属する五輪塔文軒丸瓦などが出土している。

「馬池谷」西側の台地上での当該期の遺構は、前書［大阪市文化財協会1990C］で報告した瓜破遺跡東南地区の調査地（11）で検出された建物遺構のほか、「西谷」の西側に位置する旧高野街道沿いの調査地（19）で、９世紀に創建されて14世紀に廃絶した寺院の存在が想定されている。

ｖｉ）鎌倉～室町時代

鎌倉時代には平安時代の屋敷地の多くが廃絶し、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ・Ⅲ［大阪市文化財協会1982A・1983B］で報告した長原遺跡東南地区から南地区の８条４里の南北に連なる14・23・26坪（註２）と遺跡北西部の出戸４丁目付近から西の喜連東遺跡にかけての地域に遺構・遺物が集中する。前者の集落は周囲が幅約4m、深さ約1.5mの濠で囲まれ、比較的狭い範囲に形成されたものであり、14世紀まで続いて、その後途絶える。一方、後者の地域はその後も継続し、15世紀代の鬼瓦をはじめとする瓦が多く出土している［鈴木秀典1984］。

また、「西谷」と「東谷」に挟まれた地点（13）には、南北朝期における幕府方の最前線であった「宇利和利城」があったとされている。14世紀後半の「宇利和利城」での合戦と幕府軍の勝利は、その後のこの地域の景観に何らかの変化をもたらしたものと思われる。

以上の発掘調査の概要からみて、５世紀後半以後、瓜破台地上での遺構・遺物の分布が顕著になっており、この時期以後、この地域の景観が台地上を中心とするものに変化したとみることができる。本書で報告する長原遺跡西地区・瓜破遺跡東南地区の調査はこうした５世紀後半以後の様相の一端を示すものである。

（京嶋）

註）

（１）このほか、馬野繁蔵氏採集の遺物が関西大学考古学研究室から報告されている　［関西大学考古学等資料室1985・1986・1987］。

（２）河内国丹北郡条里。［服部昌之1975］に基づいた『長原遺跡発掘調査報告』［長原遺跡調査会1978］の用例にしたがい、河内の直線古道である大津道を里の起点とし、難波宮から南下し、大津道・丹比道と交差する古道を条の起点とする、固有名詞里を数詞里に置換えた呼称法である。

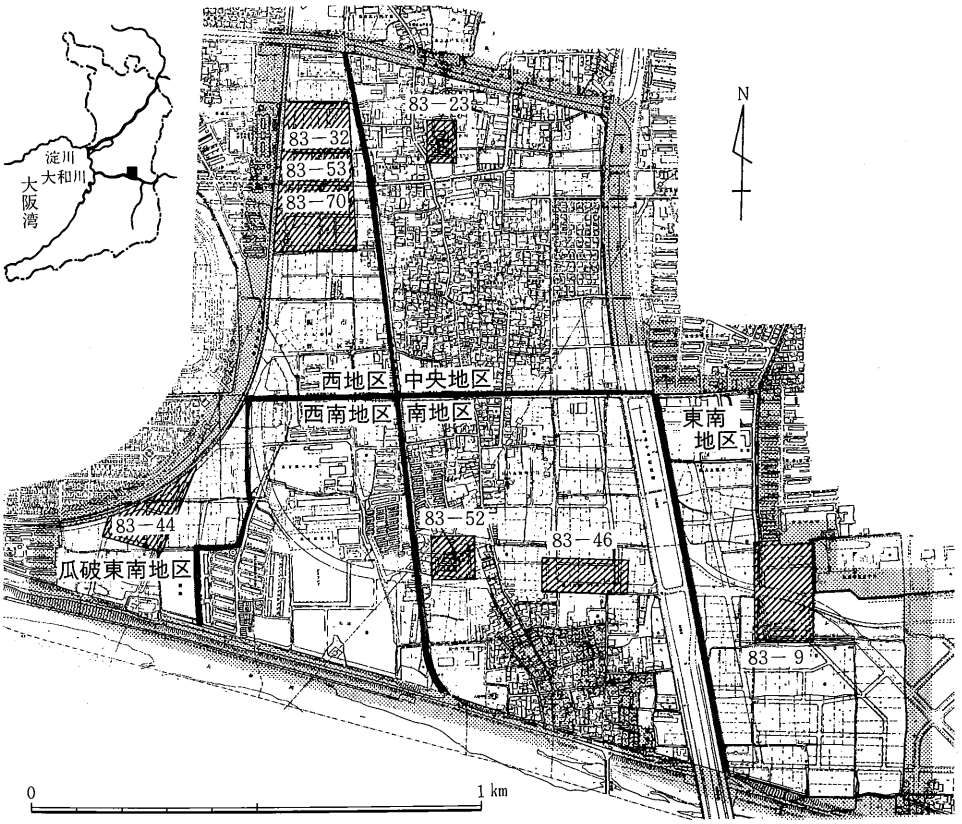


図2　区画整理事業施行範囲と地区区分

第２節　調査の経過と概要

１）長原遺跡西地区（83－32・53・70次調査）

ｉ）83－32次（図3）

調査地は西地区北部に位置する。周辺では本調査以後、84－12・25・29次、85－21次などの調査が行われており、古墳10基、古墳時代および平安時代の建物群などが調査されている。

写真2　83－32次調査地の発掘前風景（北から）

1983年8月23日から「長吉１号線」部分の３本の東西トレンチの掘削を開始した。「長吉１号線」の調査は1982年度の82－28次調査［大阪市文化財協会1990B］でもトレンチ調査が実施され、溝状遺構などが検出されており、今回の調査では一連の遺構を再調査することになった。

さらに、8月30日からＪＲ阪和貨物線に平行する「出戸川辺線」敷地内の表土掘削を開始した。「出戸川辺線」敷地内の調査区は、道路東側の農地への進入路と既設道路によって、４分割された。調査は北から進め、古墳時代から平安時代の建物群などを検出した。また、調査地南半部は写真測量を行い、検出した建物のうち主要なものは保護砂によって被覆し、保存した（写真3）。調査は12月9日に終了した。

ii）83－53次（図3）

83－53次調査区は83－32次調査区から続く「出戸川辺線」の南北約90m分と「出戸川辺線」から西の「長吉２号線」にのびる２本の東西道路におけるトレンチ調査である。トレンチは2m幅で一部拡張して調査を行った。

写真3　保護砂による建物遺構の保存状況

1983年12月16日から83－32次調査区から続く「出戸川辺線」敷地内の調査を北から開始した。この北端部は83－32次調査地の南端部に接している。また、83－

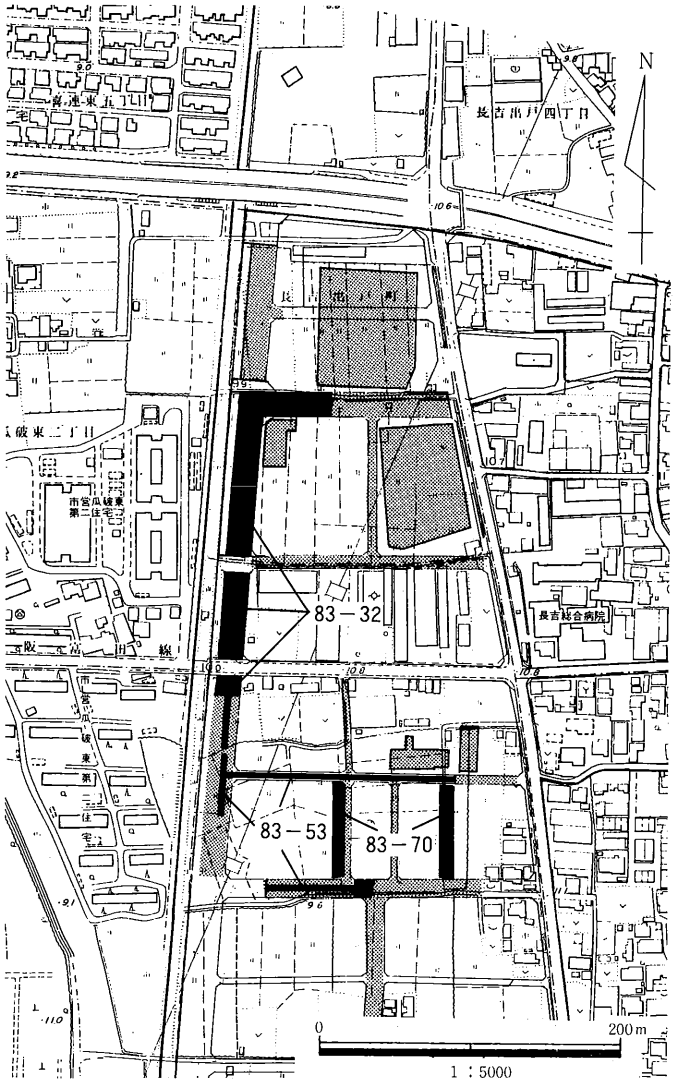


図3　長原西地区調査位置図

15次の試掘調査や84－47次調査も近接した調査地である。「出戸川辺線」地区では調査範囲の約1／2が北西方向にのびる埋没谷にあたっていたが、下水管埋設深度の関係で谷底までの掘削はできなかった。東西区画道路の調査地区では、古墳時代と平安時代後期の遺構が検出されたが、その後、85－16次調査などが行われ、一連の遺構が検出されている。調査は翌1984年3月12日で終了した。

iii）83－70次（図3）

83－53次調査の期間中、調査地周辺で土地区画の変更に伴う切土工事が行われた。切土工事は変更された土地区画の高低差を調整するための整地工事である。1984年2月21日、83－53次調査地西部の切土工事で、掘立柱建物の一部が露出したため、柱穴の測量を行った。さらに、3月8日、83－53次調査地東部の切土工事中に古墳時代の須恵器・土師器が多量に出土し、遺構も露出した。このため、都市整備局と協議し、ただちに調査を開始した。切土工事対象地は民有地であることから、十分な調査期間を確保することができず、すでに露出していた土壙群・竪穴住居・溝などの掘削と記録保存を行って、3月22日に現場作業を終えた。

（京嶋）

２）瓜破遺跡東南地区（83－44次調査）

瓜破霊園の南側、瓜破東８丁目の区画道路用地を調査区の幅2mもしくは3mで、1983年11月1日から発掘を開始した。調査区は区画道路中央の下水管埋設位置を中心に設け、調査を行った順にⅠ区～Ⅴ区と命名した。調査区の規模は、Ⅰ区は全長110m、幅3m、Ⅱ区は全長35m、幅3m、Ⅲ区は全長70m、幅2m、Ⅳ区は全長160m、幅2m、Ⅴ区は全長180m、幅2mである（図4）。またⅢ区は82－23次調査地［大阪市文化財協会1990C］の南延長部にあたり、Ⅳ・Ⅴ区も北で同調査地に取付く。Ⅳ・Ⅴ区は平行するトレンチで、中央部で東西にふくらむのは高圧線の鉄塔を避けるためである。現代作土の掘削は重機を用い、それ以下は人力で行った。長く細い調査区であるから各区を細分化し、順次、地山面まで調査を進め、地山面で各区の全景写真を撮るという方法をとった。一部並行して調査した地区もある。最近の調査では当調査地の西側で７世紀代の建物群［南秀雄1987］が発見されて注目されたが、今回も特にⅣ・Ⅴ区で同時代の溝や土壙が地山上面で発見され、遺物も同時代のものが多い。1984年2月8日、すべての調査を終了した。

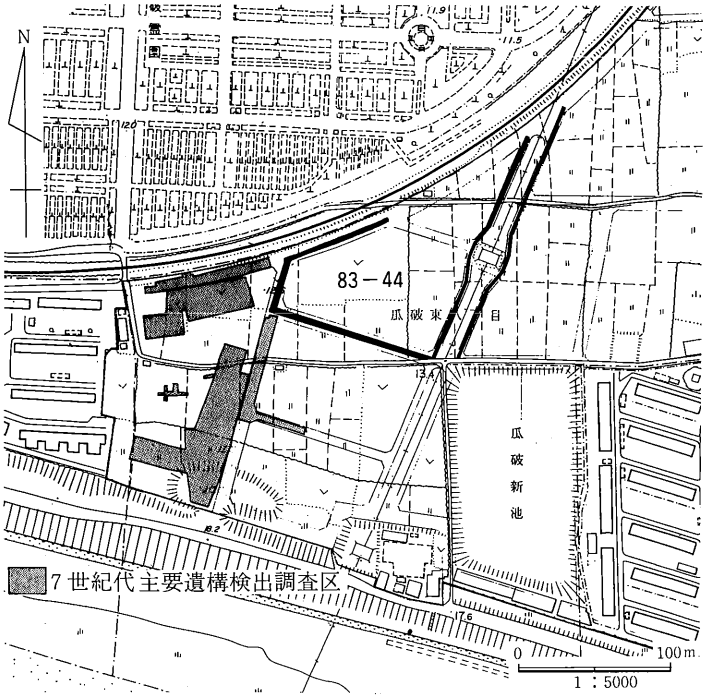


図4　瓜破東南地区調査位置図

（黒田）

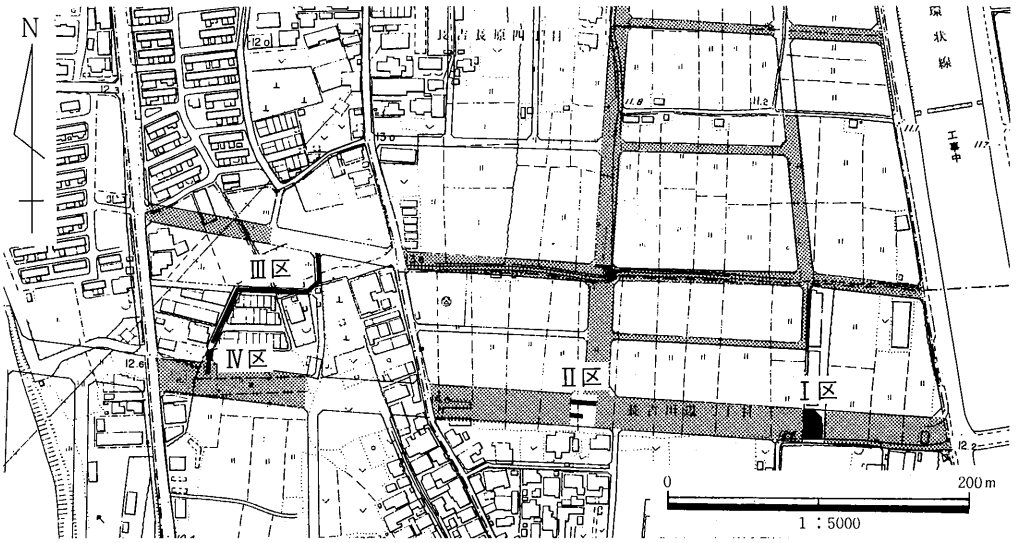


図5　長原南地区調査位置図

3）長原遺跡南地区（83－46・52次調査）

ⅰ）83－46次（図5）

本調査地は、かつて81－2次調査［大阪市文化財協会1989B］時に、調査対象地とされていたが、何らかの支障があって調査できなかった個所、もしくは道路敷設工事に伴う未調査個所を対象とする追加調査として実施した。調査個所は図5に示すように、Ⅰ区（約150 m^2）とⅡ区（約50m^2）に分れている。それぞれ長原４層上面までを重機により掘削し、以下は調査の進行に合わせて人力により掘削を行った。

調査は1983年11月4日から12月15日まで行った。

ⅱ）83－52次（図5）

本調査地は、「長吉２号線」から「出戸川辺線」にいたる新設道路の下水管埋設工事に先行して実施した。ただし「出戸川辺線」側の10m余りを除いては、掘削個所が現在も使用されている下水と重複していたり、生活道路の中央部であるため占有が困難であるなど、十分な調査を行うには支障が多い状況であった。そのためこれらの個所に関しては、工事掘削時に立会い、断面観察による遺構の確認に留めることとなった。図5に示すⅢ区がこれにあたる。

Ⅳ区に関しては、GL－0.5mの長原４層上面までを重機によって掘削し、以下を調査対象とした。

調査は1983年12月12日から1984年2月4日まで行った。　（植木）

４）長原遺跡中央地区（83－23次調査）

本調査地は長原遺跡中央部に位置し、遺跡内を北流していた近世の東除川が東に流れを変える地点にあり、調査地の西および北でその流路に近接する。

調査の対象は、道路予定地のうち、下水管埋設部分（幅2m、長さ60m）であり、南北２地点に分れている。図6に示したとおり、南部の東西トレンチ（50m）をⅠ区、北部の南北トレンチ（10m）をⅡ区として1983年7月7日から調査を実施した。

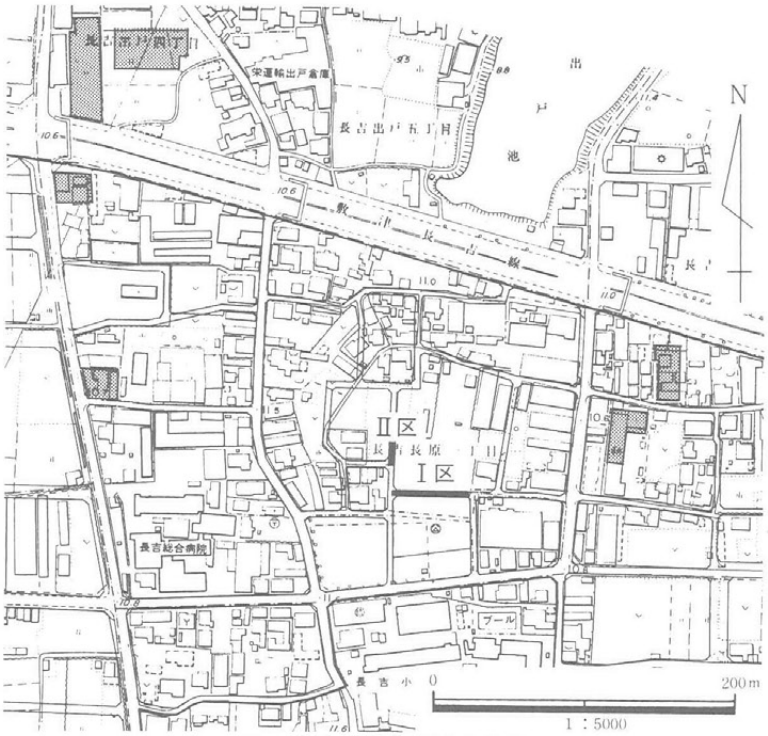


図6　長原中央地区調査位置図

Ⅰ区の東半部約25mは、近年に埋戻された池にあたり、GL－1.6m付近まで瓦・陶磁器・レンガなどの現代遺物を含むため、できる限り重機により掘削した。しかし、湧水が激しく、人力による掘削も途中で断念せざるをえなかった。

そのため、おもな調査対象をⅠ区の西半部とⅡ区におき、層位ごとに掘下げつつ遺構検出を行ったが、Ⅰ・Ⅱ区とも湧水が著しかったため、Ⅰ区の中央部分約9mとⅡ区をGL－3mまで掘下げ、8月4日に調査を終了した。

（木原）

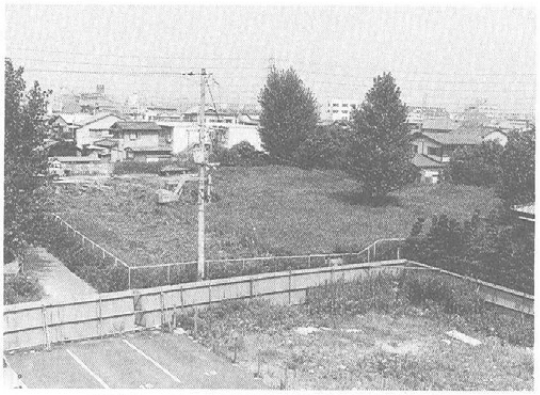


写真4　83－23次調査地遠景（東から）

5）長原遺跡東南地区（83－9次調査）

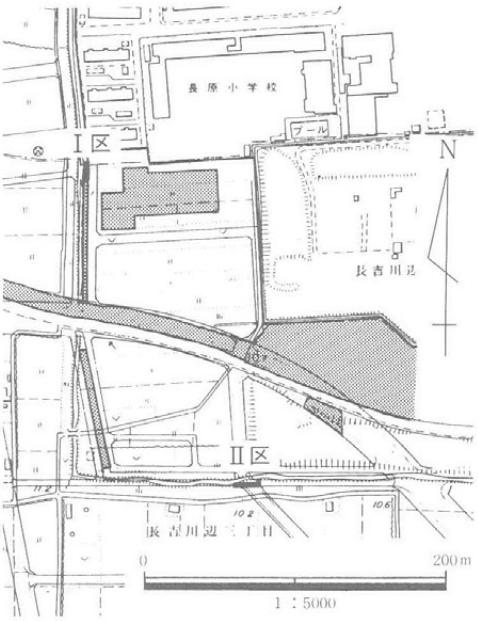


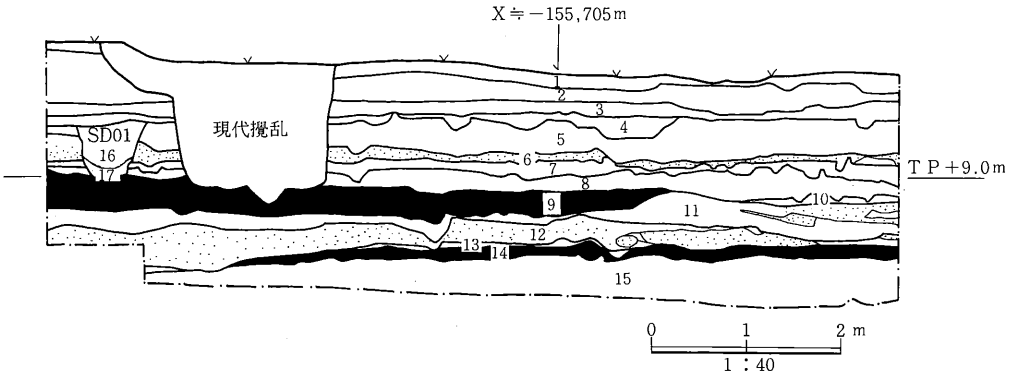
図7　長原東南地区調査位置図

大正川周辺整備事業の一環として1982年度に実施された82－31次調査［大阪市文化財協会1990E］に引続き、工事によって掘削される個所の調査を行った。図7に示したⅠ・Ⅱ区は、ともに河川横断の橋を兼ねたボックス建設予定地である。

1983年5月23日にいたって、Ⅰ区のボックス設置個所が連絡なしに大きく掘削されていることがわかり、その個所を立会調査することになった。調査は土層断面の精査に限られたが、東側に隣接する大阪市立平野養護学校敷地内での調査成果［大阪市文化財協会1983B］を参考にして、観察できた地層を長原遺跡の標準層序（本書第Ⅱ章参照）に対比させると図8のようになる。また、図8・写真5に示したように上端幅が35cm、下端幅が20cm、深さが30cmの断面が台形を呈する溝SD01を発見した。この溝は長原5A層を掘込んだもので、遺物は出土しなかった。

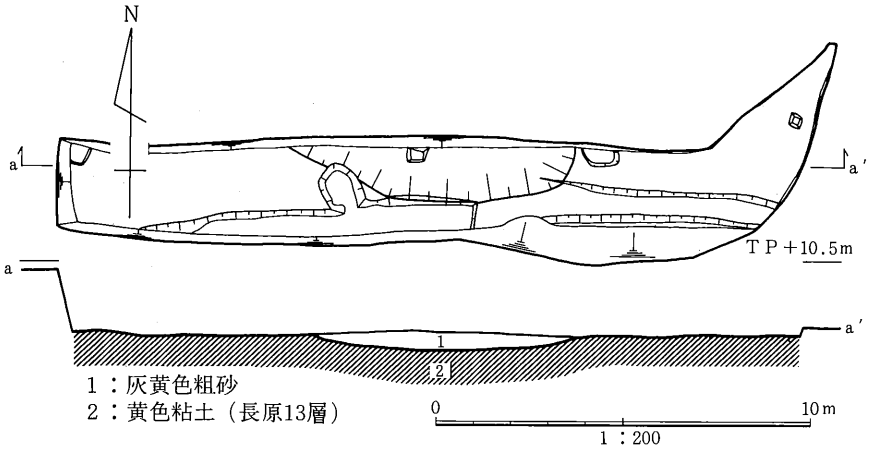
写真5　83－9次Ⅰ区東壁　SD01断面

Ⅱ区ではボックス建設個所に迂回流路を設けることになったので、4月20日～4月25日に迂回流路敷を調査した。その結果、図9に示したよ



1：現代作土（長原１層）
2：淡灰黄色砂礫混りシルト（長原２層）
3：淡灰黄色シルト混り粘土（長原３層）
4：灰褐色粘土混りシルト（長原４層）
5：黄色シルト（長原５Ａ層）
6：橙色細粒砂混り粗粒砂（長原５Ｂ層）
7：灰色粗粒砂混り粘土（長原６Ａ層）
8：灰黄色粘土（長原６Ｂ層）
9：黒色粘土（長原７Ａ層）
10：灰色シルト混り粘土
11：灰色粘土混りシルト（長原８層）
12：灰色中粒砂（長原８層）
13：暗灰色粘土（長原９Ａ層）
14：黒色粘土混りシルト（長原９Ｂ層）
15：灰色シルト混り粘土（長原９Ｃ層）
16：黄色細粒砂
17：淡灰色細粒砂

図8　83－9次Ⅰ区断面実測図



1：灰黄色粗砂
2：黄色粘土（長原13層）

図9　83－9次Ⅱ区遺構実測図

うに現代の客土層直下で長原13層に対比できる地山層（黄色粘土層）を検出した。遺構としては段や小土壙が検出されたが、いずれも現代のものであった。また、調査区の中央では、直径が約7.5mと推定され、深さが約0.2mの浅い土壙が検出された。埋土は灰黄色粗砂であるが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。

なお、当調査地では遺構・遺物がほとんど得られなかったので、これをもって本報告にかえる。

（黒田）

写真6　83－9次Ⅱ区全景（東から）

第Ⅱ章　長原遺跡の地層

第１節　長原遺跡の地形と地質の概要

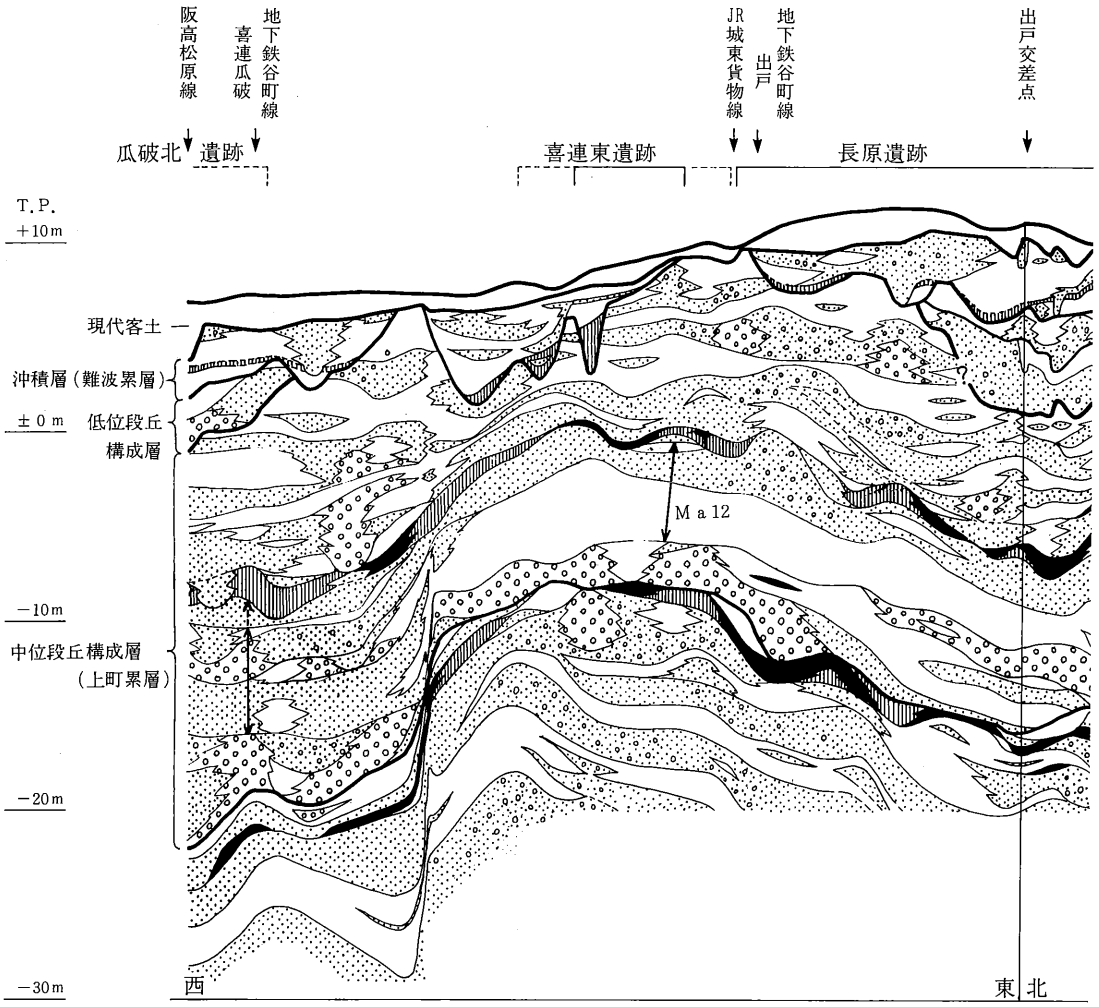
大阪南部の丘陵群から北へ派生する中位段丘は河内台地と呼ばれ、大阪平野を東西に横断する現大和川の北側で、河内平野と呼ばれる沖積平野の地下に埋没する。現大和川以北の河内台地の先端部は瓜破台地ともいわれ［建設省国土地理院1965］、標高12m前後の起伏のある平坦面をなす。大阪市平野区にある長原遺跡はそのような台地の東縁から沖積平野にかけて立地する（図10）（註１）。

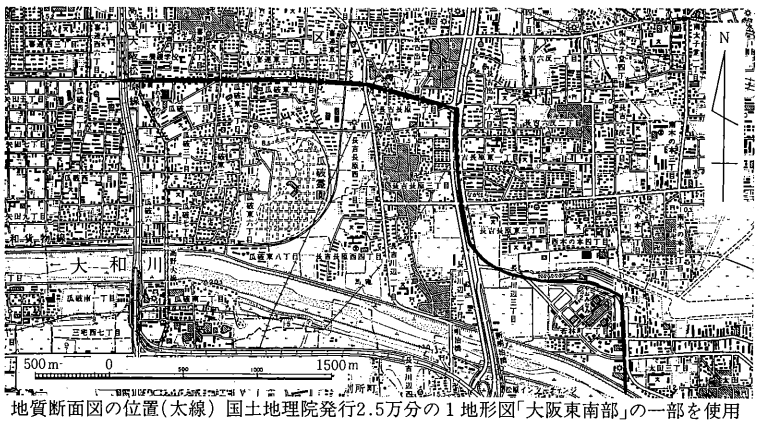
瓜破台地の地形は、基本的には中位段丘面とその侵食谷によって構成される。低位段丘構成層および沖積層は中位段丘面を薄く覆うとともに、侵食谷を埋積している。中位段丘をつくる上町累層［市原実1960］は最終間氷期の地層と考えられている。本地域の上町累層は下部が砂礫層主体、中部がMa12海成粘土層および同時異相の海成砂層、上部が泥炭層を挟む砂泥互層からなる全層厚20m前後の地層である。

瓜破台地の西縁は、相対的に急な傾斜で沖積面下に埋没しており、西側の沖積面と5m前後の比高が認められる。これに対して、その東縁は緩傾斜であるため、台地と沖積平野の両地形面間には顕著な傾斜変換点はなくて漸移している。この地形の違いは台地の地下に分布するMa12海成粘土層・海成砂層の分布高度にも現われており、台地を隆起させた構造運動に起因する現象と考えられる。

一方、長原遺跡東・北部の平野部地下に分布する低位段丘構成層は、層厚5～9mで下位の埋没中位段丘構成層を不整合で覆うと推定されるが、上面では顕著な段丘崖は確認されていない。埋没低位段丘の地形は、縄文時代のMa13海成粘土層が堆積した地域の沖積面下に、「古長瀬川」や「古平野川」（註２）の河岸段丘として残存している［那須孝悌ほか1981］。低位段丘構成層は最終氷期の最寒冷期の直前までに堆積した地層と考えられ［那須孝悌ほか1987］、本地域では上部・下部層に区分される砂礫から粘土の地層である。

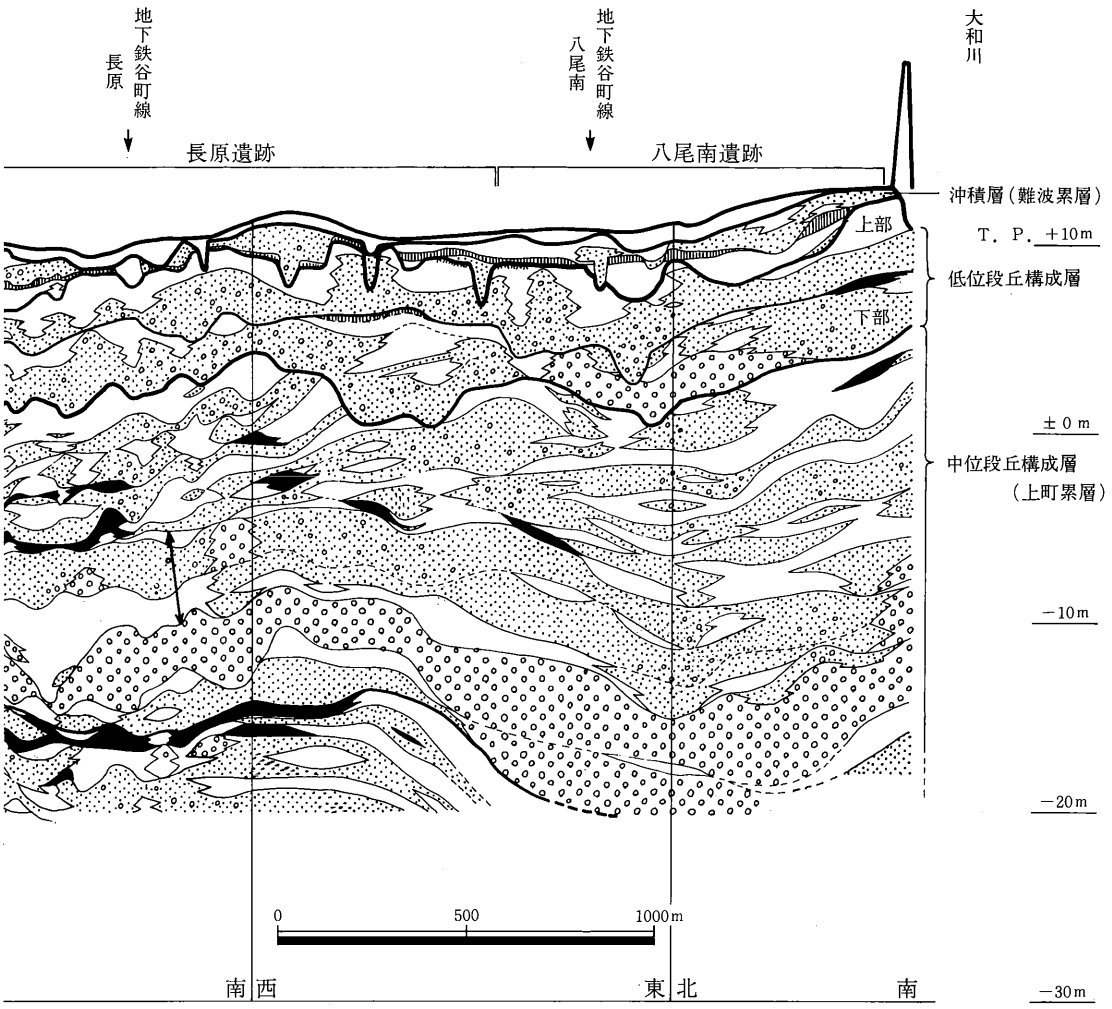
難波累層と呼ぶ沖積層は、遺跡東・北部で低位段丘構成層を不整合で覆い、河内平野の中心部に向ってしだいに層厚を増す。本層は平坦な沖積氾濫原面を構成するとともに、自





地質断面図の位置（太線）国土地理院発行2.5万分の1地形図「大阪東南部」の一部を使用

図10　長原遺跡とその周辺の地下鉄谷町線に沿う地質断面図（趙・樽野原図）



礫

砂

シルト・粘土

泥炭

泥炭質粘土・暗色帯（沖積層中の暗色帯は長原７～９層の層準）

火山灰

不整合

海成層

然堤防や天井川の地形を構成する。難波累層は中部にMa13海成粘土層を挟む最終氷期最寒冷期以降の地層であり［梶山彦太郎ほか1972］、本地域では上部・中部・下部層に区分される非海成の砂泥互層からなる。

長原遺跡で発掘調査の対象としている地層は、低位段丘構成層および沖積層である。

註）

（1）図10は1992年3月7日～4月12日に大阪市立自然史博物館で開催されている特別陳列の展示品として、同館の樽野博幸氏と趙とで作成した長居公園通りに沿う東西地質断面図の一部である。この図の地層の対比にあたっては、同館の那須孝悌氏にも検討していただいた。

（2）［那須孝悌ほか1981］に示された「古長瀬川」は現大和川が1704年に付替えられた以前の旧大和川の本流であった長瀬川の前身である。また、「古平野川」は1704年以前に狭山池方面から河内平野西部を北流した旧西除川の前身の谷地形である。ともに最終氷期最寒冷期前後に低位段丘面を下刻した埋没古河川である。

第２節　長原遺跡の標準層序

長原遺跡南部の基本層序は、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ［大阪市文化財協会1982B］で第０層から第15層までの呼称が提案され、その基本は今日まで踏襲されてきている。この間、調査精度の向上に伴って、層序の細分が行われてきており、地層の年代を与える資料も蓄積されてきた。また、この基本層序は遺跡東南部から南部で確立されたものではあるが、すでに長原遺跡全域とこれに西接する瓜破遺跡の一部、および東に接する八尾南遺跡で有効性が広く検証されてきたように思われる［大阪府教育委員会ほか1986、大阪府教育委員会1991、大阪市文化財協会1989C・1990A ・1991］（註１）。そこで本節では、今日の層位学的に到達した最新の層序を、長原遺跡の標準層序として提示し、大方の御批判を乞うしだいである。

標準層序の地層名の呼称にあたっては、地層番号の前に「長原」を付けて「長原9A層」と呼ぶこととする。また、図表等では必要に応じて長原遺跡の略号である「NG」を付けて「NG9A層」と表記することがある。本稿では遺跡内の地域をさすばあいに、前述の台地部と平野部を用いるほか、遺跡東南部というばあいは長吉川辺３丁目付近を、南部は同２丁目と長吉長原４丁目付近を、中部は長吉長原２・３丁目付近を、西部は長原西３・４丁目付近を、北部は長吉出戸１丁目付近をそれぞれ示すこととする。なお、現状の即自的な地層の区分と命名は、将来において地層形成史を踏まえた対自的な区分と名称に再編集されるべきであり、今後に残された課題である。以下、上位の地層より述べる（図11）。

１）完新統

i）沖積層上部層Ⅰ（難波累層上部砂泥互層の上半部相当層）

本亜部層は砂優勢の砂泥互層であり、標準層序の長原０層から長原７Ａ層が構成する。これらの地層は長原遺跡の台地部の表層に比較的厚く累積している。そのうち、砂・礫に富む粗粒な水成層は、台地部を南北に流下した旧東除川をはじめとする人工の河川沿いで厚く、氾濫性の堆積層であることを示す。本地域における粗粒堆積層の分布は、［建設省国土地理院1965］の自然堤防と天井川の分布におおむね重なっており、周辺では急激に層厚を減じている。一方、粘土・シルトを主体とする地層は粗粒堆積層の上位に連続して厚

く重なり、おおむね作土層（註２）や暗色帯（註３）を構成するいわゆる遺物包含層となっている。すなわち本亜部層は、人為の影響の強い環境下で形成された地層である。

長原０層：現代の客土層（註４）である。

長原１層：現代の作土層をいい、層厚は15～25cmである。

長原２層：灰褐色ないし黄褐色を呈する含細礫シルト質砂ないし砂質シルトからなる作土層で、層厚は6～24cmである。本層上面および下面には畝間や犂痕、溝等の耕作遺構が検出されている。伊万里系の染付磁器や唐津・美濃・備前などの日本製陶磁器が包含される。本層は長原遺跡のほぼ全域に分布し、地域によっては砂層等の水成層を挟んで細分されうる。

長原３層：含細礫淡黄褐色ないし灰色砂・粘土質シルトからなる作土層で、層厚は12～20cmである。偽礫（註５）からなる客土層を挟むことがある。本層下面には畝間や溝、島畠などの耕作遺構が検出されている。瓦質土器や瓦器（Ｃ－Ⅳ～Ｖ期の椀［鈴木秀典1982A］以下同様）、陶磁器が包含される。本層は遺跡南部と北部で分布が確認される。

長原４層：暗灰褐色礫質砂ないしシルトからなり、後述する長原５Ａ層上に形成された淘汰不良の地層であり、暗色帯を構成する。層厚は10～45cmで、下限は不明瞭である。遺跡南部を模式地とする。本層内から多数の掘立柱建物およびピット、井戸が検出されている（註６）。また瓦器、黒色土器、陶磁器、須恵器、土師器などの多量の遺物が包含される。後述する長原４Ａ～４Ｃ層とはほぼ同時異相の関係にある。

長原４Ａ層：含細礫黄灰色中粒砂ないし砂質シルト層で、層厚は8～15cmである。瓦器（Ｃ－Ⅲ～Ⅳ期の椀）、土師器が特徴的に包含される。遺跡東南部を模式地とし、遺跡の平野部で厚く、下位層上面の人工河川を埋積している。

従来の長原4B層は、遺跡東南部を模式地として、長原4Bi～iii層に細分される。

長原4Bi層（新称）：褐色をおびる灰色砂質シルトからなる作土層で、平均層厚は20cmである。暗色帯である長原４層の分布しない地域に分布する。長原4Ａ層に直接覆われる本層上面には、水田址や人間および偶蹄類の足跡が検出されている。瓦器（Ｃ－Ⅱ～Ⅲ期の椀）・土師器・黒色土器などが包含される。

長原4Bii層（新称）：水成の含細礫黄灰色中粒砂層であり、平均層厚は5cmである。遺跡東南部に断続的に分布する。

長原4Biii層（新称）：灰色砂質シルトからなる作土層で、平均層厚は15cmである。長原4Bii層に直接覆われる本層上面には水田址が検出されている。黒色土器が包含されるほ

か、C－Ⅰ～Ⅱ期の瓦器椀が包含される。遺跡南部に断続的に分布する。

なお、他の地域では、長原4Bii～iii層は4Bi層に同化され、識別しがたい。

長原4Ci層：淘汰のよい明黄褐色砂質シルト層で、平均層厚は20cmである。遺跡東南部に局所的に分布する。

長原4Cii層：にぶい黄褐色を呈する淘汰不良のシルト質粗粒砂からなり、下位の５Ａ層を掘込んで形成された作土層である。平均層厚は20cmである。遺跡東南部に局所的に分布する。

長原5Ａ層：砂・礫を主体とし、シルト質細粒砂薄層を挟在する、顕著な斜行葉理がみられる水成層である。層厚は10～80cmである。平城宮Ⅴ・Ⅵ期に属する土師器や須恵器のほか、弥生土器などを包含する。模式地は遺跡南部にあり、後述する長原6Ai 層上面の人工河川を埋積し、これらを中心に中部から西部まで広く分布する。

長原5Ｂ層：上半部が褐色をおびる水成の青灰色細粒ないし極細粒砂層で、層厚は2～8cmである。上面に人間の足跡や鍬跡が検出されている。遺跡東南部を模式地とする。

長原6Ai層：暗青色の砂・粘土質シルトからなる作土層で、層厚は20cm以下である。局所的にはラミナの不規則な変形や断絶が観察される。本層は遺跡東南部を模式地とし、広域に分布する。上面には広く水田址および人間の足跡群が検出されている。平城宮Ⅲ期に属する土師器、須恵器がわずかに包含される。

長原6Aii層：水成の灰色中粒ないし細粒砂層で、層厚は50cm以下である。遺跡東南部を模式地とし、主として下位層上面の人工河川を埋積し、これを中心に遺跡南部から西部に広がる。また、分布縁辺部では下位層上面の足跡群内に残存する。

長原6Bi層：砂・礫を含み黒褐色ないし暗灰色を呈するシルト質粘土からなる作土層であり、層厚は15cm以下である。全般に淘汰が不良であり、葉理は観察されない。遺跡東南部を模式地とし、中部まで分布が認められる。本層の上面には水田址および足跡群が検出されている。飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に属する土師器、須恵器がわずかに包含される。

長原6Bii層：水成の灰色を呈する粘土・シルト・細礫質粗粒砂層で、層厚は10cm以下である。遺跡東南部を模式地とし、中部以南に断続的に分布する。その縁辺部では下位層上面の微小な凹部に残存する。飛鳥Ⅲ期に属する土器が包含されている。

なお、長原6Aii～6Bii 層は6Ai 層に同化されて、識別しがたいところがある。

長原７Ａ層：含砂黒褐色シルト質粘土層で、平均層厚は15cmである。構成物質の偏りが少なく、全般的に淘汰が不良である。遺跡南部を模式地とし、全域に断続的に分布する。

本層上面には断続的に水田址が検出され、未検出の地域でも、畦畔状の高まりや下面の段が観察されている。また、基底面には掘立柱建物が検出されている。飛鳥Ⅰ期に属する土師器、須恵器が包含される。

ⅱ）沖積層上部層Ⅱ（難波累層上部砂泥互層の下半部相当層）

本亜部層は粘土・シルト優勢の側方変化に富む砂泥互層であり、標準層序の長原7B層から長原11層が構成する。これらの地層は長原遺跡平野部の沖積面下に累積して厚く発達する。地層の伸長方向と傾斜はいずれも南北ないし南東－北西方向であり、南方から堆積物質が供給されている。粗粒物質の優勢な長原10層と8Cⅰ・8A層の最大層厚部は下位層上面の自然河川や凹地上にあり、長原8A層の堆積によって現地表面に近似した沖積平坦面が形成された。本層中に介在する複数の暗色帯は、各時期の生活面示準相として有効な鍵相となる。本亜部層は自然営力と人為の相互作用によって形成された地層であり、相対的に上位層ほど人為が強く働いている。

従来の長原7B層は、遺跡東南部を模式地として、長原7Bⅰ～ⅲ層に細分される。

長原7Bⅰ層（新称）：黒褐色ないしにぶい黄褐色を呈する砂・礫質粘土からなる暗色帯構成層である。層厚は35cm以下で、下限は不明瞭である。遺跡に広く断続的に分布し、遺跡中部から南部では黒ボク起源の古土壌を構成する。また、その上面には多数の小規模古墳（長原古墳群）が検出されている。埴輪、土師器、須恵器が包含されている。

長原7Bⅱ層（新称）：水成の褐色極粗粒砂ないし粘土質シルト層であり、上方に細粒化する。層厚は20cm以下である。遺跡東南部にわずかに分布が認められる。

長原7Bⅲ層（新称）：暗褐色粘土質シルトからなる暗色帯構成層である。層厚は5cm以下で下限は不明瞭である。遺跡東南部に分布が認められている。長原遺跡の東に接する八尾南遺跡では、本層の上面に水田址が検出され、作土層となっている。また、畿内第Ⅴ様式の土器や庄内式土器がわずかに包含されている（註7）。

従来の長原8層は、遺跡東南部を模式地として、長原8A～8Cⅱ層に細分される。

長原8A層（新称）：青灰色から黄灰色を呈する水成の砂礫層であり、上方に細粒化する。層厚は10～70cmである。また、側方では上部の灰黄ないし明黄褐色細礫～細粒砂層と、これと漸移関係にある下部の微細な炭化物のラミナ（層厚0.1～0.3cm）を2層挟む明黄褐色～暗灰黄色シルト質粘土層からなり、基底部に中粒～粗粒砂を伴うことがある。層厚は上部が40～50cm、下部が15～20cmである。遺跡の平野部で分布が確認されている。

長原8B層（新称）：上部の暗褐色砂質シルト層と、これと漸移関係にある下部の暗褐色

シルト質中粒砂層とからなり、微細な炭化物が散在する暗色帯を構成する。下限は不明瞭である。層厚は上部が約10cm、下部が約5cmである。遺跡東南部で分布が確認されている。本層の上面からは、畿内第Ⅲないし第Ⅳ様式の土器を伴う方形周溝墓が検出されている。

長原8Ci層（新称）：水成のにぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂層であり、上方および側方へ細粒化する。斜行葉理がある。平均層厚は約25cmであり、下位層の凹地上では礫を含んで粗粒物質が卓越し、下方侵食する。最大層厚は90cmに達する。遺跡の平野部に広く分布する。本層基底から木葉形石鏃が出土している。

長原8Cii層（新称）：水成の黄褐色シルト質粘土層であり、微細な炭化物からなる平行葉理構造がある。層厚は15cm以下である。本層上面にはヒトの足跡が分布し、足跡の凹み直下の葉理は荷重により変形している。模式地付近で分布が確認されている。

長原9A′層（新称）：灰色粘土からなる作土層であり、作土は下位の長原9A層を母材とする。側方へ暗灰黄色粗粒砂質粘土に移化する。層厚は約10cmである。遺跡東南部を模式地とし、その付近の微高地に分布する。本層上面には長原遺跡最古の水田址が検出され、また乾痕が観察される。

長原9A層：黒褐色砂・シルト質粘土からなる一部水成の暗色帯構成層である。層厚は3～15cmであり、下限は不明瞭である。局所的に黒褐色礫質極粗粒砂薄層を挟んで層厚を増すことがある。上面で水田の導水路や護岸を行った大溝が検出されているほか、乾痕が観察される。遺跡東南部を模式地とし、遺跡の平野部に広く分布する。畿内第Ⅰ様式の土器と縄文晩期長原式土器が本層上面にへばりつき、また本層内に包含されている。

従来の長原9B層は、遺跡東南部を模式地として、長原9Bi～ｖ層に細分される。いずれも模式地付近で分布が確認されている。

長原9Bi層（新称）：水成の灰オリーブないし黒褐色砂礫層であり、シルト質細粒砂ラミナを挟む。層厚は最大90cmである。

長原9Bii層（新称）：暗灰黄色シルト質粘土からなる一部水成の薄い暗色帯構成層であり、層厚は10cmで、局所的に微細な炭化物ラミナを数層挟んで厚くなる。下限は不明瞭である。本層には畿内第Ⅰ様式の土器が包含され、木製の竪杵がみつかっている。

長原9Biii層（新称）：水成の灰オリーブ色シルト質粘土層であり、層厚は3～14cmで、下位層上面の流路上では砂礫薄層・細粒ないし粗粒砂薄層を挟んで厚くなる。

長原9Biv層（新称）：灰オリーブ色シルト質粘土からなる一部水成の暗色帯構成層である。層厚は8～15cmであり、下半部3cmには微細な炭化物が多く含まれ、下限は不明瞭であ

る。局所的に粗粒～極粗粒砂レンズを挟んで厚くなる。本層には縄文時代晩期の長原式土器が包含され、木製の弓や石斧の柄がみつかっている。

長原 9Bv 層（新称）：水成の灰オリーブ色シルト質粘土層である。層厚は10～14cmであり、局所的に下半部が砂礫に移化して厚くなり、最大層厚35cmとなる。

従来の長原9C層は、遺跡東南部を模式地として、長原9Ci ～ iii層下部に細分される。

長原 9Ci 層（新称）：黒褐色ないし褐灰色シルト質粘土からなる一部水成の暗色帯構成層である。層厚は2～8cmであり、下限は不明瞭である。遺跡の平野部に広く分布する。本層上面では縄文時代晩期に比定される滋賀里Ⅳ式土器がみつかっている。

長原 9C ii 層（新称）：微細な炭化物ラミナを２層挟む水成の灰色シルト質粘土層であり、砂礫に側方変化する。層厚は2～10cmである。模式地付近で分布が確かめられている。

長原 9Ciii 層上部（新称）：オリーブ黒色ないし灰色シルトおよび粗粒砂質粘土からなる淘汰不良の暗色帯構成層であり、層厚は7～25cmである。下限は不明瞭である。遺跡の平野部に広く分布する。

長原 9Ciii 層下部（新称）：暗灰色シルトないし粘土質粗粒砂層であり、層厚は約5cmである。下限は不明瞭である。模式地は遺跡東南部にあり、上位層に伴って分布する。本層には火山ガラスを多く含む火山灰層がレンズ状に挟まれる。

なお、細分しがたい９C層からは縄文時代後期の四ツ池式土器がみつかっている。

長原 10 層：緑灰色からオリーブ灰色を呈する水成の礫質砂層であり、上方および側方へ細粒砂からシルトに移化する。斜行葉理が発達し、下位層の凹地では下方侵食する。木片および微細な炭化物を含有する。最大層厚は80cmであり、模式地は遺跡東南部にあり、遺跡の平野部に広く分布する。また、後述する長原12層から由来したと考えられる爪形文土器が出土している。

長原 11 層：水成の暗緑色をわずかにおびる灰色シルト質粘土層で、層厚は16cm以下である。平行した数層の炭化物のラミナが観察される。模式地は遺跡東南部にある。上位層に伴って広く分布する。本層以下は上位層に相対して固く締っている。

iii）沖積層中部層（難波累層中部海成粘土層の上半部相当層）

本部層は細粒物質が優勢な地層であり、一部に砂礫層を伴う。標準層序の長原12層が構成する。この地層は下位層上面の凹地を、一部下方侵食して埋積しており、古川辺川と呼ぶ浅い埋没谷内に顕著に発達する（註８）。浅い埋没谷周辺の分布高所では相対的に薄い陸成層となる。本地域には海成層は分布しない。

従来の長原12層は、遺跡東南部の古川辺川流域を模式地として、長原12A～12BC層に細分される。

長原12A層（新称）：腐植質の黒褐色礫質粘土ないしシルトからなる一部水成の暗色帯構成層であり、層厚は15cm以下である。下位層を部分的に下方侵食する。遺跡の平野部に断続的に分布する。本層の上面には乾痕が観察される。石鏃が包含されるほか、上面付近には縄文時代中期末に属する北白川Ｃ式土器がみつかっている。

長原12BC層（新称）：黒味をおびる暗灰色細粒シルトないし粘土質シルトからなる陸成層であり、暗色帯を構成する。層厚は5～20cmである。下限は不明瞭であるが、本層内から発達する顕著な乾痕が観察される。下位層上面の凹地に分布する。

古川辺川の流域では、長原12BC層はさらに12Bi ～12C層に細分される。

長原12Bi層（新称）：暗灰色細粒砂質シルト層であり、層厚は約20cmである。

長原12Bii層（新称）：暗黄灰色シルト質火山ガラス層であり、側方へ火山ガラス質シルト層に移化する。層厚は約10cmである。本層ならびに下位層の火山ガラスは少なくとも後述する２層準の火山灰層に由来するものであり、二次堆積物である。

長原12Biii層（新称）：灰色火山ガラス質シルト層であり、層厚は約10cmである。本層ならびに12Bii層にまたがって、縄文時代中期前半に属する船元Ⅱ式土器がみつかっている。

長原12Biv層（新称）：黄灰色砂礫層であり、層厚は15cm以下である。下位層を下方侵食する。

長原12C層（新称）：緑灰色シルト質極細粒砂ないしシルト層であり、層厚は45cm以下である。下位の長原13層を下方侵食する。

２）上部更新統および完新統の下部

ｉ）長原12／13層漸移帯（仮称）

長原12BC層の下位にあり、これとは比較的明瞭な境界をもちながら、下位層とは漸移関係にあって、暗灰色ないし灰色の細粒シルトからなる厚さ5cm以下の地層の部分である。この地層の部分が12BC層と後述する13A層とに挟まれた未記載の地層なのか、13Ai層が上方層相変化した部分なのか、13Ai層形成後の土壌化による風化・擾乱部分なのかは明らかではないので、仮に12／13層漸移帯と呼んで、他の識別可能な地層と区別しておく。遺跡東南部で認められる。この地層の部分から出土している石器遺物には、縄文時代早期・

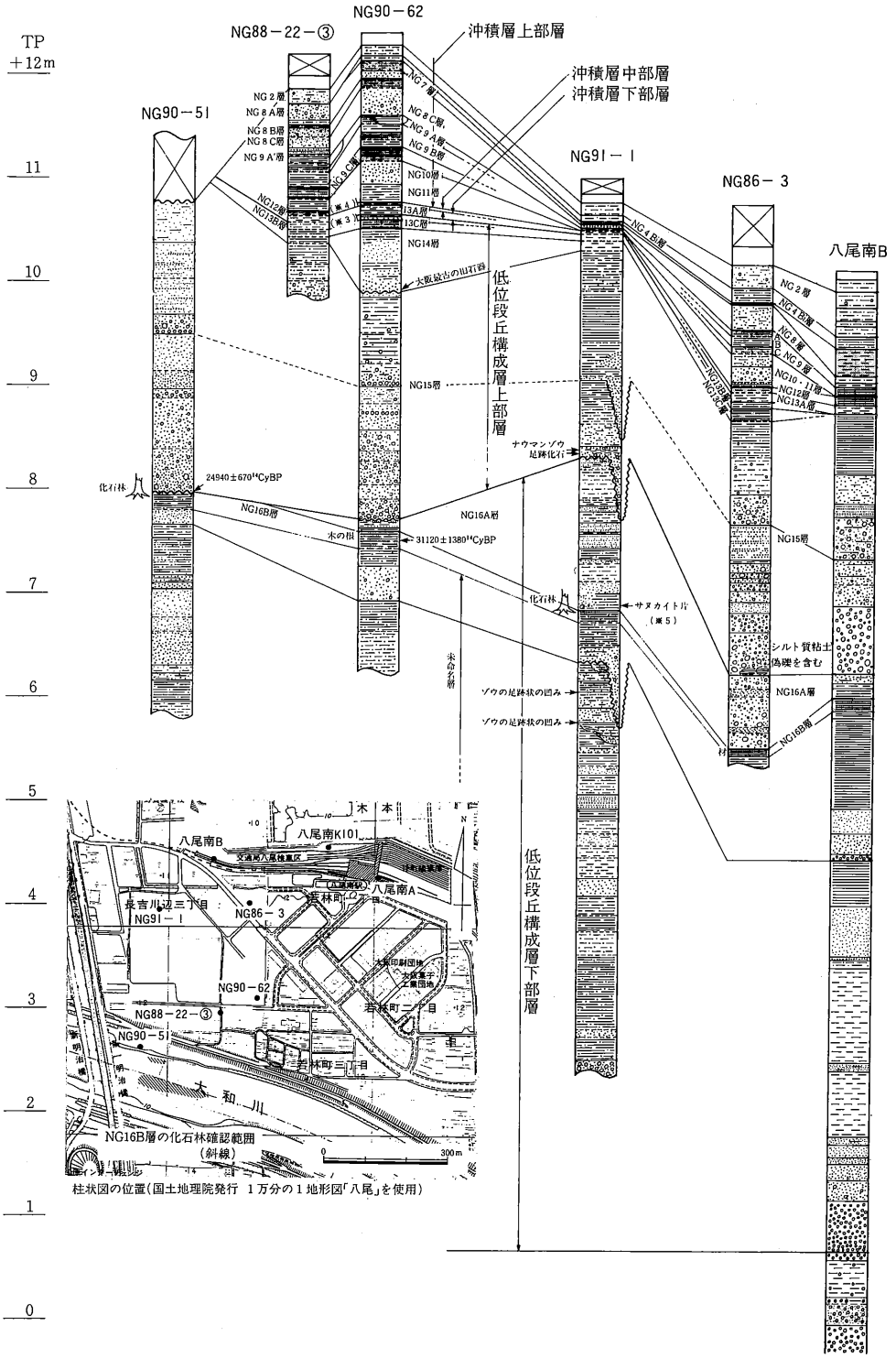
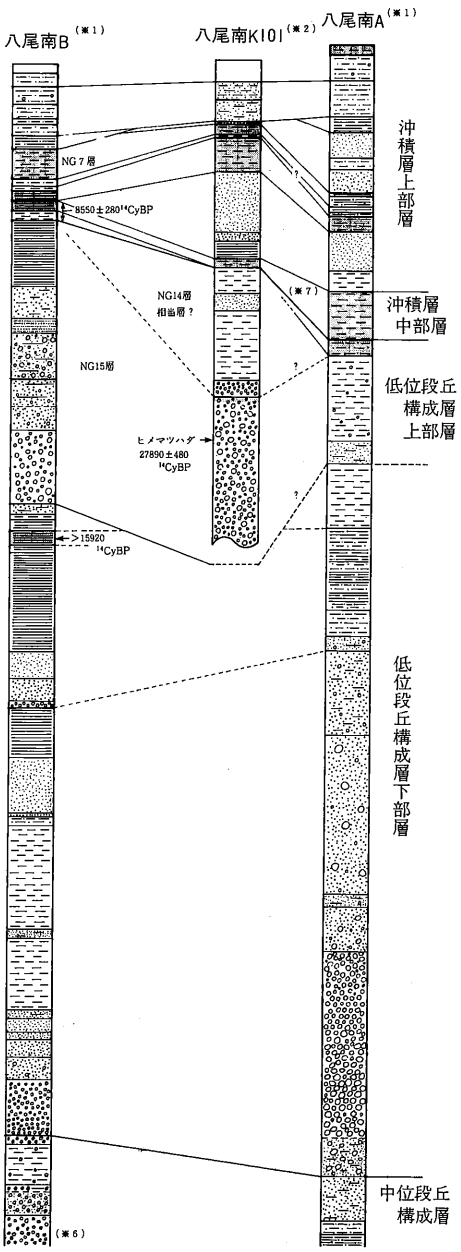


図11　長原遺跡東南部付近の地層の対比



凡　例

- 粘土
- シルト
- 極細粒砂～細粒砂
- 中粒砂～極粗粒砂
- 細礫
- 中礫以上
- 火山灰
- 暗色帯

TP +11m
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

※１　八尾南Ａ・Ｂ地点は大阪市立自然史博物館の那須孝悌・樽野博之両氏の資料による。

※２　八尾南K101地点は〔那須孝悌ほか1979〕による。

※３　平安神宮火山灰層（NG13Bii層）

※４　4740±140 14CyBP(NG12A層上部)
4900±140 14CyBP(NG12A層下部)
4900±100 14CyBP(NG12Biv層)

※５　NG16A層最下部層準からは、マツハダ・エゴノキ・オニグルミなどの植物遺体が産出している（本文参照）。

※６　八尾南B地点のTP－2.8～－4.4mには植物遺体を含有する暗褐色シルト層が分布する。図10の断面図からは、このシルト層はMa12海成粘土層・海成砂層の上位にある泥炭層・泥炭質粘土層の層準にあたると推定され、約10万年前の年代が与えられると予想される。

※７　第Ⅲ黒色帯（3950±130 14CyBP）からはイチイガシ・エゴノキなどの植物遺体が産出している。

前期に属すると考えられる石鏃のほか、有茎尖頭器、細石刃などが含まれる。

遺跡の中部地域では火山灰層起源の黒ボクが確認されており、火山灰分析からはこの漸移帯あたりに降灰層準が求められる。この火山灰層は無色～褐色透明の偏平型ガラスに富むガラス質火山灰層であり、角閃石と少量の斜方輝石・単斜輝石を含む。ガラスの屈折率は1.510 前後である。この火山灰層は近畿地方の標準火山灰層である横大路火山灰層［吉川周作ほか1986］に対比される。

ii）沖積層下部層（難波累層下部砂泥互層相当層）

本部層は粘土からシルトを主体とする地層であり、標準層序の長原 13A 層が構成する。埋没低位段丘面を不整合で覆う。

従来の長原 13A 層は、遺跡東南部を模式地として、13Ai・ii 層に細分される。

長原 13Ai 層（新称）：暗灰色火山灰質細粒シルト層であり、層厚は5cm以下である。下限は漸移的である。模式地付近のみで識別されている。

長原 13Aii 層（新称）：灰色ないし灰黄色火山灰質細粒シルト層であり、層厚は約10cmである。下位層とは不整合面で境される。また、本層の下面には不明瞭な乾痕が観察されることがある。模式地でのみ識別されている。本層からは旧石器時代の石器遺物が出土している。実体顕微鏡レベルでは、13Ai・ii 層ともに下位層に由来する偏平型火山ガラスのほか、中間型から多孔質型の火山ガラスと少量の角閃石が含有される。なお、これまでに、小型のナイフ形石器を含んで多数出土している 13層の遺物は、13A層に包含されているものと、13A層か 13B 層かが不明なものとがあるが、13Ai 層または 13Aii 層かの詳細な層準が明らかなものは数少ない。

iii）低位段丘構成層上部層

低位段丘構成層は部分不整合をもって上部層と下部層に区分される。上部層は下部層を一部著しく下方侵食した凹地を埋積する。また、上部層の最上部層準は暗色帯であり、上部層準は砂礫を伴うシルト主体、下部層準は砂礫主体の地層であるが、大局的には下位から上位へ粗粒物質から細粒物質への 2 堆積サイクルを示す。当地域の標準層序の長原13B～15層が構成する。

従来の長原13B 層は、遺跡東南部を模式地として、13Bi・ii 層に細分される。

長原13Bi 層（新称）：黄褐色～灰黄色シルト質粘土～粘土質シルトからなる暗色帯構成層であり、層厚は5cm以下である。下限は不明瞭である。模式地付近でのみ識別されている。

長原13Bii層（新称）：黄灰色粗粒シルト質火山灰層であり、層厚は5cm以下である。下位層とは明瞭な層理面で境される。この火山灰層は遺跡東南部と南部、中部で識別されている。無色透明の偏平型ガラスに富むガラス質火山灰層であり、少量の角閃石と斜方輝石・単斜輝石を含む。ガラスの屈折率は1.500前後である。この火山灰層は近畿地方の標準火山灰層である平安神宮火山灰層に対比される［吉川周作ほか1986］。

従来の長原14層は、遺跡東南部を模式地として、長原13C層と14層とに区分される。

長原13C層（新称）：暗灰黄色～暗褐色シルト質粘土層であり、暗色帯を構成する。層厚は平均12cmである。模式地付近で分布が確認されている。分布低所では最大層厚20cmとなり、下位層とは軽微な不整合面で明瞭に境される。また、下面に乾痕が観察されることがある。分布高所では薄く、下限は不明瞭であって、下位層最上部の古土壌化した部分として認められる。

長原14層（再定義）：上部層準が灰白から緑灰色のシルト質砂ないし砂質粘土からなり、中位に連続性の乏しい砂礫薄層を挟んで、下部層準は灰色砂礫ないし砂質シルトからなる地層である。層厚は20～80cmである。模式地付近で分布が確かめられる。分布低所では下部層準の粗粒物質が優勢であり、下位層とは軽微な不整合面で明瞭に境されるが、分布高所では全般に細粒化し、下限は不明瞭である。本層からは石器遺物が出土しており、小型のナイフ形石器が含まれるが、調整は粗く、瀬戸内技法の要素とは認めがたい一群である。

長原15層（再定義）：緑灰色から灰白色を呈する砂礫優勢の地層であり、層厚は平均200cmである。中部と下部層準ではシルト薄層を挟んで砂礫が卓越する。長径10cm大の大礫や下位層に由来する偽礫のほか、植物遺体を包含する下部層準の砂礫層は、部分不整合で著しく下方侵食して、最大層厚340cmとなる。上部は黄褐色をおびてシルトが優勢であり、上方にさらに細粒化して最上部は風化の著しいシルト質粘土となる。遺跡東南部を模式地とし、台地部に広く分布する。本層下部層準にある砂礫薄層の上面および下面から、長鼻類の足跡化石がみつかっている。

iv）低位段丘構成層下部層

本部層は砂・礫優勢の砂泥互層であり、標準層序の長原16A～16B層および未命名層が構成する。各構成層は相対的に厚く、堆積と侵食を繰返して累重している。粘土・シルトに富む16B層を除けば、全般に堆積物質の搬入速度は速かったものとみられる。

長原16A層（新称）：暗灰色から灰青色の細粒砂優勢のシルト薄層と砂薄層の互層であ

表2　長原遺跡の標準層序 1992

層序			層序概念図	層相		層厚(cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物(註1)	C-14 y. B.P. 他	時代
沖積層（難波累層）		NG 0 層		現代客土		—	(網目は暗色帯)			現代
		NG 1 層		現代作土		15～25			Wd：木片 Cb：木炭 Sh：貝殻 Pt：泥炭 Sl：土壌	
		NG 2 層		含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂		6～24		↓小溝群・畝間　日本製陶磁器		近世・近代
		NG 3 層		含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト		12～20		↓小溝群・畝間・島畠　瓦器(C-Ⅳ～Ⅴ期)・瓦質土器・陶磁器		室町
	上部層Ⅰ	NG 4 層 NG4A層		暗灰褐色礫質砂～シルト(10～45)	含細礫黄灰色中粒砂	8～15		瓦器 黒色土器 陶磁器 須恵器 土師器 ←水田面　瓦器(C-Ⅲ～Ⅳ期)		鎌倉
		NG4B層 i ii iii			褐灰色砂質シルト	av 20		↓小溝群・畝間　瓦器(C-Ⅱ～Ⅲ期)		
					含細礫黄灰色中粒砂	av 5		←水田面		
					灰色砂質シルト	av 15		↓小溝群・畝間　瓦器(C-Ⅰ～Ⅱ期)・黒色土器	(800)	平安
		NG4C層 i ii			明黄褐色砂質シルト	av 20		▽掘立柱建物		
					にぶい黄褐色シルト質砂	av 20		←水田面		
		NG 5 層 NG5A層		灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を狭在		10～80		←鍬跡　平城宮Ⅴ・Ⅵ期	(1200)	
		NG5B層		青灰色細粒～極細粒砂		2～8		←水田面		奈良
		NG 6 層 NG6A層 i ii		暗青色砂・粘土質シルト		≦20	タニシ	平城宮Ⅲ期		
				灰色中粒～細粒砂		≦50		←水田面	(1300)	
		NG6B層 i ii		含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土		≦15	タニシ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ期		飛鳥
				灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂		≦10	←乾痕	←水田面　飛鳥Ⅲ期		
		NG7A層		含砂黒褐色シルト質粘土		av 15		↓掘立柱建物　飛鳥Ⅰ期	(1400)	
	上部層Ⅱ	NG 7 層 NG7B層 i ii iii		黒褐色砂・礫質粘土		≦35		←長原古墳群　埴輪(Ⅱ期)・須恵器(～MT15)		古墳後期
				褐色極粗粒砂～粘土質シルト		≦20			(1600)	古墳中期 古墳前期
				暗褐色粘土質シルト		≦5		(←水田面：八尾南遺跡) ↓方形周溝墓・竪穴住居　庄内式・畿内第Ⅴ様式	(1700)	弥生後期
		NG 8 層 NG8A層		青灰～黄灰色砂・礫～粘土		≦40		←方形周溝墓・溝		
		NG8B層		暗褐色砂質シルト		av 10		畿内第Ⅲ・Ⅳ様式・凸基式石鏃	(2000)	弥生中期
				暗褐色シルト質中粒砂		av 5				
		NG8C層 i ii		にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂		av 25		←ヒトの足跡　木葉形石鏃		
				黄褐色シルト質粘土		≦15	←乾痕	←水田面・溝・護岸　←畿内第Ⅰ様式・晩期長原式・石斧		
		NG 9 層 NG9A′層		灰色シルト質粘土		av 10				
		NG9A層		黒褐色砂・シルト質粘土		3～15		畿内第Ⅰ様式・晩期長原式・石鏃		弥生前期
		NG9B層 i ii		灰オリーブ～黒褐色砂礫		≦90				
				暗灰黄色シルト質粘土		10		土偶　畿内Ⅰ様式・竪杵		
		NG9B層 iii		灰オリーブ色シルト質粘土		3～14	アラカシ イヌガヤ	石棒		
		NG9B層 iv		暗灰オリーブ色シルト質粘土		8～50		▽石器製作址　晩期長原式・石斧の柄・弓	(2300)	
		NG9B層 v		灰オリーブ色シルト質粘土・砂		10～14		▽土器棺墓		縄文晩期
		NG9C層 i ii		黒褐～褐灰色含シルト質粘土		2～8	←乾痕	▽竪穴住居・貯蔵穴　←晩期滋賀里Ⅳ式	(3000)	
				灰色シルト質粘土～砂礫		2～10		後期四ツ池式　後期福田KⅡ式（八尾南遺跡）凹基式石鏃		
		NG9C層 iiiup		オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土		7～25		土器片		縄文後期
		NG9C層 iiilw		暗灰色シルト～粘土質粗粒砂		av 5	←火山灰層準			
		NG10層		緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト		≦80	←地震			
		NG11層		灰色シルト質粘土		≦16	←乾痕		←4020±110 Sl (GaK－11323)	
	中部層	NG 12 層 NG12A層		腐植質黒褐色礫質粘土～シルト		≦15		中期北白川Ｃ式・石鏃	←4740±140 Sl (GaK－14942) ←4900±140 Sl (GaK－14941)	
		NG12B層 i ii iii iv		NG12BC層 暗灰色細粒砂質シルト		av 20	←地震？			
				暗灰色細粒～シルト(5～20) 暗黄灰色シルト質火山ガラス		av 10	(2次堆積)	中期船元Ⅱ式		縄文中期
				灰色火山ガラス質シルト		av 10				
				黄灰色砂礫		≦15		▽土壙　凹基式石鏃	←4900±100 Cb (GaK－14940)	
		NG12C層		緑灰色シルト質極細粒砂～シルト		≦45	←乾痕			
	下部層	12／13漸移帯		暗灰色細粒シルト(～黒ボク:風成)		≦5	←横大路火山灰層	有茎尖頭器・細石刃	(←6700～7000) (註3)	縄文早・前期
		NG 13 層 NG13A層 i ii		灰色細粒シルト		≦5		石器製作址　剥片・ハンマーストーン		
				灰黄～灰白色細粒シルト(火山灰質)		av 10	(火山灰層準)	石器製作址　削器・ナイフ形石器・剥片・石核		晩氷期
							←乾痕			
低位段丘構成層	上部層	NG13B層 i ii		黄褐～灰黄色シルト質粘土		≦5		？剥片・石核		亜間氷期
				黄灰色粗粒シルト質火山灰		≦5	←平安神宮火山灰層		(←2.1～2.5万) (註4)	バウド期
		NG13C層		暗灰黄～暗褐色シルト質粘土		av 12	↓乾痕			ルフ
		NG14層		灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土		20～80		剥片		後期旧石器
				灰色砂礫～砂質シルト				石器製作址　掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器		
		NG15層		黄灰色～緑灰色粘土質砂礫～細粒砂質シルト砂礫		av 200				亜氷期Ⅱ
				シルト砂礫		(150～450)	ヒメマツハダ（註2） ←ナウマンゾウの足跡		←27890±480 Wd (GaK－6977) (註5)	
	下部層	NG 16 層 NG16A層		暗灰～灰青色シルト・砂互層 灰色シルト質粘土		≦150	エゴノキ・マツハダ・オニグルミ シキシマブナ・コナンキンハゼほか ←化石林			中期旧石器
		NG16B層		含材化石暗褐色泥炭質～灰色砂質粘土互層		≦40		←上面検出遺構 ▽地層内検出遺構 ↓下面検出遺構	←31120±1380Wd (GaK－15852)	亜間氷期
		(未命名層)		灰色砂礫～中粒砂		15～120				ゲトワイゲル
				粘土・シルト，砂互層・砂礫		370+	←ゾウの足跡状の凹み			

註）1　瓦器椀の編年は［鈴木秀典1982A］による。
2・5　［那須孝悌ほか1979］の層序を対比し、引用する。
3・4　［吉川周作ほか1986］の年代による。

る。層厚は140～160cmである。平行ラミナがよく観察される。下部層準では一部泥炭質のシルト質粘土層やシルト層が優勢で、側方へ砂礫層に移化する。オニグルミ・エゴノキなどの種子や、マツハダの毬果のほか、下記のものが産出している（註９）。トウヒ属、ハンノキ、シキシマブナ、ホオノキ、スモモ、バラ属・バラ科、マンサク科、サワラ（？）、ヤナギ属、カラスザンショウ、キハダ、クマヤナギ、コナンキンハゼ、ミズキ、ブドウ属、カヤツリグサ科。中部層準では平行ラミナのある細粒ないし極細粒砂層が卓越し、側方へ砂礫に移化して、下方侵食する。上部層準ではシルト質細粒砂層が優勢である。遺跡東南部を模式地とし、遺跡中・西部でも分布が確認されている。なお、本層下部層準の砂層中から、サヌカイトの細片が１点みつかっている。

長原16Ｂ層（新称）：暗灰褐色から暗オリーブ灰色の泥炭質粘土層であり、暗色帯を構成する。層厚は最大40cmである。下部層準は淘汰不良の灰色砂質粘土で、下限は不明瞭である。本層および16Ａ層下部層準に根をはる広葉樹の立木の化石が多数みつかっている。また、ナス属の種子が出土した。遺跡東南部を模式地とする。

未命名層（註10）：遺跡東南部では、16Ｂ層の下位に、上位より、下方侵食し上方細粒化する灰色砂礫層（層厚15～120cm）、暗青灰色中粒ないし細粒砂層（層厚約30cm）、緑色から暗青灰色で最下部がシルト質極粗粒砂層の粘土・砂互層（最大層厚70cm）、暗緑灰色細粒砂（下部）ないしシルト質粘土層（層厚約70cm）が重なる。後の２層の上面にはそれぞれゾウの足跡状の凹みが観察される。

さらに下位には、層厚約180cmで緑灰色を呈する砂質シルト薄層とシルト質細粒砂薄層が互層し、一部泥炭質のシルト質粘土薄層や粗粒砂薄層を挟む。その下位には中礫を含む砂礫層が推定層厚150～200cmで分布する。被圧水が豊富なこの帯水層の上面高度は、TP＋2.5m である。

ボーリング資料（図10）によれば、本地域の中位段丘構成層と低位段丘構成層下部層との間に推定される不整合面は、模式地付近でTP＋0～1mにあり、下部層最下部層準の砂礫層で覆われる。模式地のTP＋2.5m以下の砂礫層がこれにあたる。

以上の標準層序を表2にまとめておく。

（趙・京嶋・高井）

註）

（１）ただし、地層の記載や地層の対比にあたっては、さらなる正確さが求められよう。

（2）遺跡の地層を記載するのにあたって、一義的には分類できないと思われる概念や、従来の用語だけでは煩雑な記載になるばあいに、筆者は次のような用語を用いることにしている。また、考古学ではなじみの薄い用語について若干の解説を加えておく。

作土：耕作された土壌をさす土壌学の用語であり、その土壌体を地層として扱うばあいに、「層」を付けて作土層と呼ばれる。水田、畑にかかわらず用いられる。

客土：外から人為的に運ばれてきたと判定される土砂の総称、およびその行為を示す用語であり、土壌学用語の援用である。埋立て土、盛土、積み土、いわゆる整地層、狭義の床土、貼床等の概念を含む。作土層と同様に地層として扱うばあいには、「層」を付けて客土層と呼ぶ。

偽礫：未固結の堆積物の礫状体（塊）をさす地質学の用語であり、礫層と同様に地層として扱うばあいには偽礫層という。

（3）従来の黒色帯は現場の観察に即して暗色帯と呼び改める。なお、一般に暗色帯は下面がきわめて不明瞭であり、層理面とは判定しがたいので、厳密には地層とはいえない。しかし、暗色帯は層位学的方法を用いて調査ができる地層の部分であるので、発掘現場では「単層」扱いで調査を進めることができる。

（4）註（2）と同じ。

（5）註（2）と同じ。

（6）過去の生活面と遺構検出面の認識の仕方については、［趙哲済1983］で提案したが、その中で述べた下面検出遺構については、いわゆる遺物包含層の層位学的理解が深まったことにより、現在の認識に即した呼び分けが必要となってきたと思われる。そこで、下面検出遺構Ｄ・Ｅのうち、Ｄのみを下面検出遺構と呼び、Ｅを地層内検出遺構と呼んで区別することとする。すなわち、下面検出遺構Ｄは、遺構Ｄがｘ層上面で検出され、埋土が上位のｙ層と一連、あるいは区別できないばあいで、ｙ層が水成層の堆積構造をもたない（残さない）と観察されるばあいの遺構であり、これに対して地層内検出遺構Ｅは、埋土zをもつ遺構Ｅがｙ層掘削中に発見されたが、遺構Ｅの掘込み面が認められないまま掘削を続け、ｘ層上面で検出作業を行ったばあいの遺構であり、換言すれば、相対的に層相が均質で細分しがたい遺物包含層等を掘削調査中に、その包含層内に確認された遺構といえる。

（7）八尾市文化財調査研究会YS89－15次調査の際に、地層を観察させていただき、また、遺物に関して青木勘時氏（現天理市教育委員会）からご教示いただいた。

（8）古川辺川は旧石器時代からこの地に存在した浅い谷である［趙哲済1990］。

（9）長原１６Ａ・１６Ｂ層から産出した植物遺体は、大阪市立自然史博物館の那須孝悌氏に同定していただいた。

(10) 現状で当協会が発掘調査の対象としていない長原16Ｂ層より下位の地層には、地層番号を与えないで、未命名層と一括して呼ぶ。

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　長原遺跡西地区の調査（83－32・53・70次調査）

１）西地区の層序と遺物

ｉ）はじめに

今年度、西地区での調査は、第Ⅰ章第２節で述べたように３次に分けて実施した。各調査地は同一路線内で連続したり近接しているため、これらを検出遺構の内容や条里阡陌線・地形などを考慮して、Ⅰ～Ⅲ区に区分しなおした（図12）。

Ⅰ区は83－32次調査地の北半部で、都市計画道路「長吉１号線」西半部におけるトレンチ調査および「出戸川辺線」の延長105m分を範囲とし、南端を坪境で区切る。６条６里６坪と７条６里１坪の一部である（註１）。Ⅱ区は83－32次調査の南半部で、「出戸川辺線」の延長95m分の範囲で、南端は「馬池谷」に及ぶ。６条５里31坪にあたる。Ⅲ区は83－53・70次調査地のすべてで、「出戸川辺線」の延長60m分のトレンチ調査とその東側の街区を区切る区画整理道路および整地工事区域における調査地である。７条５里25・26坪と６条５里30坪の一部に相当する。

以下、この地区名を用いて記述する。

ii）層序（図13）

西地区は瓜破台地東部にあり、沖積層上部層Ⅰ（註２）に相当する地層はあまり遺存していない地区である。Ⅰ区北端の「長吉１号線」内のトレンチでは82－28次調査［大阪市文化財協会1990B］と同様、長原4B層がよく遺存していたものの、これ以南では、「馬池谷」内と遺構埋土を除けば、長原２～４層に相当する薄いシルト層が１ないし２層存在するにすぎず、部分的に長原６層相当のシルト層が認められるだけである。したがって、この地区の古墳時代から平安時代の遺構は、おおむね長原２～４層のいずれかの地層の基底面を検出面とし、長原13層と思われる黄褐色砂礫混りシルトないし黄色粘土～シルト層を掘込んでいる。また、「馬池谷」斜面では13層以下の層準と考えられる砂礫層が認められ

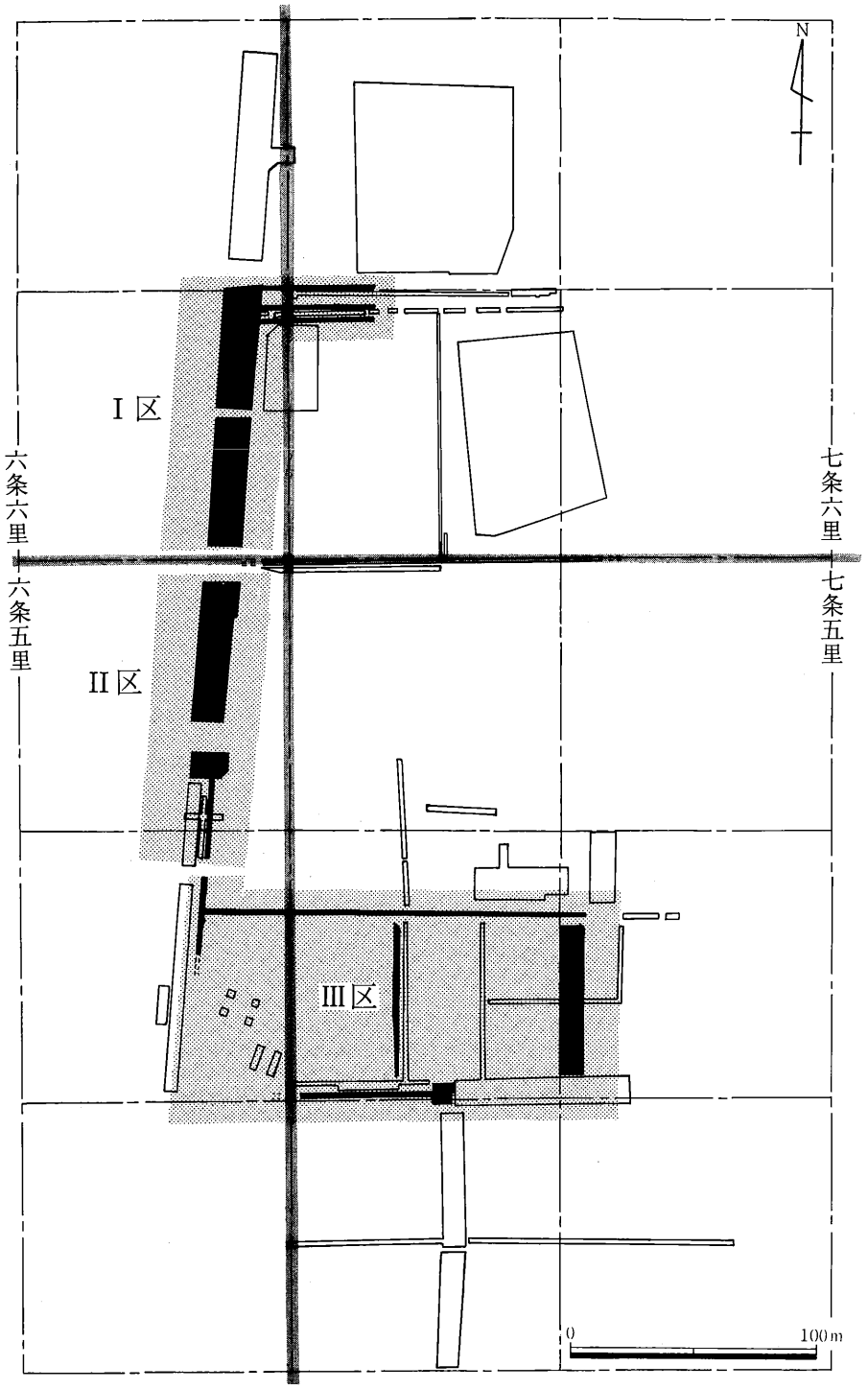


図12　長原西地区の調査区分

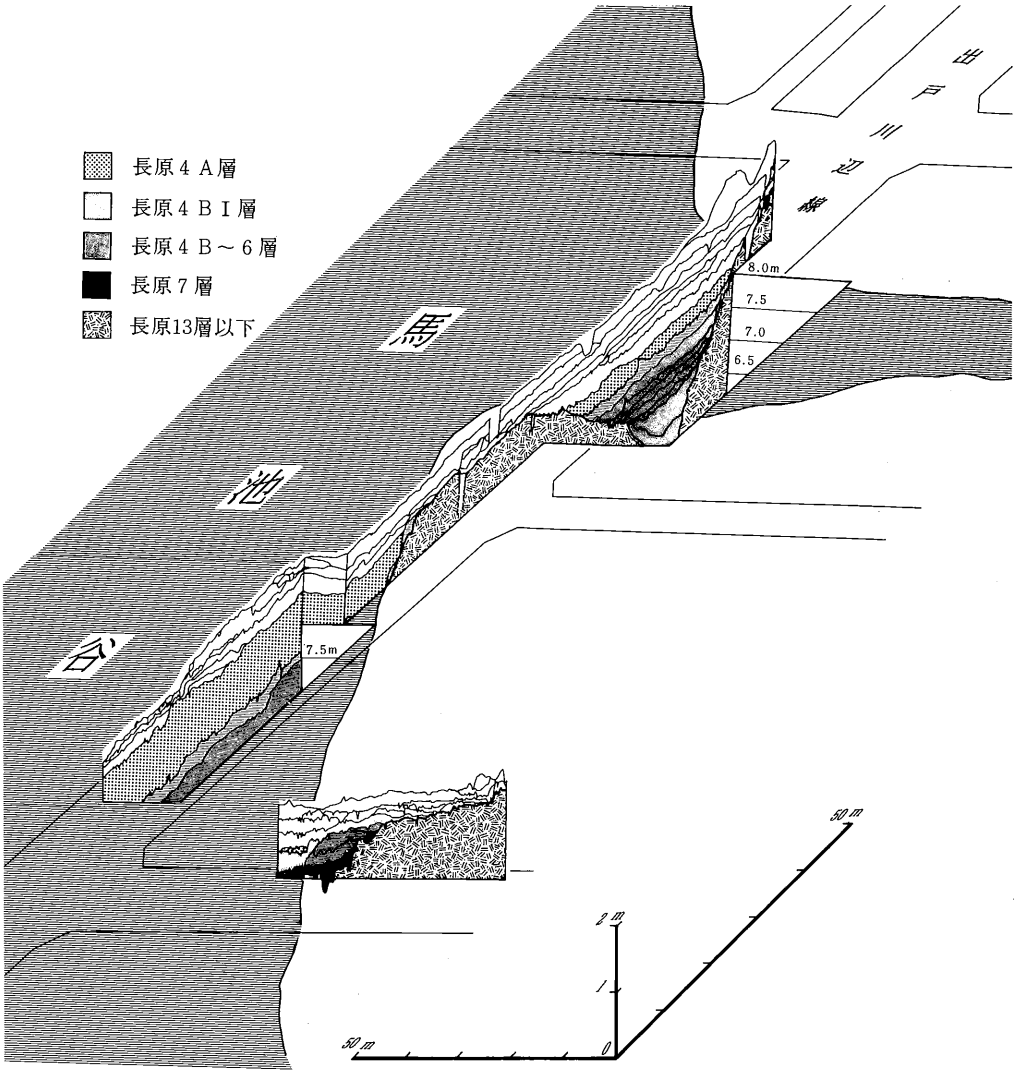


図13　「馬池谷」付近のパネルダイアグラム

る。

第Ｉ章第１節で述べたように、西地区の西部には南東から北西にのびる「馬池谷」が存在する。ここではこの谷部に堆積し、遺存していた沖積層上部層Ｉに相当する地層について記述したい。

長原１層：現代の作土層である。

長原２～３層：灰色砂混りシルト層・灰色シルト混り粗粒砂層で、この間には薄く水成の細粒砂層が介在するところがある。全体の層厚は40～70cmあるが、これらの地層は分層

発掘せず、遺物を地層ごとに取上げていないため、正確な対比ができない。

長原4A層：水成の灰色～黄褐色粗粒砂層である。層厚は30～100cmであり、谷側に向ってしだいに厚くなる。

長原4B層：灰色砂礫混り粘土質シルト層で、層厚は25～30cmである。上面で水田畦畔が検出された。本層上面はTP＋8～9mである。

長原６～７層：暗黄褐色粘土質シルト層で、Ⅲ区西部の傾斜の緩やかな谷斜面に堆積す

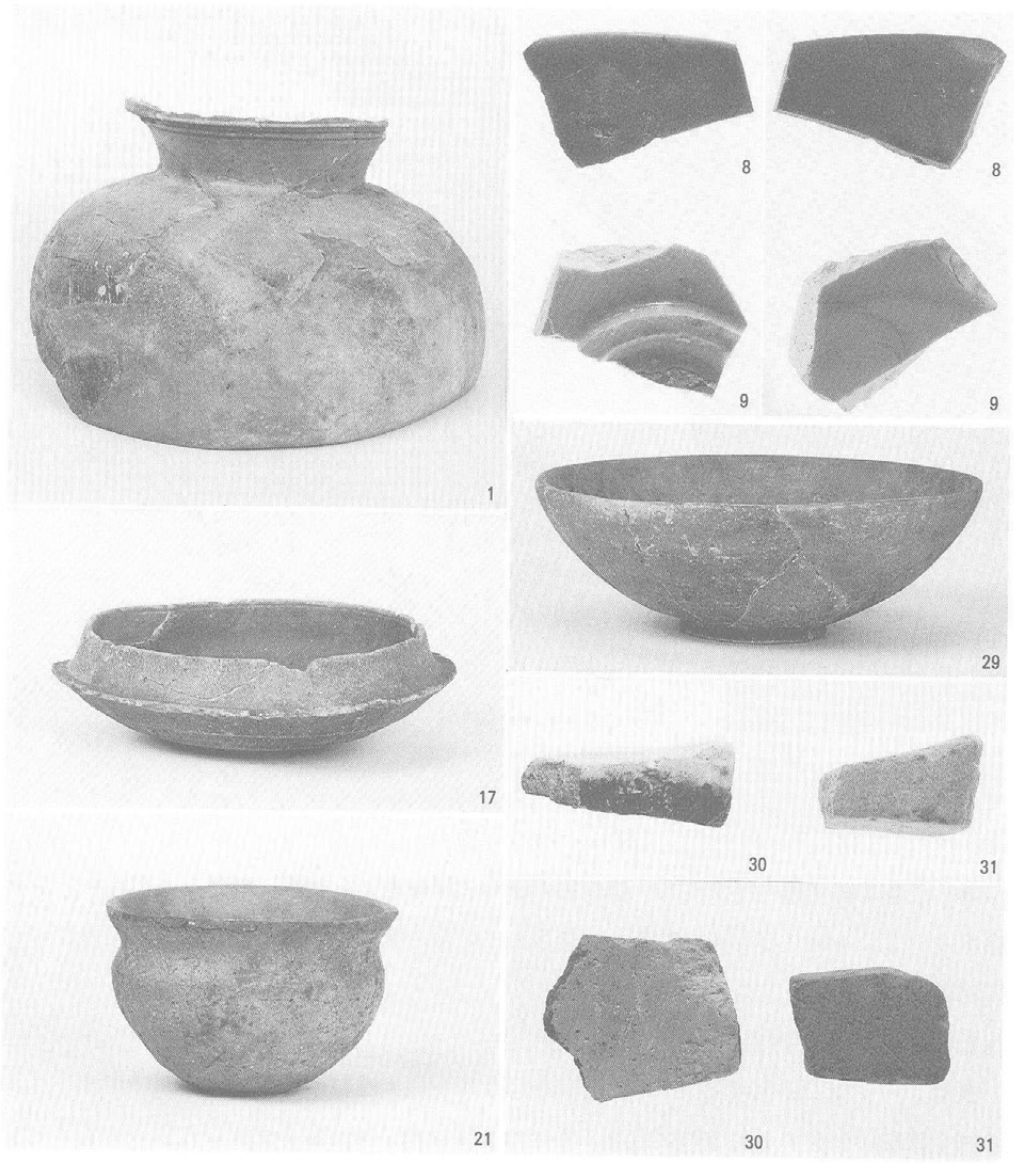


写真7　各層出土遺物
Ⅰ区北部（1・8）、Ⅰ区南部（9・30・31）、Ⅱ区南部（17）、Ⅲ区（21・29）

る。層厚は15～30cmである。土師器・須恵器片が多く含まれ、下面で井戸・溝・柱穴などが検出された。

長原７層：黒褐色砂混りシルト層で、Ⅱ区南部の谷斜面に堆積する。層厚は15cm以上である。須恵器杯身17が出土した。

ⅲ）各層出土の遺物（図14、写真7・8）

弥生時代以前の遺物の報告は後述することとし、ここでは古墳時代以後の遺物について記述する。

1はⅠ区北部の長原２層基底面で検出したTK208型式（註３）の須恵器甕である。破片がまとまった状態で出土しており、何らかの遺構に係るものと思われるが、遺構は確認できなかった。外面は平行タタキを施し、内面は同心円の当て具痕をていねいにナデ消している。Ⅰ区の長原4B層からの出土遺物には土師器小皿Ｂ・Ｆ（註４）や瓦器小皿・椀、土

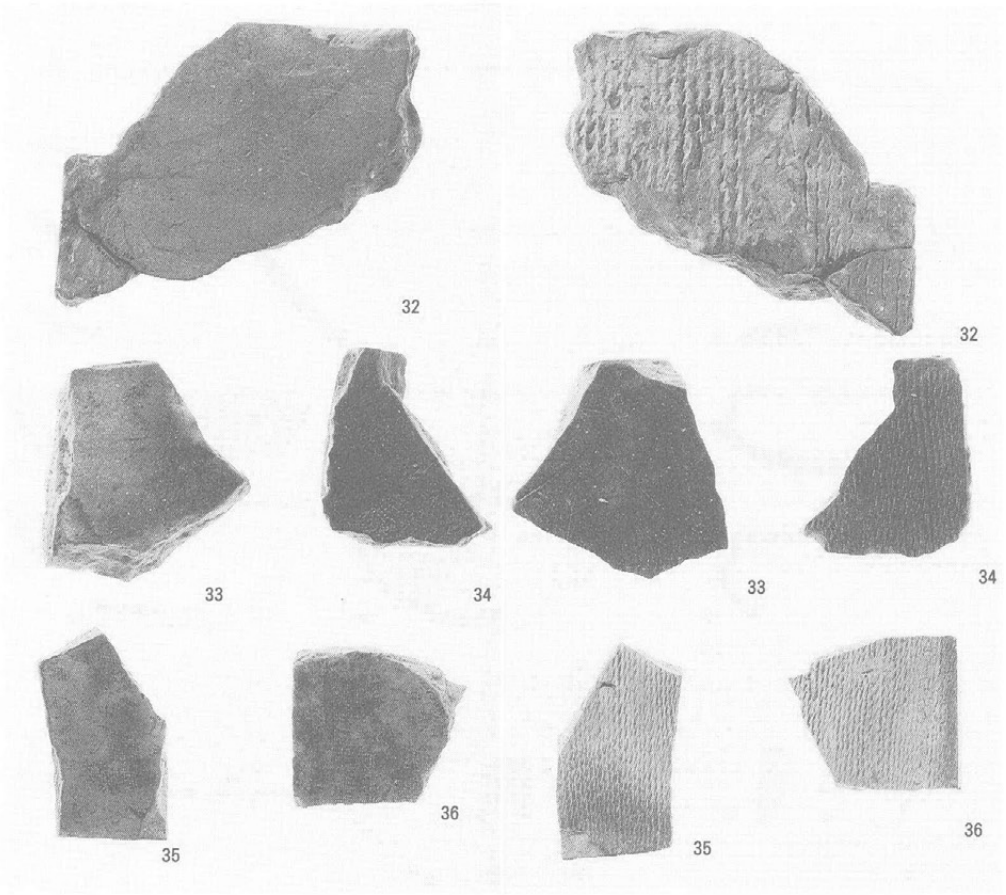


写真8　Ⅰ区出土瓦

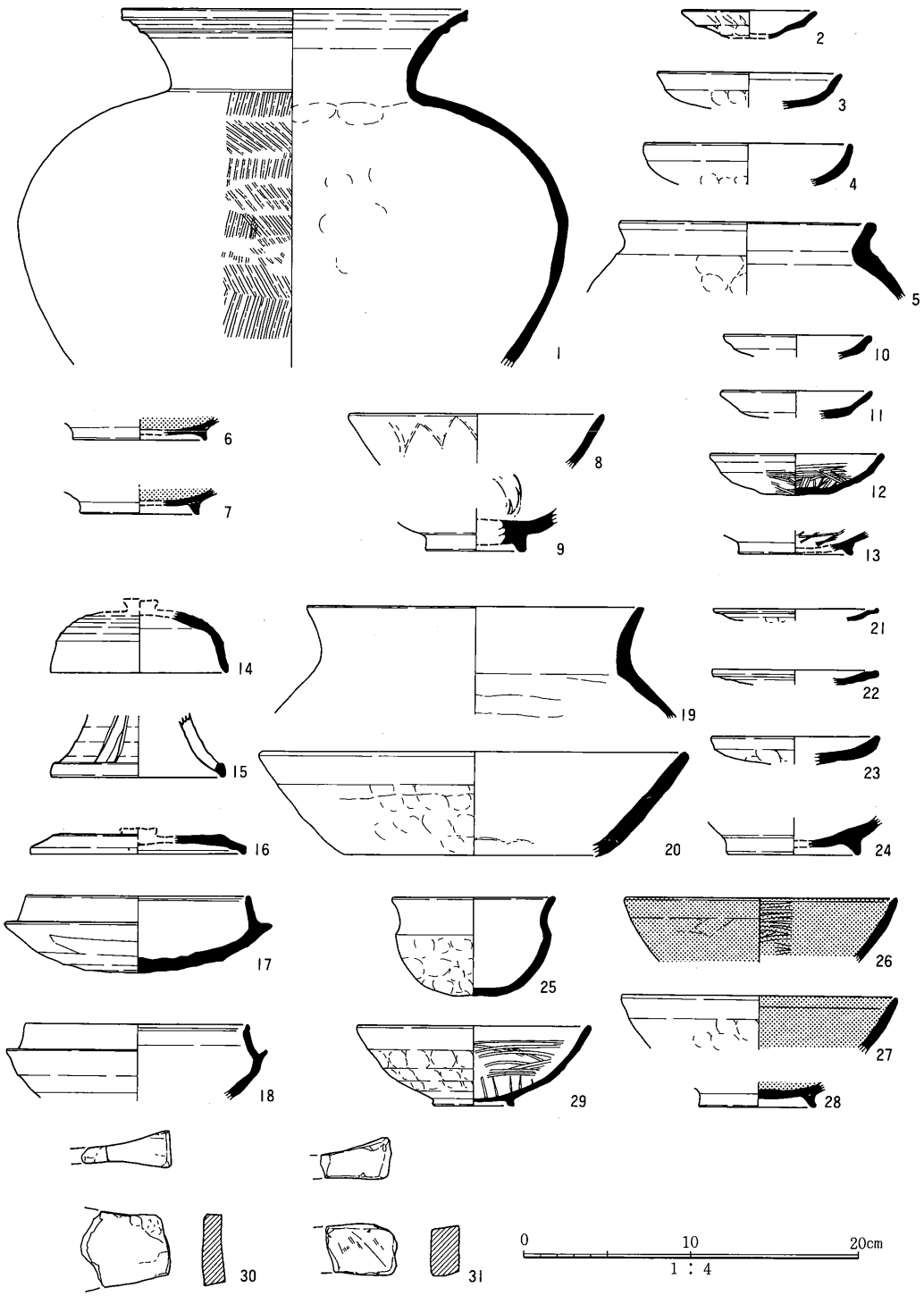


図14　各層出土遺物
Ⅰ区北部（1・3～5・7・8・11～13）、Ⅰ区南部（2・6・9・10・30・31）、Ⅱ区南部（17）、Ⅲ区（14～16・18～29）

師器甕Ｂ、青磁碗、砥石がある。瓦器小皿12は内外面にヘラミガキが認められる。瓦器椀13はＣ－Ⅰ～Ⅱ期（表10参照）で内底面に格子の暗文がある。8・9は龍泉窯系の青磁碗で、8は外面に鎬蓮弁の文様をもつⅠ－５－ｂ類（註５）、9は高台部全体に施釉する。砥石30・31は30が泥岩製、31は極細粒砂岩製である。いずれも上面および下面の中央部と推測される部分が顕著に研ぎ減っており、断面形が凹レンズ形をなす。30は側面も使用されている。２点ともⅠ区南部の奈良時代の建物群付近で出土しているため、当該期に属する可能性がある。

Ⅲ区西部の「馬池谷」内では、長原６層または７層からMT15型式の須恵器杯身17、長原4A層からMT15型式の須恵器杯身18、奈良時代から平安時代初頭の土師器小型甕25、Ｃ－Ⅲ期（表10参照）の瓦器椀29が出土している。長原4A層からは各時期の遺物が出土しているが、29の瓦器椀がこの地層の年代にもっとも近いといえよう。

Ⅲ区北部の平安時代の建物群付近の長原４層から出土した遺物には、土師器皿、黒色土器Ａ・Ｂ類椀、須恵器蓋・高杯などがある。これらはこの付近で検出された古墳時代あるいは平安時代の遺構群と関連する遺物である。14・15・19は古墳時代の遺物と思われる。20の土師器鉢は平底と思われる底部から直線的に斜め外方にのびる口縁部で、端部は丸くおさめる。内外面ともにユビナデ調整で粘土接合痕が残る。

また、Ⅰ区では、凸面に縄タタキメ、凹面に布目圧痕が残る平瓦片（写真8）が出土しているが、遺構出土資料も含めて瓦塼類はⅠ・Ⅱ区に集中しており、Ⅲ区では少ない。

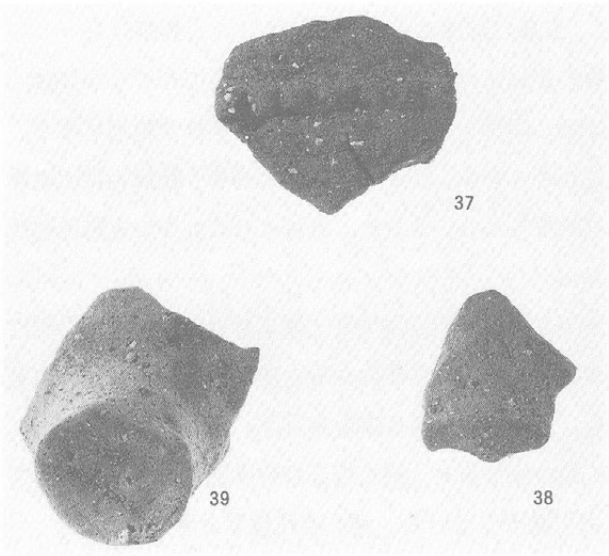


写真9　弥生時代以前の遺物

２）弥生時代以前の遺物

ｉ）土器（図15、写真9）

37はⅢ区西部の馬池谷斜面に

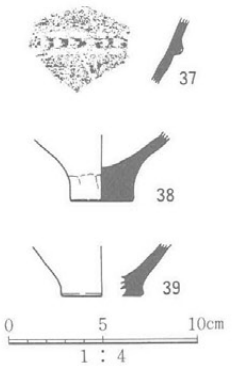


図15　弥生時代以前の遺物
SD29(37)、Ⅰ区南部(38)、SK12(39)

堆積する長原６～７層から出土した縄文土器の体部片である。突帯が貼付けられ、そこに刻み目が施されている。胎土は角閃石や雲母を多く含む生駒西麓産で、暗褐色を呈する。縄文時代晩期の深鉢の破片であろう。

38・39は弥生土器の甕または壺の底部である。いずれも内外面の調整は磨滅のため不明である。38はⅠ区南部に薄く堆積していた長原４層ないし６層から、39はⅡ区で検出された古墳時代の土壙SK12から出土した。

両者とも底部の形態からみて第Ⅴ様式に属するものであると思われる。西地区における弥生時代の資料は少ないが、38・39の出土地点の10m西側の調査で、第Ⅴ様式の土器を出土する小型の方形竪穴住居と溝が検出されている（註６）。また、周辺では弥生土器や石鏃・石庖丁・蛤刃石斧などが散布しており、この付近に小規模の弥生時代の集落が存在していたと考えられる。（京嶋）

ⅱ）石器遺物

本調査地からは石器として、石鏃10点、石錐１点、尖頭器１点、ナイフ形石器６点が出土した。ほかにクサビの使用に関係する資料や、火を受けて破砕しているサヌカイト礫などが出土している。これらはほとんどがⅠ区全域とⅢ区南西部の「馬池谷」斜面に堆積する古墳時代以降の地層から出土したもので、すべて遊離資料である。したがって、石器遺物の年代を確定することは困難であるが、形態・製作技術などから推測しうるものについては文中に記している。

石鏃（図16、図版37）

40は脚のやや長い凹基式鏃である。刃部の形態は先端ですぼまり、尖頭部は尖っている。脚は末端に向うにしたがってやや広がっている。側縁は側面からみてジグザグに仕上げられており、薄く鋭い。えぐり部分は、両面とも一度の大きな押圧剥離で整形するが、風化のため側縁の調整との前後関係はわからない。側縁で、一辺につき十数回の押圧剥離を行うなど、全体に細かくていねいに調整されているため、素材とした剥片の主剥離面は不明である。縄文時代前半と考えられる。

41は脚の短い凹基式鏃で、側縁に段があり五角形を呈する。先端付近に素材とした剥片の主剥離面が遺存しており、打点が横方向にあることがわかる。基部のえぐり部分は表裏面とも１回の大きな押圧剥離で整形し、その後に側縁の調整を行う。両面とも、基本的に大きな押圧剥離を数回行うだけで薄く鋭い縁を作り、修正部分にのみ細かな調整を施している。特に、尖頭部は細かい調整だけで整形している。縄文時代前半と考えられる。

42は基部のえぐりがやや深い凹基式鏃である。尖頭部は新しい折れによって失われているが、中ほどにわずかにくびれが残ることから、先端に向って細くなるタイプと考えられる。脚の端部は尖りぎみである。素材となった剥片の面は残っていない。基部のえぐりは、片面は１回の大きな押圧剥離で仕上げており、もう一方の面は数回の押圧剥離を行っている。その後で側縁を調整している。縄文時代後半と考えられる。

43は尖頭部が新しい折れにより失われている凹基式鏃である。全面に押圧剥離がいきわたり、もとの素材の剥離面は残っていない。基部のえぐりは、両面とも数度の押圧剥離に

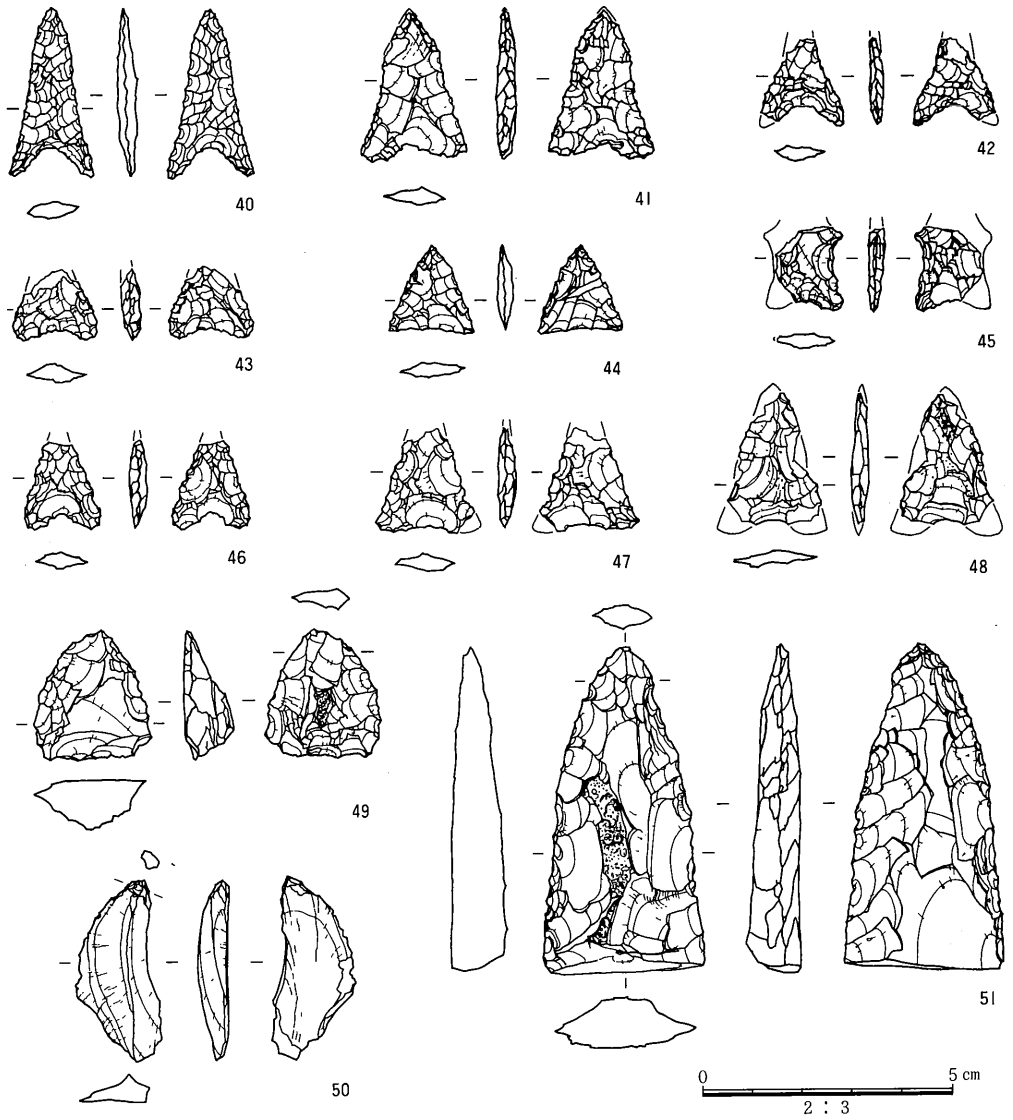


図16　石鏃・石錐・尖頭器

よって整形されており、浅い。脚の先端は丸い。縄文時代と考えられる。

44は平面形が正三角形に近い平基式鏃である。薄く鋭い刃部の先端付近にわずかな段があり、そこから先は細かな調整によって尖頭部を作り出している。基部はわずかに内湾しているが、側縁と同様な押圧剥離が並んでいる。全面に押圧剥離がいきわたり、素材となった剥片の剥離面は残っていない。縄文時代前半と考えられる。

45は側縁が明瞭に突出する五角形の凹基式鏃である。新しい折れによって尖頭部と片方の脚を欠いている。中央に素材の主剥離面が残り、剥片の末端側を基部にあてていることがわかる。基部のえぐりは、まず背面側で大きな剥離を行ってから、主剥離面側に数回の小さな調整を行って仕上げている。側縁の調整は、正位置に置いたとき、両面とも向って左側は小さく、右側は大きい傾向がある。縄文時代後半と考えられる。

46は側縁が直線的な凹基式鏃である。新しい折れによって尖頭部側を欠いている。基部は両面とも１回の押圧剥離によって一段深いえぐりを整形し、そののちに側縁の調整を行う。側縁の押圧剥離は、末端がステップになるが、側面からみて比較的大きなジグザグに仕上げられており、刃部は薄く鋭いものとなっている。縄文時代と考えられる。

47は側縁が直線的な凹基式鏃である。新しい折れによって尖頭部と脚を欠いているが、脚には古い折れもみられる。それらの欠損部分を復元してもバランスのよい形とはいえない。基部のえぐりはごくわずかであるが、反り具合は41に似ている。素材となった剥片の面は、押圧剥離によってすべて取去られている。刃部は薄く鋭い。その調整は正位置に置いたとき、両面とも向って右側には大きな剥離が並び、左側には小さな剥離が並ぶ傾向がある。縄文時代と考えられる。

48は刃部がやや外側に広がり、基部がわずかにへこむ凹基式鏃である。新しい折れによるいたみが激しい。側縁の調整は粗いが、鋭いもので、基部の調整状況は41に似ている。縄文時代の可能性があろう。

49は背面に自然面を含む厚い素材を用いているが、平面形からみて石鏃と考えられる。主剥離面は平坦で、ほぼ側縁の全周に押圧剥離を行っているが、刃部の調整としては不十分である。背面についても大きな縦長の押圧剥離を施して自然面の除去を試みているが、末端はステップになって止っている。そのために未製品のまま廃棄されたものであろう。基部の調整がすべて側縁の調整を切っていることから、両面加工石器の尖頭部が製作途中に折れて、その折面から調整を行い、再利用しようとした可能性も考えられる。縄文時代と考えられる。

石錐（図16、図版37）

50は上端が磨滅していることから、石錐と考えられる。ただし顕著な回転痕ではないことから、手に持って刺突するための道具であろう。素材は横長剥片で、背面は大きなネガティブな剥離面の一部を切取っている。打撃の作用点が幅広いために主剥離面のバルブは不明瞭で、打面の縁にリング・フィッシャーが集まっている。剥離は急角度で進み、末端で段になって抜けている。ほかに二次的な加工はなく、偶然できた断面三角形の鋭い端部を転用したものであろう。縄文時代の尖頭部を作り出した石錐とは形態が異なっていることから、弥生時代に属する可能性がある。

尖頭器（図16、図版37）

51は背面に自然面をもつ剥片を素材とした尖頭器である。刃部は先端に向うにしたがってすぼまっている。刃部の調整は、主剥離面側の左側縁では長さ1.5㎝、幅0.6㎝前後の縦長の剥離面が並ぶ、いわゆる樋状剥離に近いていねいなものである。一方、右側縁では横長の剥離面が多く、その末端はステップとなっている。また、背面側でも横長の剥離面が多く、自然面が残る不十分な状態である。基部は、左平面図の左最下にみえる押圧剥離からの衝撃によって折れており、そのために未製品のまま廃棄されたものであろう。以上の調整の仕方は弥生時代の石槍とは異なり、縄文時代草創期の有茎尖頭器の未製品と考えられる（註７）。

クサビから剥落した剥片（図17、図版37）

52は背面全体が自然面である横長剥片である。自然面を打面とする主剥離面のバルブは平坦で、打面に対して垂直に割れが広がり、稜をなすリングでいったん止っている。再び始まる割れは、末端に向けて急速に背面側に抜けている。こうしたことから、この剥片がクサビに使用した本体から剥落したものと考える。また、剥片の末端は背面・主剥離面ともに細かな調整が施されており、刃部を作って道具として使用した可能性がある。

53は主剥離面に相当する面のバルブは凹んでいる。背面にはこの面と打点を同じくする面が広がり、両者は同時に形成された面であることがわかる。一方、反対側には向い合う加撃で末端がステップとなった細かい剥離面が多くみられる。これらのことから、この剥片がクサビに使用された本体から剥落したものと考えられる。

54は背面は稜をもつ自然面である。主剥離面に相当する面は、自然面を打面とし、バルブは凹み、同じ方向から加えられた力で剥離した細かい剥離面が打点付近にみられる。一方、反対側にも向い合う力で剥離した細かい剥離面がみられる。これらのことから、この

剥片がクサビに使用された本体から剥落したものと考えられる。

55は中央で２度にわたって折れており、それを復元しても両面とも打面がない。仮に１枚の平坦面のみで構成されている方を主剥離面とすると、左側縁に剥離がいったん止って段をなしている部分がみえる。また、背面には複雑な剥離面が混在しており、それぞれの切合い関係も明瞭でないことから、これらの剥離は同時に起った可能性がある。以上のことは、通常の打撃による剥離のようすとは異なっていることから、クサビ本体を対象物に打込んだときに剥落したものの可能性がある。

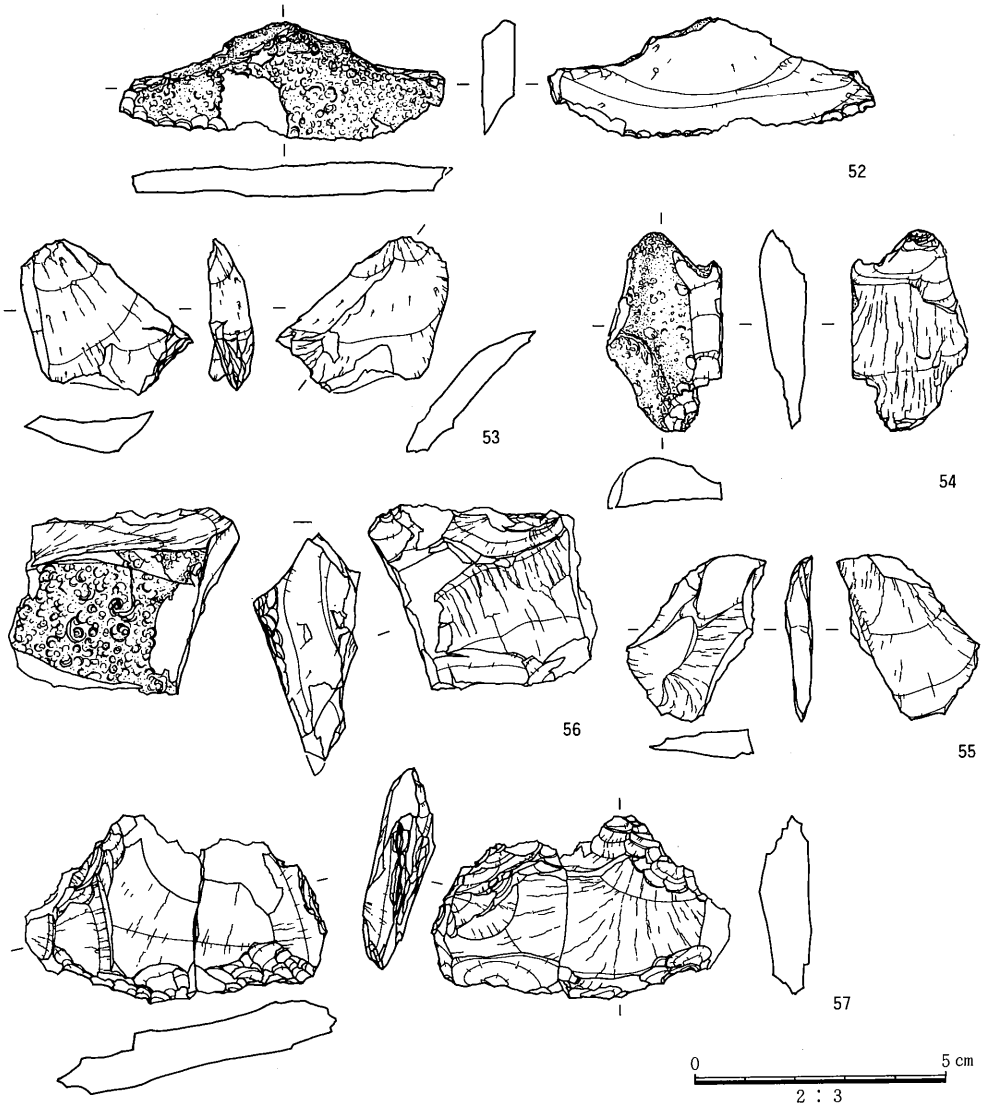


図17　クサビ

クサビ本体（図17、図版37）

56は背面が自然面のみで構成される。主剥離面側は複数の面によって構成されている。中央の広い面を主剥離面とすると、その剥離の状況はフィッシャーなどをみると強い打撃が加えられたようすを示している。しかも、上下からの剥離面どうしが複雑に入組み、切合い関係が判断しづらいことから、これらがほぼ同時に起った剥離面であると考えられる。現状では四辺の折れのためにクサビとして不可欠な鋭い縁はみあたらないが、対象物に打込んだ際に剥落した可能性がある。背面側からみて右にある折面は、主剥離面が形成されたのちのものである。折面には自然面からの小剥離が多数認められるが、それによる形態の変化は特に認められず、意図的なものではないようである。

57は厚さ約1cmの板状の剥片の周囲を、不安定な小さいステップの剥離が取巻いている。しかも、上縁と下縁の相対する方向に、両面にわたって多くみられることから、両極的な打撃が幾度も加えられたもの、つまりクサビとして使用されたと考えられる。ただし、これらの剥離の中にクサビの刃部として加工されていた剥離面が含まれているか否かは、現状では判断できない。主剥離面にあたる右図のもっとも広い面はリングが発達して段をなしているがバルブは凹んでおり、通常の打撃ではなく、打面に対して垂直に近い角度で強く敲いたときに起りうる剥離の現象と考えられる。

ナイフ形石器（図18、図版38）

58は翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器である。素材の打面は、大ぶりで急角度のブランティングによって鋸歯状に取除かれており、やや外反する背部に整形されている。刃縁部の下端にも調整剥離を行う二側縁加工を施している。基部の調整は欠損のためわからない。尖頭部は古い折れによって失われている。刃部の断面の角度（刃角）は約55°である。断面形は厚い台形である。底面にはわずかに自然面が残ることから、もとの盤状の石核の主剥離面は、自然面に近い部分を割取っていたことがわかる。素材の翼状剥片は、底面の偏り具合から、左右の均整が取れたものとはいえない。背面には先行する翼状剥片の剥離面がみえるが、リングが波打っており、不安定なものである。

59は横長剥片を素材としたナイフ形石器で、素材の剥片に底面はみられない。尖頭部・基部ともに折れている。背部と刃部の両方に、主剥離面を打面としたブランティングを加える二側縁加工を施している。

60は盤状剥片を石核とした、底面をもつ横長剥片を素材としたナイフ形石器である。尖頭部は折れている。背部に主剥離面を打面としたブランティングを施し、背面には先行す

る横長剥片を取った剥離面がみられる。

61は小型の切出し形ナイフ形石器である。二側縁に主剥離面側からの垂直に近い角度のブランティングを施し、鋭い尖頭部と尖った基部を作り出している。そのため平面形は三角形を呈し、背面の半分以上は底面によって占められている。刃部は薄く、刃角は約23°で、平面でみた尖頭部の角度（尖頭角）は55°である。風化が著しく進行し、基部の磨滅などの使用痕は明瞭でない。素材となった剥片の剥離方向の判定も困難である。

62は横長剥片を素材とした比較的大型のナイフ形石器である。背面側にも同一の打撃方向からなる剥離面がみられることから、素材は一連の打撃によって割取られた剥片であることがわかる。しかし、底面にあたる部分は複数の剥離面によって構成されており、典型的な翼状剥片とはいえない。背部は、大ぶりで急角度の整ったブランティングを行い、直線的に仕上げられている。刃縁部は、基部加工と中ほどにみられる小さな加工が施されて

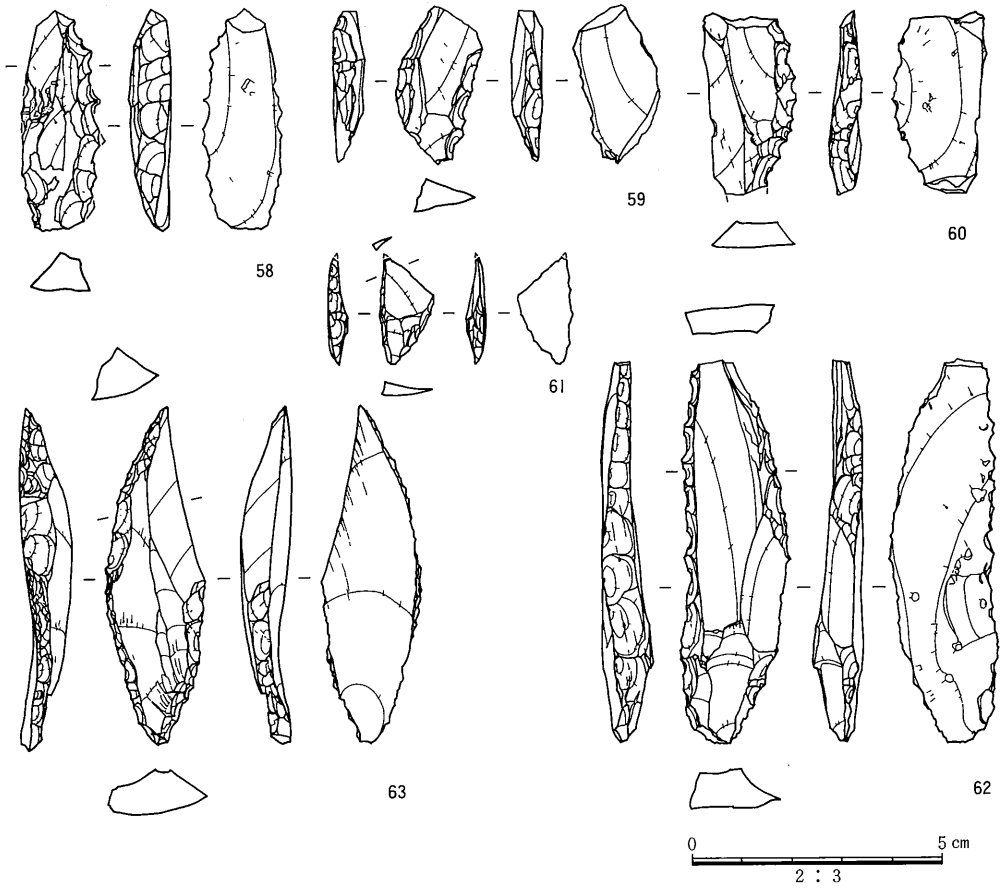


図18　ナイフ形石器

いる。中央部での断面形は偏平な台形を呈する。折れのため刃部を欠いており、刃角・尖頭角ともに不明である。

63は真正な石刃ともみえる縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。素材の打面を基部にあてている。やや内反りの刃部を残し、二側縁加工によって鋭い尖頭部を作り出していることから、典型的な茂呂型ナイフ形石器といえる。長側縁を外反させるように施したブランティングは、すべて主剥離面側を加撃しているが、中ほどと先端から約1.5cmの間にのみ背面の稜線上からも加撃し、尖頭部を断面三角形に整形している。刃角は約60°、尖頭角は3°である。短側縁の調整も主剥離面側を打面とし、ていねいに仕上げられている。

石核（図19、図版38）

64は５枚以上の剥片を取った石核である。これらの剥片のうち、下図上縁の横長剥片の右側縁は先行する剥離面と切合う場所で鋭い縁をつくっており、刃部となりうる部分をもつ剥片といえる。さらに、この剥片を取ったのち、その剥離面を打面として上図下縁の横長剥片を取っているが、作業はそこで終了している。

65は６枚以上の剥片を取った石核である。自然面とそれに直交する折面をもつ素材から、左図にみえる剥片を取ったのち、最終的には側面図にみられる末端の歪んだ縦長剥片を取っている。64のような鋭い縁をもつ剥片が取られたと考えられる面はない。

66は厚さ1.5cm程度の板状の礫を素材とし、石核の一辺を両面から敲いて数枚ずつ剥片を取っている。その多くは横長の剥片である。右図のほうが新しく剥離されており、剥離の順番に規則性がうかがえる。こうしたことから、素材の一辺を加工して刃部としようとした石器の可能性も考えられる。

67の右図の左下半部にある大きく広がる剥離面は、最初に素材となった剥片を得たときの主剥離面である。この剥片は背面に自然面をもつ盤状のものである。その主剥離面を打面として、まず左右から背面側の中央に向けて薄く調整剥離を行い、横断面をかまぼこ形に整えている。上下の折れがなければ、その頂点を敲いて翼状剥片を割取るのに都合のよい石核となりえたであろう。

しかし、この素材剥片は上下縁が折れたのちも使われている。最初に取られた剥片は、主剥離面の右側にみえる横長剥片である。大きさは石核の横幅いっぱいに割取っている。打面は背面の調整部分を用いている。次に取られたのは、下縁の折面を打面に使った小さな丸い剥片である。この折面にはほかに８回以上の打撃裂痕があるが、剥片の剥離は成功していない。さらに持ち替えて、上の折面からも三角形の横長剥片を２枚取っている。１

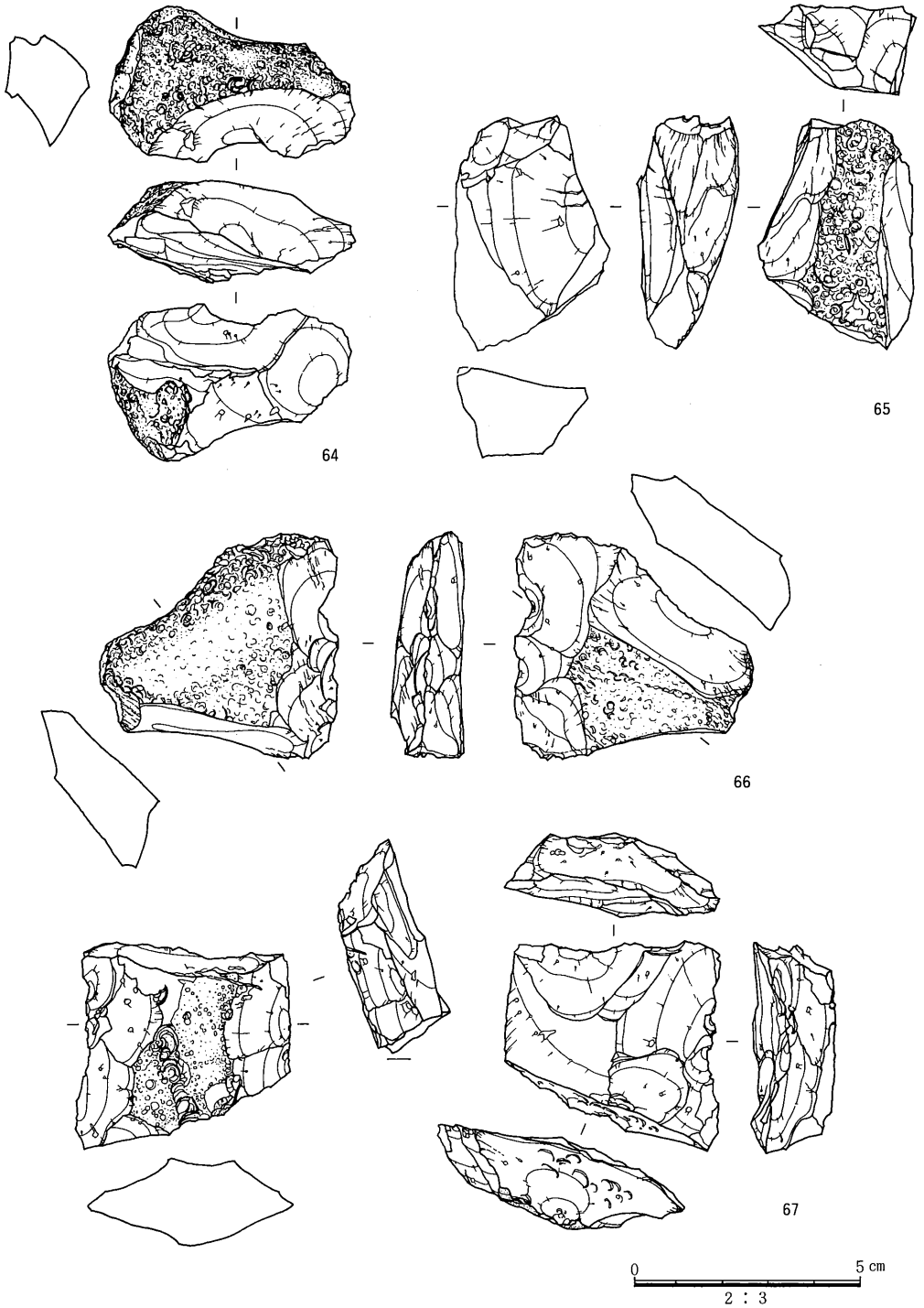


図19　石核

枚目は、最初に取った剥片の剥離面の末端を右側縁に取込んでおり、それを底面とすると小型のナイフ形石器になりうる剥片と考えられる。背面の右縁にある調整剥離面を打面とする剥片の剥離は試みられることなく、この石核は廃棄されている。

底面をもつ剥片（図20、図版39）

68は素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。打面調整を行ったのちに加撃され、この剥片の主剥離面が形成されている。背面にも横長の剥離面があり、同じ底面をもつ横長剥片を取っていることから、連続して底面をもつ横長剥片を取る作業が想定できる。以上のことから翼状剥片と考えられる。

69は素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。背面も同様に素材となる石核の主剥離面を底面にもつ横長の剥離面である。背面の打点付近に、この横長の剥片に先行する打面調整が行われている。主剥離面側からみて、右側に自然面が残っており、素材となった石核は礫の周縁部を利用した剥片であろう。以上のことから翼状剥片と考えられる。

70は素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。剥片の主剥離面は素材の流理構造を切っているためリングが発達している。その打面は平な面であり、石核とした素材の背面に相当する可能性がある。また、剥片の背面側にも主剥離面と同じ方向から加撃された横長の剥離面がみられる。ただし、打撃の作用点は広く、打面の縁にリングが集まること、全体的に薄く、背面側のリングが不安定なことなどから、別の剥片が取られたときに同時に剥がれた可能性がある。

71は素材となる石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。背面も同様に素材となる石核の主剥離面を底面にもつ横長の剥離面である。背面の打点付近に背面から打面調整を行って、主剥離面が形成されている。いずれも、打点は石核の山形状の稜線上にあり、連続して２枚以上の底面をもつ横長剥片が取られていることがわかる。以上のことから翼状剥片と考えられる。

72は素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。主剥離面は打面調整によって山形状に盛り上がった部分を打点としている。また、背面側にも横長の剥離面があり、連続して横長剥片を取る作業が想定できる。以上のことから翼状剥片と考えられる。

73は素材となる石核の主剥離面を底面にもつ横長剥片である。背面も石核の主剥離面を底面にもつ横長の剥離面で、両者の打点はほぼ同じ位置にある。しかし、背面の剥離面に

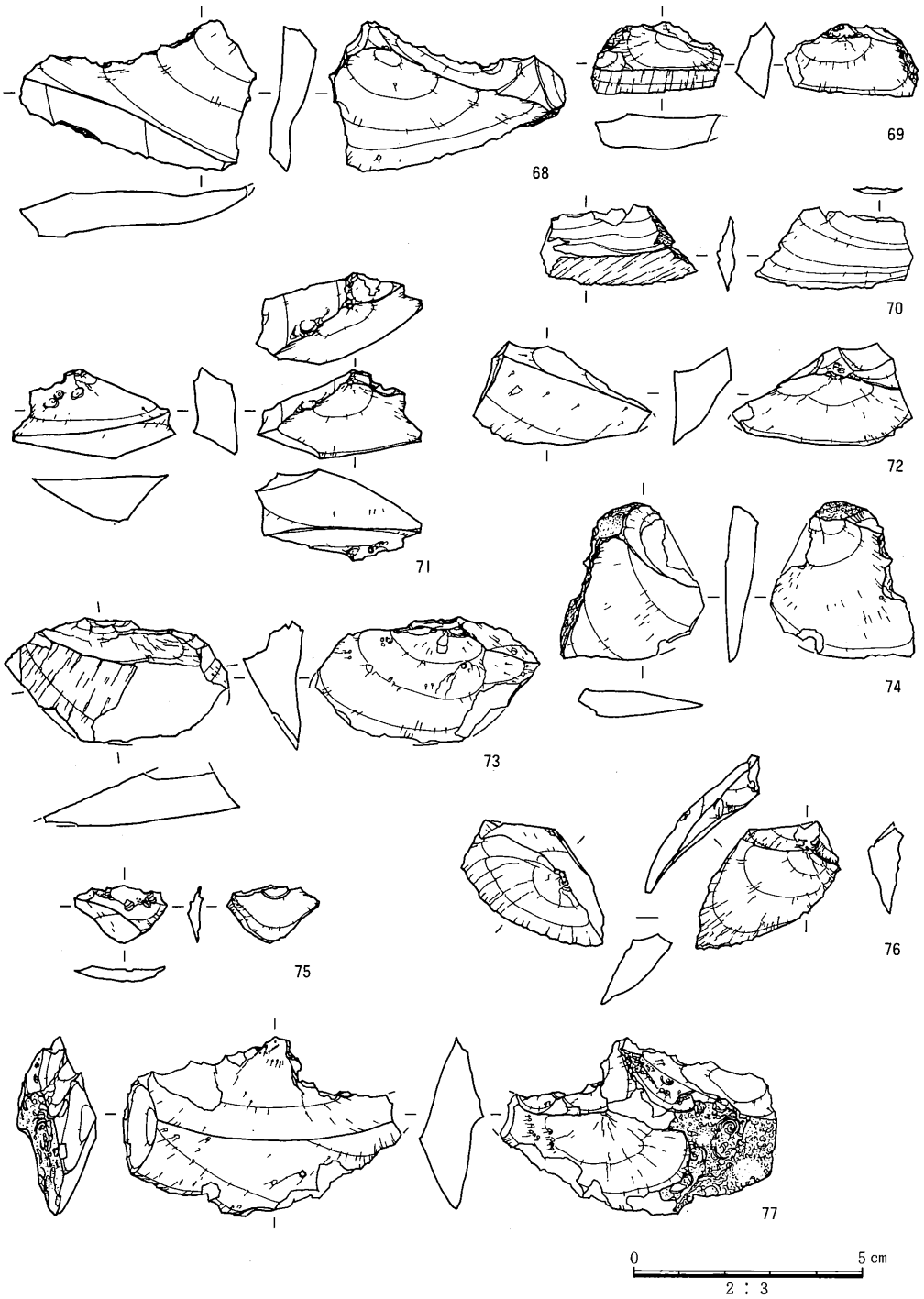


図20　底面をもつ剥片

は直前の敲き損いによって生じた割れに影響されてステップやリングの歪みがある。以上のことから翼状剥片と考えられる。

74は背面が比較的大きく平な面で、この剥片が盤状の剥片を素材としていると考えられる。この面が素材の主剥離面か、背面であるかは判別しがたい。主剥離面であるならば、流理構造に沿って剥離が奥に入りすぎているが、底面をもつ剥片と考えられる。また、背面としたばあい、83と似た打面を準備するための剥片とも考えられる。主剥離面は自然面を打面とし、同じ打面による先行剥離面が背面に認められる。

75は主剥離面の打面が、バルブがステップになるのに伴い、折れて欠損している。末端はヒンジ・フラクチャーで終っている。背面は加撃方向の異なる2枚の剥離面からなる。下の面は上のネガティブな面によって切られる以前は大きく広がっていたことがリングのようすからわかる。これを底面として二側縁加工を施すと、61のような切出し形ナイフ形石器になりえよう。また、瀬戸内技法の打面調整にみられる細部調整剥片とも考えられる。

76は背面がポジティブな面とそれに伴う打面で構成されており、打点は裂痕となって遺存している。これらは右図の主剥離面によって切られていることから、それに先行する剥離面である。また、フィッシャーが発達していることから、もとは大きな剥離面だったと考えられる。主剥離面は背面の主軸を斜めに切る方向に剥離されている。打点の右にある小さな三角形の面は最後の折面で、それ以外に二次的な調整はない。つまり、この剥片は先行する剥離面の打点付近を底面として取込み、剥離されて以後、加工はなされていない。以上のことから、盤状剥片の主剥離面を底面とした翼状剥片を割取ろうとしたとき、打点が斜めになり、片流れの剥離になったファースト・フレイクと考えられる。

77は素材の背面に自然面をもつ盤状の剥片で、その主剥離面を底面にもつ翼状剥片である。背面側には打面調整が加えられ、山形状に高くなった部分を打点としている。主剥離面は右面にみられる横長の剥離面である。残核は素材とした石核の末端となる。背面にも同様の横長剥片を取った剥離面があり、連続して底面をもつ横長剥片を取る作業が考えられる。

打面調整剥片（図21、図版39）

78は背面が3枚のネガティブな剥離面と自然面からなる。剥離面の剥離の方向は自然面に向いており、自然面を除去しようとした意図がうかがえる。主剥離面はバルバースカーが発達し、末端はフェザー・エッジとなって自然面を切っている。打面は平坦な剥離面を用いており、菱形を呈する。この剥片を取ったあとの剥離面を打面として翼状剥片を割取っ

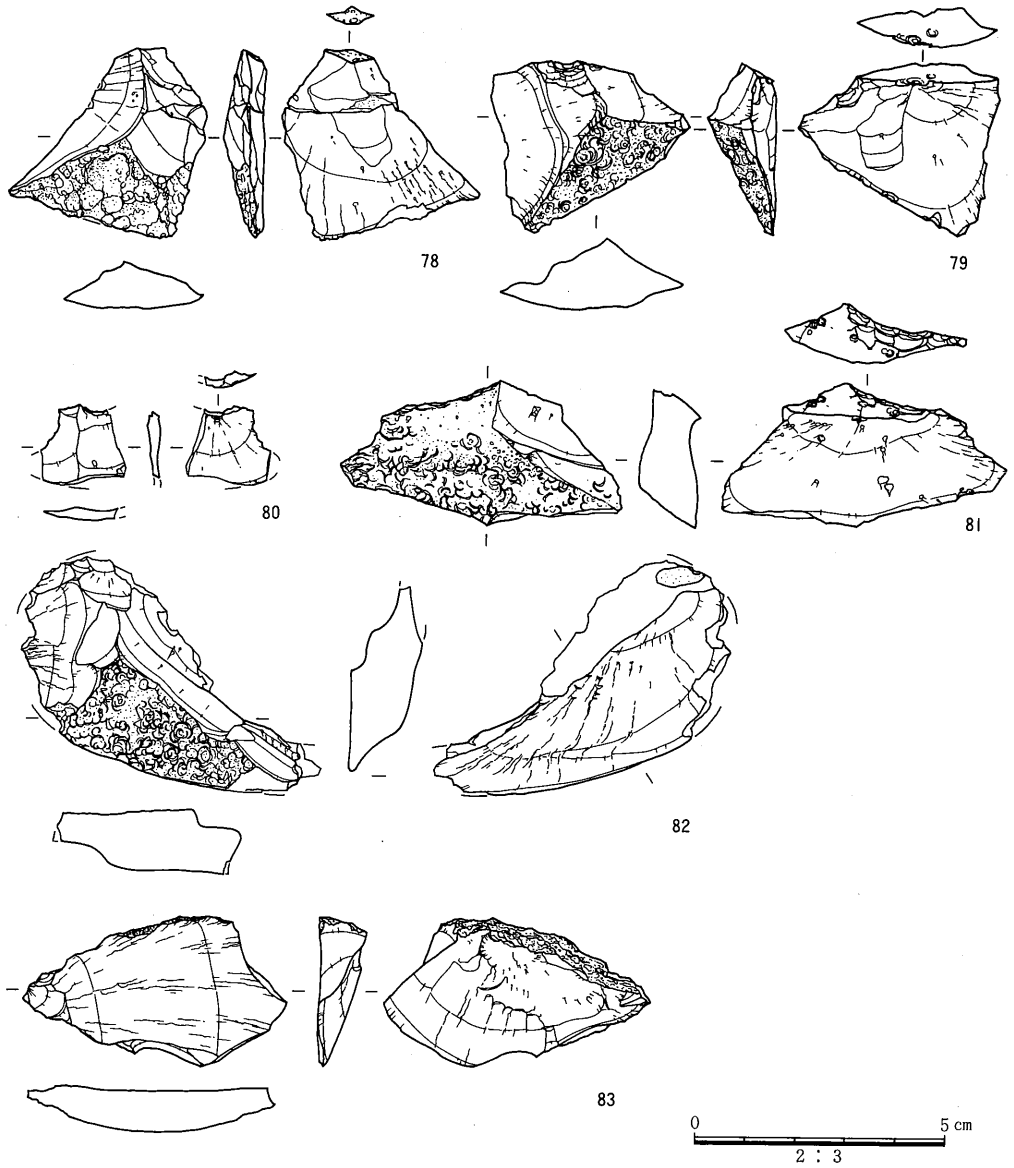


図21　打面調整剥片

たとすれば、打面準備のための調整剥片といえよう。

79は背面が自然面と三つの剥離面からなる。主剥離面は比較的大きく平な面の一部を打面としている。この打面は背面に自然面をもつ盤状の石核の主剥離面である。瀬戸内技法の剥片剥離作業の中では、この剥片は78と同じく翼状剥片を取るための打面を準備する剥片に相当すると考えられる。背面の剥離面は、先行する翼状剥片を取る際に、石核の両側

縁から施された打面調整であると考えられる。また、主剥離面の末端に小さな剥離面があり、何らかの道具に使用した可能性がある。

80は背面がおもに２枚のネガティブな面からなり、双方とも剥離は上方からの加撃による。左右・下端の折面は新しいもので、二次加工はない。主剥離面の打面は１枚の剥離面を用い、剥離の方向は背面と同じであることから、盤状の剥片を石核に利用する際の打面調整剥片の可能性がある。全体に風化が進んでいる。

81は背面が自然面と１枚の剥離面からなる。主剥離面の打面は比較的大きな剥離面を利用している。打面には、背面側から敲かれた細かい剥離が多く認められるが、主剥離面の形成以前のものである。素材となった石核は背面に自然面をもつ盤状の剥片で、その主剥離面を打面として作られた剥片である。瀬戸内技法の剥片剥離作業の中では、最初の翼状剥片を取るための打面を石核に準備する剥片に相当すると考えられる。

82は背面がおもに５枚のネガティブな剥離面と、自然面からなる。剥離面の加撃の方向はすべて自然面に向けられていることから、自然面を除去して打面を準備しようとした可能性がある。しかし、右上の大きな剥離面はサヌカイトの流理構造に入り込み、波打っている。主剥離面もこれと同様に波打ち、末端はヒンジ・フラクチャーを起している。打点・打面を欠いているため、詳細は不明で、主剥離面の右上にあるのはガス穴である。

83は背面が大きな剥離面と左端の小さく欠けたような剥離面で構成される。右側縁と下縁は折れている。主剥離面は自然面を直接打面に用い、フィッシャーが発達しているが、バルブは凹んでいる。背面の大きな面がポジティブな剥離面だとすれば、この剥片は、盤状の大きな剥片から翼状剥片を連続的に取っていく際の、打面調整の性格をもつ最初の断面三角形の剥片といえよう。

縦長剥片（図22、図版40）

84は不整形な縦長剥片である。背面はネガティブな剥離面からなる。主剥離面の打面は自然面を薄く除去して準備しており、打面の広さに比べて大きな剥片を取っている。剥離の方向は背面と同方向である。バルバースカー・フィッシャーが発達しており、剥離の末端はヒンジ・フラクチャーを起していることから、比較的大きな力で剥離されたものであろう。リングの歪みは、石材中に含まれるガス穴に起因する。

85は背面がすべて自然面である。主剥離面は平坦で、末端はフェザーである。風化のために打面のようすは明瞭でない。背面側からみて右半部は折れのために欠いている。

86は背面が自然面と２枚の剥離面からなる。それらの面が作る稜線を利用して取られた

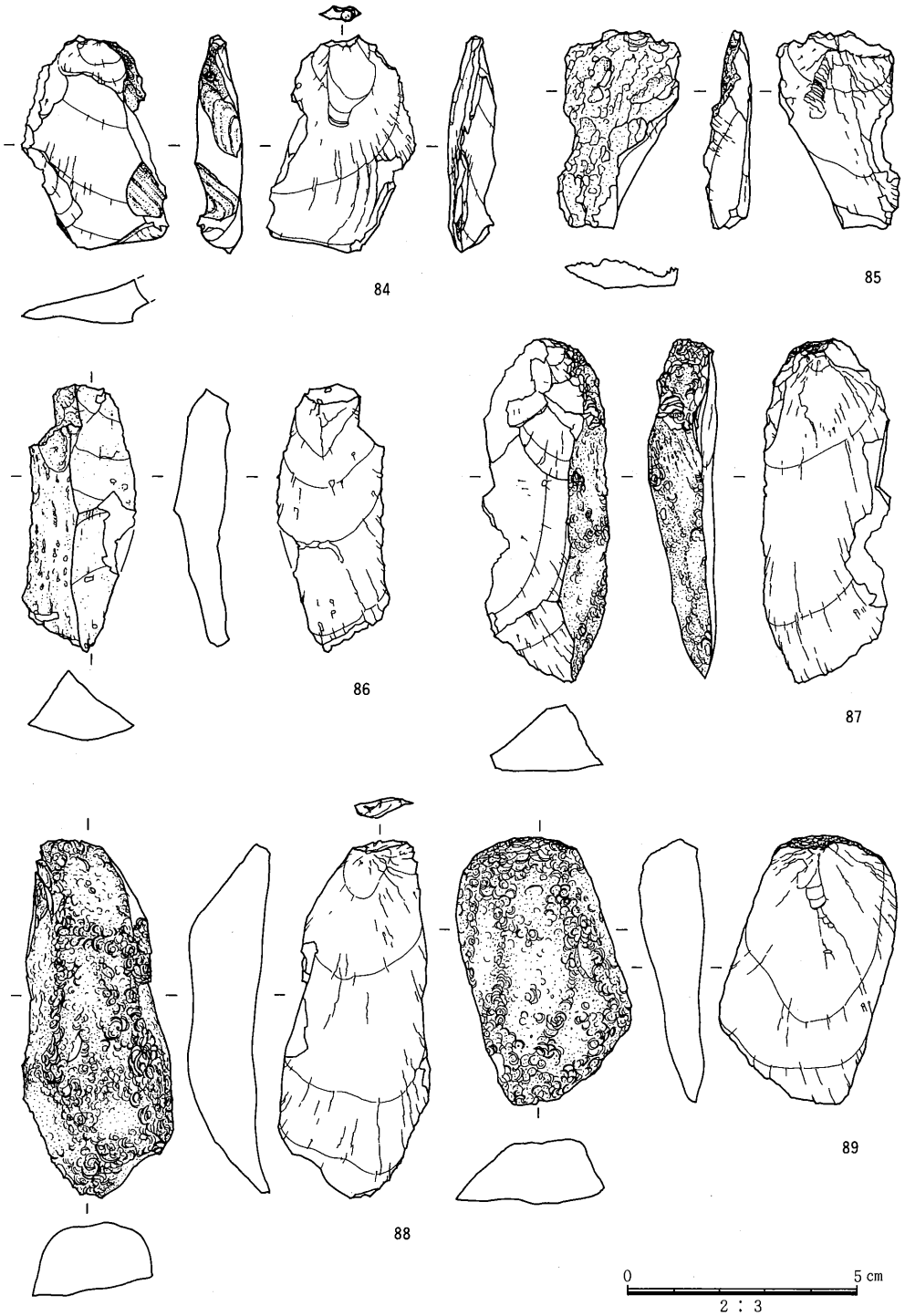


図22　縦長剥片

縦長剥片である。全体に風化が著しい。

87は背面が複数のネガティブな剥離面と自然面で構成されている。主剥離面の打面は自然面を利用している。二次加工はない。背面中央の剥離面は、左からの横方向の剥離である。主剥離面の右側縁にある「く」字形の小さな剥離面は、この剥片を取る以前のものである。この剥片以前に連続して縦長剥片を取った形跡はない。

88は背面全体が自然面の縦長剥片である。先行する唯一の剥離面を打面としている。原礫から剥片を取っていく過程のごく初期に取られたものであろう。

89は背面全体が自然面の縦長剥片である。自然面の屈曲した部分を打面としている。ファースト・フレイクである。

その他の剥片（図23・24、図版40・41）

90は背面が広いポジティブな面を切取った一面からなる。主剥離面の打点の位置は右上にあることがリングから読取れるが、折れのため残っていない。打撃と同時に縦方向に割れてしまった剥片である。主剥離面の左側縁にみえる５枚の剥離面は、この剥片を剥離する以前に加工されたものである。表面の風化が著しい。

91は背面が３枚のネガティブな剥離面からなる。剥離の方向は左上からであろうか、風化が進んでおり明瞭でない。主剥離面の末端は、大きなヒンジ・フラクチャーを起している。打面は欠損している。

92は背面が自然面と剥離面からなる。背面の右側縁にみえる折面によって、縦方向に二つに折れているのがわかる。主剥離面は大きく平な面であるが、打点側は折れとそれに伴う剥離によってなくなっている。

93は背面が３枚以上のネガティブな剥離面で構成されるが、欠損と風化が著しく、詳細は不明である。主剥離面と考えられる方も打面を折れによって欠いており、垂直割れとも考えられる発達したリングと右上に小さな剥離面が認められるのみである。

94は背面が大きく平な剥離面と、末端がキズでステップとなっている剥離面からなる。主剥離面もこのキズでリングが大きく湾曲し、打点側が折れている。そこで、大きく平な面をもつ剥片を素材とし、その面に平行な盤状の剥片を取ろうとして加撃した結果、途中のキズで折れてしまったものの末端と考えられる。

95は剥片の末端部である。主剥離面の末端はヒンジ・フラクチャーで終っている。左上の横長の剥離面は主剥離面を切っているが、打点部が折れのため欠損している。背面は大きなネガティブな面からなる。右下の小さな剥離面は、打撃や押圧剥離によるものではな

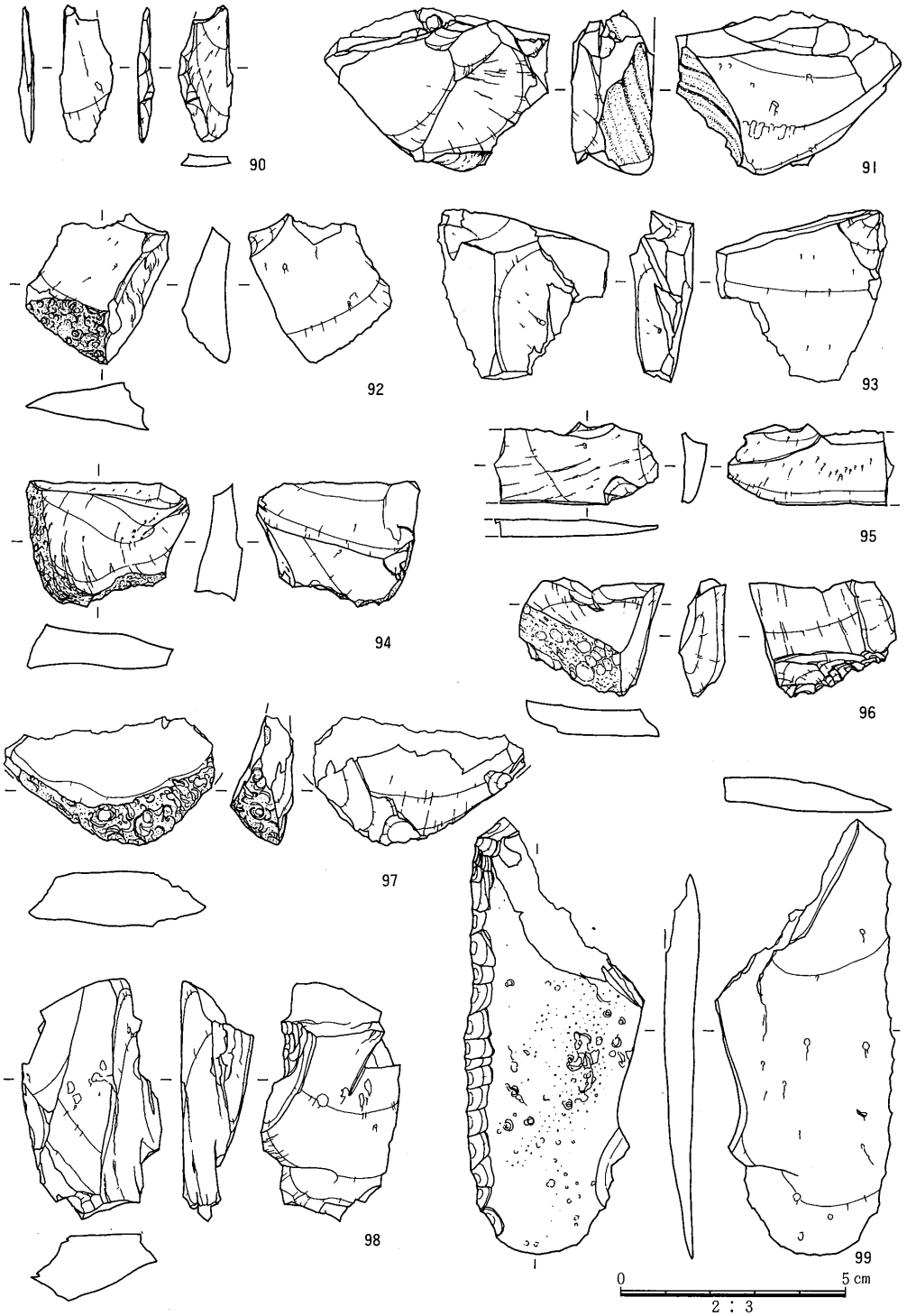


図23　剥片（1）

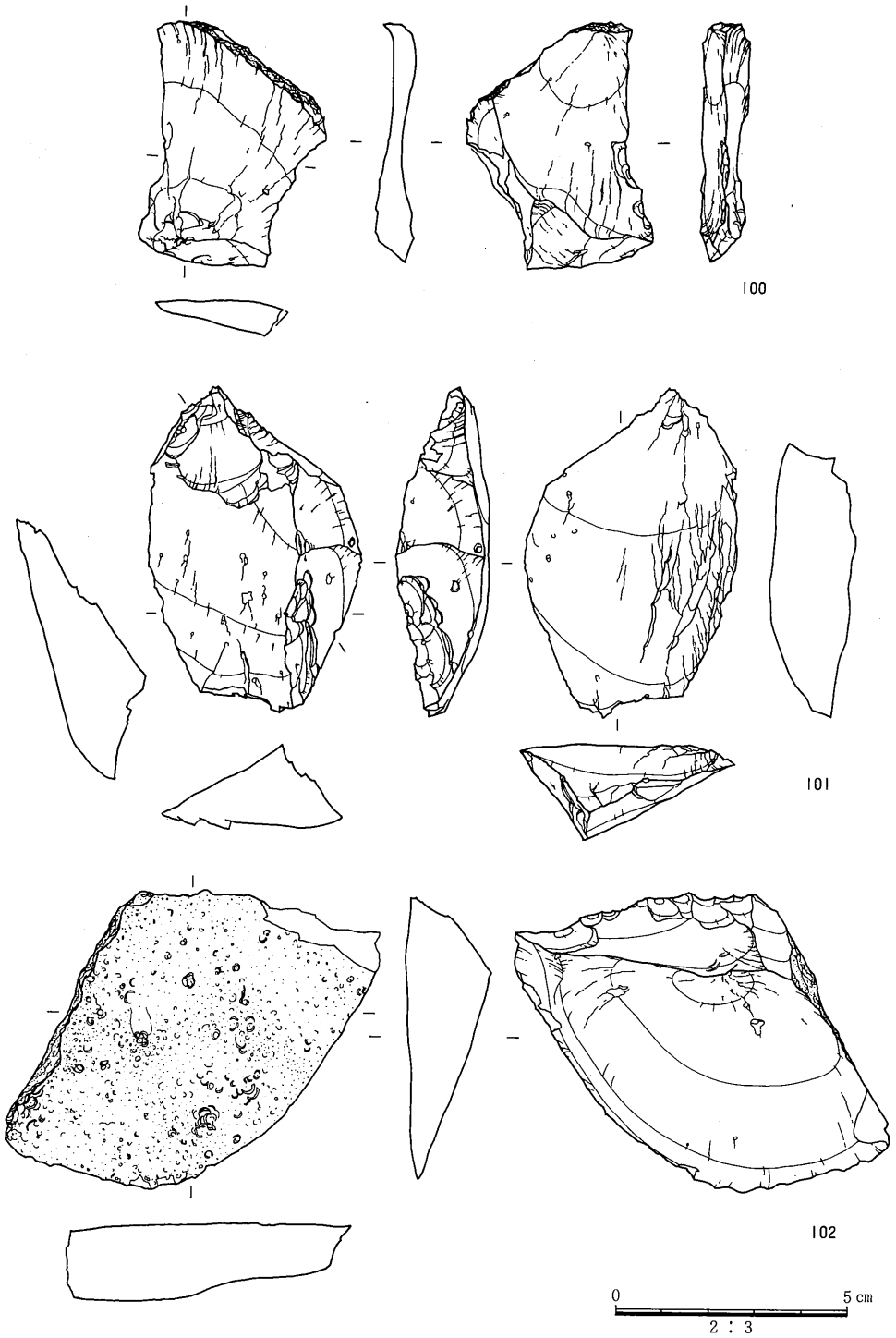


図24　剥片（２）

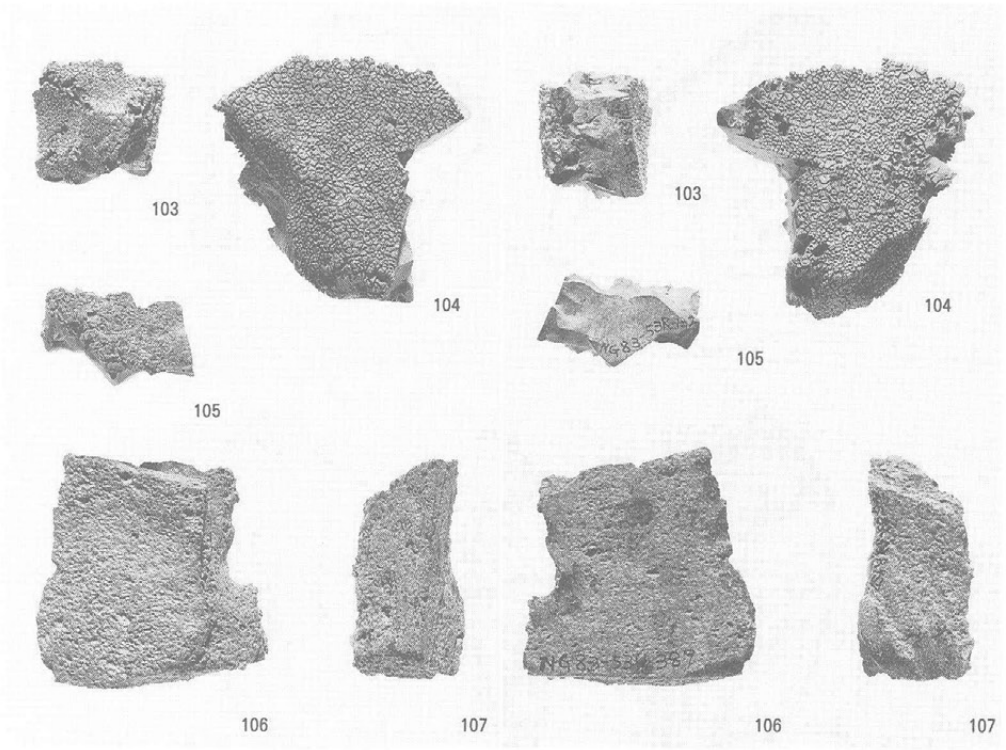


写真10　熱を受けたもの・その他

さそうである。上縁と一方の側縁が折れのため欠損している。

96は自然面をもつ剥片である。自然面が残る面を背面側とすると、主剥離面側には中央に広いポジティブな面がある。その下には、自然面を打面とする細かい不安定な剥離面があるが、左側縁の折れに切られており、目的は不明である。三辺の折れによって剥離面の新旧関係はわからない。

97は背面が１枚のネガティブな面からなる。主剥離面には自然面を打面に用いた二次加工が２枚みられるが、加工の意図は不明である。上縁の新しい割れによって打面は失われている。背面・主剥離面とも加撃の方向が同じで、末端に自然面をもつことから、盤状の剥片の末端部とも考えられる。

98は背面の中央の細長い面が、すべて両側の剥離面に切られている。しかし、それが主剥離面が形成されて以後のものかは、風化のためにわからない。主剥離面の上部にある面は折面で、これによって打面は失われている。

99は縞状の流理構造に沿って剥いだ縦長剥片を利用したユーズド・フレイクである。背

面は自然面である。主剥離面の縁辺から背面へ細部調整が施され、刃部を形成している。

100は背面がバルブが大きく、バルバースカーが顕著なポジティブな面である。主剥離面は自然面を打面としている。その打面の広がりと、主剥離面の末端にある2枚の先行する剥離面の広がりから、この剥片を割取った残核は小さく、薄いものと考えられる。また、主剥離面の右側縁に小さな剥離面があり、何らかの道具に使用した可能性がある。

101は背面の中央に稜線があり、左側には広いネガティブな縦方向の剥離面が、右側には3枚の横方向の剥離面がある。3枚のうち、最下にある三角形の剥離面を切る2枚の横長の剥離面は、主剥離面形成以後のもので、明らかに背面の稜線上を打面として敲いているが、目的はわからない。背面の上部に上からの加撃による複数の剥離面がある。これらによって主剥離面の打面は失われている。主剥離面も、やや右上方からの加撃のようすを示している。向って右側縁のフィッシャーは発達しており、流理構造に食込んで段差を生じている。新しい割れによっていたんでいるが、鋭い右側縁を使用した可能性がある。

102は背面に平坦な自然面をもつ剥片である。主剥離面の打面となった剥離面に小さな剥離が背面側から加えられているが、主剥離面との時間差は判別しがたい。主剥離面の末端は鋭い縁となっており、そこを使用した可能性がある。

その他（写真10）

103～105は火を受けて破砕した礫である。106・107は風化が著しく、剥離面の検討は行えなかった。

本年度の調査で出土した石器遺物はすべて遊離資料であり、製作された時代を決定することは困難であるが、わずかな製品をみても旧石器時代から弥生時代まで、多くの時期にわたっていることがわかる。そのうち、旧石器時代と推測される遺物には、後期旧石器時代の特徴的な石器製作技法のひとつである瀬戸内技法に関連すると思われる資料が含まれていることが明らかとなった。それらはナイフ形石器（58・60・62）とその素材となる翼状剥片（68～73・77）である。さらに、瀬戸内技法の剥片剥離作業の中で理解できる剥片もいくつかみつかった。もっとも、一部を除いて多くは典型的な翼状剥片とはいいがたい形状で、これらの資料が、長原遺跡における瀬戸内技法の存在を証明する資料になるかは、なお慎重な検討が必要であろう。

ほかに、弥生時代と推定されるクサビに関連する資料の存在や、時期は不明ではあるが熱を受けたサヌカイト礫の存在などが特徴としてあげられる。

（清水・松本）

表3　石器遺物計測表

（単位cm）

石鏃	長さ	幅	厚さ
40	3.35	1.69	0.38
41	2.85	2.15	0.38
42	1.73	1.67	0.29
43	1.38	1.71	0.37
44	1.71	1.68	0.31
45	1.70	1.38	0.30
46	1.75	1.58	0.32
47	2.08	1.95	0.38
48	2.52	1.86	0.36
49	2.50	2.33	1.02
石錐	長さ	幅	厚さ
50	3.61	1.65	1.59
尖頭器	長さ	幅	厚さ
51	6.87	3.14	1.12
クサビ			
①剥落したもの	長さ	幅	厚さ
52	6.52	2.29	0.68
53	3.42	3.17	0.95
54	3.95	2.36	0.94
55	3.22	2.91	0.54
②本体			
56	3.95	4.22	2.12
57	3.89	5.94	1.05
ナイフ形石器	長さ	幅	厚さ
58	4.38	1.59	0.92
59	3.05	1.51	0.65
60	3.63	1.77	0.61
61			
62	7.56	2.15	0.90
63	6.65	2.02	0.96
石核	長さ	幅	厚さ
64	5.29	3.40	2.20
65	5.05	3.39	1.94
66	4.85	5.21	1.55
67	4.50	5.63	1.83
剥片			
底面をもつ剥片	長さ	幅	厚さ
68	3.16	4.97	0.88
69	1.43	2.94	0.94
70	2.71	2.63	0.36

71	1.77	3.59	1.16
72	2.25	3.89	1.40
73	2.63	4.86	1.54
74	3.32	3.05	0.84
75	1.23	2.00	0.28
76	3.69	2.21	0.81
77	3.80	6.10	1.73
打面調整剥片	長さ	幅	厚さ
78	3.76	3.82	0.94
79	3.47	3.96	1.49
80	1.49	1.79	0.26
81	2.98	5.60	1.46
82	4.63	6.14	1.42
83	2.92	5.28	1.03
縦長剥片	長さ	幅	厚さ
84	4.70	3.25	1.00
85	4.39	2.59	1.00
86	5.73	1.52	2.49
87	7.43	2.74	1.49
88	7.62	3.29	1.81
89	5.84	3.94	1.48
その他の剥片	長さ	幅	厚さ
90	3.03	1.16	0.33
91	3.60	4.98	1.75
92	3.30	3.14	1.06
93	3.72	3.78	1.38
94	3.60	2.68	1.26
95	1.75	3.65	0.53
96	2.59	3.22	1.10
97	1.41	2.71	4.68
98	5.25	3.05	1.51
99	9.65	3.97	0.74
100	5.18	3.81	0.94
101	7.12	4.63	2.04
102	6.33	8.69	1.95
その他	長さ	幅	厚さ
103	2.37	2.50	1.63
104	5.13	5.01	2.13
105	1.70	3.12	1.49
106	4.55	4.47	1.44
107	4.41	2.32	1.45

３）古墳時代の遺構

掘立柱建物１１棟、竪穴住居１棟、井戸２基のほか、多数の土壙・溝を検出した。これらはおおむねⅡ・Ⅲ区に位置しており、Ⅰ区における遺構・遺物の分布は少ない。以下、各遺構ごとに記述する。

ｉ）掘立柱建物・竪穴住居

SB13（図26・102、図版6）

Ⅱ区北部に位置する桁行４間（5.65m）、梁行２間（5.10m）の総柱建物である。梁行柱間が2.50mに対して、桁行柱間が1.40mと短く、平面形は正方形に近い。掘形は、一様に梁行方向に長い隅丸長方形で、0.7m×0.5mの規模である。柱径は約0.2mであり、掘形の東寄りに位置するものが多い。棟方位はN36°Wを示す。

掘形内から須恵器・土師器の細片が少量出土した。

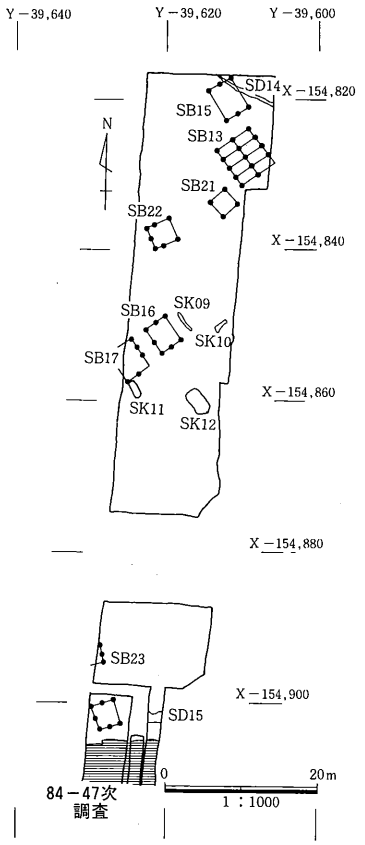


図25　西地区Ⅱ区遺構配置図（古墳時代）

SB15（図26・102、図版7）

Ⅱ区北部で、SB13の北に位置する。桁行の側柱が検出できなかったが、桁行総長が4.65mで、1.5m前後の柱間距離を想定すると３間になる。梁行は２間（3.42m）で、柱間は1.71mである。掘形は直径0.35ｍの円形に近い形状で、柱径は約0.1mである。棟方位はN31°30′WでSB13とほぼ等しい。

掘形内から土師器・須恵器の細片が出土した。

SB16（図26・102、図版6）

Ⅱ区中央部に位置し、２間（3.90m）×２間（3.20m）の規模である。柱間は南北が1.95m、東西は1.60mである。掘形は平面形が一辺0.4mほどの隅丸方形を呈するものが多く、柱径は0.1mである。方位はN36°Wで、SB13と同じ方位を示す。建物の東側柱筋から1.6mの間隔をあけ、平行するように溝状の土壙SK09がある。掘形から土師器の細片が出土した。

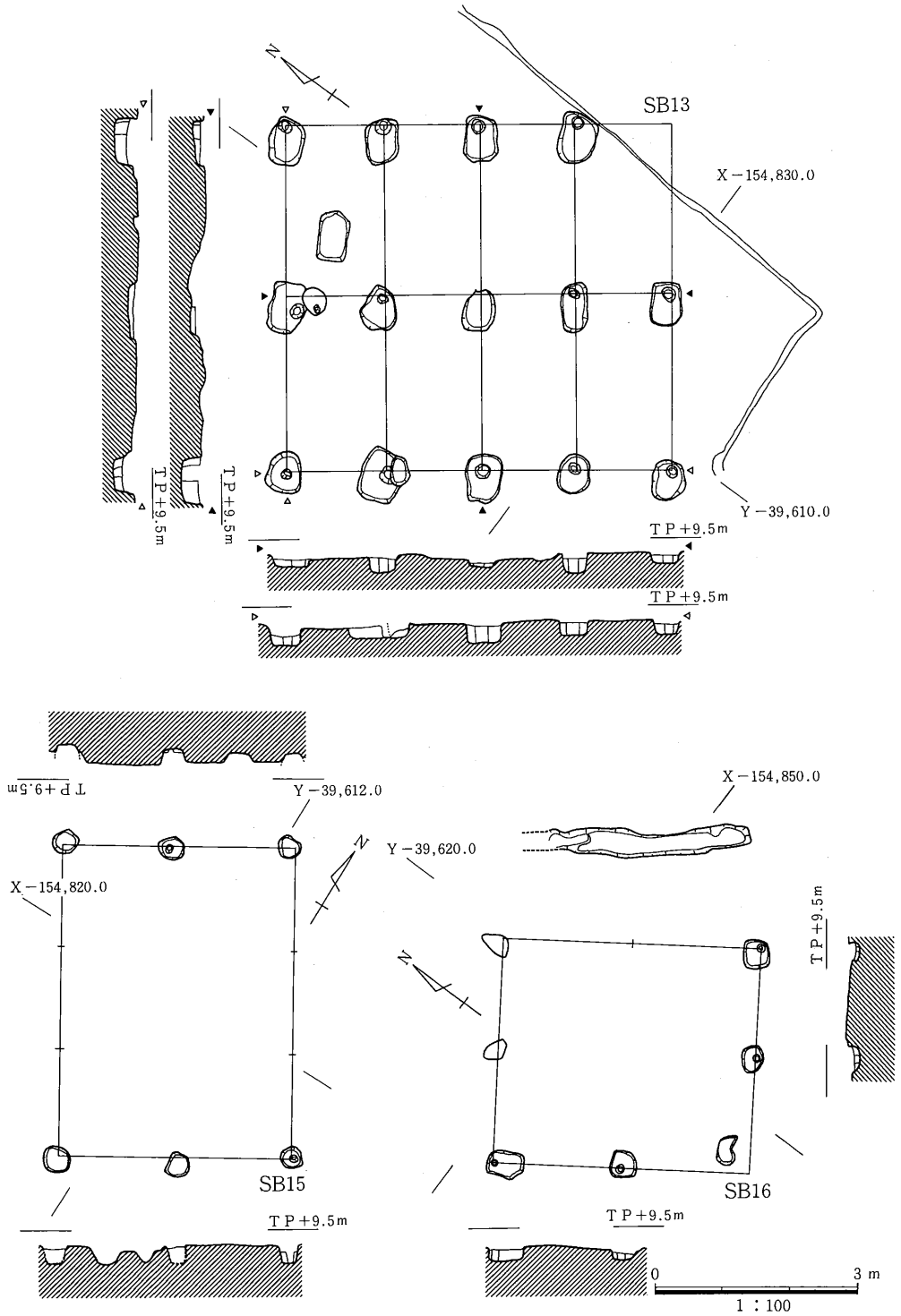


図26　SB13・15・16実測図
（上：SB13、下左：SB15、下右：SB16）

SB17（図27・102、図版7）

Ⅱ区中央部のSB16と2mの間隔をあけ、平行して並ぶ建物である。西半部は調査範囲外にある。３間（4.45m）以上×２間（3.70m）以上であるが、検出した南西隅と北東隅の柱穴は他の柱穴より深く、隅柱と考えられることから、３間×２間と思われる。掘形は一辺0.35mの隅丸方形を呈し、柱径は0.1mである。方位はN35°Wで、SB16とほぼ等しい。

須恵器甕の細片が柱穴から出土した。

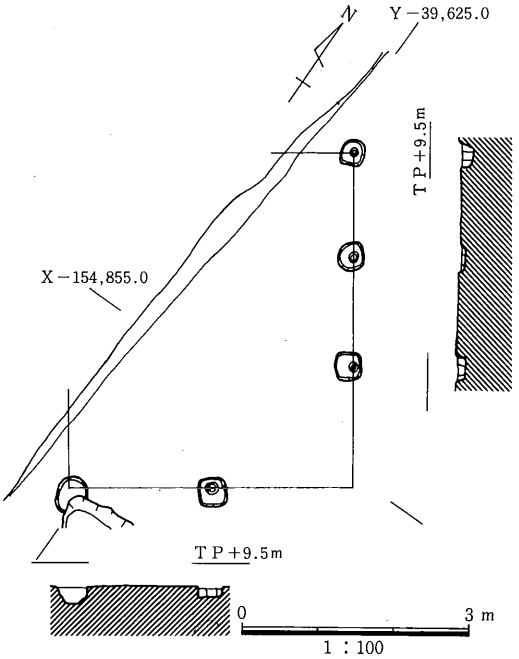


図27　SB17実測図

SB21（図28・102）

Ⅱ区のSB13の南側に位置する。直径ないし一辺が0.3mの４柱穴からなる、2.70m四方の方形建物である。N42°30′Wの方位を示す。床面が削平された方形の竪穴住居の可能性がある。

SB22（図28・102）

Ⅱ区中央部に位置する。３間（3.18m）×２間（3.05m）に復元した。掘形は一辺約0.3mの隅丸方形である。N67°Eの方位を示す。

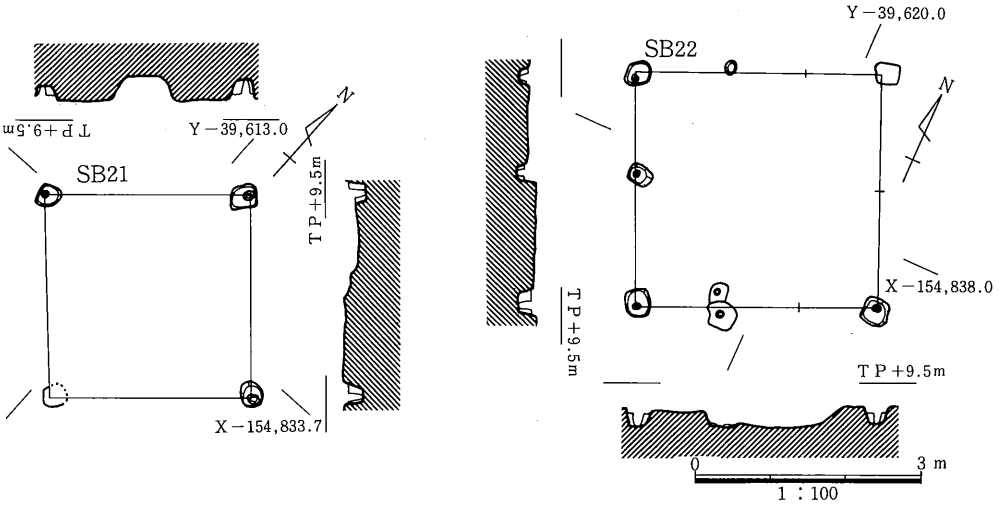


図28　SB21・22実測図
（左：SB21、右：SB22）

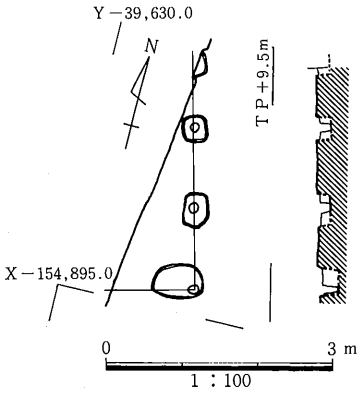


図29　SB23実測図

SB22付近にはほかにも柱穴があり、これ以外の建物が重複して存在していたと考えられる。

SB23（図29・104、図版7）

Ⅱ区南端部に位置する。建物の東側柱列を3間分検出した。柱痕跡が確認できた2間分が2.15mであり、柱間は1.08mとなる。柱列の方位はN12°30′Wである。掘形は一辺約0.4mの隅丸方形に近く、南東隅柱の掘形はやや大きい。出土遺物がないため時期は不明だが、掘形の形状や埋土などから当該期の遺構として報告する。なお、南に5m離れて、この柱列と柱筋を揃えた同じ方位の建物（3.10m×3.40m）が84－47次調査で検出されている。

SB31（図31・32・105、図版8）

Ⅲ区中央部の南端に位置する。桁行3間（4.83m）、梁行2間（3.82m）の総柱建物で、柱間は桁行1.61m、梁行1.91mである。柱掘形は0.3～0.4mの方形ぎみ、または円形で、柱径は0.12mである。妻中央柱の掘形は建物内側でやや小さめの柱穴に切られている。この内側

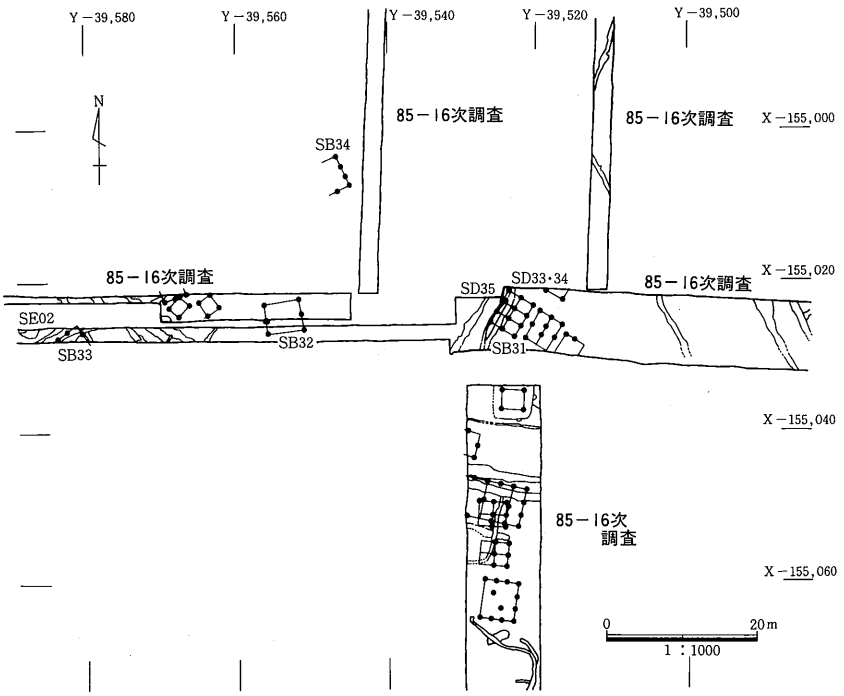


図30　西地区Ⅲ区南部遺構配置図（古墳時代）

の柱穴は束柱と思われる。棟方位はN30°10′Eを示す。建物の北西隅柱の柱穴から土師器の小型甕が完形で出土した。これは柱を抜いたあとに置かれたものと思われる。この建物は今年度の調査（83－53次）で西半部を発掘し、その後、1985年度に実施した85－16次調査で東半部を調査した。図31は85－16次調査の資料を付加したものである。また、この時の調査では、この建物の東に1.0～1.4m離れて、２間×２間で棟通りに３間となる束柱をもつ建物が並んで検出されており、さらにその東にも、もう１棟並んでいたことが判明している。

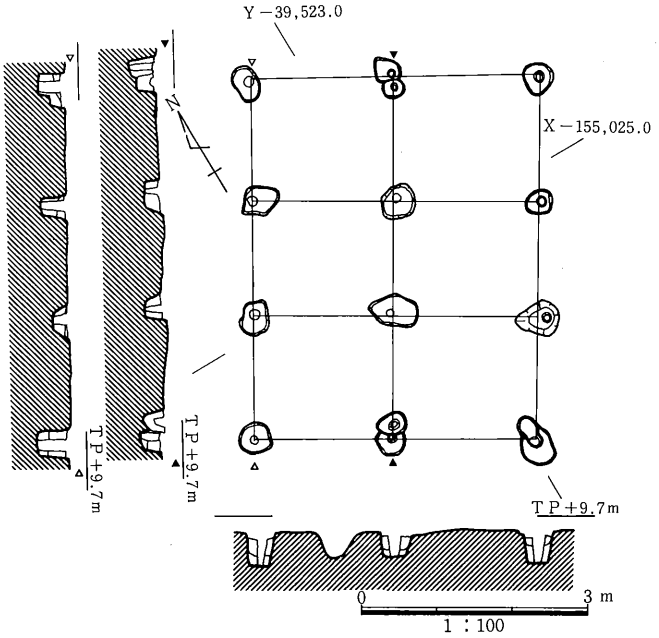


図31　SB31実測図

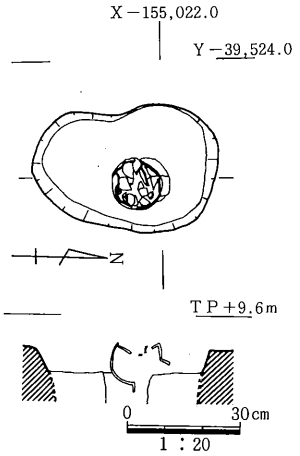


図32　SB31土器出土状況

SB32（図33・105）

Ⅲ区南西部に位置する。東西は4.62～4.75mで、３間と考えれば柱間は1.60m、南北は２間以上（3.75～3.85m）で、柱間1.90mとなり、SB31と同規模である。掘形は一辺が0.35～0.40mの南北に長い長方形を呈する。出土遺物はないものの、柱穴の形状や埋土の質・色調などからSB31と同じく、古墳時代の建物と考えられる。また、掘形の平面形が長方形ぎみである点はSB13と共通している。棟方位はN82°Eである。

SB33（図34・105）

Ⅲ区南西端部付近で、西に向って緩やかに高度を下げる谷斜面に位置する。２間（3.00m）以上×１間（1.40m）以上で、全体の規模は不明である。建物の方位はN54°20′Eで、溝SD28・29と同じである。谷斜面には複数の溝が斜面に平行あるいは直交して掘られており、この建物の柱穴はこれらの溝と切合っているが、先後関係は埋土が酷似しているため明らかにできなかった。また、建物の西側には後述する井戸SE02がある。出土遺物

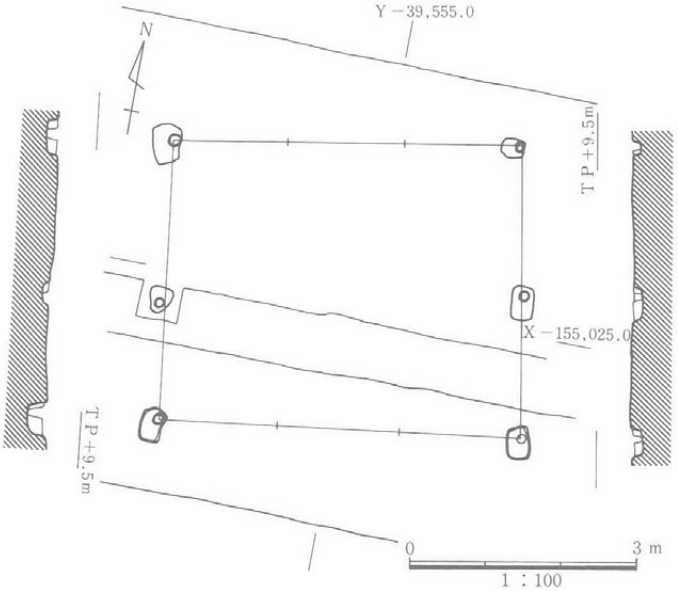


図33　SB32実測図

はないが、この建物を構成する柱穴以外の同様の柱穴から須恵器が出土している。

SB34（写真11）

Ⅲ区南西部に位置する。整地工事の際に柱穴が露出し、建物の存在を確認したが、民有地であったことなどから柱穴の発掘はできなかった。

3間（4.20m）×1間（1.70m）以上の建物で、掘形は一辺が0.3～0.4mの方形である。柱穴の埋土は褐色を呈するシルトを主体とするもので、建物の方位はN26°Wを示す。

時期は明らかでないが、建物方位や埋土の特徴から古墳時代の建物と考えられる。

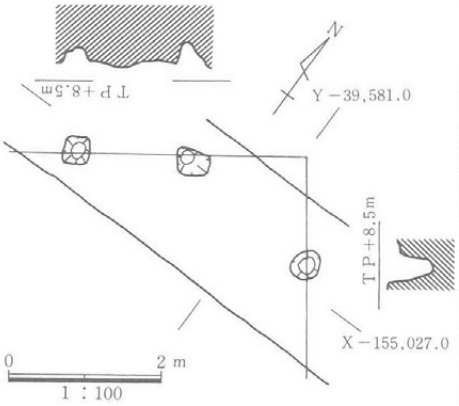


図34　SB33実測図

写真11　SB34（南から）

SB35（図36・106、図版8）

Ⅲ区東部に位置する竪穴住居である。床面は4.20m×4.30mの方形で、その外周を幅0.10～0.40mの溝が巡る。床面には４個の主柱穴が方形をなすように配され、柱間は2.61m、2.84m、2.72m、3.08mと不揃いである。柱掘形の埋土は長原13層と思われる灰白色粘土を主体とするものであった。南東辺の壁ぎわ中央には、平面規模が0.67～0.78mの楕円形を呈する土壙が周壁溝を切って検出された。この土壙からは遺物は出土せず、建物に伴うと断定できないものの、入口と推定できる南東壁の中央にあることから、建物に関連する可能性もある。建物の方位はＮ48°Ｗである。

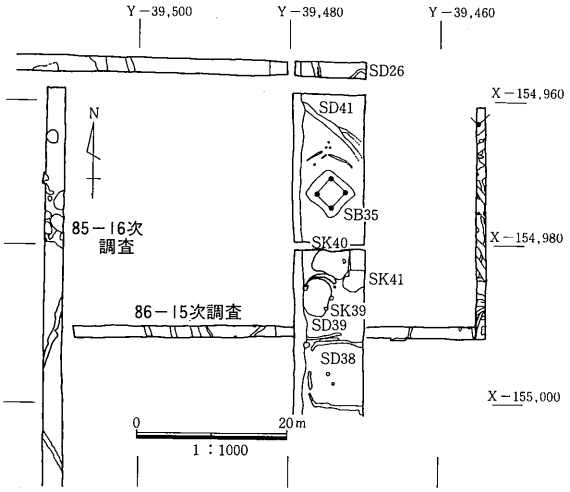


図35　西地区Ⅲ区北東部遺構配置図（古墳時代）

SB35の北側にはほかにも竪穴住居の周壁溝と考えられる小溝が存在したが、遺存状況が悪かったこと、また、民有地であるために調査期間が短く、十分な検討ができなかった。

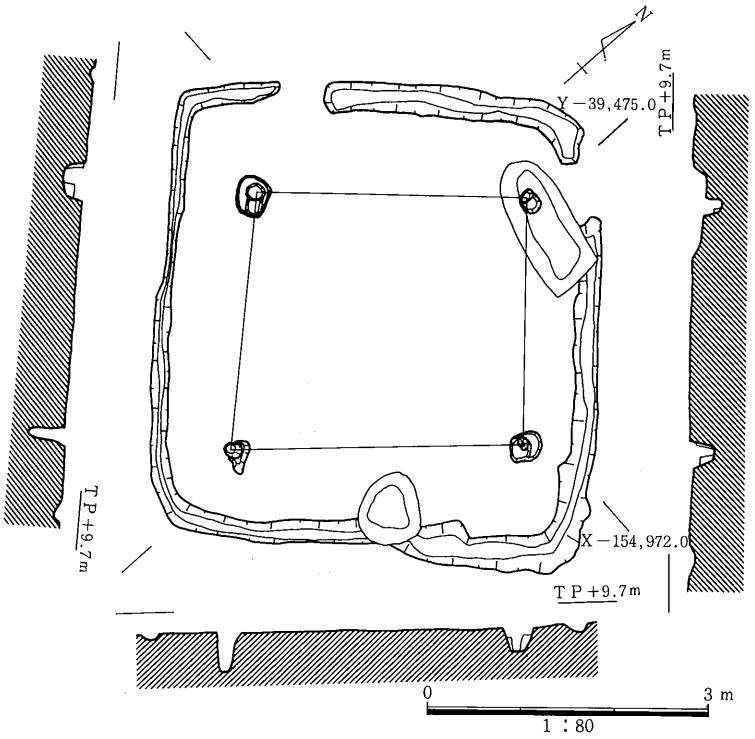


図36　SB35実測図

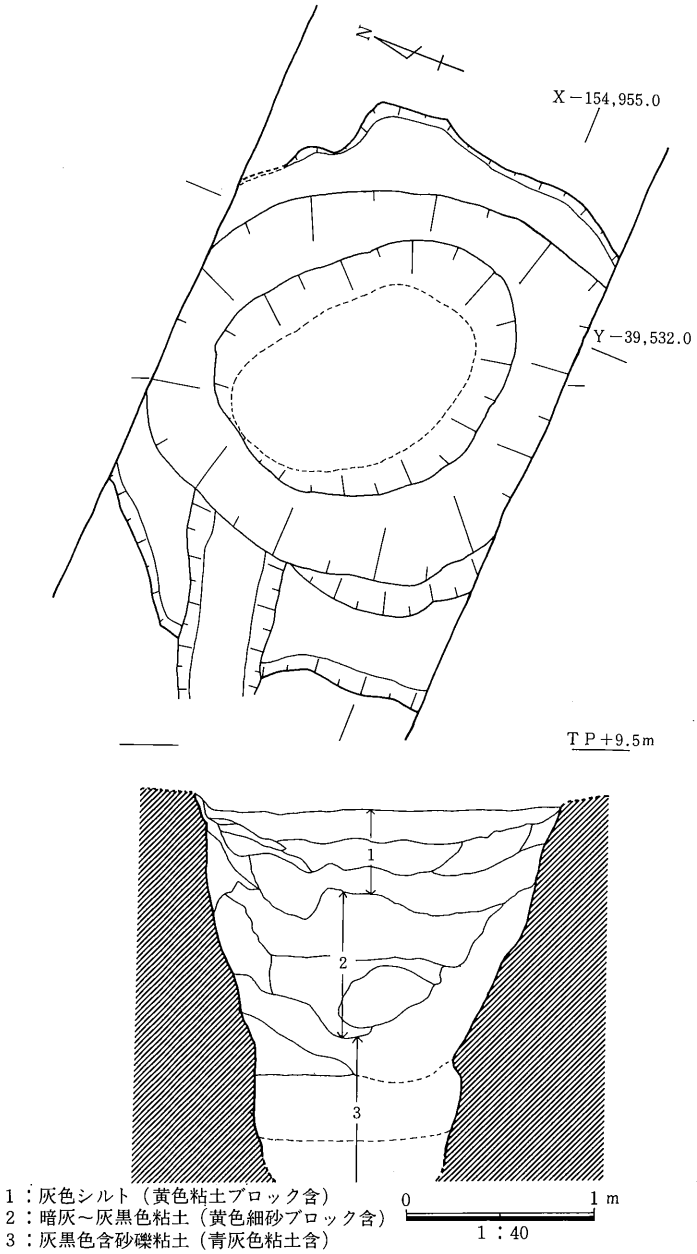


図37　SE01実測図

ii）井戸

SE01（図37・103、図版9）

Ⅲ区中央部に位置する。直径2.2～2.5mの楕円形の平面形を呈する素掘りの井戸である。検出面から1.5m下方では直径1.1～1.3mとなる。検出面から2mまで掘削したが、底を確認することはできなかった。埋土は最下部が灰黒色の砂礫を含む粘土で、その上は暗灰色～灰黒色粘土と黄色細粒砂などがブロック状に混る地層であり、井戸の周囲から流れ込んだ様相を呈する。埋土の上部は、黄色粘土をブロック状に含んだ灰色の粘土あるいはシルトが数層に分れて堆積するが、埋戻された状況は観察できない。最終的には淡灰色を呈する均質なシルトで埋没している。

出土した遺物は、土師器の高杯・甕口縁部のほか、須恵器の細片が出土した。この井戸の西側には、竪穴住居の周壁溝の可能性があるSD18や居住域を区切ると思われるSD19・20があり、須恵器蓋杯や外面に縄蓆文タタキのみられる甕体部片が出土している。これらはＴＫ216型式ないしＴＫ208型式に属するものであり、SE01もそれらと一連の遺構群とみることができる。

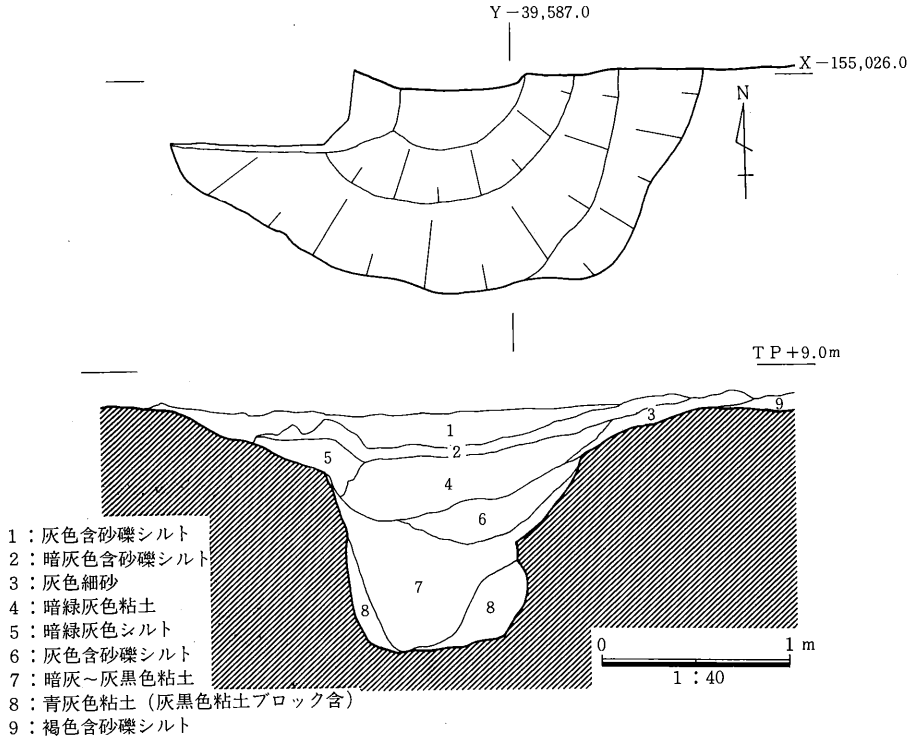


図38　SE02実測図

SE02（図38・105、図版9）

Ⅲ区南西部の「馬池谷」の斜面に位置するSB33の西側にある素掘りの井戸である。直径は2.9m、深さは1.4mである。埋土の下部は灰黒色ないしそのブロックを含む青灰色粘土で、上部は砂礫を含む灰色～緑灰色を呈するシルトを主体とする周辺からの流れ込みによって堆積したと考えられる地層である。

出土遺物はないが、長原6B層または7A層基底面で検出されたこと、東側に古墳時代の溝や建物が存在することから、これらと同じ時期の遺構と考えられる。

iii）土壙

SK01（図39・100、図版10）

Ⅰ区北部に位置する。1.51m×0.64mの長方形を呈し、深さは0.15mである。埋土は均質な淡灰色シルトである。出土遺物

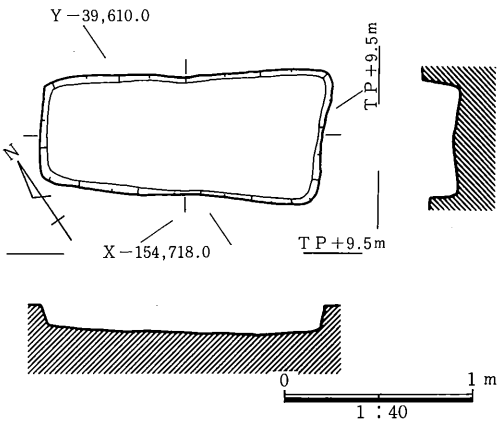


図39　SK01実測図

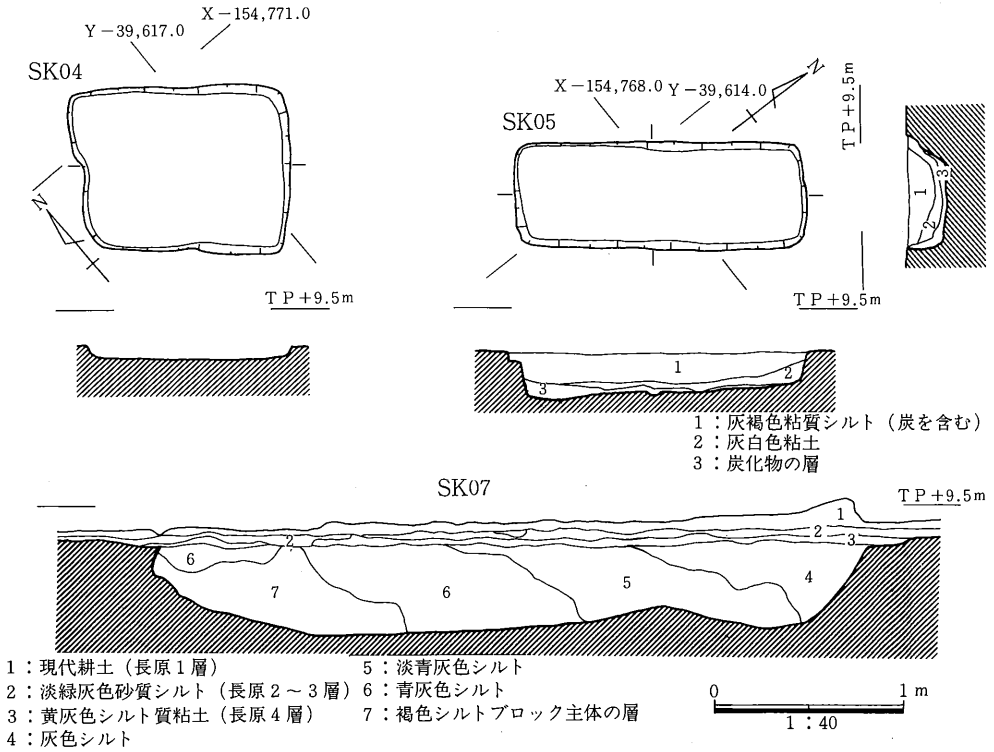


図40　SK04・05・07実測図
（上左：SK04、上右：SK05、下：SK07）

はなく時期は不明だが、長軸方向が古墳時代の溝と直交し、一連の遺構とみることが可能であるためここで報告する。しかし、この地点の東20mの85－21次調査で検出された類似する遺構が、出土遺物から奈良時代末と考えられていることから、奈良時代に属する可能性もある。

SK04（図40・101、図版10）

Ⅰ区南部に位置する1.10m×0.96mの方形に近い平面形の土壙である。深さは0.07mと浅く、底面に炭化物の薄層が認められた。古墳時代の須恵器・土師器の細片が出土した。

SK05（図40・101、図版10）

Ⅰ区南部でSK04の北東4mに位置する。平面形は1.55m×0.57mの長方形で、深さは0.2mである。底面にはSK04と同様に炭化物の薄い層が認められ、同じ軸方向をもつため、一連の遺構と思われる。出土遺物はないがSK04と同じく古墳時代の遺構とする。

SK06（図101）

Ⅰ区南端部付近に位置する平面が楕円形を呈する土壙である。長径2.6m、短径1.3mで、深さは0.2mである。土師器の甕・甑の破片が出土した。

SK07（図40・101）

Ⅰ区南端部に位置し、北側部分のみが検出された土壙である。東西3.75m、深さ0.5mで、楕円形を呈するものと思われる。埋土は長原13層のブロックを含む青灰色シルトである。出土遺物に土師器甕、須恵器高杯の破片がある。

SK09（図26・102、図版6）

Ⅱ区中央部に位置する溝状土壙である。幅0.30～0.45m、長さ3.0m以上で、深さは0.15～0.25mである。SB16の北東辺に1.3～1.5mの間隔をおいて平行して位置し、その南東端は建物の北東辺柱列の南端で終っている。北東端は新しい遺構で壊されているが、底面の状況から長くのびることはない。

SK10（図41・102、図版11）

Ⅱ区中央部に位置する。平面形は1.88m×0.52mの長方形である。深さは南部で0.40mだが、北部で段状に低くなり、0.62mとなる。埋土上半部は人為的な埋め土で、下半部は灰白色の均質なシルトである。北部の後者の上面で須恵器高杯が出土し、南部の前者の層中から先の高杯と同一個体の杯部破片、土師器高杯脚部、ウマの骨が出土した。

この遺構は平面形から判断すれば土壙墓と考えられるものであるが、北半部の底面が段状に低くなっていること、馬骨が出土したことなど、疑問の点も多

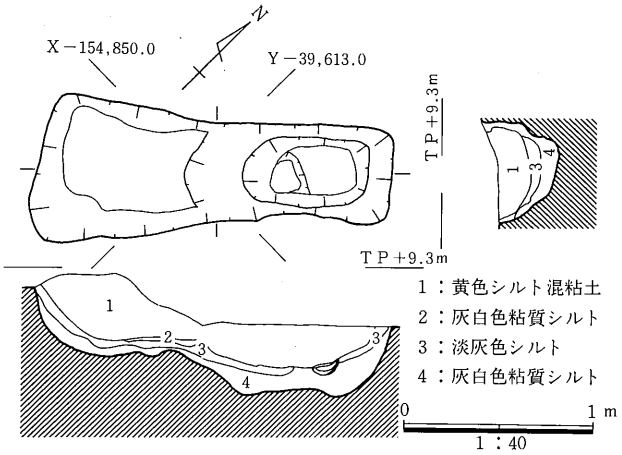


図41　SK10実測図

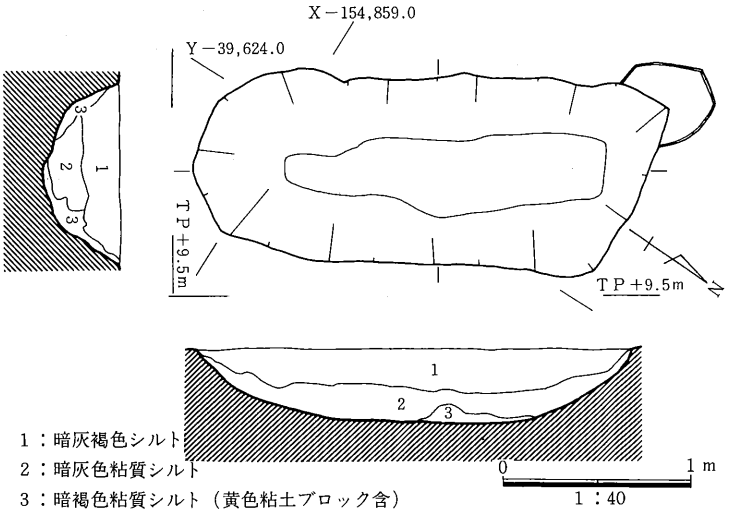


図42　SK11実測図

く、土壙墓と断定するにはいたらなかった。

SK11（図42・102、図版11）

Ⅱ区中央部の西部に位置し、SB17の柱穴を切っている。2.55m×0.97mの隅丸長方形を呈し、深さは0.4mである。埋土は上下２層に分れ、北部の上層に須恵器・土師器の破片が集中して含まれる。また、骨片も少量出土した。この土壙も形状からみて土壙墓と考えうる遺構であったが、骨片の一つがイノシシであったことから、それと断定することができなかった。

SK12（図43・102、図版11）

Ⅱ区中央部に位置する土壙である。長径3.24m、短径2.35mの楕円形を呈し、深さは0.28mである。埋土は３層に分離できるが、炭を多く含む上２層に多くの遺物が包含されていた。多くの須恵器・土師器のほか製塩土器やウマの歯・骨、炭化木が出土した。

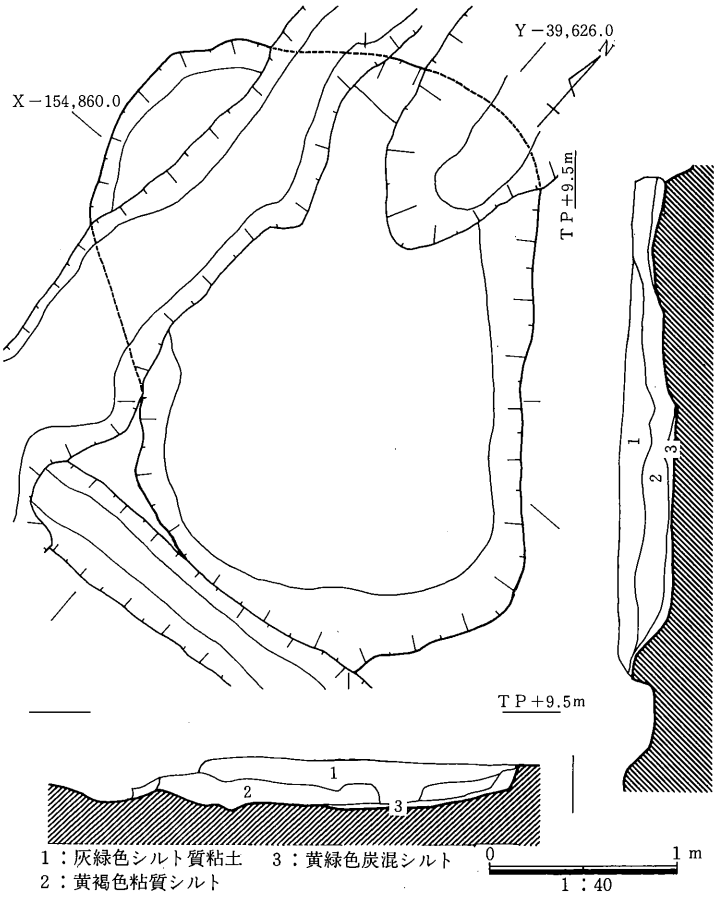


図43　SK12実測図

SK34（図103、写真12）

Ⅲ区北東部に位置する。平面形は0.90m×0.88mの方形ないし長方形になると思われる。深さは0.12mである。埋土は上下２層に分れ、上層は黄色粘土のブロックを多く含む淡灰色シルトで、下層は炭化物の薄い層である。平面形や埋土の状況はⅠ区南部のSK04と共通しており、同じ性格の遺構と考えられる。出土遺物は少なく、須恵器・土師器の細片が少量出土した。

SK35（図103）

Ⅲ区北東部に位置する。東西3.3m以上の土壙で、

深さは0.4mである。黄色粘土の小ブロックを含む淡灰色シルトを埋土とし、土壙壁面をえぐるように横に掘削された部分がある。出土遺物は古墳時代の須恵器細片が少量ある。

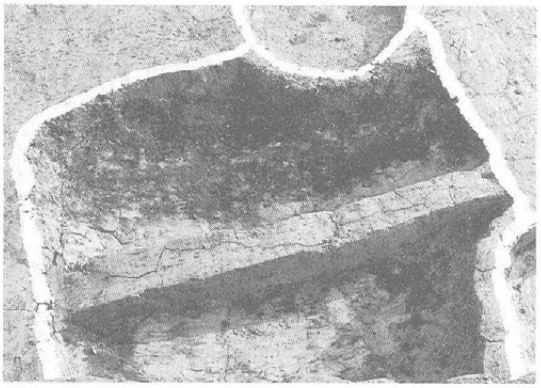


写真12　SK34（北から）

SK37（図103）

Ⅲ区北東部に位置する楕円形の土壙である。規模は2.4m×1.8m、深さ0.5mで、埋土はSK35と同じである。土師器・須恵器片が出土した。

SK35・37と同様の土壙はこの南側の85－16次調査でも数基確認されている。

SK39（図44・106、図版12）

Ⅲ区北東部に位置する。長径6.1m、短径4.4mの楕円形で、深さは0.12mである。土師器・須恵器が多く出土したが、ほかに土製紡錘車、製塩土器や馬歯が出土した。出土遺物のうち土師器甑は土壙の東端中央付近に多く分布し、須恵器高杯が西半部に多い傾向が認められた。

底面は焼けて赤く変色し、埋土中には大量の炭や炭化木が含まれていた。

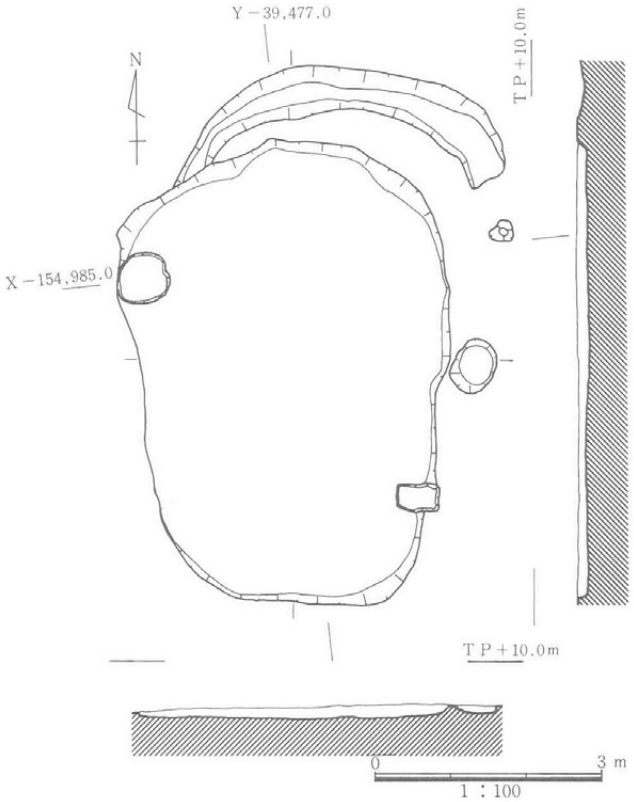


図44　SK39・SD40実測図

SK40（図106）

Ⅲ区北東部のSK38の北側に位置する。4.8m×3.7mの不整形を呈し、深さは0.08mと浅い。

SK41（図106）

Ⅲ区北東部のSK38・39に近接する不整形の土壙である。規模は3.5m×2.9m、深さ0.11mである。

土壙内の直径0.3mほどの範囲に製塩土器が集中していた。

iv）溝

SD02（図99）

Ⅰ区北東部に位置する南西から北東方向の溝である。検出した長さは約9mで、幅0.5m、深さ0.05mの浅い溝である。古墳時代の須恵器・土師器片が少量出土した。この80m東で検出された82－28次調査の古墳時代溝SD02・03［大阪市文化財協会1990B pp.175-177］と同じ方向である。

SD09（図100）

Ⅰ区北部に位置する南西から北東方向の溝で、南西に向って浅くなり、消失している。検出した長さは約10mで、幅0.5m、深さ0.07mである。土師器甕片が集中して出土したが、復元できなかった。この溝は後述するSD10と約3mの間隔をあけて平行している。

SD10（図100）

Ⅰ区北部に位置する南西から北東方向の浅い溝である。幅0.7mで、長さ約5mを検出した。

SD11（図100）

Ⅰ区北部のSD09からそれに直交して北西に長さ1.2mを検出した。幅0.5m、深さ0.14mの規模である。SD09との交点付近で土師器甕が出土した。

SD14（図102、図版7）

Ⅱ区北端部に位置する南東から北西方向の溝で、長さ8.5mを検出した。幅0.45m、深さは0.15mである。古墳時代の須恵器・土師器の細片が出土した。

SD15（図104）

Ⅱ区南部の「馬池谷」の斜面に平行する、南東から北西方向の溝である。古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

SD18（図103、図版13）

Ⅲ区北部に位置する溝である。ほかにも方形に巡るような溝や、柱穴と思われるピットが周辺にあり、完形品を含む古墳時代の須恵器・土師器が出土していることから、竪穴住居がいくつか重複しているのではないかと推測できる。

SD19（図103、図版13）

Ⅲ区北部に位置する。幅約1m、深さ0.15mの溝で、南西から北東に長さ6.4mを検出した。この溝から北西に向う溝が派生している。また、この溝と3mの間隔をあけて平行するSD20

がある。いずれも埋土は長原13層の粘土ブロックを含む淡灰色シルトである。

SD20（図103、図版13）

Ⅲ区北部に位置し、SD19と平行する幅0.9m、深さ0.3mの溝である。土師器・須恵器が出土したが、その中には、外面に縄蓆文タタキを施した須恵器甕の体部片が含まれる。

SD23（図103）

Ⅲ区北部に位置する北でやや西に振る南北方向の溝である。幅1.5m、深さ0.2mで、長さ2m分を調査した。土師器・須恵器が少量出土した。

SD26（図103）

Ⅲ区北東端に位置する幅0.25m、深さ0.04mの小溝で、直角に屈曲している。竪穴住居の周壁溝であるかもしれない。須恵器高杯片が出土した。

SD28～32（図105、図版14）

Ⅲ区南西の「馬池谷」斜面に位置する溝で、SD28・29が南西から北東方向で、SD30～32が南東から北西方向である。SD30はSD29から派生する溝である。また、SD31とSD32をつなぐ小溝もある。SD28～30は幅0.5m前後で、深さは0.1m前後である。SD31・32は幅が約1m、深さ0.3m前後である。いずれも暗灰褐色砂混りシルトを埋土とし、須恵器・土師器が多く出土した。

SD33～35（図45・105、図版15）

Ⅲ区南部のSB31付近に位置する南西から北東方向の溝である。このうちSD33とSD35はいずれも幅0.8m、深さ0.1～0.2mの溝で、約3mの間隔をあけて平行している。SD33の埋土は上層が浅黄橙色砂礫混りシルトで、下層は橙色砂礫混りシルトである。須恵器・土師器が出土した。SD35はSB31と重複するが、柱穴との切合いはない。SD34は幅0.25m、深さ0.05mの小溝である。SB31の柱穴と切合っているが、溝が浅いため、明確な先後関係は把握できなかった。

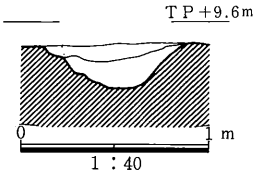


図45　SD33断面実測図

SD36・37（図106、図版16）

Ⅲ区南東部に位置する南西から北東方向の溝で、いずれも幅0.5m、深さ0.1mである。SD36はSD37よりも東西方向に近い方位で、SD37に切られている。出土遺物は少ないが、土師器・須恵器の細片が出土している。

SD38・39（図106、図版16）

Ⅲ区北東部に位置する。SD38は幅0.4m、深さ0.08mで、南北辺が約8mの方形に巡ると推定される。須恵器・土師器のほかに砥石が出土した。SD39はSD38の北溝の北側に沿う同規模の溝である。

SD40（図44・106）

Ⅲ区北東部のSK39の北に弧をなす溝で、幅0.4m、深さ0.03mである。

SD41（図106）

Ⅲ区北東部で竪穴住居SB35の北東壁から4m離れて位置する、南東から北西方向の溝である。幅0.8m、深さ0.08mである。韓式系土器の小型平底鉢や須恵器片が出土した。この溝とSB35は同じ方位を示しており、同時期の遺構と考えれば、この遺物がSB35の時期を示唆するものといえよう。

4）古墳時代の遺物

この時代の遺物には土器・土製紡錘車・砥石・双孔円板などがある。記述にあたって、土師器の器種や調整手法については本書第Ⅳ章第２節で示した名称を用いる。

ｉ）柱穴出土の遺物（図46、図版42）

古墳時代の掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は細片であり、時期を特定できるものは少ない。ここでは図示しえた遺物に関して記述する。

110は須恵器高杯の脚部で、長方形の三方スカシ孔に復元できる。Ⅲ区北部の古墳時代井戸SE01の西側に位置する、竪穴住居の柱穴の可能性があるピットから出土した。

111はSB31北西隅柱の柱痕跡から出土したほぼ完形の土師器小型甕である。球形の体部に「く」字形の短い口縁部が付く。体部内外面はハケ調整で、内面の一部にナデが認められるａ手法である。

112・113はSB31の柱穴掘形から出土した須恵器杯蓋である。112は天井部外面のほぼ全体にヘラケズリが及ぶが、113はそれほど下方までヘラケズリが及ばない。両者とも口縁

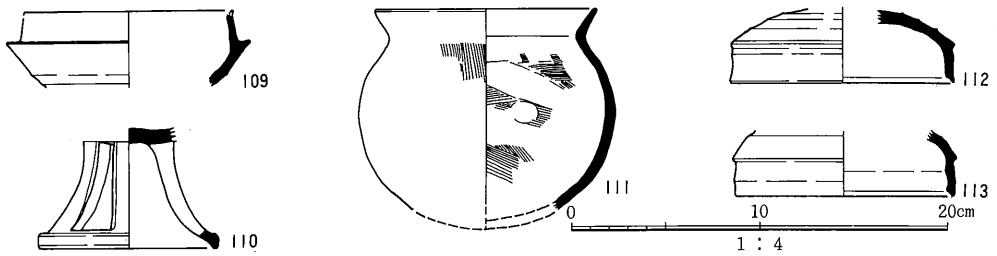


図46　柱穴出土遺物（古墳時代）
SB31（111～113）、Ⅲ区ピット（109・110）

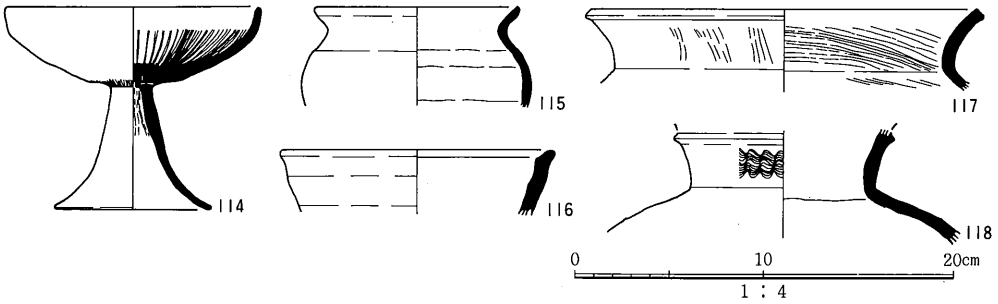


図47　SE01出土遺物

端部は内傾する面をなす。これらはＴＫ208～ＴＫ23型式のものであろう。

109はⅢ区西南部のSB33付近にある同様の柱穴から出土した須恵器杯身である。ＴＫ23型式に比定しうる。

ii）SE01出土の土器（図47、図版42）

114は土師器高杯Ａで、完形に復元できる。杯部は内傾ぎみの口縁部をもち、端部は丸くおさめる。脚部は柱状部から緩やかに裾部が外方に開く。115～117は土師器甕である。115は小型甕の上半部で、球形の体部をなすと思われる。内外面の調整は不明である。116は布留式の系譜をひく甕の口縁部で、端部内面が内傾する面をなす。器壁は厚く、胎土は生駒西麓産である。117は長胴甕の口縁部と思われ、端部は面をなす。外面はハケ調整し

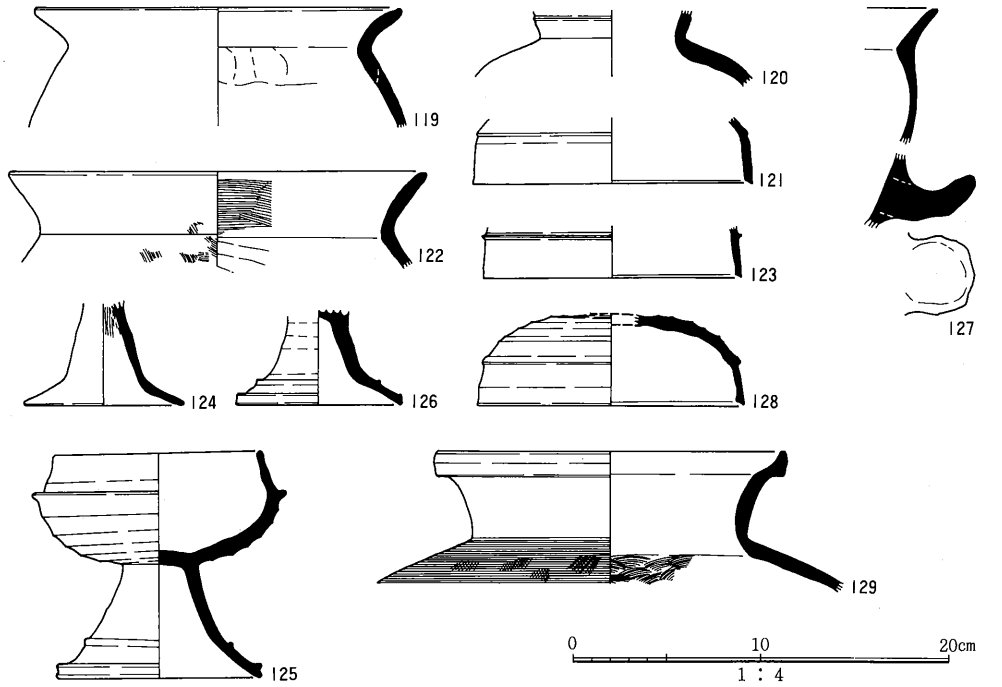


図47　Ⅰ・Ⅱ区土壙出土遺物（古墳時代）
SK04（120・121）、SK06（119）、SK07（122・123）、SK09（126）、SK10（124・125）、SK11（127～129）

たのちにヨコナデ仕上げ、口縁部内面はハケ調整で、それ以下はヘラケズリが認められる。118は須恵器壺上半部で、口縁端部が欠損している。口縁部は頸部から外反し、１本認められる突線との間に波状文が施されている。口縁部から体部の内面はヨコナデあるいはナデ仕上げで、同心円の当て具痕は残らない。

iii）Ⅰ・Ⅱ区土壙出土の遺物（図48、図版42）

Ⅰ区南部の土壙から少量の須恵器・土師器が出土している。いずれも須恵器におけるＴＫ２０８からＴＫ23型式の時期の遺物である。

Ⅱ区のSK10出土遺物には須恵器の有蓋高杯125と土師器高杯の脚部124がある。有蓋高杯125は立上がりが長く、口縁端部は丸くおさめられている。ＴＫ216型式と考える。また、ウマの骨（後述）も出土した。

Ⅱ区のSK11からは「く」字形の口縁と偏平な把手をもつ土師器鍋127、ＴＫ23型式の須恵器杯蓋128・甕129が出土した。

SB16に伴うと思われる溝状の土壙SK09からは、須恵器高杯の脚部126が出土している。スカシ孔はなく、脚端部の形状は125と類似することから、同じくＴＫ216型式と考える。

iv）SK12出土の土器（図49・50、図版43・44）

土師器

130は脚部を欠くが、高杯Ａ類である。甕は小型の131、中型の132・134、長胴甕の上半部と思われる133がある。中型の132は体部内面をヘラケズリし、頸部付近に強いナデ調整がなされて、内湾ぎみの口縁部になる点は布留式甕に類似している。134は完形に復元でき、体部は長胴ぎみである。調整はａ手法である。長胴甕133は体部内面の調整が不鮮明であるが、ハケメは認められず、ｂ－２ないしはｃ手法であろう。

135は鍋の上半部である。体部外面の調整は不明だが、内面にはハケメがみられ、ａないしｂ－１手法であると考えられる。

甑136は平底で、偏平な把手をもつ。底部片と把手接合部から口縁部にかけての破片があるが、接合できない。底部の蒸気孔は残存する一部から推定すると、円孔を中心にしてその周囲に楕円形孔を３個ないし４個配するものと思われる。調整は不明である。

須恵器

蓋杯137～147のうち杯蓋140の天井部は高く、杯身141は立上がりが短いなど新しい様相を示すものがある。しかし、口径は杯身で11㎝前後とＴＫ47型式の杯身ほど縮小化が進んでおらず、ＴＫ23型式に属すると思われる。

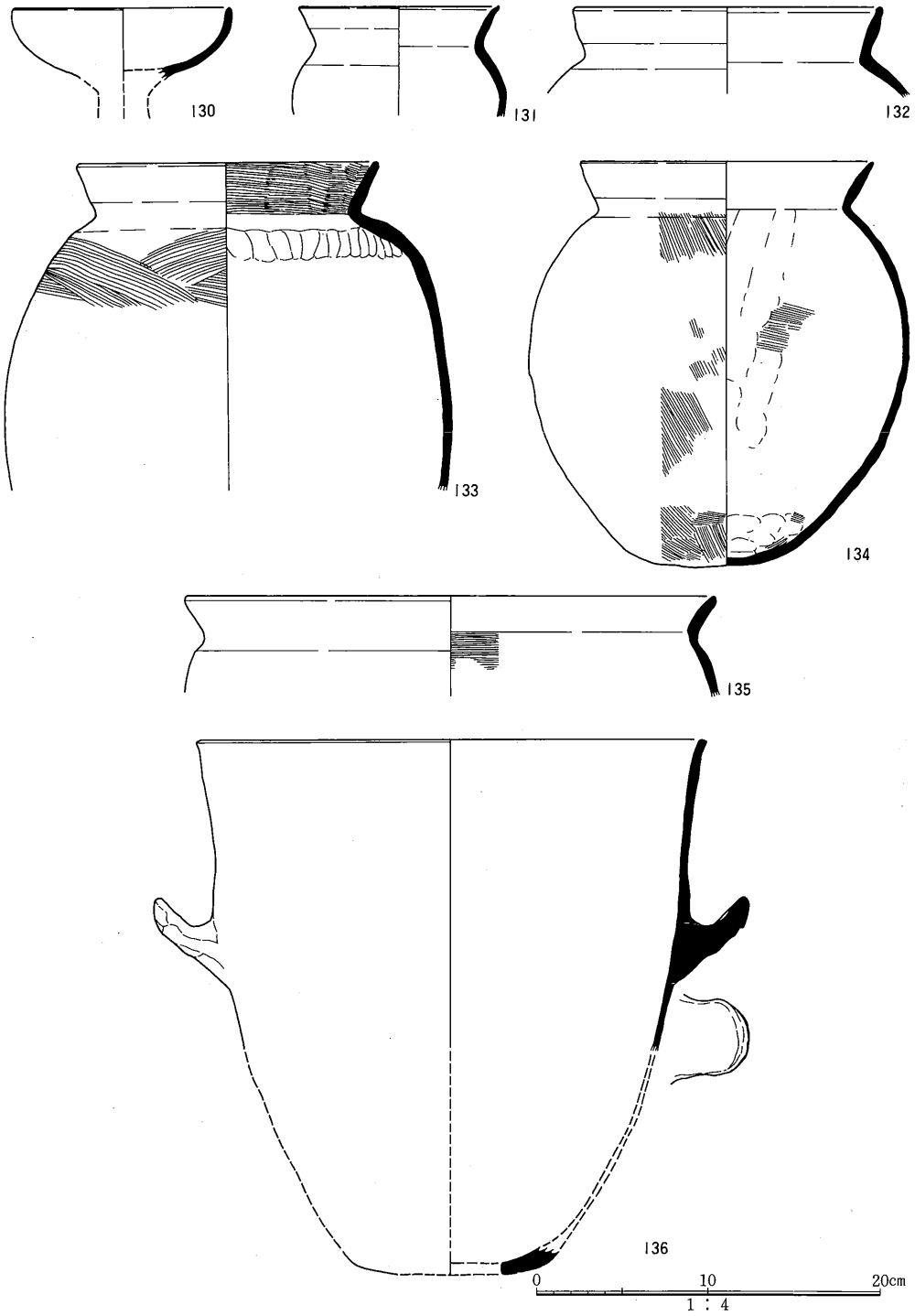


図49　SK12出土土師器

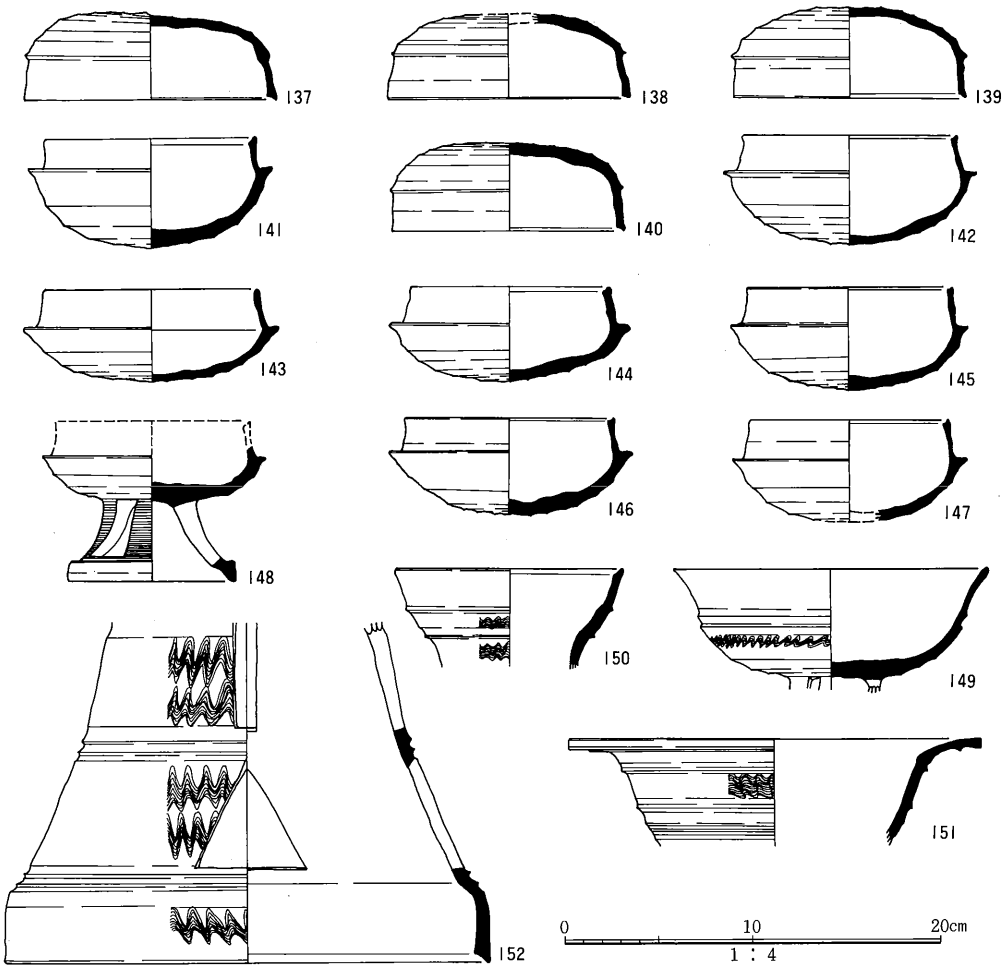


図50　SK12出土須恵器

高杯には有蓋の148と無蓋の149がある。148は口縁部を欠くもので、脚部の外面はカキメが施され、三方に長方形のスカシ孔がある。149は杯部のみだが、脚部の三方にスカシ孔があることがわかる。

150の鼎または壺の口縁部と151の広口壺の口縁部はＴＫ23型式より古いもので、ＴＫ216型式と考えられる。152は高杯形器台の脚部である。

ｖ）SK39出土の土器（図51～54、図版45～49）

土師器

高杯153～159はすべてＡ類である。いずれも杯部内面は荒れており、暗文の有無は不明である。また、脚裾部内面はユビナデで、柱状部内面の絞り目がそのまま残り、脚部内面の仕上げが粗雑である。杯160は小型で器壁が厚い丸底になると思われる。

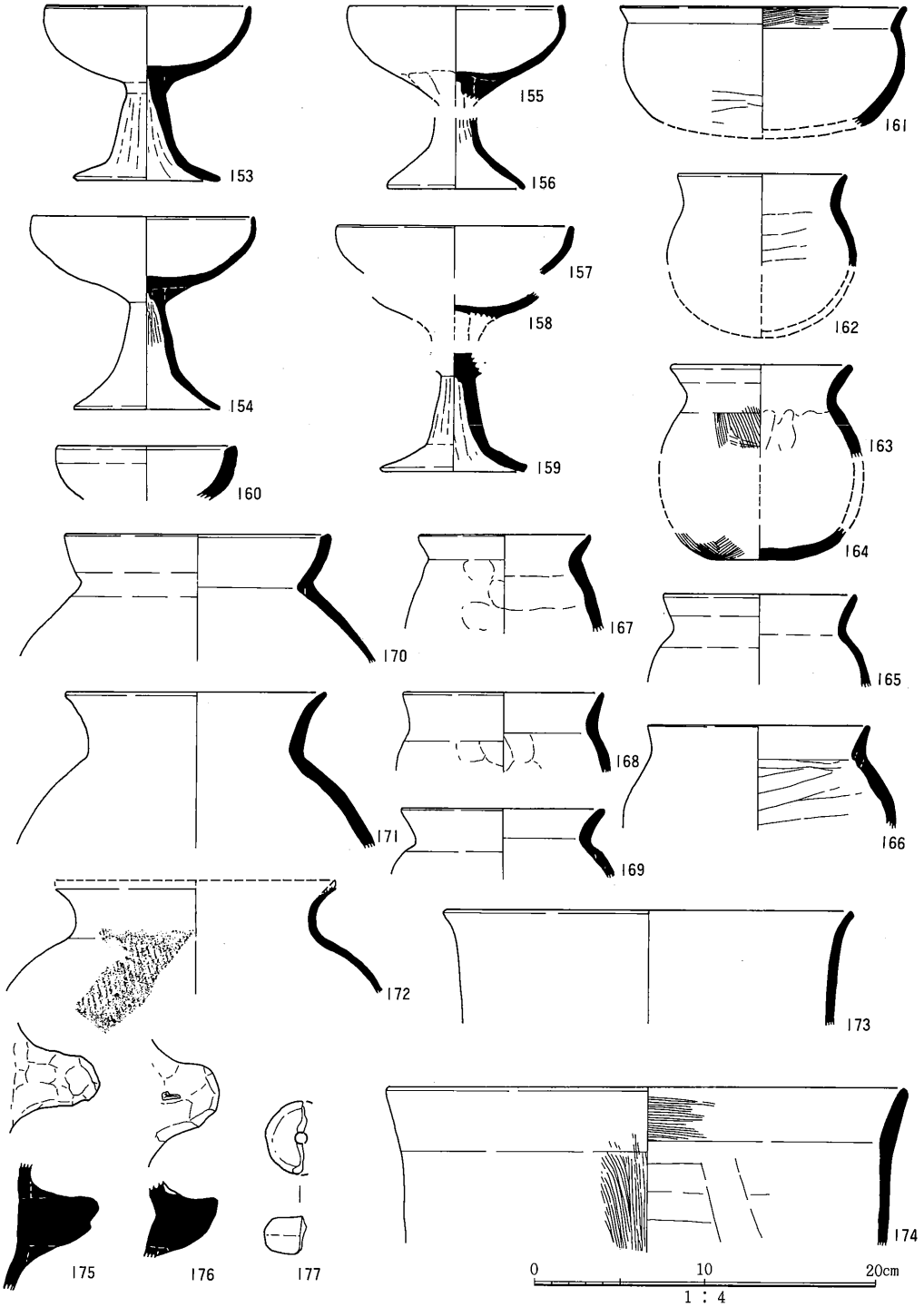
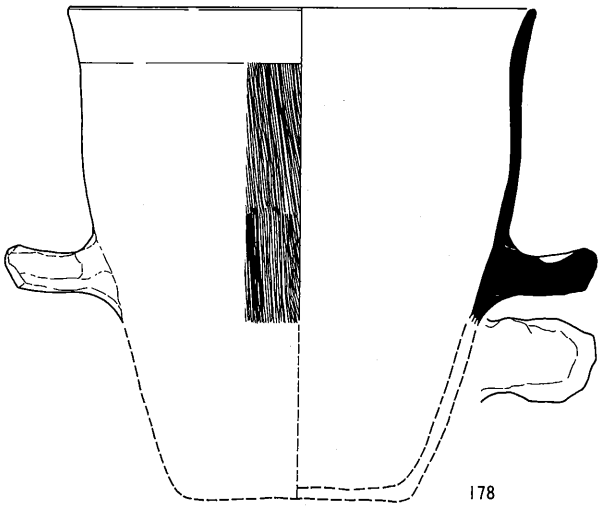
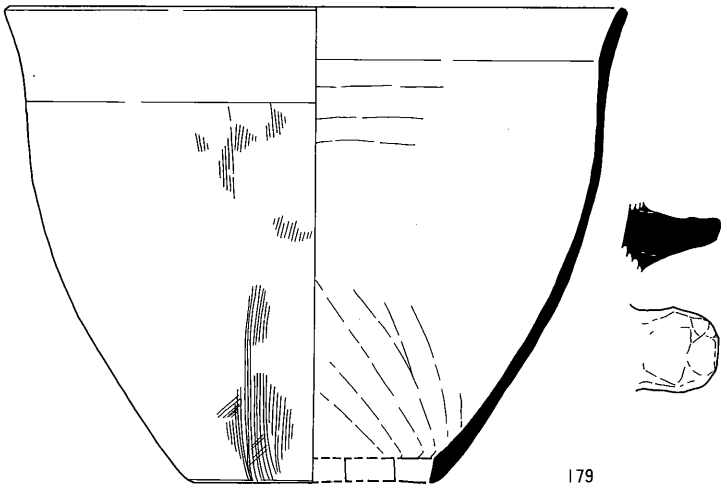
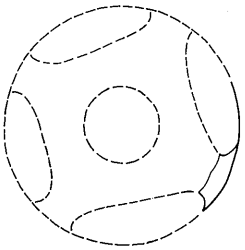


図51　SK39出土土師器（１）







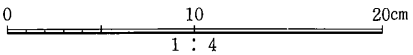
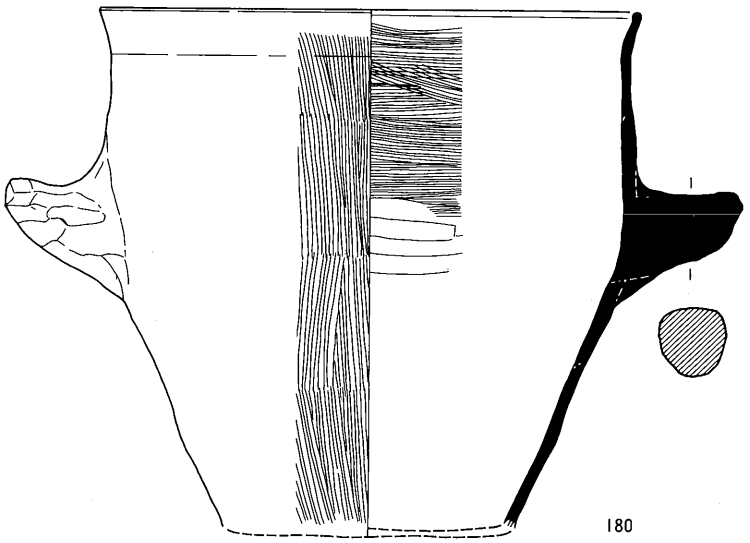
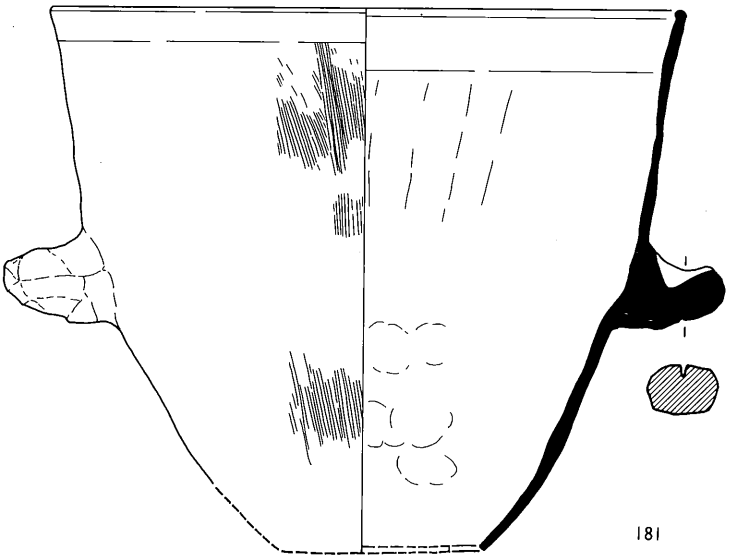


図52　SK39出土土師器（2）

鉢は161の１点のみが出土した。丸底で、椀形の体部から短い「く」字状の口縁部が付く。口縁部内面には横方向のハケが施され、体部内面の調整は器面が荒れているため、明らかでない。外面の調整も不明瞭であるが、下半部の底部付近はヘラケズリである。

甕は小型甕・長胴甕・布留式系甕がある。162～169は小型甕で、調整はｂ－２・ｃ手法がみられる。外面調整は不明のものが多いが、内面調整はナデかヘラケズリで、ハケ調整





0　10　20cm
１：４

図53　SK39出土土師器（３）

がみられない。布留式系甕170は口縁端部が内傾する面をなす。内外面の調整手法は不鮮明だが、体部内面はヘラケズリしている可能性が高い。胎土は他の土師器甕と異なり、長石・雲母の細粒を多く含む。長胴甕171は口縁部のみの資料で、調整は不明である。

甑は６個体以上が確認できる。180は口縁端部の内面が肥厚し、角状で根元が太く、先端が細くなる把手が付く。底部の蒸気孔の形状は不明である。調整はｂ－１手法で、内面の下半部は横方向のヘラケズリが認められる。181は口縁内面が肥厚し、ヘラによる切込みがある角状の把手が付き、底部には円形の蒸気孔の周囲に楕円形の蒸気孔が配される型式である。調整はｃ手法である。178は上半部のみで底部を欠く。口縁部は丸くおさめ、偏平な把手が付く。把手は挿入法によるもので、ユビナデにより中凹みになる。調整は外面がハケ調整であるが、内面は不明である。179は口縁上端部が面をなし、偏平な把手が付くものである。把手は接合できないが、胎土の特徴から同一個体と考えられる。把手の形状は178と同じである。蒸気孔の形状は円孔の周囲に楕円孔を４個配するものであり、調整は内面の下半部をヘラケズリするｂ－２手法であるが、上半部にはハケメが残らない。

173・174は甑の口縁部である。174の調整はｃ手法であるが、口縁部にのみハケが施されている。175・176は甑の把手である。176は根元が先端に比べて太く、長さの短い把手である。上部にヘラで浅い切込みが短く認められる。これと対をなす把手がもう１点ある。

172は体部外面に平行タタキメが認められる軟質の甕ないし壺で、韓式系土器である。口縁端部は欠損している。体部はおそらく球形であると思われる。

須恵器

蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・椀・甕がある。蓋杯182～190・200は口縁端部は丸くおさめたり、面をなすものがあるなど、形状や法量などが一様ではなく、個体差が顕著である。しかし、完形に近い個体が少なく、資料も良好ではない。

有蓋高杯は194～196・198・199の５個体が確認できる。このうち３個体は完形に復元しうる資料であった。195・196はいずれも脚部に長方形のスカシ孔が四方に穿たれたもので、脚端部は肥厚して丸くおさめる。194はスカシ孔がなく、１本の稜線と端部に面をつくる。199も長方形のスカシ孔を四方にもつ脚部が付く。

高杯蓋は191～193・197の４点がある。191・193の天井部中央には、平面円形で中央部が凹むつまみが付く。191の天井部にはカキメが施されている。197は天井部外面に中心に向う鋸歯文が施文されており、やや丸みをおびた稜線から短い口縁部がのび、端部は面をなす。天井部中央は欠損しており、つまみがあったか否かは不明だが、つまみの付く高杯

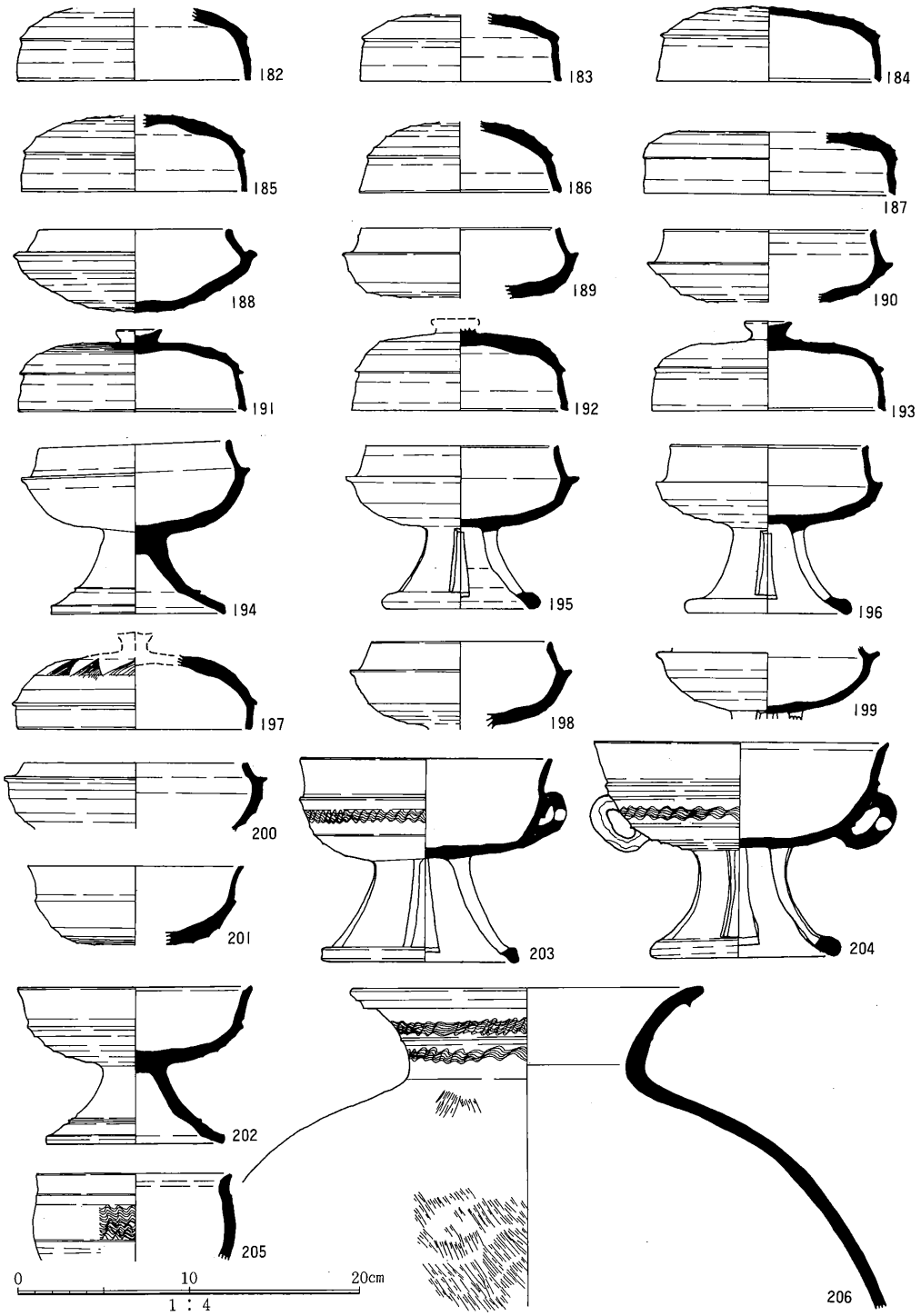


図54　SK39出土須恵器

蓋と考える。ＴＫ73型式と思われる。

無蓋高杯は201～204の４点がある。このうち３点が完形に復元できる。201・202は杯蓋を逆位にした形態の杯部で、口縁部は外反させる。201の杯底部にはカキメが施される。202の脚部は有蓋高杯194のそれと同形態である。203・204は杯部に波状文を施し、203は１個、204は２個の把手を付けた深い杯部で、脚部は長方形のスカシ孔を四方にもち、端部を肥厚させて丸くおさめる。204の脚部のスカシ孔の切取り口はヘラで面取りされている。

椀205は波状文が２段に施されるもので、残存する破片から把手の有無は不明である。

甕206は口縁部が大きく外反し、端部は丸く、外面の端部からすぐ下に１本の稜線がある。その下方の口縁部中位にもう１本の稜線があり、この稜線の上下にそれぞれ波状文が施されている。体部外面には平行タタキが認められ、内面はナデにより仕上げられている。

以上の須恵器はＴＫ216～ＴＫ208型式に属するものと考えられる。

土製紡錘車

177は直径4.3cmの算盤玉形の紡錘車で、中央に直径0.6cmの貫通孔がある。軟質で、灰褐色を呈する。

ⅵ）SK40・41および周辺出土の遺物（図55、図版49）

SK40から出土した土師器鍋207は口縁部と把手および底部が接合できないが、胎土の特徴から同一個体と判断できる。把手は棒状のもので、先端はナデにより面をつくる。底部は平底である。調整は不明な部分が多いが、おおむねナデ調整と思われる。

同じSK40出土の須恵器甕208は口縁部と体部の下半部を欠く。口縁部には稜線が１本あり、その上下に波状文が施される。体部は平行タタキののち、カキメを施している。体部内面はナデでていねいに仕上げる。

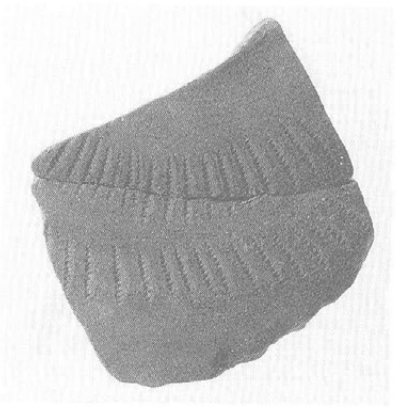


写真13　高杯蓋天井部の文様

209～213はSK41から出土した須恵器である。有蓋高杯212は口縁部を欠くが、内傾する短い立上がりであったと推定される。脚部は裾部があまり広がらない特異な形態で、端部は面をつくる。脚柱状部外面には、長方形のスカシ孔を切取るために刻まれた平行する線刻が残る。また、高杯脚部213にはヘラを突いて開けた菱形に近いスカシ孔が四方にある。

214～216はSK41から出土した製塩土器である。外面にタタキが施されたものはなく、すべてナデ仕

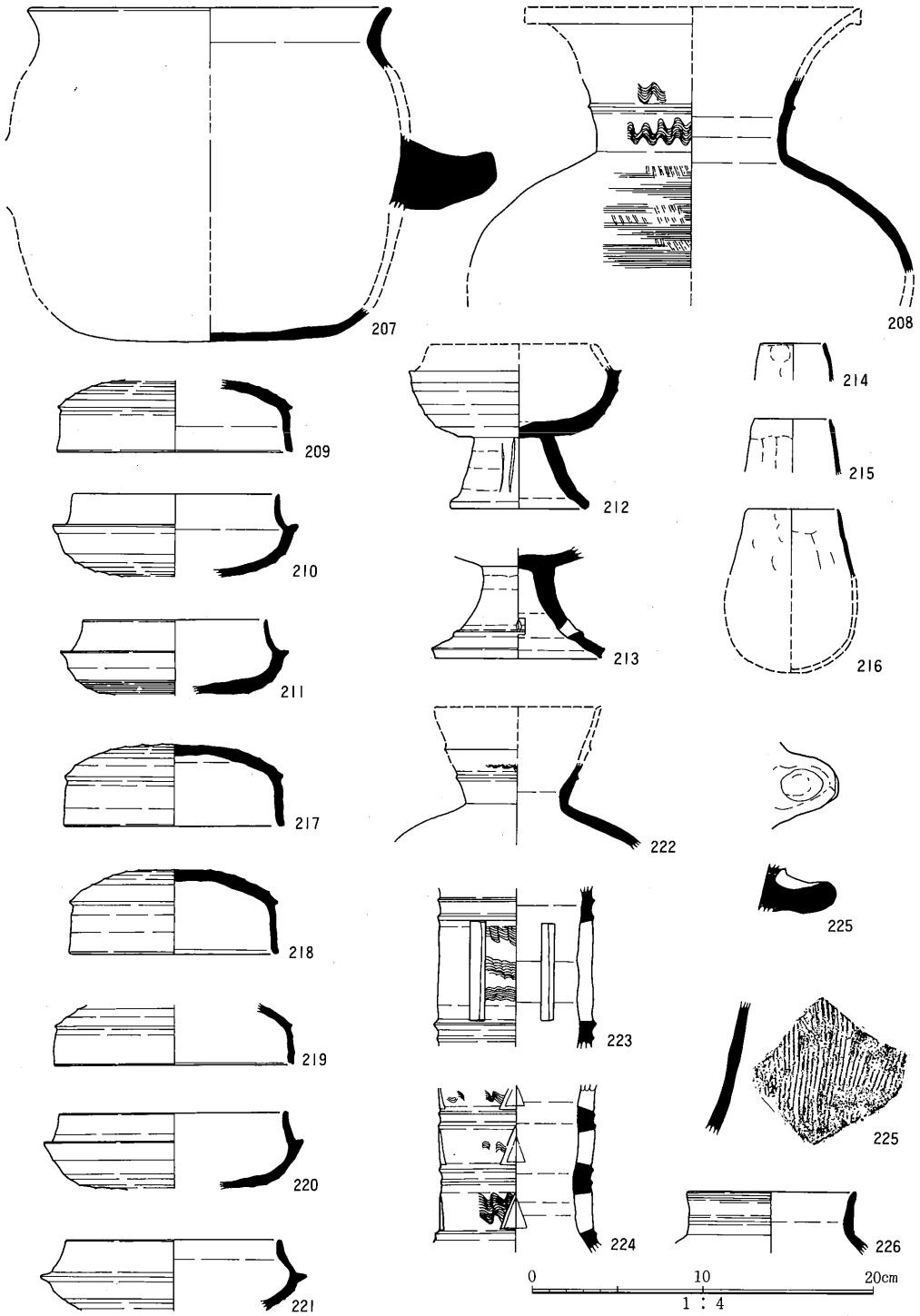


図55　SK40・41出土遺物
SK40（207・208）、SK41（209～216）、SK39～41検出中（217～226）

上げである。丸底で、灰白色を呈するものが多い。

217～227はSK39～41周辺を調査中に出土した遺物である。須恵器蓋杯のほか、223・224の筒形器台の筒部や天井部に列点文を二重に巡らせた高杯蓋227（写真13）、図化できなかったが樽形瓶の破片などがある。また、225は外面に縦方向の平行タタキを施す軟質の甑と思われる破片で、韓式系土器である。

以上の遺物を総合すると、SK40・41から出土した遺物は、SK41の須恵器などからみて、前述のSK39出土の土器群と同様にＴＫ216～ＴＫ208型式の範疇にある。

vii）Ⅰ～Ⅲ区溝出土の遺物（図56、図版50・51）

Ⅰ区北部のSD11から出土した土師器甕228は長胴の体部である。内外面の磨滅が顕著で調整痕がほとんど消滅しているが、外面にはわずかにハケメが残り、内面にはナデないしはユビオサエによる凹凸が認められた。また、この溝と交差するSD09出土の土師器甕229も器面の磨滅が顕著であるが、内面がヘラケズリされていることが確認できる。

Ⅱ区北部のSD14出土の230・232は須恵器の杯蓋と高杯脚部である。230は口縁部が短く端部は内傾する面をつくる。ヘラケズリは下方まで及んでいる。232は長方形のスカシ孔を四方にもつものに復元でき、脚端部は丸く仕上げる。

Ⅱ区南部の「馬池谷」に面するSD15出土の231は、須恵器無蓋高杯の杯部である。口縁端部は内傾する面をつくって外方に短く屈曲させ、その下方の外面には１本の稜線があり、底部付近にカキメを施している。精良な胎土で、淡灰色を呈する。

以上の土器のうち、Ⅱ区の溝出土の須恵器はＴＫ216～ＴＫ208型式と考えられる。

Ⅲ区のSD18とその周辺には重複する溝群が存在し、竪穴住居の周壁溝を想定することができる。須恵器杯身234～239は立上がりが長く、端部は面をなす。底部外面のヘラケズリは上方まで及んでいる。238は体部外面の中位にカキメを施しており、高杯かもしれない。239の立上がりは大きく内傾しており、古い形態を残している。杯蓋233は共伴する杯身に比べて口径が大きい。土師器小型甕243は外面をハケで仕上げているが、内面調整は不明である。244は大型甕の上半部である。

SD19出土の240は須恵器高杯蓋の天井部で、偏平なつまみが付く。241は小型の把手付椀で把手を欠く。２本の稜線の下方に波状文を施す。242は土師器小型甕で、内面をナデ調整している。このほか細片ながら細かい格子タタキを施した須恵器甕片が数点ある。

SD26出土の須恵器高杯形器台245は口縁部を欠く杯部の破片で、２本の稜線を介して上下に波状文を施す。

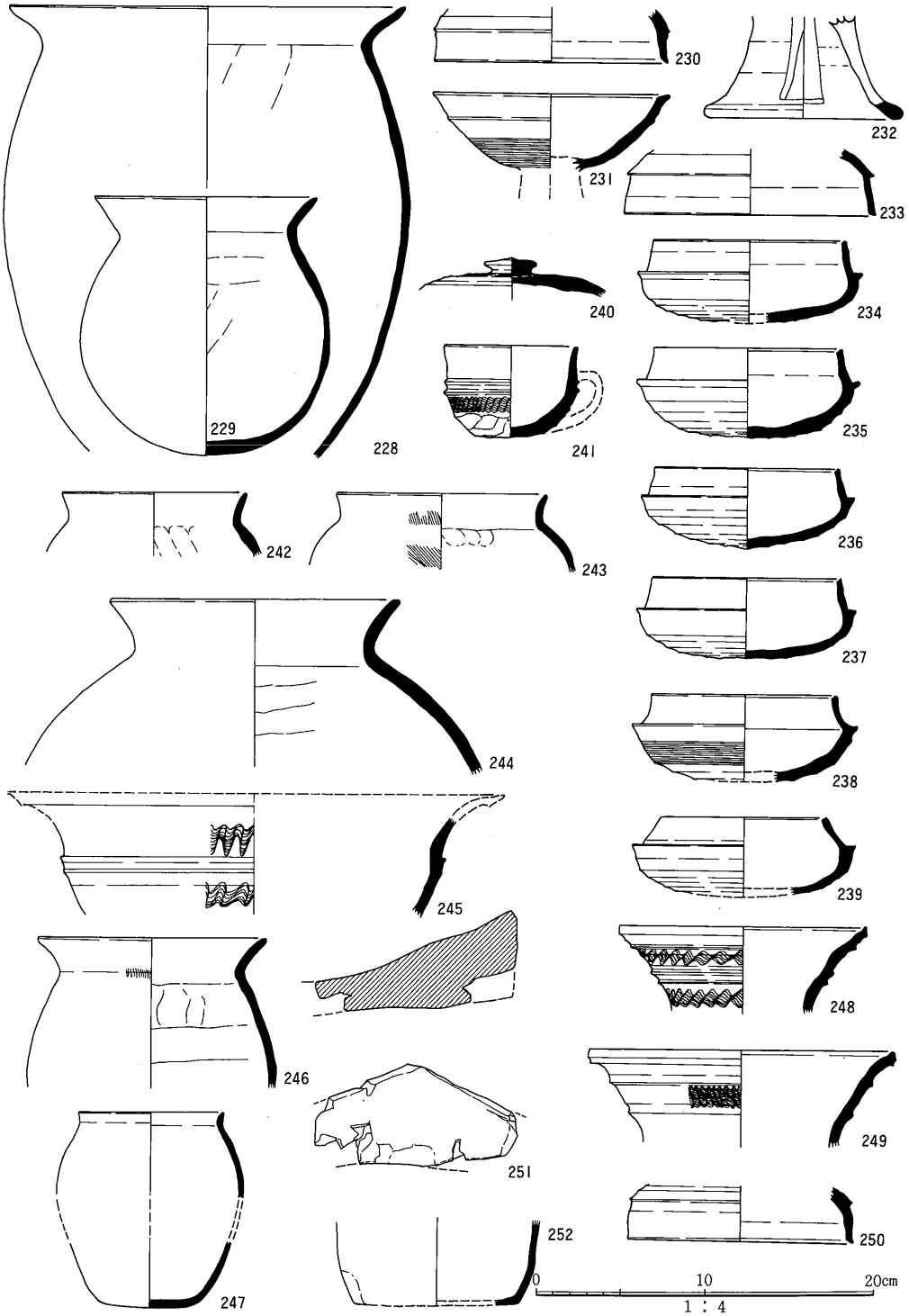


図56　溝出土遺物（古墳時代）（１）
SD09（229）、SD11（228）、SD14（230・232）、SD15（231）、SD18（233～239・243・244）、SD19（240～242）、SD26（245）、SD33（246・248）、SD35（247・249）、SD38（250）、SD39（251）、SD41（252）

SD33出土の土師器甕246は上半部の破片で、ｃ手法で調整される。248は須恵器壺の口縁部である。口縁部外面の中位に２本１組の稜線があり、その上下に波状文を施す。

SD35出土の247は平底で、短い口縁部をもつ土師器小型甕である。かなり磨滅しており、調整は不明だが、形態は韓式系土器の小型平底鉢に近い。249は須恵器壺の口縁部で、口縁部外面に２本の稜線があり、その間に波状文を施す。

方形に巡る溝SD38出土の250は須恵器杯蓋である。比較的短い口縁部で、端部は内傾する面となる。天井部外面のヘラケズリは稜線近くまで及ぶ。

SD39出土の251はシルト岩製の砥石である。全体に焼けて赤色に変色し、板状に割れている。

SD41出土の252は広い平底となる軟質の土器で、韓式系土器の小型平底鉢と思われる。調整は不明であるが、体部外面の最下部はヘラケズリしているようにみえる。

viii）Ⅲ区西部SD28～32および谷斜面出土の遺物（図57、図版51・52）

SD28～32および覆う長原６層ないし７層からの出土土器について、一括して記述する。

土師器

高杯Ａ・甕がある。高杯Ａ253・254・256～260はいずれも杯部のみで、254・260の内面には放射状の暗文があり、外面にハケメが残る。これら以外の資料の調整は不明である。高杯脚部の255・261は高杯Ａのものと思われる。

中型の甕262・263のうち263は布留式系甕の口縁部であり、体部外面がハケ調整で、内面はナデ調整である。胎土は他の甕と異なり、雲母を多く含む。262の調整はｃ手法である。長胴甕264は口縁部付近の破片で、体部外面はハケ調整、内面はナデ調整である。

須恵器

杯蓋265～270には、口縁部がほぼ垂直で、端部が面をなす265・266・268・270と、口縁部が開きぎみで厚みがあり、端部は面をなす267・269がある。天井部外面のヘラケズリは稜線付近まで及ぶものが多い。杯身271は端部が面をなす短い口縁部が内傾ぎみに付く。

272・273の高杯蓋は天井部外面につまみを中心に列点文を巡らす。

無蓋高杯274は杯部外面に２本の稜線があり、その間に波状文を施す。脚部は長方形のスカシ孔を三方にもち、外面にカキメが施されている。275～277は長方形のスカシ孔をもつ高杯脚部である。

278は外面に２帯の波状文を施す筒形器台の杯部である。口縁端部は丸く仕上げ、その直下に稜線をつくる。

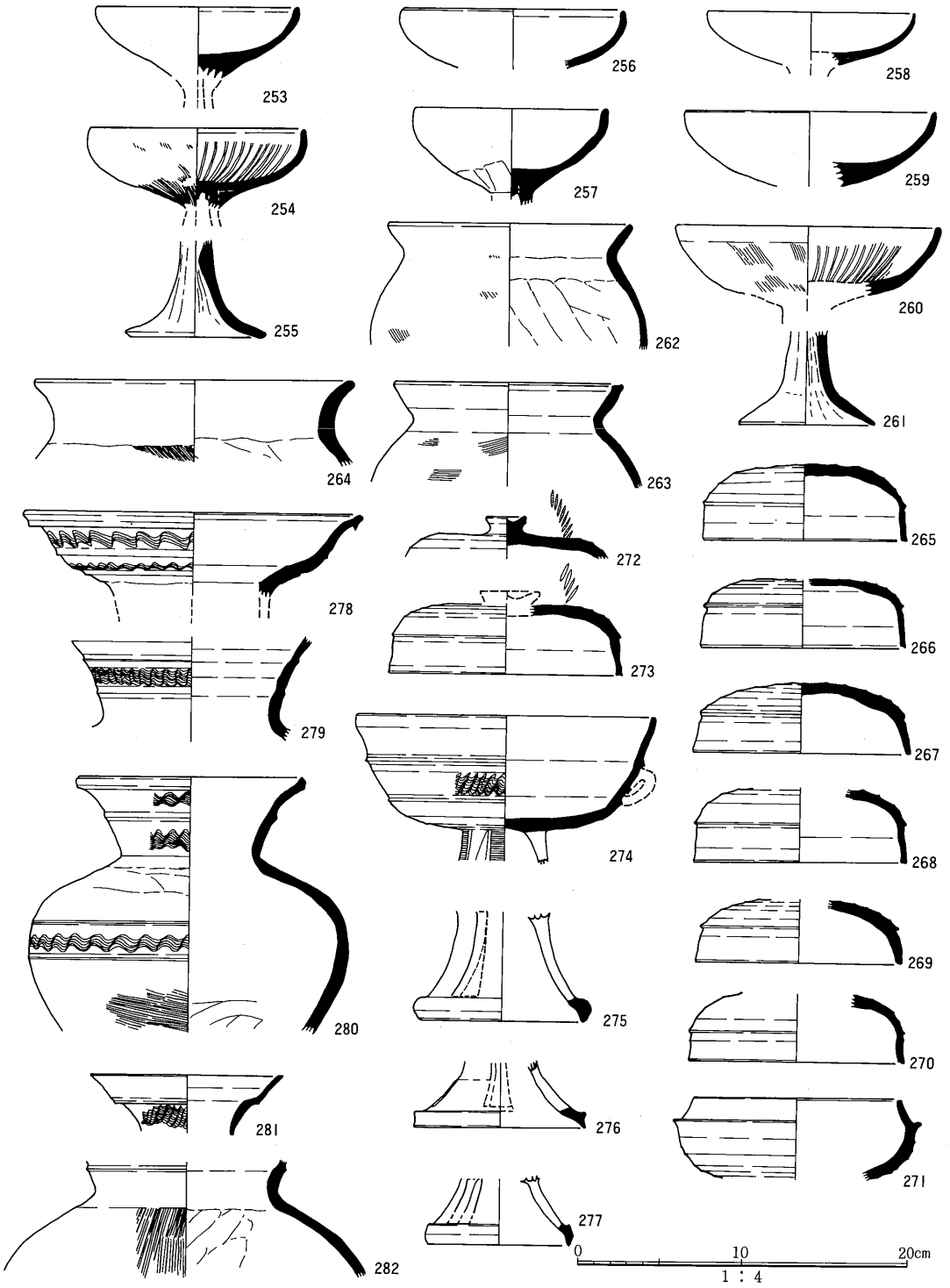


図57　溝出土遺物（古墳時代）（2）

SD28（262・265・275）、SD29（253・254・278）、SD30（267）、SD31（256～260・264・268・272・273・279・282）、SD32（255・263・269）SD35（261）、谷斜面（266・270・271・274・276・277・280・281）

279・280は壺で、280は体部の最大径部に平行する２条の凹線を施し、その間に波状文を施文する。体部下位の外面には平行タタキが残る。

281は甕の口縁部と推定される。282は体部外面に平行タタキが残り、内面はナデで仕上げられた甕である。

以上の土器は須恵器におけるＴＫ216～ＴＫ23型式のものであるが、ＴＫ208型式までのものが中心であると考える。

ix）石製品（図58、写真14）

３点の石製品が出土した。双孔円板283・284は283が緑色を、284が光沢のある乳白色を呈する滑石片岩製である。前者はＩ区の包含層から、後者はＩ区南部のSB10の柱穴から出土した。いずれも古墳時代の遺物と断定できるわけではないが、ここで記述する。

285は方形になると思われるが、全体の形状は不明である。厚さは1.5cm以上となる。もっともよく遺存している面には溝状の凹みが２個所あるが、これが本来の加工痕か後世の削痕かは判別できない。光沢がある灰白色の珪長片岩製である。Ｉ区南部の包含層から出土した。

（京嶋）

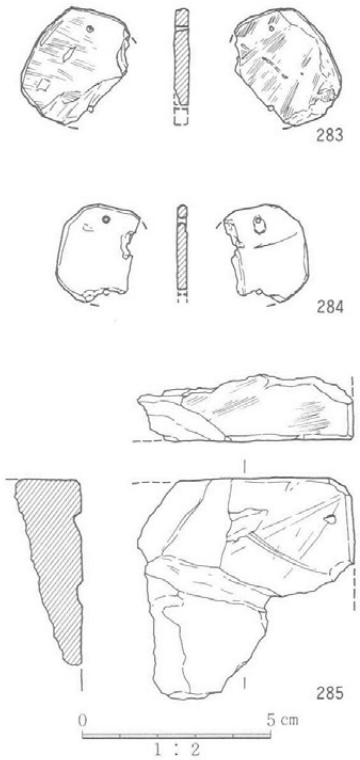


図58　石製品

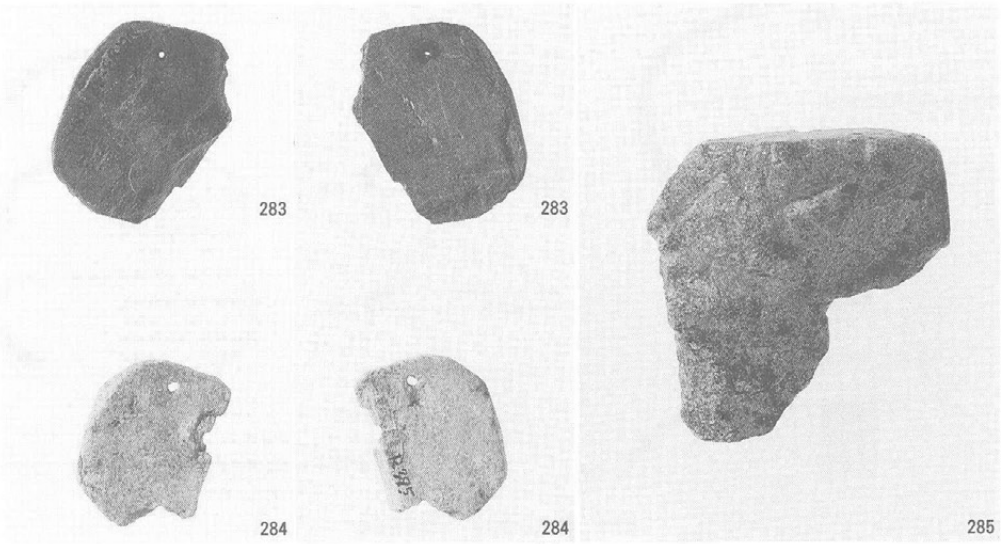


写真14　石製品

ｘ）動物遺体（図版53）

西地区で出土した動物遺体は、総数８点あった。これらは、Ⅱ区SK10～12の埋土から出土したものである。土壙の形状から前二者は土壙墓の可能性が考えられている。時期は、共伴する土器から、５世紀後半から６世紀初頭であり、なかでもSK10が古い。

動物遺体の遺存状態はかなりもろく、樹脂で補強して取上げてクリーニングののち、同定を行った。その結果、６点から以下の２種が判明した（註９）。

ウマ科ウマ　　*Equus caballus* Linnaeus

イノシシ科イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* (Temminck et Schlegel)

以下、遺構ごとに動物遺体の出土状況・部位などを記す。

SK10

骨は西端に集中しており、その中からウマ右中足骨とウマないしウシの右上腕骨を同定することができた。両者は近接して出土し、一個体に由来するものと仮定しても、骨格中の自然な位置を保っているとは考えがたい。中足骨は腐蝕が著しいが、両骨端が残存していた。その全長249㎜をもとに林田重幸・山内忠平氏の公式［林田重幸ほか1957］によって体高を復元すると124㎝となり、いわゆる中型馬に属する大きさであると推定できた。

SK11

北西端の土器が集中した個所から、イノシシ左下顎骨の破片が出土した。乳切歯i_1から第１乳臼歯m_1が脱落し、永久歯である切歯I_1から第１前臼歯P_1が未萌出のまま残存している。林良博氏らの成果［林良博ほか1977］によると、６カ月齢より若い個体のものと考えられる。

SK12

東半部から土器に混って散乱した状態で、ウマ右下顎第３後臼歯M_3、同右下顎臼歯および同中手骨あるいは中足骨の遠位端が出土している。いずれも破片であり、詳しいことは現段階ではわからない。

以上が出土した動物遺体の概略である。判明したのは哺乳類のみであり、特にウマに関しては貴重な資料を追加することができた。現段階では、河内平野周辺におけるウマの出現時期は古墳時代前期以降であり、５世紀後半から６世紀初頭に増加するものと考えられている［松井章1986、野島稔1984］。本資料は、その増加する時期のものにあたる。近年の長原遺跡の調査でも当該期のウマの出土例は増加しており、全国的にみても５～６世紀代に属するものを多く出土する点で注目すべきことである。出土したウマの形質は中型馬

と推定できたが、このことは隣接する瓜破遺跡の５～６世紀代の資料でも確認されている［樽野博幸1978］。古墳時代の馬の導入過程や利用を検討するためにも、今後十分に注目してゆかねばならない。また、古墳時代の長原・瓜破遺跡ではウマ・ウシ・イヌ・シカが確認されているが［樽野博幸1978］、イノシシは今回が初出である。当時の動物利用を考える上で重要な資料であろう。

さらに、土壙墓状の遺構との関連も注意されるが、骨に比べて残存度の良好な歯の出土数が少ないことや、骨の位置関係などから、ウマやイノシシを埋葬したと断定することはむずかしい。しかし、SK10は体高復元されたウマを埋葬するのに十分な大きさであることや、ウマを埋葬したと考えられる遺構の類例もあるので［松井章1991］、その可能性は無視できない。今後の調査の課題としておきたい。　　（久保）

５）奈良時代の遺構と遺物

掘立柱建物５棟、土壙２基を検出した。いずれもⅠ区南部からⅡ区にかけて位置している。

ｉ）掘立柱建物

SB08（図60・101、図版17）

Ⅰ区南部でSB09の北側に位置する。桁行３間（4.45m）、梁行推定３間（3.6m）の総柱建物である。柱間は桁行1.48m（５尺）等間、梁行1.2m（４尺）等間であり、東柱は側柱と東西方向に柱筋を揃えているが、南北方向ではやや西にずれている。掘形は側柱が一辺0.5～0.7mの方形を呈するのに対して、東柱の掘形は一辺0.4～0.5mとやや小型である。深さは0.15～0.40mで、直径0.12～0.18m

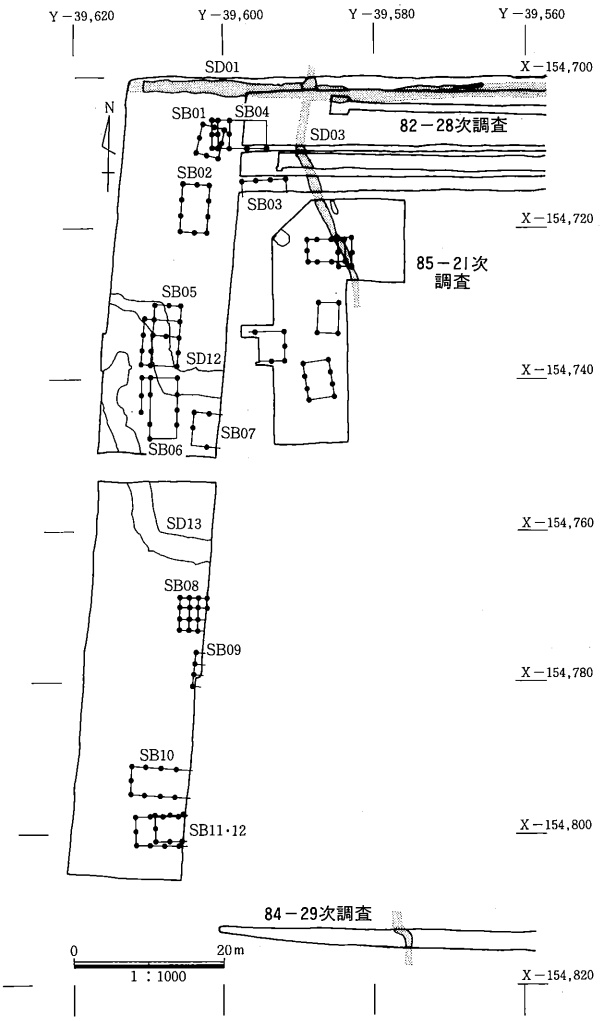


図59　西地区Ⅰ区遺構配置図（奈良時代以後）

の柱痕跡が認められた。方位は西側柱列がＮ1°Ｅで、東柱列はＮ4°Ｅを示す。

SB09（図61・101、写真15、図版17）

Ｉ区南部のSB08の南側柱列から3m（10尺）の間隔をおいて南に位置する。西側柱列は約1.5m（５尺）東に寄っている。南北３間（4.56m）で柱間は1.52m（５尺）等間である。建物の西側柱列とその東側１間目の柱穴を南北１間分検出した。したがってSB08同様に総柱建物であると考えられる。掘形は一辺が0.7～0.9mの方形で、深さは0.3～0.6mである。直径0.15～0.20mの柱痕跡が認められた。方位はＮ4°40′Ｅである。

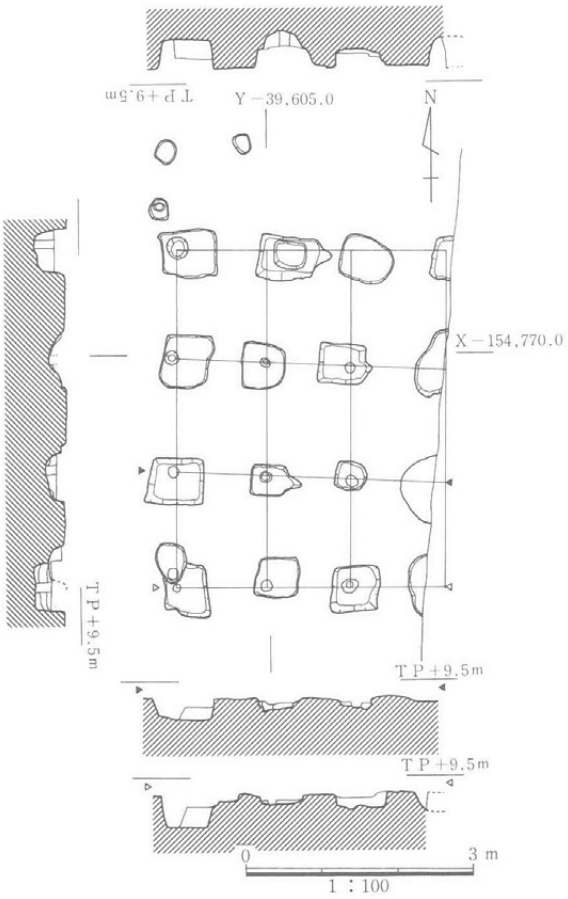


図60　SB08実測図

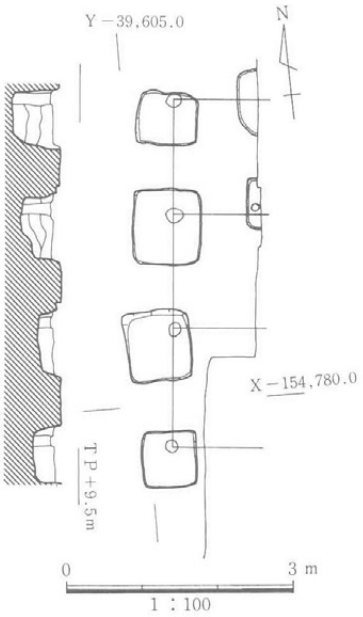


図61　SB09実測図

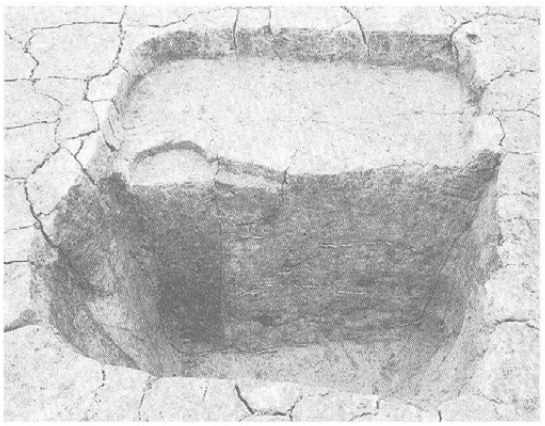


写真15　SB09の柱穴断面

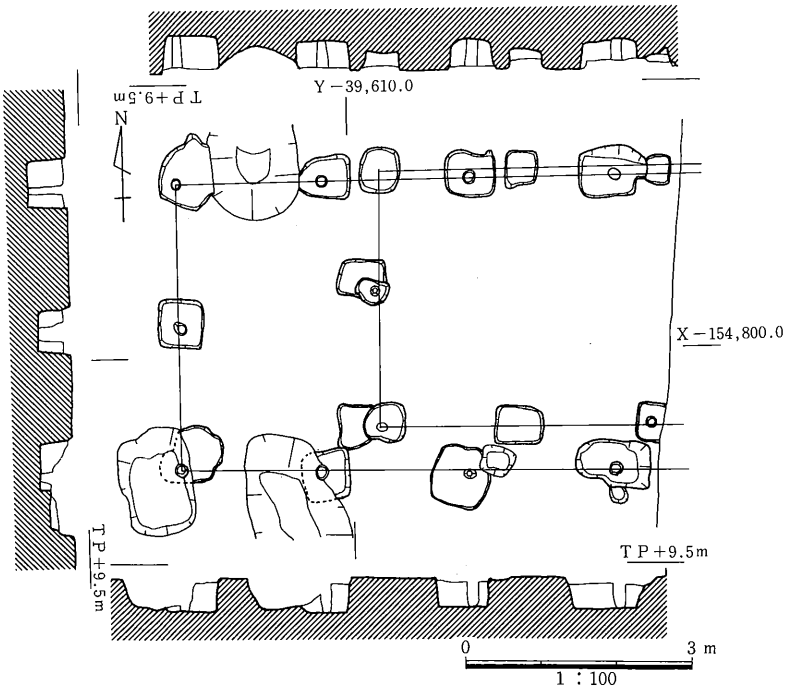


図62　SB11・12実測図

SB11（図62・101、図版17）

Ⅰ区南端部でSB10の南に位置する。桁行3間（5.78m）以上、梁行2間（3.75m）の東西棟建物である。柱間は桁行が1.93m（約6.5尺）等間、梁行は1.87m（約6尺）となる。掘形は一辺0.5～0.7mの方形を呈し、深さは0.4m前後で、柱径は0.12～0.18mである。棟方位はE1°Sである。

SB12（図62・101、図版17）

Ⅰ区南端部でSB11と重複する建物である。桁行2間（3.6m）以上、梁行2間（3.4m）の東西棟建物である。柱間は桁行1.8m（6尺）、梁行は1.6～1.8mである。掘形はSB11よりやや小型で、0.4～0.6mの方形を呈する。西妻中央柱と南西隅柱は柱筋を揃えるためか、掘形を掘り直している。直径約0.1mの柱痕跡が認められた。棟方位はSB11とほぼ等しい。

SB11とSB12は掘形のごく一部が切合っていた柱穴の先後関係から、SB12からSB11へと床面積の拡張を意図して建替えられたと考えたい。

SB18（図63・102）

Ⅱ区中央部に位置する。桁行推定3間（4.4m）、梁行推定2間（3.3m）の建物であるが、攪乱坑や新しい遺構に壊されており、北西隅柱と東側柱列の柱穴がかろうじて検出できた。一辺が0.4～0.6mの方形の掘形で、深さは0.1mである。直径0.15mの柱痕跡が認められた。掘形の形状からSB11・12などと同じ時期のものと思われる。棟方位はN5°Eを示す。

ii）土壙

SK02（図101）

Ｉ区南部のSB10の北側柱列の柱穴に切られる土壙である。長径2.2m、短径1.2mの楕円形で、深さは0.3mである。土師器・須恵器の杯や瓦が出土し、奈良時代の遺構と思われる。

SK03（図101）

Ｉ区南部のSB10の北西に位置する土壙である。長径1.7m、短径0.7m、深さ0.2mである。土師器・須恵器の細片が出土した。

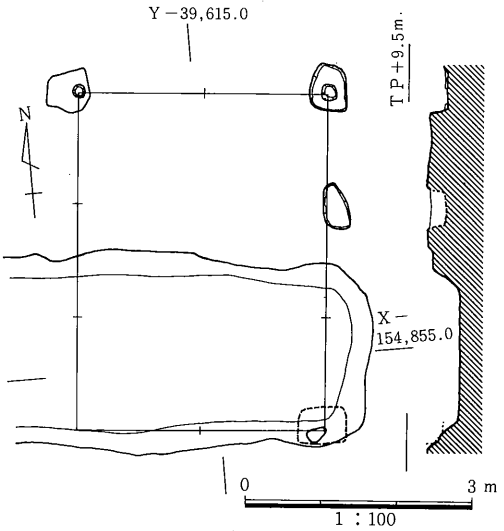


図63　SB18実測図

iii）奈良時代の遺物（図64、図版54）

この時期の遺物は各区で認められるが、ほとんどはＩ区南部に集中していた。ここではＩ区のSB08・09およびSB11・12付近とSK02・03で出土した遺物について記述する。なお、器種名・編年は『平城宮発掘調査報告』Ⅶ［奈良国立文化財研究所1976］にしたがう。

土師器

杯Ａ、高杯Ａ、甕Ａ・Ｂがある。

杯Ａは法量において口径15cm前後の286～290と17～18cmの291・292の２種がある。口縁部の外傾傾向はあまり顕著ではない。内外面の調整はいずれの資料も磨滅しており、不明である。

高杯Ａ296は杯部と脚部の接合部の破片で、脚部は断面八角形に面取りされている。調整は不明である。

293・294は甕Ａである。294は上半部の破片で、口縁端部を肥厚させる。調整は不明である。甕Ｂ295は偏平で平面三角形を呈する小型の把手を付けた体部片である。外面はハケ調整で、内面はナデで仕上げる。

須恵器

杯Ｂ・Ｆ、壺Ｑ・Ｅ・Ｍ・Ｃ、横瓶がある。

杯Ｂ300～302は平底の外周付近に高台を付けたもので、302の底部外面はヘラ切りのままで不調整である。杯Ｂ蓋298・299は口縁端部の下方への突出が顕著でないもので、天井部外面はヘラケズリしている。303は杯Ｂ蓋の可能性もあるが、口径が大きく天井部から

口縁部にかけての屈曲が顕著であるため、ここでは杯Ｆの蓋とした。304は杯Ｆで、比較的高い断面長方形の高台を貼付け、緩やかな曲線を描いて口縁部にいたると推定される形態である。底部外面はヘラケズリしており、そのほかはヨコナデ仕上げである。

壺Ｑ307は体部中位の破片である。306も壺Ｑの可能性があるが、後述する壺Ｅかもしれ

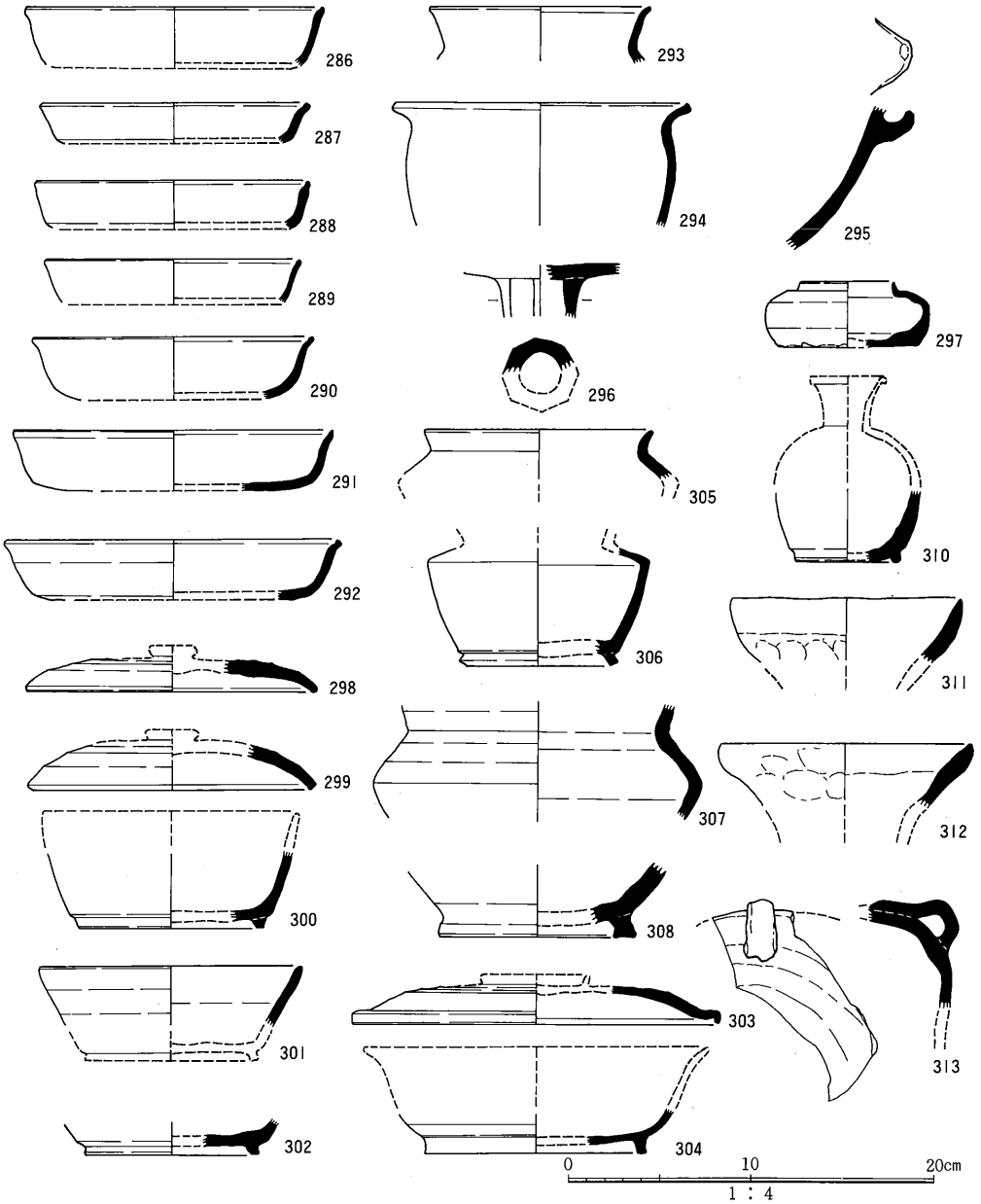


図64　Ⅰ区出土奈良時代遺物
SB09（286・293）、SK02（292・301）、SK03（308）、Ⅰ区南部ピット（287・294・295・303）、Ⅰ区南部（288～291・296～300・302・304～307・310～313）

ない。壺Ｅ305は口縁部の破片である。壺M310は小型で、底部の外周ぎわに小さな高台を貼付ける。壺Ｃ297は大きな平底をもつ偏平な体部に短い口縁部が付く小型壺である。308は大きくふんばる高台をもつ壺底部である。313は帯状の把手を貼付けた横瓶である。

製塩土器

全形を知ることができる破片はないが、３個体以上あると思われる。311・312は大きな砂粒を多量に含む胎土で、全体がユビナデないしはユビオサエで整形され、粘土接合痕が残るなど、器面の調整は粗い。二次的な加熱による変色がみられる破片がある。内面に布圧痕はなく、岩本氏のいうＩ類に属する［岩本正二1983］。

以上の土器のうちＩ区南部の柱穴から直接出土した遺物は少ないが、この時期の遺物はSB08・09の周囲に集中しており、これらが建物の時期の一端を示していると考えられる。土師器杯は調整が不明であるが、法量からみて平城宮Ｖ・Ⅵ期に属し、Ⅶ期まで下らないものと思われる。また、須恵器もそれを否定しうる資料はないため、これらが建物の時期を示すものとすれば、その廃絶は平城宮Ⅵ期ころにあったということができる。

６）平安時代の遺構

掘立柱建物18棟、井戸１基のほか、多数の土壙・溝を検出した。これらの遺構の分布域はＩ区北部・Ｉ区南部・Ⅱ区北部・Ⅲ区西部・Ⅲ区東部の５個所である。

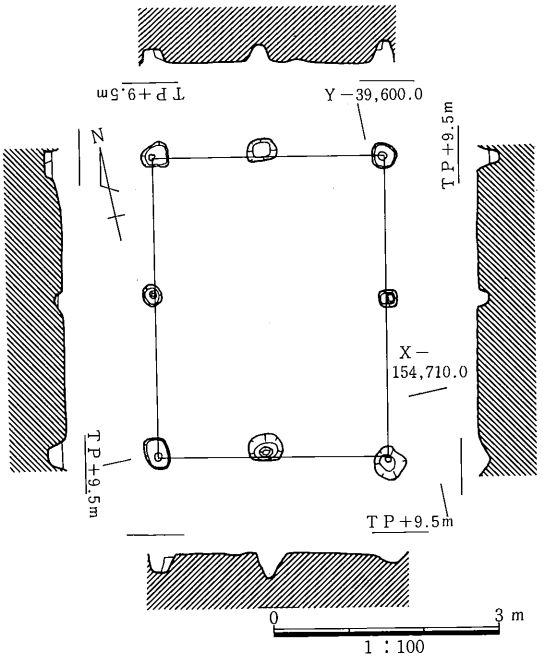


図65　SB01実測図

ｉ）掘立柱建物

SB01（図65・66・100、図版18）

Ｉ区北端部に位置する桁行２間

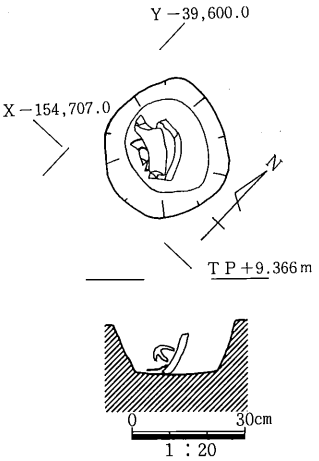


図66　SB01遺物出土状況

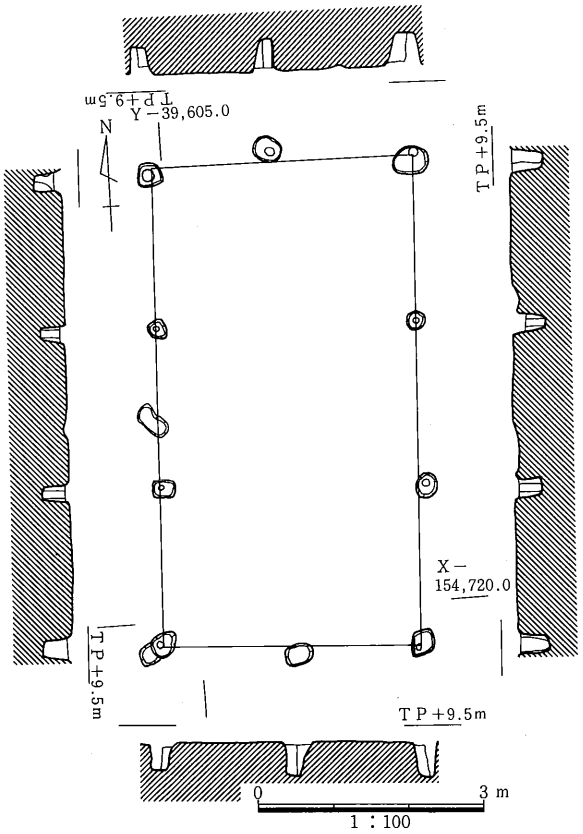


図67　SB02実測図

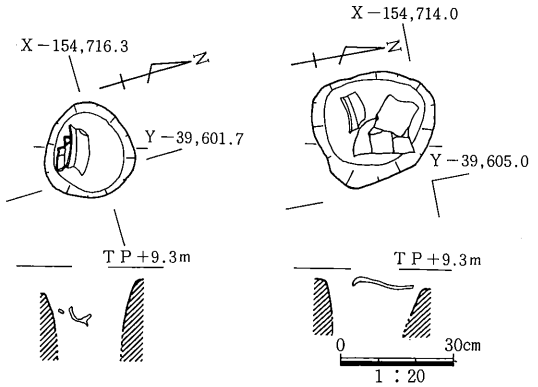


図68　SB02土器出土状況

（3.95m）、梁行２間（3.05m）の小型の南北棟建物である。柱間はやや不揃いである。直径0.3～0.4mの円形の掘形で、棟方位はN11°50′Eを示す。

北東隅柱の柱穴から土師器羽釜の上半部と皿が平瓦とともに出土した。柱穴から黒色土器が１点も出土しておらず、後述する他の建物に先行する可能性がある。

SB02（図67・68・100、図版18）

Ⅰ区北部のSB01の南に位置する。桁行３間（6.28m）、梁行２間（3.45m）の南北棟建物で、桁行柱間が2.09m（７尺）、梁行柱間は約1.8m（６尺）の等間となる。妻中央柱はやや外寄りに配されている。掘形は直径0.25～0.30mの円形を呈する。棟方位はN3°10′Eである。

北東隅柱と北東隅柱から１間南の柱（図68－左）および北西隅柱（図68－右）の各柱穴から土師器羽釜の上半部が出土したが、このうち、後二者の柱穴から出土した羽釜片は同一個体であった。黒色土器A類椀と思われる細片が出土している。

SB03（図69・99）

Ⅰ区北部でSB02の東側に位置し、東西３間分（5.85m）を検出した。調査地北側に対応する柱穴がないことから、東西棟建物の北側柱列と考える。柱間は1.7～2.1mと不揃いであ

る。柱列の示す方位はＥ４°Ｎである。

掘形内から土師器、黒色土器Ａ・Ｂ類の細片が出土した。

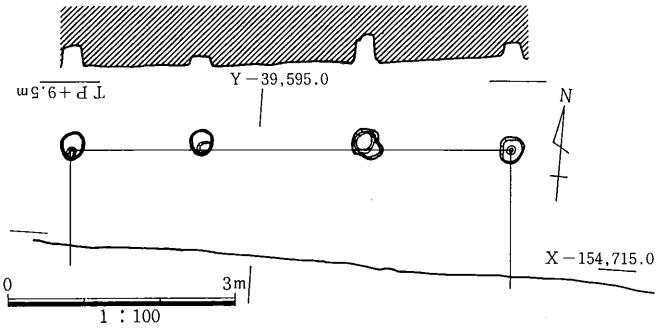


図69　SB03実測図

SB04（図70・99、図版18）

Ｉ区のSB03の北側に位置する東西棟建物である。身舎が桁行２間（4.95m）、梁行２間（3.85m）で、西側に庇がある。庇の出は2.1m（７尺）であるが、身舎西妻から西に1.5m（５尺）の位置にも庇と思われる小柱穴があり、庇の造替えがあったと思われる。桁行柱間2.47m（約８尺）等間、梁行柱間1.93m（６.５尺）等間である。柱穴の掘形は直径0.25mの円形であるが、庇の柱穴は直径0.15m足らずの小型で、深さも浅い。棟方位はＥ０°20′Ｎである。

柱穴から土師器皿のほか、黒色土器Ａ・Ｂ類の細片が出土した。

Ｉ区北部のSB01～04の建物群のうちSB01とSB04が重複するが、先後関係は不明である。

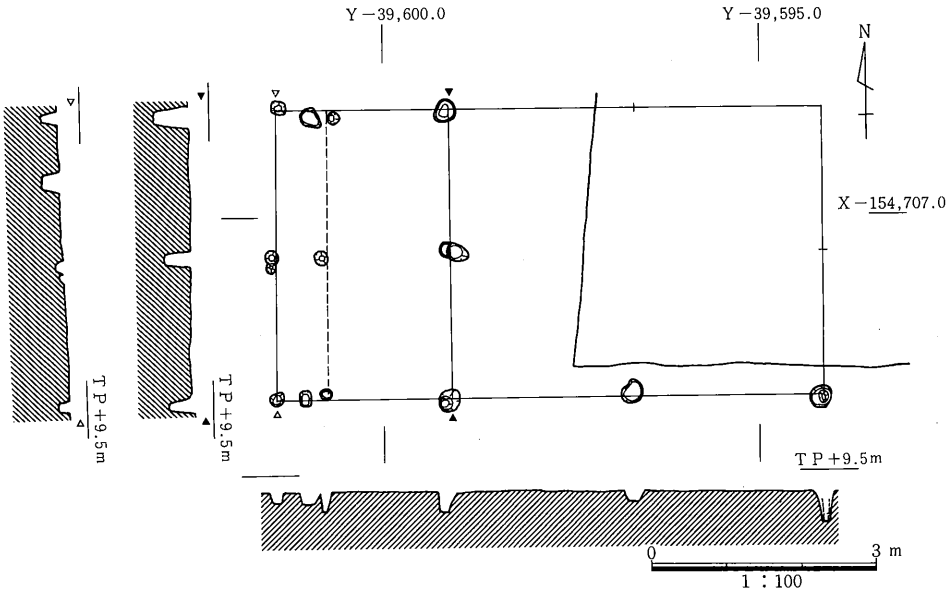


図70　SB04実測図

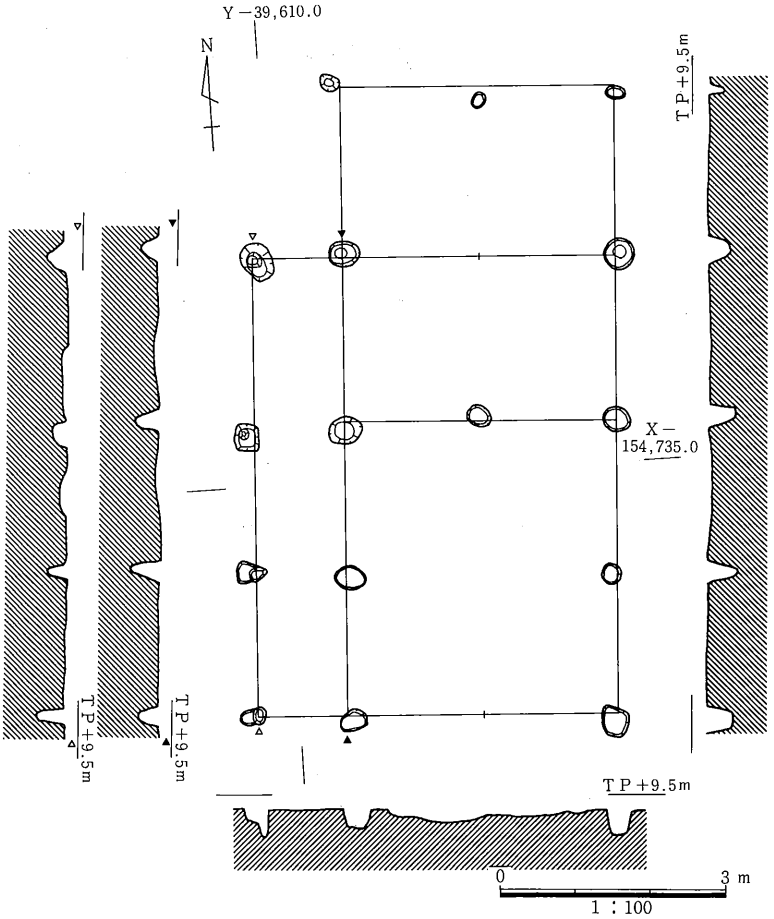


図71　SB05実測図

SB05（図71・100、図版19）

Ⅰ区南部に位置する南北棟建物である。身舎は桁行３間（6.28m）、梁行推定２間（3.60m）で、桁行柱間2.09m（７尺）等間、梁行柱間1.8m（６尺）となる。北側と西側に庇が付き、庇の出は北側が2.1m（７尺）、西側が1.2m（４尺）である。妻中央柱は遺存しない。棟通りの北から１間目に間仕切りの柱穴がある。掘形は直径0.35～0.40mの円形で、柱径は0.12～0.15mである。棟方位はN4°Eを示す。

出土遺物は図化しえなかったが、生駒西麓産の胎土の羽釜片を含む土師器細片と黒色土器Ａ類椀の破片がある。

SB06（図72・100、図版19）

Ⅰ区南部でSB05の南側に位置する。SB05の南妻とSB06の北妻との間隔は約1.4mであ

る。身舎の桁行４間（8.1m）、梁行推定２間（3.6m）で、柱間は桁行が不揃いで1.9～2.3m、梁行は1.8mである。西側に北から２間分の庇があり、庇の出は1.1mである。これに続く南２間分には一連の庇を構成する柱穴はないが、西側柱列から1.5m離れて、1.3m間隔の柱穴が南北２間分（2.6m）検出されており、SB06に係る何らかの遺構と考えられる。また、身舎の梁行総長はSB05と等しく、西および東側の柱列がSB05のそれと柱筋が一致する。掘形は直

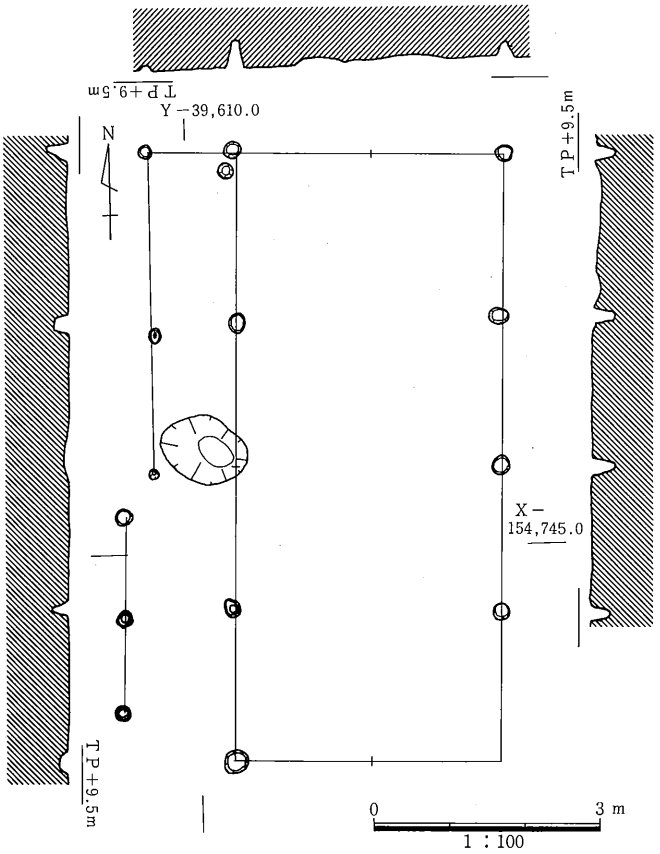


図72　SB06実測図

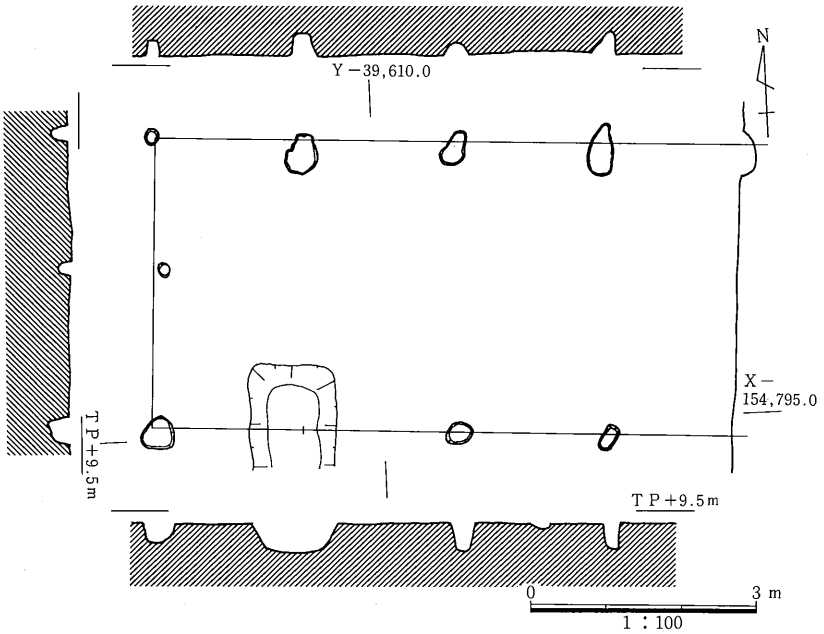


図73　SB10実測図

径0.2～0.3mの円形で、SB05より小型である。柱は確認できなかった。棟方位はN1°30′Eを示す。土師器小皿G類片や黒色土器A類椀の細片が出土した。

SB07（図100）

Ⅰ区中央部のSB06の東側に、約2mの間隔をあけて位置する。桁行1間（2.0m）以上、梁行推定2間（4.4m）の東西棟建物と思われる。南西隅柱は遺存しない。直径0.25～0.30mの円形の掘形で、柱径は0.12～0.15mである。E8°Sの方位である。土師器片が出土した。

SB10（図73・101、図版19）

Ⅰ区南端部の東西棟建物で、桁行3間（6.0m）以上、梁行2間（3.9m）である。柱間は桁行2.00m（約7尺）、梁行1.95m（6.5尺）となる。掘形は、直径0.2～0.4mの円形ないしは南北に長い楕円形を呈し、深さは0.2～0.4mである。棟方位はE2°30′Sである。土師器杯・皿の細片と黒色土器A類椀片が出土した。

SB14（図75・102、図版20）

Ⅱ区北部の南北棟建物である。身舎は桁行4間(8.75m)、梁行2間（4.40m）で、南側に庇が付き、庇の出は2.2mである。身舎の南妻中央柱の位置には近世の遺構があるため、遺存しない。柱間は桁行・梁行とも2.19m（約7尺）のほぼ等間である。掘形は直径0.2～0.4mの円形ないしは東西に長い楕円形を呈する。深さは0.20～0.35mで、柱径0.10～0.12mである。北東隅柱から1間南の柱穴には柱位置の底部に塼が据えられていた。この柱穴の南西の建物内側

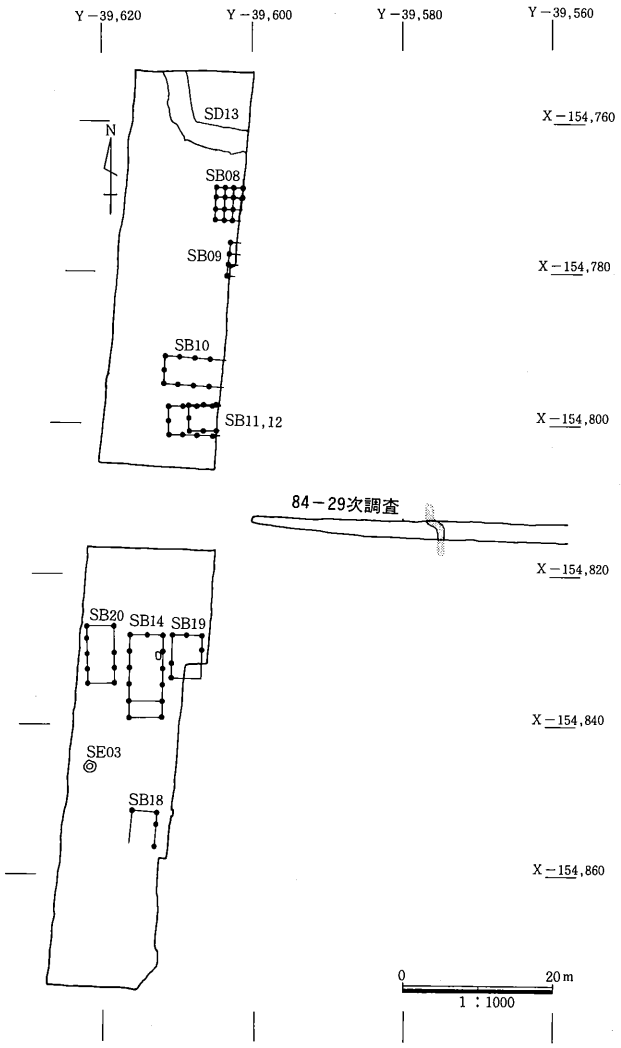


図74　西地区Ⅰ区南部・Ⅱ区北部遺構配置図（奈良時代以後）

に長軸方向を同じくする楕円形の土壙SK06があり、土師器小皿３点が出土した。遺物は建物と同時期であり、建物に関連する遺構と思われる。

また、北西隅柱から南に４間目の柱穴から土師器小型甕の上半部が出土した。ほかに土師器皿・黒色土器Ａ・Ｂ類椀・須恵器鉢などが出土した。建物の棟方位は座標南北方向である。

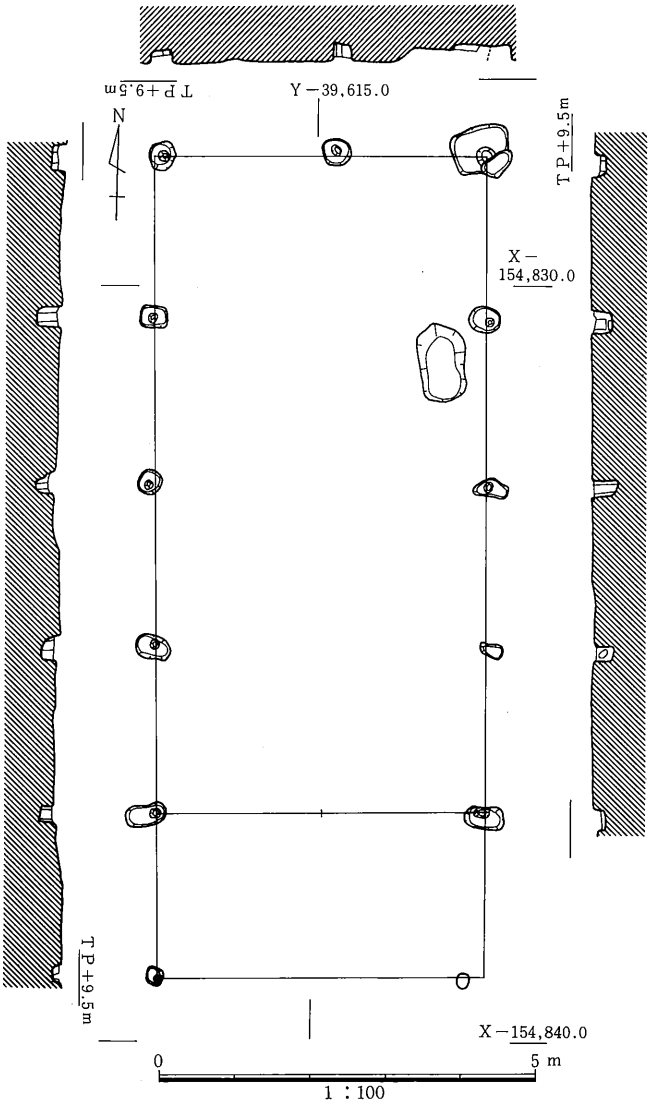


図75　SB14実測図

SB19（図76・102）

Ⅱ区北部のSB14から西側に1m離れ、北妻をSB14と揃えて位置する南北棟建物である。桁行推定３間（5.64m）、梁行２間（3.9m）で、柱間は桁行1.88m、梁行1.95m（６．５尺）である。掘形は直径0.2～0.3mの円形で、柱径は0.1m前後である。棟方位はN1°30′Eである。

掘形から土師器・須恵器の細片が少量出土しただけである。

SB20（図102）

Ⅱ区北部のSB14の東側に1.8m離れ、北妻を1.2m北に寄せた位置にある南北棟建物である。桁行４間（7.4～7.6m）、梁行推定２間（3.7m）で、桁行の柱間は推定で1.5～2.1mと不揃いである。棟方位はN1°20′Wで、掘形は直径0.2～0.3mの円形である。

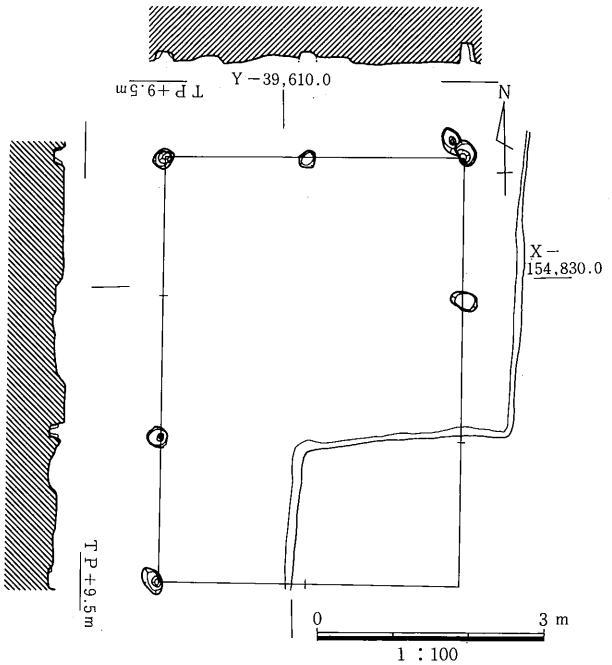


図76　SB19実測図

掘形からＢ類の黒色土器片と瓦の細片が出土した。

SB24（図104、図版20）

Ⅲ区西端部に位置する南北３間分の柱列である。南にさらに柱が並んでいる可能性があり、南北３間（4.7m）以上の南北棟建物の西側柱列と考えられる。柱間は1.58mとなる。掘形は直径0.3mの円形を呈し、深さは0.25mである。方位はN2°20′Wである。

柱穴から遺物は出土しなかったが、掘形埋土や柱列の方位から当該期の遺構として報告する。

SB25（図103）

Ⅲ区北東部に位置する、溝で区画された建物群の西端の建物である。東西２間分を確認して、梁行２間（4.3m）の南北棟建物の南妻柱列とした。柱間は2.15mとなる。掘形は直

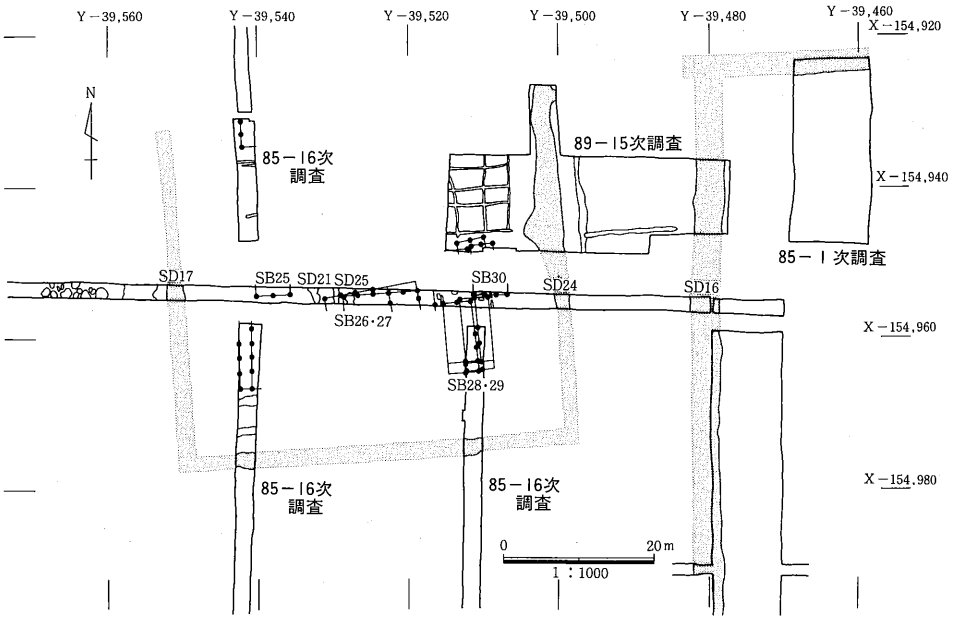


図77　西地区Ⅲ区北部遺構配置図（平安時代）

径0.3～0.4mの円形を呈する。棟方位はN1°20′Wに復元できる。この建物の南には85－16次調査で南北棟建物が確認されている。B類の黒色土器片が出土した。

SB26（図78・103）

Ⅲ区北東部の溝で区画された屋敷地の中央部に位置する。桁行推定６間（12.3m）、梁行１間以上（2.1m）の東西棟建物である。桁行柱間は1.9～2.2mとやや不揃いで、梁行は

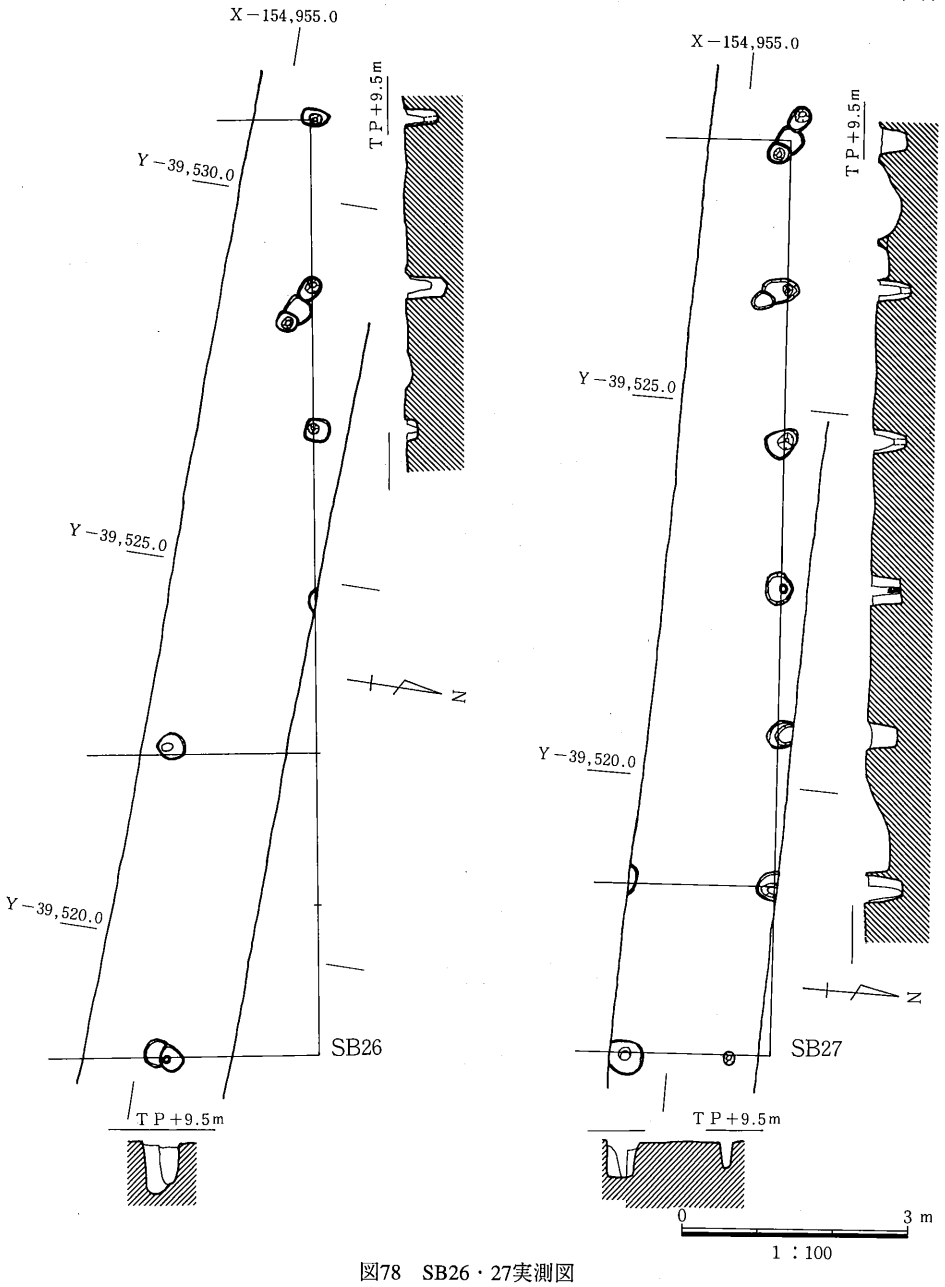


図78　SB26・27実測図
（左：SB26，右：SB27）

2.1m（７尺）と推定される。東妻柱から西に２間目に間仕切りの柱穴がある。掘形は直径0.3mの円形に近い形状で、深さは0.15～0.40mである。柱径は0.10～0.15mであり、炭化した柱根が遺存するものもある。棟方位はＥ9°Ｎとなる。

この建物の柱穴には、柱部分に焼土塊が多く含まれていた。また、北側柱列の西から２間目の柱穴から、鉛・銅・硅素などからなる物質の付着した、土師質の小椀形土器が焼土とともに出土した。ほかに黒色土器Ａ・Ｂ類片が出土している。

SB27（図78・103）

Ⅲ区北東部のSB26と重複する東西棟建物である。桁行は推定６間（12m）、梁行は１間（2.0m）以上で、柱間は桁行が1.98m（約６．５尺）の等間となる。東妻柱から西に１間目

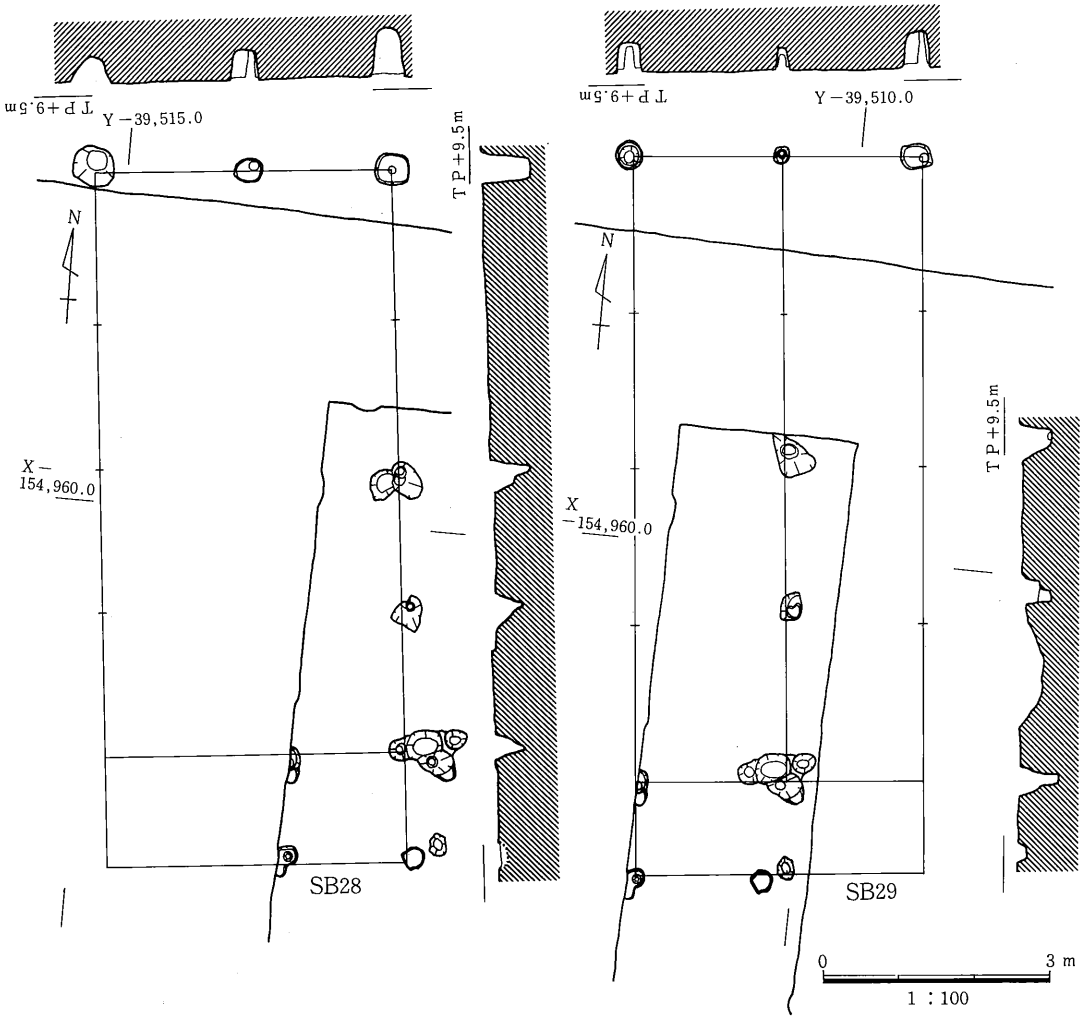


図79　SB28・29実測図
（左：SB28、右：SB29）

に間仕切りになると思われる柱穴がある。柱掘形は0.3～0.4mの円形で、深さは0.4mである。柱径は0.10～0.12mであり、北側柱列の西から３間目の柱穴には、柱根が遺存していた。棟方位はＥ4°Ｎである。土師器皿や黒色土器Ａ・Ｂ類椀などが出土した。

SB26とSB27は明確な柱穴の切合いがなく、先後関係は不明である。また、前者の柱穴に焼土が多く含まれるのに対して、後者の柱穴には含まれないという相異点がある。

SB28（図79・103）

Ⅲ区北東部の屋敷地の東端に位置する。1985年度調査（85－16次）で南部を検出しており、これと合わせて復元すると、桁行推定４間（7.8m）、梁行２間（3.9m）の南北棟建物と考えられる。柱間は桁行・梁行とも1.95m（６．５尺）となる。掘形は直径0.3～0.5mの円形で、深さは0.4～0.5mである。南側に庇が付くと推定でき、庇の出は1.2mとなる。棟方位はＮ6°Ｗである。今回調査した北東隅柱から完形の黒色土器小型椀や土師器・黒色土器Ａ・Ｂ類椀の破片が多く出土した。

SB29（図79・103）

Ⅲ区北東部のSB28と重複する南北棟建物である。SB28同様、南部は85－16次調査で検出した。桁行推定４間（8.3m）、梁行２間（3.9m）で、SB28同様、南側に庇が付くと推定され、庇の出は1.4mである。85－16次調査では、棟通りの南から２間分の柱穴を確認しており、総柱形式の建物であったと推定される。柱間は桁行が2.08m（７尺）、梁行が1.95m（６．５尺）となる。掘形は直径0.2～0.4mの円形で、深さは0.25～0.50mである。棟方位もSB28と同じくＮ6°Ｗを示す。北東隅柱から土師器皿・杯・羽釜など多くの土器片が出土し、他にＡ・Ｂ類の黒色土器が出土した。

SB28・29付近にはほかにも柱穴が多く存在し、さらに建物が重複していると思われる。また、東側に両建物と同じ方位を示す小溝SD22が東を画するようにある。

SB30（図80・103）

Ⅲ区北東部のSB28・29の北に位置する東西３間分（5.0m）の柱列で、東西棟建物の南側柱列とみられる。柱間は1.67m（５．５尺）となる。掘形は直径0.3～0.4mの円形または隅丸方形である。深さは0.3～0.4mで、柱径は0.10～0.12mであ

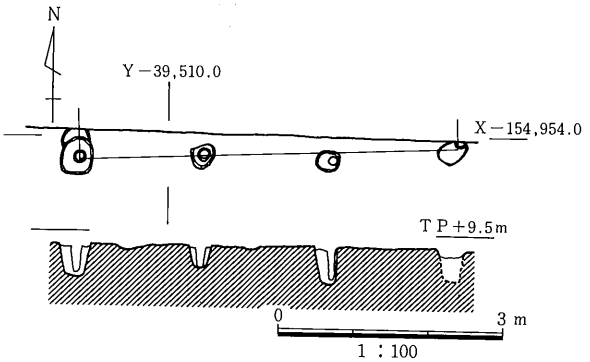


図80　SB30実測図

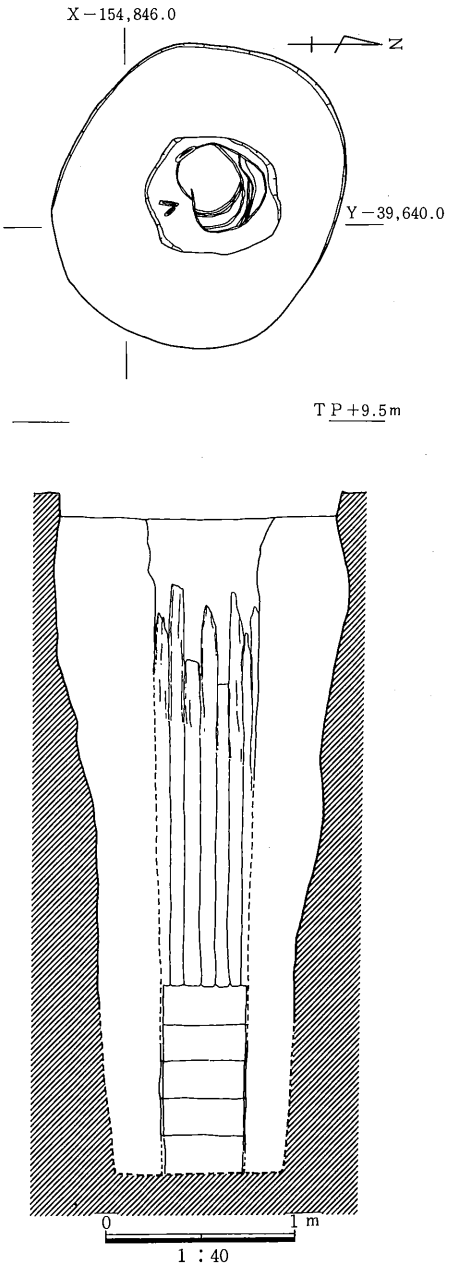


図81　SE03実測図（一部は推定復元）

る。建物方位はほぼ正方位である。柱穴にはSB26同様、焼土を含むものがあり、A・B類の黒色土器の破片が出土した。

ii）井戸

SE03（図81・102、図版21）

Ⅱ区北部の建物群の南に位置する。掘形は直径1.4～1.6mの楕円形で、幅7.4～11.5cm、長さ200cm以上、厚さ3～4cmの縦板24本を直径0.6mの円形に組合せて井戸枠を構築する。縦板の両側面には0.84～1.08mの間隔をおいて上下2個所にほぞ穴があり、一辺5～6cmの方形の小木片を縦板相互のほぞに挿入することによって組合せている。縦板の下端部は角を削っているものや、一辺4～6cmの方形のほぞ穴をもつものがある。下端部にほぞ穴をもつ材は6本あり、4本に1本の割合である。ほぞ穴に挿入される板材は検出されていないことから、このほぞは井戸枠の構築に係るものではなく、これらが建築部材の転用であることを示していると理解しておきたい。

この縦板組の井戸枠の下には少なくとも5個体の曲物が重ねられていたと考えられるが、曲物はかなり損壊しており、明確に元の状況を復元できない。また、井戸掘削中に井戸掘形が崩壊したことによって、上部の井戸枠と下部の曲物との関係も観察できなかった。井戸底面は検出面から3.5mの深さである。

iii）土壙

SK08（図82・102、図版22）

Ⅱ区北部に位置し、SB14の東側柱列の北から2間目やや内側で検出された楕円形の小土

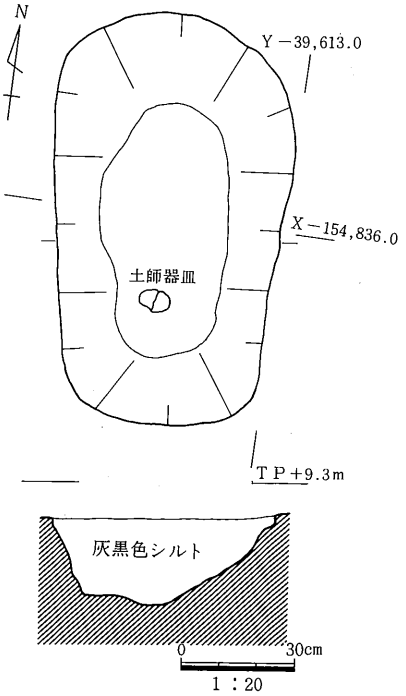


図82　SK08実測図

壙である。長径1.09m、短径0.61mで、深さは0.23mである。埋土は灰黒色シルトである。土師器小皿が完形に近い状態で３点出土した。長軸方向はSB14と揃っており、SB14の建築に際しての地鎮などの祭祀に係る遺構であろう。

SK13（図83・104、図版22）

Ⅱ区南部で検出された。直径0.5mの円形を呈し、深さは0.26mを測る。

黒色土器の細片のほか、土師器小皿の完形品が出土している。

SK14（図104）

Ⅱ区南部に位置する1.3m×0.5m、深さ0.06mの浅い土壙である。土師器甕の上半部が出土した。

SK15～30（図103、図版23）

これらはⅢ区北部に集中して検出された土壙群である。各土壙の規模は表4に掲載した。平面形は楕円形・円形・隅丸方形と一様ではないが、埋土は例外なく黄色粘土のブロックを含む灰

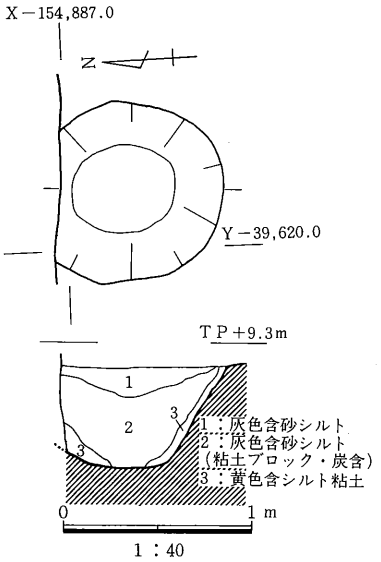


図83　SK13実測図

表4　Ⅲ区北部土壙群一覧表

遺構番号	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物
SK15	浅い溝状？	6.00		0.06	401・402
SK16	楕円形	0.65	0.67	0.37	403
SK17	楕円形	1.30	0.95	0.36	397～399
SK18	隅丸方形	1.00	1.00	0.41	
SK19	楕円形	0.65	0.32	0.18	
SK20	楕円形	0.65	0.25	0.22	400
SK21	楕円形	1.15	1.05	0.57	404
SK22	円形	0.98	0.73	0.43	
SK23	楕円形	0.76	0.60	0.50	
SK24	円形	0.74	0.70	0.37	
SK25	不整楕円形	1.10	1.25	0.35	
SK26	長方形	0.58	0.45	0.33	
SK27	円形	0.70	0.65	0.13	
SK28	円形	1.65	1.60	0.57	405
SK29	楕円形？	0.40	0.53	0.16	
SK30	大型不明		4.25	0.24	

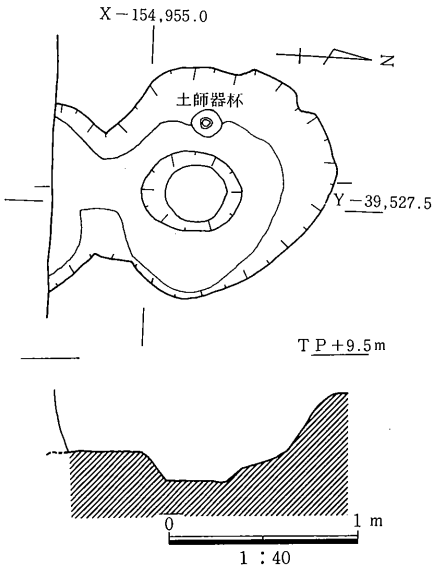


図84　SK31実測図

色シルトである。土壙の底面は平坦なものが多く、壁面を横方向に掘削しているものもある。

各土壙から出土した遺物は少ないが、土師器椀や黒色土器片のほか、SK15・28では瓦器椀の完形品１個体が土壙底面で出土している。

SK31（図84・103）

Ⅲ区北部のSB26・27西部の北側柱列付近に位置する。直径1.20m、深さ0.45mの円形土壙で、同様の土壙と切合っているが、先後関係は不明である。埋土は長原13層の小ブロックを大量に含む暗灰色シルトで、黒色土器・土師器を多く出土した。土師器杯・小皿は完形である。

SK32（図103）

Ⅲ区北東部のSB26・27の東を画するように位置する溝状の土壙である。長さ1.40m、幅0.25mで、深さは0.35mである。土師器・黒色土器が出土した。

SK33（図103）

Ⅲ区北東部で古墳時代と考えられるSK34を切って検出された。0.5m×0.8m以上の方形を呈すると思われ、深さは0.18mである。黒色土器片を出土した。

SK36（図103）

Ⅲ区北東部、SB30の南側柱列の西から１間目の柱穴のやや北寄りで検出された。東西0.97mで、深さは0.28mである。埋土は焼土を含む暗灰色シルトである。黒色土器Ａ・Ｂ類椀片が出土した。

SK38（図103）

Ⅲ区北東部に位置し、SK32に切られた状態で検出された。0.75m×0.40mの方形で、深さは0.04mである。土師器・黒色土器椀などが出土した。

ⅳ）溝

SD01（図99、図版24）

Ⅰ区北端部に位置する東西溝である。幅約2m、深さ0.35mで、長原・瓜破地域において現代まで遺存していた条里遺構の陌線にほぼ一致する。この位置には現代の農業用水路がわずかに位置を違えて存在し、この溝を壊していた。埋土は均質な灰色シルトで、土師器・

須恵器・黒色土器が出土したが、瓦器はみられない。瓦器を出土する溝は、やはりやや位置を違えており、平安時代後期から現代まで少しずつ位置をかえて存続してきたことを示している。

丹北郡条里における７条６里６坪と８条６里１坪の北を画する溝ということになる。

SD03（図85・99、図版24）

Ⅰ区東部で検出された、やや屈曲する南北方向の溝である。幅1.4m、深さ0.33mで、暗灰色粘土質シルトを埋土とする。土師器・須恵器・黒色土器を含むが、下部では黒色土器は出土せず、奈良時代ころまでさかのぼる可能性がある。

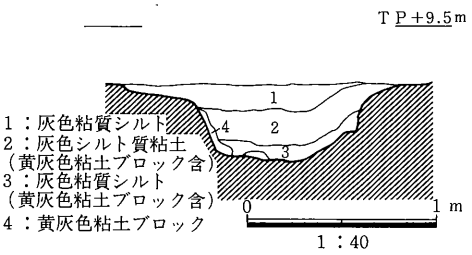


図85　SD03断面実測図

この溝は82－28次SD05［大阪市文化財協会1990B p.181］と同じ溝で、85－21次調査でも検出されている。85－21次調査地から82－28次調査地点までは南東から北西方向で、ここから北東寄りに向きを変えて、ほぼ南北方向になるようである。SD01に切られて、さらに北にのびている。この溝の南方の84－29次調査でも一連と思われる溝が検出されている。

この南北溝はⅠ区から85－21次調査地にかけて分布する建物群の東を画する溝で、これより東側の長吉２号線までの間では建築遺構は検出されていない。また、この溝は条里遺構における阡線に近い位置にあり、７条と８条の境界線となる可能性がある。

SD04～08（図100）

Ⅰ区北部で検出された幅0.3～0.4m、深さ0.05m前後の小溝群である。北端坪境溝SD01の南側では、これに平行して東西方向であるが、そこから南に屈曲して南北方向となる部分がある。いずれも灰色シルトを埋土とし、黒色土器が出土した。

SD16（図86・103、図版25）

Ⅲ区北東部で検出された幅3.8m、深さ1.3mの断面Ｖ字形をなす南北溝である。この位置は現存条里の阡線の位置にあり、北側の85－1次調査の成果によれば、この溝はさらに北に30m続き、陌線の位置で東に直角に屈曲すると推定される。また、南には今年度の調査では延長60mまでを確認したが、85－16次調査では、次の陌線を越えて、この地点から130m以上南に続くことが判明している。したがって、東に屈曲する北端部から南に160m以上続くことになる。長原遺跡における当該期の溝の規模としては、遺跡東南地区の西部で検出

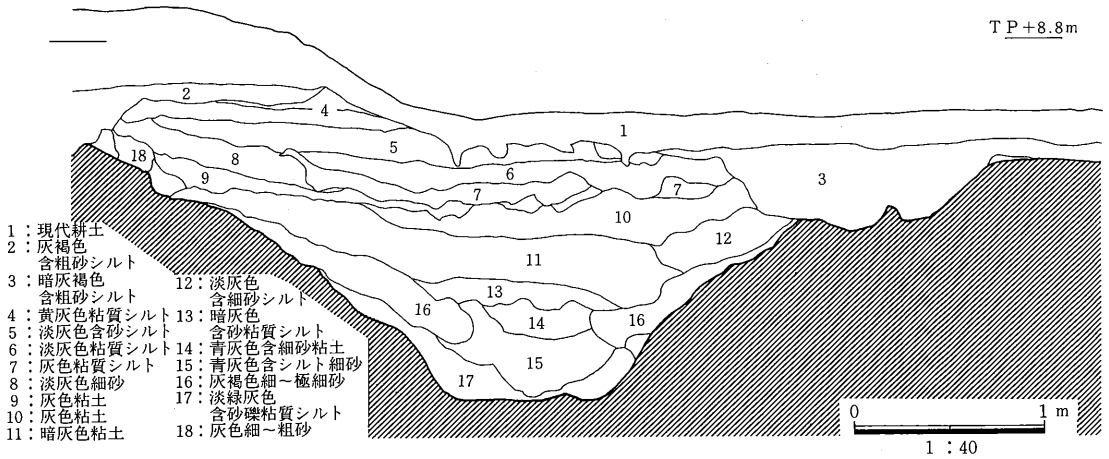


図86　SD16断面実測図

された環濠と推測される溝SD210［大阪文化財センター1978 pp.233-236］に匹敵するものであり、同様の性格を想定できる。出土遺物は多くないが、黒色土器・瓦器が出土しており、C－Ⅰ～C－Ⅱ－2期と思われる。

SD17（図103、図版25）

Ⅲ区北部の平安時代建物群の西側を画する南北溝である。幅2.2m、深さ0.3mである。炭を多く含む暗灰色シルトを埋土とする。この溝は図77で示したように、この南で直角に東に屈曲し、85－16次調査で検出された東西溝および後述する東側の南北溝SD24と一連の区画溝と推定される。遺物は出土しなかった。

SD24（図103、図版25）

Ⅲ区北東部で、建物群の東を画する南北溝である。幅2.1m、深さ0.2mで、SD17とほぼ同じ規模である。西を区画するSD17との心々間の距離は約51m（およそ半町）となる。

土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器などが出土した。

SD25（図103）

Ⅲ区北部の建物群内に位置する。SB26の西妻から西に0.5m離れて平行して存在する。幅約1mで、深さは0.05mの浅い溝である。黒色シルトを埋土とする。土師器・須恵器のほかに焼土塊が出土した。

SD21（図103）

Ⅲ区北部の建物群内にあり、東西棟建物SB27の西妻から西に0.5m離れて平行して存在する。幅0.7m、深さ0.04mの浅い溝である。黒色シルトを埋土とし、土師器・須恵器・黒色

土器が出土した。

SD22（図103）

Ⅲ区北部の建物群の東部にあり、南北棟SB28・29の東側柱列から東にそれぞれ2.6m、0.3m離れて平行する幅0.3mの小溝である。深さは0.08mである。出土遺物には土師器・黒色土器の細片のほかに焼土塊がある。

ｖ）土器埋納遺構

ここでいう土器埋納遺構は、完形あるいは本来完形であったと推測できる土器をピット内に埋納した遺構で、長原遺跡においては古墳時代から平安時代までの類例があるが、性格については明らかでない。

これらと類似した遺構が平城京内でも検出されており、内容物から胞衣埋納あるいは地鎮め遺構として理解されているものがある［奈良国立文化財研究所1989］。しかし、長原遺跡においては、出土遺物の内容差や時期幅が大きいなど、その性格について一律に理解しうるものではない。ここではそれらを一括して土器埋納遺構として報告する。

SP01（図87・104、図版26）

Ⅱ区南部のピット群の中にある。長径0.30m、短径0.25mの楕円形を呈する。東端に偏った位置で黒色土器椀・土師器椀がそれぞれ完形で出土した。

SP02（図87・104、図版26）

Ⅱ区南部のピット群の中にある。直径0.35mの円形で、内部に完形の土師器甕が正位に置かれていた。甕内に火葬骨を納めた可能性があるが、内容物は遺存していなかったため、断定はできない。

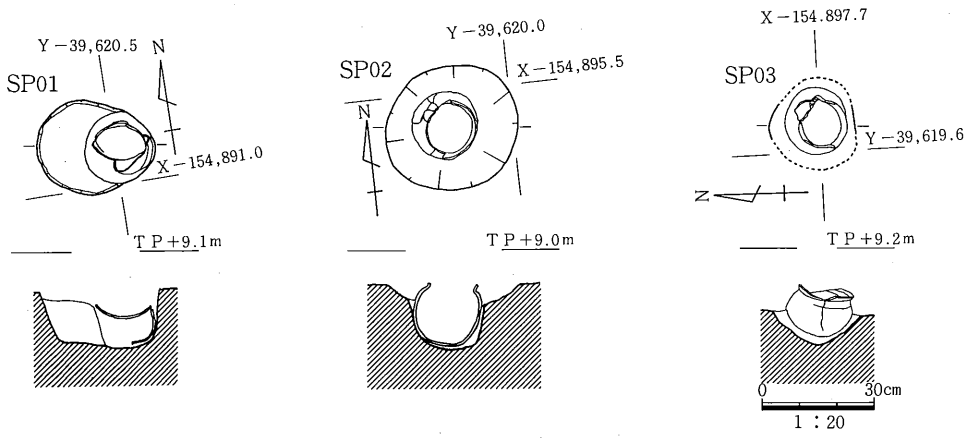


図87　SP01～03実測図
（左：SP01、中：SP02、右：SP03）

SP03（図87・104）

Ⅱ区南部のピット群の中にある。直径0.25mの円形である。SP02同様、完形の土師器甕が正位に置かれていた。内容物は遺存していなかった。

SP04（図104、図版26）

Ⅱ区南部に位置する円形を呈するピットである。土師器小皿２点が、完形に近い状態で重なって出土した。

以上の４基の遺構はⅡ区南部のピット群の中にある。このピット群の中には柱根が遺存し、柱穴と考えるべきものがあるため、復元しえなかった建物が重複して存在していると考えられる。

７）平安時代の遺物

記述にあたって、土師器皿・甕などの分類・編年は［鈴木秀典1982A・1983A］にしたがう（表5）。

ｉ）Ⅰ・Ⅱ区柱穴出土の遺物（図88、図版55）

SB01

土師器皿314と土師器羽釜318が柱穴から出土した。314は胎土が粗く、口縁端部の形状も不明確である。318の羽釜は短い口縁部の頸部付近に鍔が付くもので、胎土は生駒西麓産である。９世紀代のものと思われる。333は上記２点の土器と共伴した平瓦である。凸面に縄タタキメ、凹面に布目痕が残る。

表5　平安時代の時期区分（Ｂ期）

9世紀	B期	Ⅰ	
10世紀		Ⅱ	1
			2
11世紀	C期	Ⅰ	

SB02

土師器羽釜319・322と鉢320、杯316、黒色土器Ａ類椀317がある。土師器杯316はやや浅く、口縁部内外面をヨコナデし、それ以外の外面はユビナデで仕上げる。黒色土器Ａ類椀317は底部に断面三角形の高台を貼付け、高台径は大きい。土師器鉢320は球形に近いと推定される体部で、口縁部が内湾ぎみになる。外面はユビオサエないしはナデで、粘土接合痕が残る。内面は板状工具によるナデ調整で平滑に仕上げられている。羽釜319は口縁部がわずかに外反し、体部が長胴形をなすもので、頸部付近に鍔の剥離痕が残る。胎土は粗く、砂粒を多く含んで淡灰褐色を呈するが、生駒西麓産の胎土ではない。322は体部から口縁部が「く」字状に外反する形態で、鍔は頸部からやや下がった位置に付く。

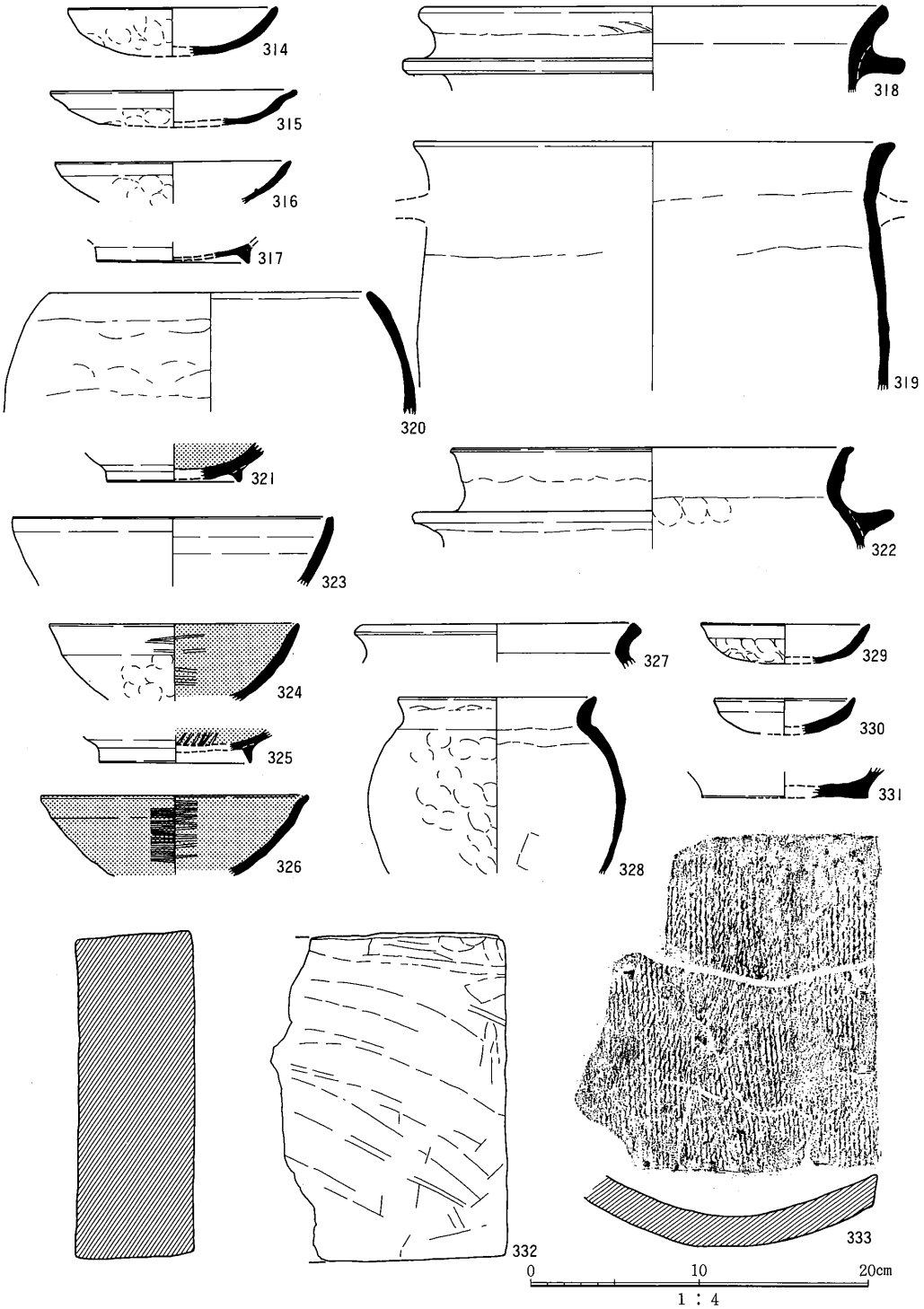


図88　Ⅰ・Ⅱ区柱穴出土遺物（平安時代）
SB01（314・318・333）、SB02（316・317・319・320・322）、SB04（315）、SB10（321・323）、SB14（324～332）

杯・黒色土器椀はB−Ⅱ−1期、鉢・羽釜322はB−Ⅱ−2期の古相に類例がある。

SB04

土師器皿315は精良な胎土の皿ないし杯で、平安京におけるⅡ期新［京都市埋蔵文化財研究所1990］の皿に類似する。

SB10

黒色土器A類椀321、土師器鉢323が出土した。321は底径が小さくB−Ⅱ−2期であろう。

SB14

土師器小皿329・330、黒色土器A・B類椀324・326、土師器甕327・328、須恵器鉢331があり、おおむねB−Ⅱ−2期に属する遺物である。

土師質の塼332は厚さが7cm、幅は19cmである（註10）。須恵器鉢331は底部片であるが、精良な胎土で、糸切り状の痕跡が底部に残る。丹波篠窯系の製品であろう。

ⅱ）Ⅲ区柱穴出土の遺物（図89、図版56）

以下に報告する柱穴出土の土器はB−Ⅱ−2期に属するものであり、この時期から大きく隔たると断定できる遺物はない。

SB25

土師器は小皿G334、小皿B344、中皿E、黒色土器A・B類椀358・367・368、灰釉椀371がある。

SB26

土師器小皿G335、小皿B336、土師器小椀357、黒色土器A類椀底部369が出土した。

357は土師質の小椀で、外面ユビオサエ、内面はナデ仕上げと思われる。内面には溶解して黒緑色・暗赤色・乳白色に発色した物質が薄く付着していた（図中の網目部分）。付着物質のうち赤色・黒緑色の物質の蛍光X線分析（非破壊）を行ったところ、多量の鉛・銅・硅素が含まれていた（註11）。分析結果からみてガラス製品の製作に用いられた可能性があるが、さらに詳細な分析を行った上で再検討したい。

SB27

出土遺物に土師器小皿G339、土師器杯A348、土師器甕354、黒色土器A・B類椀365・370がある。甕354は短い口縁部で体部外面をユビオサエで仕上げるものである。

SB28

土師器小皿G337・338・340、小皿B343・345、土師器甕355、黒色土器A・B類椀

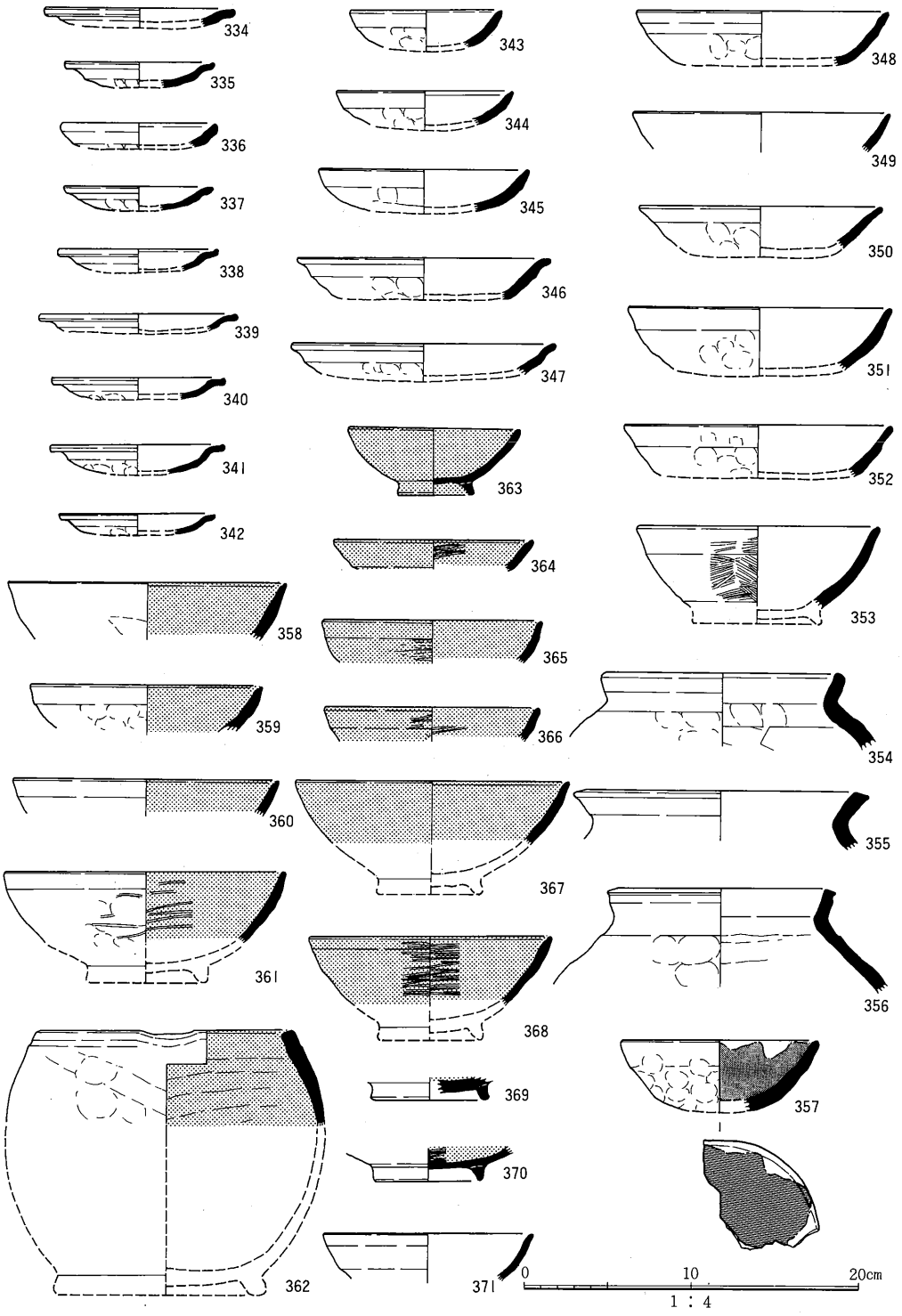


図89　Ⅲ区柱穴出土遺物（平安時代）
SB25（334・344・346・358・367・368・371）、SB26（335・336・357・369）、SB27（339・348・354・365・370）、SB28（337・338・340・343・345・355・359～364）、SB29（341・349・366）、SB30（342・347・350～353・356）

359～361・363・364、黒色土器Ａ類鉢362が出土した。

黒色土器Ａ類椀は体部外面をナデ調整するが、361にはヘラミガキが認められる。内面の調整は不明のものが多いが、観察可能なものについては密なヘラミガキが施されている。高台径は7cm前後である。362はＡ類の鉢で小さな片口をつくる。下半部の形態は不明だが、他の類例から高台が付くものと思われる。黒色土器Ｂ類椀は内外面にヘラミガキを密に施すもので、363・364は小型である。

SB29

土師器小皿Ｇ341、土師器杯349、黒色土器Ｂ類椀が出土した。

SB30

土師器小皿Ｇ342、中皿Ｇ347、土師器杯Ａ350～352、土師器椀353、土師器甕356が出土した。353の土師器椀は外面にヘラミガキが施されており、黒色土器椀と同形態のものである。

iii）SE03出土の遺物（図90・91、図版56・57・58）

土師器小皿Ｂ376～378、小皿Ｇ372～375、土師器椀387、黒色土器Ａ・Ｂ類椀379～386・389～393、灰釉椀388があり、おおむねＢ－Ⅱ－2期に属するものである。土師器小皿Ｇには、精良な胎土のものと細かい砂粒を多く含む胎土のものがある。黒色土器Ａ類椀

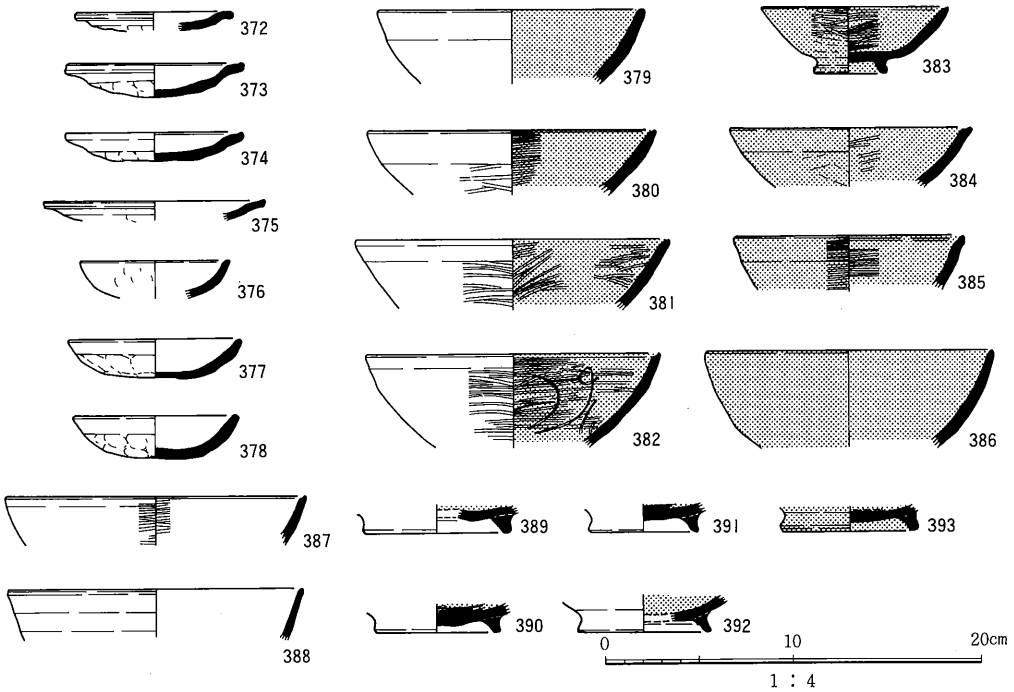


図90　SE03出土遺物

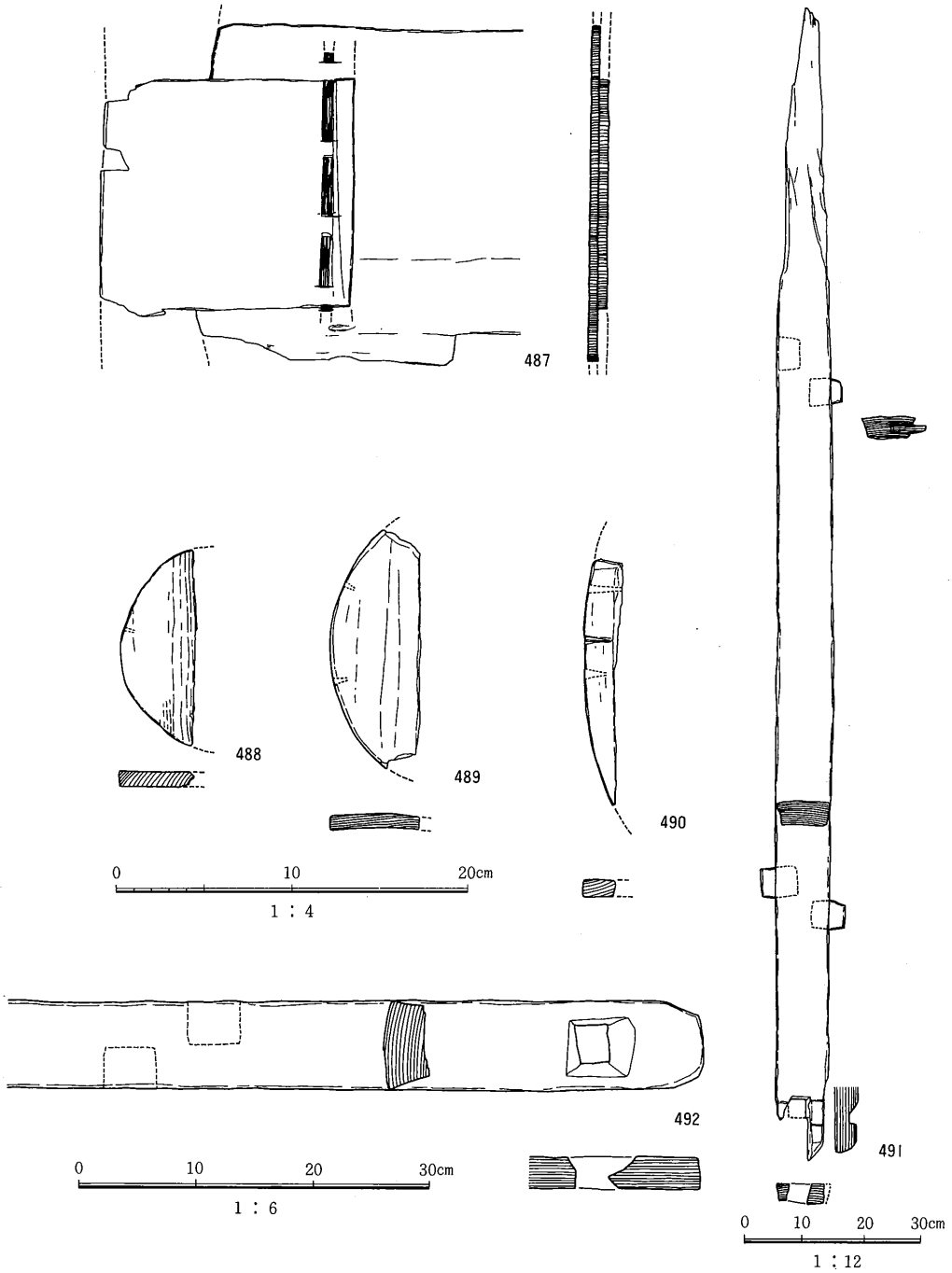


図91　SE03出土木製品

表6　SE03井戸枠材計測表　（単位cm）

	残存長	幅	厚さ	側面Aほぞ間	側面Bほぞ間	下端部形状	備　考
1	195.0	9.3	4.0	89.0	89.2	ほぞ・角を取る・抉り	図91-491
2	162.2	7.4	3.7	(102)	(98)	ほぞ・角を取る	図91-492
3	180.5	8.5	3.0	92.0	92.0	ほぞ・角を取る(片側)	
4	200.0	9.5	3.7	97.0	97.5		
5	201.7	9.2	3.0	105.0	103.0		
6	200.0	8.5	3.0	98.0	100.0	ほぞ・角を取る	
7	192.8	8.0	3.6	99.0	98.0		
8	151.5	11.3	3.0	101.0	89.0		
9	193.0	9.3	3.0	103.0	96.0	ほぞ	
10	181.7	10.0	3.6	96.0	96.0		
11	194.5	10.4	3.5	103.0	106.0		
12	199.1	9.0	3.5	102.0	104.0		
13	95.0	9.0	3.0	(42)	(54)		
14	207.0	9.0	3.5	102.0	106.0		
15	147.0	9.5	3.5	(95)	100.0		
16	204.5	10.0	3.0	96.0	97		
17	197.2	10.0	3.5	104.0	108.0		
18	207.0	9.5	3.6	105.0	100.0		
19	185.0	9.3	3.0	96.0	96.0		
20	182.0	8.0	3.0	90.0	91.0		
21	139.0	10.5	4.0	84.0	90.0	ほぞ・角を取る	
22	156.0	8.5	3.5	96.0	(90)		
23	191.2	9.0	3.4	90.0	90.0		
24	160.0	11.5	3.5	(90)	(90)		

のうち382は内外面に密なヘラミガキを施す。黒色土器Ｂ類椀には383の小型品がある。いずれも内外面は密なヘラミガキである。388は灰釉椀の口縁部で、淡灰白色を呈する灰釉がおもに内面に薄く施されている。

出土した木製品には井戸底に積み重ねられていた曲物および曲物底板がある。曲物は５個体あったと思われるが、側板の遺存状況が悪く、487の１点のみを図示しえた。曲物側板487は上・下端は遺存せず、底板との結合部は観察できない。樺皮を用いて１個所で綴合せている。内面には縦・斜方向のケビキが認められる。底板には489～491の３点がある。489は復元径11.5cm、厚さ0.8cmと小型で、遺存する側面の１個所に木釘が残っていた。490は復元径18cm、厚さ0.8cmで、遺存する側面の２個所に木釘留めの痕跡がある。491は復元径42cm、厚さ1cmで、遺存する側面の３個所に木釘留め痕がある。

ⅳ）土壙出土の遺物（図92、図版59）

410～412の土師器小皿Ｂ・ＧはⅡ区のSK08から出土したものである。

Ⅱ区南部のSK13・14からは土師器皿Ｇ395・甕Ｂ396などが出土した。いずれもＢ－Ⅱ－２期の古相に位置付けられるが、395は精良な乳白色の胎土で、平安京におけるⅡ期新に類例がある。

Ⅲ区北部の屋敷地の西側で検出された土壙群（SK15～30）から出土した遺物には、須恵器壺蓋400のほかに土師器椀404、瓦器椀402・403・405、瓦器皿401がある。このうち瓦器椀は完形に近いもので、Ｃ－Ⅰ期に属する。いずれも深い形態で、402・405は断面三角形のしっかりした高台をもつ。内外面のヘラミガキは器面が磨滅して明瞭ではない。402は内面調整がヘラミガキで、外面はヘラケズリをしている。また、405の外面にもかすか

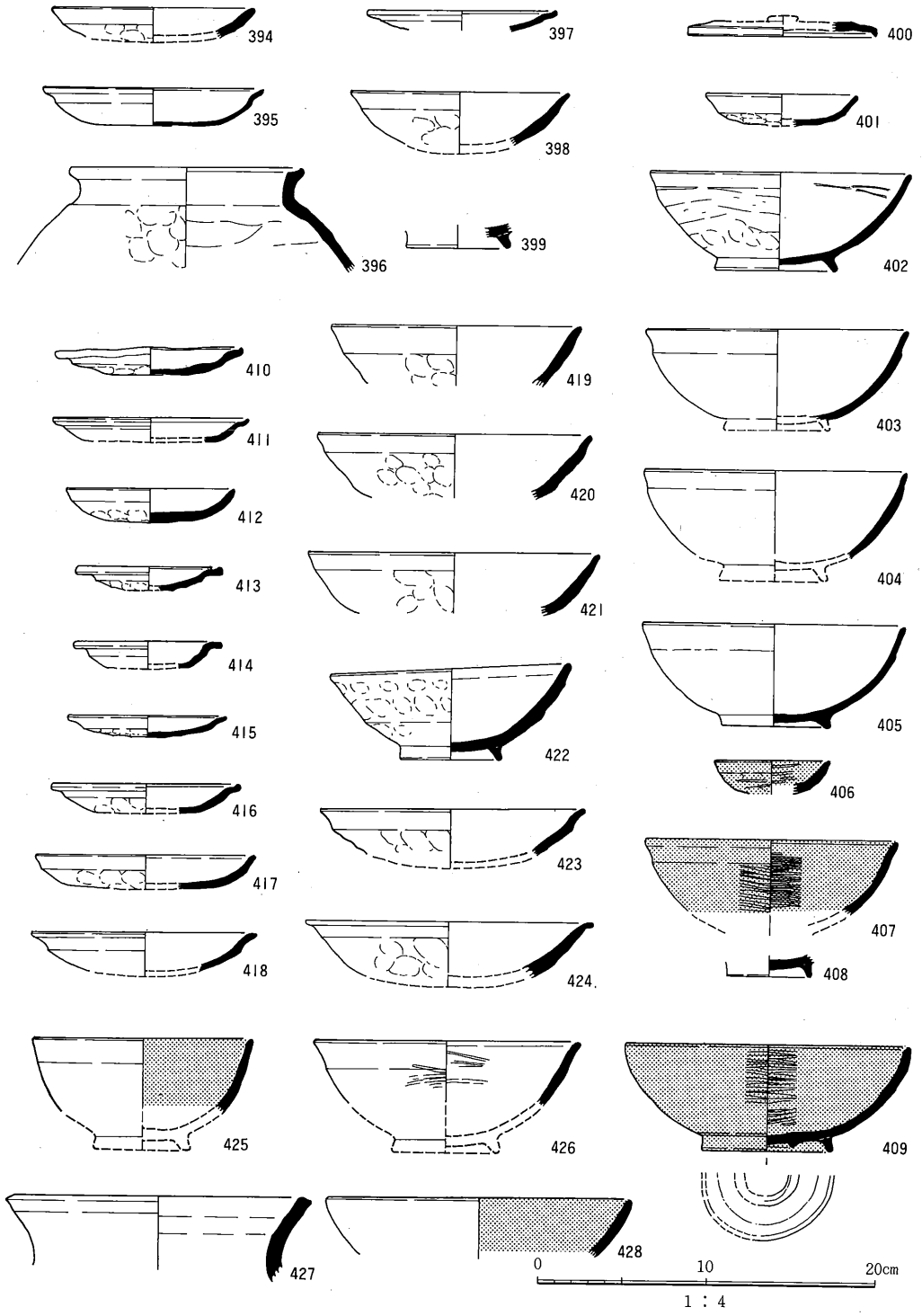


図92　土壙出土遺物（平安時代）
SK08（410～412）、SK13（394・395）、SK14（396）、SK15（401・402）、SK16（403）、SK17（397～399）、SK20（400）、SK21（404）、SK28（405）、SK31（414～423・425・427）、SK32（406・413・428）、SK36（424）、SK38（407～409・426）

にヘラケズリ痕が確認できる。404は上記の瓦器椀と同形態の深い椀形を呈する土師器椀である。

Ⅲ区北部の溝で区画された屋敷地内の土壙から出土した遺物には土師器皿Ｂ417、Ｆ418、Ｇ414～416、土師器杯Ａ419～421、土師器高台付杯422、土師器椀426、黒色土器Ａ・Ｂ類椀425・406～409・428、須恵器壺427がある。422の土師器杯は高台をもつもので、体部外面はユビオサエ、内面はヨコナデ仕上げである。426は内外面にヘラミガキを施す土師器椀で、黒色土器椀と同形態をなす。黒色土器椀は内外面に密なヘラミガキを施す。406はＢ類の小型椀と思われ、内外面にヘラミガキを施す。409は底部外面の高台内側に粘土紐を円形に貼付け、高台を二重に巡らせた形状をなすＢ類椀である。427は須恵器壺の口縁部で、外反して端部は面をつくる。

ｖ）溝出土の遺物（図93、図版60）

Ⅰ区北端部の東西溝SD01は坪境溝である。ここからは土師器小皿Ｇ429、黒色土器Ａ類椀431、土師器甕440、須恵器壺442、須恵器鉢443・444が出土した。黒色土器Ａ類椀431は外面ユビオサエ、内面ヘラミガキである。土師器甕440は端部に面をつくる短い口縁部をもつ。須恵器壺442は体部外面が平行タタキで、内面には同心円当て具痕が残る。443・444は同一個体で篠窯系の須恵器鉢である。口縁端部は肥厚し、丸くおわる。砂粒の少ない精良な胎土である。

Ⅰ区北端部の南北溝SD03の出土遺物には土師器小皿430、黒色土器Ａ・Ｂ類椀435・436、土師器甕がある。この溝からは土師器細片が多く出土し、黒色土器片の出土は少なかった。土師器甕438・441は小型の甕で、口縁部の形態は奈良時代末から平安時代初頭ころの形態を示す。

Ⅰ区北端部の建物群と重複する小溝から、黒色土器Ａ類椀432～434および黒色土器Ａ類鉢の底部437が出土している。

Ⅲ区建物群の屋敷地を区画する東側南北溝SD24からは土師器小皿450、灰釉椀451、土師器羽釜460・461が出土した。灰釉椀は底部の破片で、断面三角形の高台が付き、内面に淡緑色の灰釉が施されている。土師器羽釜の口縁部460と鍔部461は接合できないが、胎土から同一個体と思われる。口縁部は「く」字形に短く外反する。土師器甕に共通した形態を示す。鍔から口縁部までは内湾ぎみになる。胎土は砂粒を多く含むが、生駒西麓産ではなく、甕と同様の胎土である。出土遺物は少ないものの、これらはＢ－Ⅱ－２期でも新相の土器である。

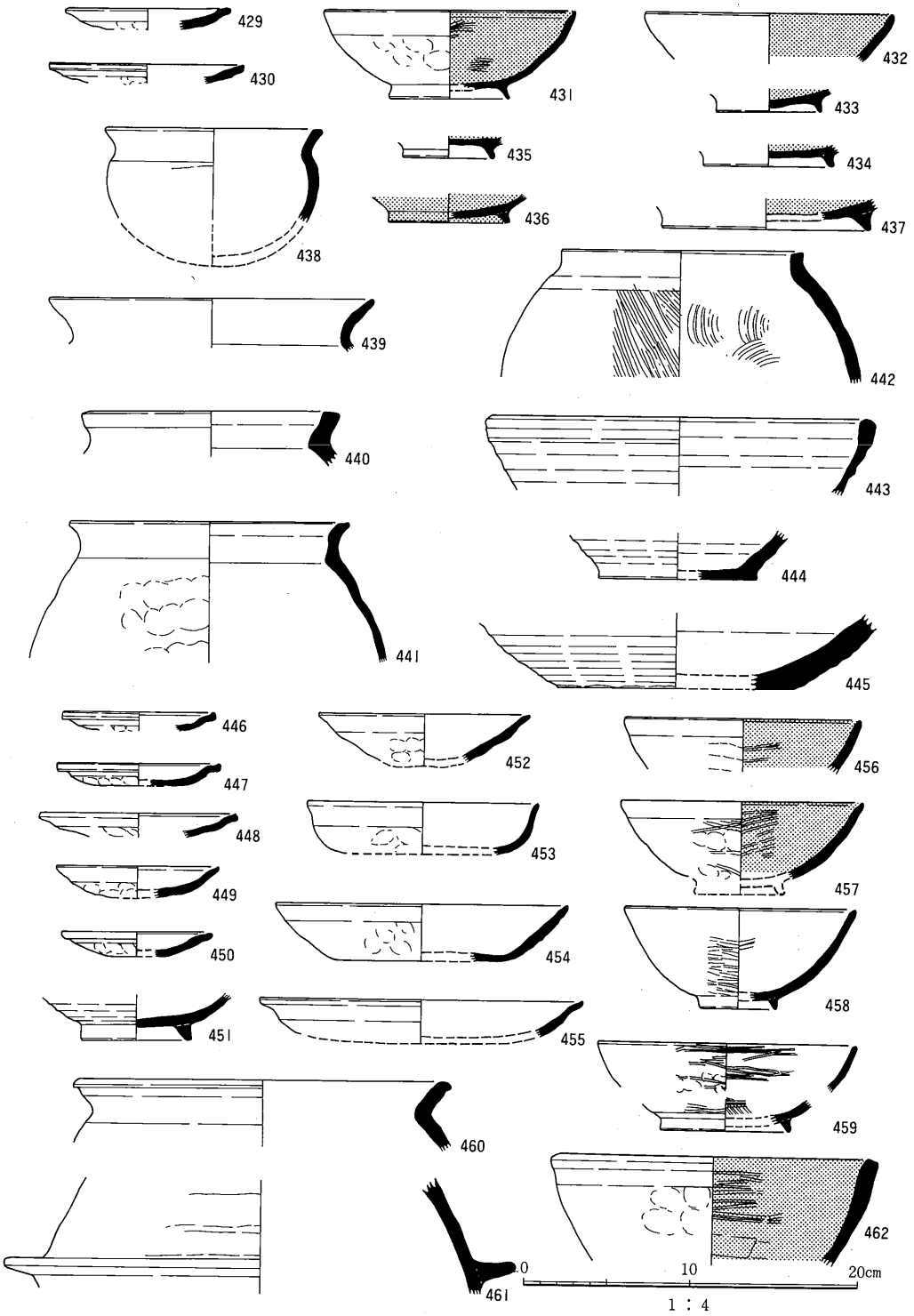


図93　溝出土遺物（平安時代）
SD01（429・431・440・442～445）、SD03（430・435・436・438・439・441）、SD04（433・434・437）、SD08（432）、SD16（453・459）、SD21（452・456）、SD24（450・451・460・461）、SD25（446～449・454・455・457・458・462）

また、Ⅲ区建物群に伴う他の溝からは土師器小皿446～449、大皿454・455、土師器杯452・453、土師器椀458、黒色土器Ａ類椀456・457、黒色土器Ａ類鉢462が出土した。458の土師器椀は内外面をヘラミガキで仕上げ、黒色土器Ｂ類と同様の形態・調整を示している。瓦器片はみられず、Ｂ－Ⅱ－２期でも新相に位置付けられる。

Ⅲ区東部の坪境の南北溝SD16から出土した459は瓦器椀の口縁部と底部の破片で、内外面には密なヘラミガキを施し、内底面も密なヘラミガキを施す。高台は断面三角形のしっかりしたもので、Ｃ－Ⅰ～Ｃ－Ⅱ－１期に属する。

ⅵ）土器埋納遺構・ピット出土の遺物（図94、図版61）

463はほぼ完形の黒色土器Ａ類椀、464は完形の土師器椀で、Ⅱ区南部のSP01から出土した。463は外面にヘラケズリが認められ、464は外面ユビオサエである。467・468は完形の土師器甕で、Ⅱ区南部のSP02・03から出土した。両者とも外面はユビオサエで、内面はナデ仕上げである。477～480はⅡ区南部のSP04出土の土師器小皿・杯である。Ⅱ区

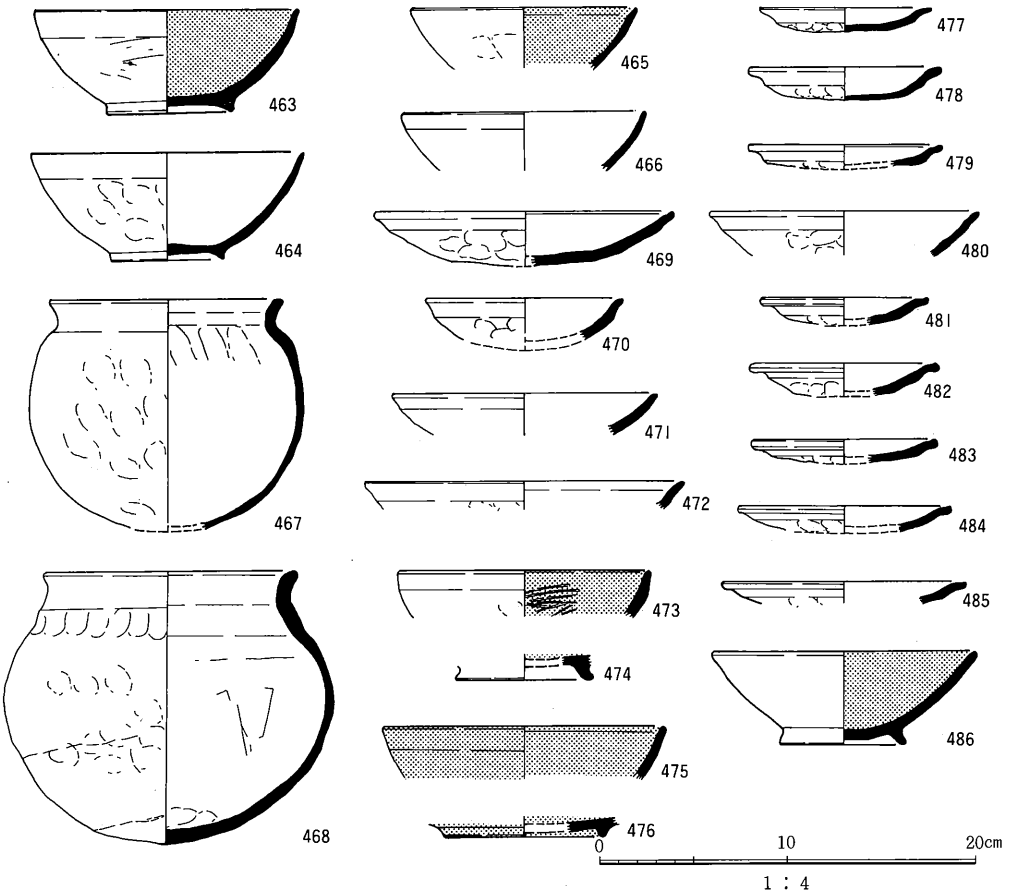


図94　土器埋納遺構・ピット出土遺物（平安時代）
SP01（463・464）、SP02（467）、SP03（468）、SP04（477～480）、Ⅱ区南部ピット（465・466・469）、Ⅲ区北部ピット（470～476・481～486）

南部のピット群出土の遺物465・466・469はB−Ⅱ−2期に属するもので、SP01〜04もその時期におさまるであろう。

Ⅲ区建物群内のピットからは土師器小皿B470、小皿G481〜485、中皿E471・472、黒色土器A・B類椀473〜476・486などが出土している。486は黒色土器A類椀であるが、体部は直線的で浅く、杯の形態に近い。

8）鎌倉時代以後の遺構と遺物

i）土壙

溝状土壙群（図102）

Ⅱ区北部に南北方向の溝状の土壙が平行して存在するが、里境を越えたⅠ区南部では検出されなかった。幅1.5m、深さ0.15m程度で、途中で切れる部分もあるが、基本的には連続している。埋土は灰褐色の砂質シルトで、古墳時代から江戸時代の遺物が出土した。耕作に係る遺構であると思われるが、具体的な用途は不明である。

ii）溝

SD12（図100、図版2）

Ⅰ区中央部に位置し、SB05・06を切って、東西から南北に屈曲する遺構である。この遺構は幅4mにわたる範囲に、幅0.5m前後の平行する数条の浅い溝によって形成されている。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦が出土した。

SD13（図101、図版3）

Ⅰ区中央部のSD12の南に位置する。幅3mの浅い溝状遺構である。この遺構も平行する数条の小溝が集合して形成されたものである。SD12と同じように屈曲しており、両者は一連の遺構と考えられる。出土遺物の内容も同様である。

SD27（図105）

Ⅲ区南部で検出された東西溝である。瓦質土器・瓦器・瓦・陶器が出土した。この位置は現存する条里遺構の陌線に相当し、現代まで機能していた溝である。出土遺物の内容からみて、14・15世紀ころまでさかのぼる可能性がある。

iii）水田畦畔（図95、図版27）

Ⅱ区南部とⅢ区西部の「馬池谷」内で検出された。Ⅱ区南部では南北方向の畦畔1本、Ⅲ区西部では約10mの間隔をおいて2本の南北畦畔が検出された。作土からは黒色土器片が出土し、上面を被覆する砂礫層からは13世紀代と思われる瓦器椀が出土しているため、

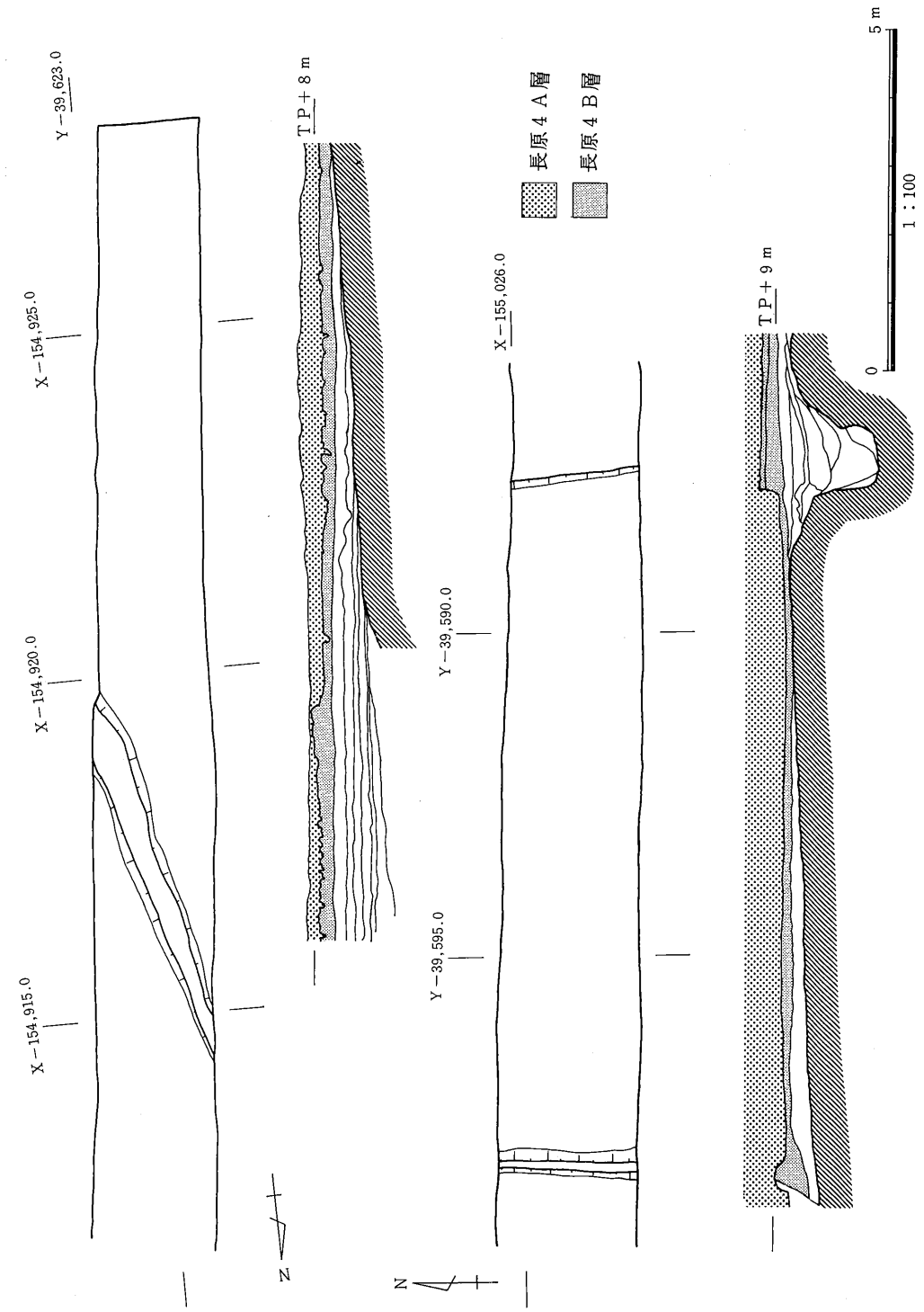

Y－39,623.0
X－154,925.0
X－154,920.0
X－154,915.0
TP＋8 m
長原４Ａ層
長原４Ｂ層
X－155,026.0
Y－39,590.0
Y－39,595.0
TP＋9 m
5 m
1：100
0
N
N

図95　水田遺構実測図

出土遺物は少ないが、１３世紀末ころに洪水で埋没した長原４Ｂ層上面の水田遺構と考えておきたい。

ⅳ）鎌倉時代以後の遺物（図96、図版61）

Ⅰ区北端部の東西坪境溝SD01上層から出土した493は瓦器椀である。口径は小さく、小型化している。内外面の調整は不明である。Ｃ－Ⅴ期（表10参照）の遺物であろう。494はⅡ区で認められた南北方向の溝状土壙群から出土した伊万里系の染付磁器碗である。

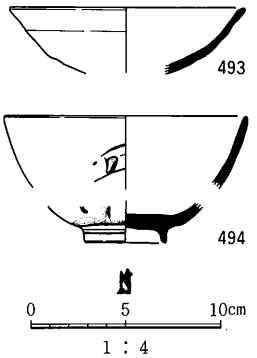


図96　鎌倉時代以後の遺物
SD01（493）、Ⅱ区北部溝状土壙群(494)

９）小結

ⅰ）弥生時代以前

第２項の「弥生時代以前の遺物」で報告したように、遊離資料とはいえ、旧石器時代から弥生時代の石器遺物が出土した。特に、旧石器時代の資料は遺跡東南地区で出土する石器遺物群との関係が注目される資料である。本書報告の資料についての評価は該当報告部分の末尾に記したとおりである。

また、弥生時代においては、Ⅱ区に接する西側で弥生時代後期後半の竪穴住居をはじめとする遺構が検出されているため、Ⅱ区周辺に当該期の集落が存在することは確実である。この時期の集落は長原遺跡東部の低地部に広い範囲で検出され、弥生時代の長原遺跡においてもっとも集落が拡大した時期と思われる。一方、瓜破台地の西縁低地部においては瓜破北遺跡を中心に集落が形成されている。弥生時代後期後半は、台地の東縁部および西縁部の低地に発展した集落の一部が台地高所に進出した時期と考えられるが、この事実を長原・瓜破遺跡においていかに評価すべきかは、この台地上における弥生時代の資料の増加をまって検討すべき課題であろう。

ⅱ）古墳時代

古墳時代の遺構では掘立柱建物を中心とする集落遺構が検出された。これらは出土する須恵器が、おもにＴＫ216～ＴＫ208型式を中心とするものと、ＴＫ23～ＴＫ47型式のものに区分できそうである。Ⅱ区の掘立柱建物は周辺の土壙からの出土遺物がＴＫ216型式とＴＫ23型式があり、両時期の建物の存在が想定できる。Ⅱ区南部の２棟の建物SB16・17はＴＫ23型式の須恵器を出土した土壙SK11が後者の柱穴を切っていること、前者に伴うと思われる溝状土壙SK09からＴＫ216型式からＯＮ46段階の須恵器が出土しているこ

表7　長原西地区建物一覧表

時代	地区		棟方向	桁(間)	梁(間)	桁行総長(m)	梁行総長(m)	庇	庇の出(m)	構造	棟方向	柱穴出土遺物
古墳	Ⅱ区	SB13		4	2	5.65	5.10			総柱	N36° W	
		SB15		3?	2	4.65	3.42				N31° 30′ W	
		SB16		2	2	3.90	3.20				N36° W	
		SB17		3	2	4.45	3.70				N35° W	
		SB21		1	1	2.70	2.70				N42° 30′ W	
		SB22		3?	2	3.18	3.05				N67° E	
		SB23		(3)							N12° 30′ W	
	Ⅲ区	SB31		3	2	4.83	3.82			総柱	N30° 10′ E	土師器小型甕
		SB32		3?	2	4.69	3.80				N82° E	
		SB33		(2)	(1)	(3.00)	(1.40)				N54° 20′ E	
		SB34		3	(1)						N6° W	
		SB35								竪穴住居	N48° W	4主柱で、床面4.2m×4.3mの方形。
奈良	Ⅰ区	SB08	南北	3	3	4.45	3.60			総柱	N1° E	
		SB09	南北	3		4.56				総柱	N4° 40′ E	
		SB11	東西	(3)	2	(5.78)	3.75				E1° S～E0°	
		SB12	東西	(2)	2	(3.60)	3.40				E0°	
	Ⅱ区	SB18	南北	3	2?	4.40	3.30				N5° E	
平安	Ⅰ区	SB01	南北	2	2	3.95	3.05				N11° 50′ E	土師器羽釜・皿、瓦
		SB02	南北	3	2	6.28	3.45				N3° 10′ E	土師器羽釜・杯・鉢
		SB03	東西	3		5.85					E4° N	
		SB04	東西	2	2	4.95	3.85	西	2.20		E0° 20′ N	土師器皿
		SB05	南北	3	2?	6.28	3.60	西・北	1.70・2.20	間仕切り	N4° E	
		SB06	南北	4	2?	8.10	3.55	西	1.65		N1° 30′ E	
		SB07	東西	(1)	2	(2.00)	4.40				E8° S	
		SB10	東西	3	2	6.00	3.90				E2° 30′ S	黒色土器、土師器鉢
	Ⅱ区	SB14	南北	4	2	8.75	4.40	南	2.20		N0°	土師器皿・甕、須恵器鉢、塼
		SB19	南北	3	2	5.64	3.90				N1° 30′ E	
		SB20	南北	4	2?	7.50	3.70				N1° 20′ W	
	Ⅲ区	SB24	南北	3		4.70					N2° 20′ W	
		SB25	南北	(1)	2		4.30				N1° 20′ W	土師器皿、黒色土器
		SB26	東西	6	(1)	12.30	(2.10)			間仕切り	E9° N	鉛・銅付着椀、黒色土器
		SB27	東西	6	(1)	12.00	(2.00)	東	2.20		E4° N	土師器皿・杯・甕、黒色土器
		SB28	南北	4	2	7.80	3.90	南	1.40		N6° W	土師器皿・杯・甕、黒色土器
		SB29	南北	4	2	8.30	3.90	南	1.20		N6° W	土師器皿・杯、黒色土器
		SB30	東西	3		5.00					E0°	土師器甕・皿・椀

とから、いずれも前者の時期の建物と思われる。Ⅱ区の建物群が存在したと思われる時期には、東に84－25次調査の建物群が存在する［京嶋覚1986］。これは北と南を溝で区画され、掘立柱建物を中心とする建物群であるが、Ⅱ区の建物群はこの建物群に近接しつつも、別の一群として把握しうるものである。

Ⅲ区南部の建物群は、これと切合う溝や「馬池谷」斜面に堆積する包含層出土の遺物から、ＴＫ２０８型式を中心とする時期であると考える。この南側の1985年度の調査地区でも、竪穴住居や掘立柱建物をはじめとする集落遺構が検出されているが、詳細は当該報告書で検討したい。

Ⅲ区北東部の竪穴住居SB35と土壙・溝などが検出された地点では、おもにSK39～41からＴＫ２１６～ＴＫ２０８型式の須恵器を含む土器が出土した。また、Ⅲ区北部の井戸SE01

が検出された地点も居住域内であると思われ、SD18は竪穴住居の可能性があったが、明確な住居遺構とは断定できなかった。この地区の出土遺物はＴＫ２０８型式であり、北東部のSK39～41の出土遺物に比べて若干新しい様相を示している。

以上のように、Ⅱ区の集落遺構中にＴＫ２３型式の時期に属するものがみられるが、Ⅲ区においてはこの時期の遺物は少ないように思われる。したがって、Ⅱ・Ⅲ区における古墳時代の集落遺構は、ＴＫ２１６～ＴＫ２０８型式の須恵器を出土する時期を中心に形成されたものということができよう。

iii）奈良時代

奈良時代の遺構はＩ区南部からⅡ区北部に分布しており、他の地区では遺物もほとんど出土していない。Ｉ区南部の建物群と一連の建物が、隣接する1985年度の調査地で検出されているが、それ以東は水田地帯となっている。したがって、この建物群は、南北がＩ区からⅡ区北部までの150m程度の範囲に限定されるものと思われる。今回の出土遺物とそれ以後の周辺地区での調査資料を総合すると、建物群が形成されたのは奈良時代でも後半の平城宮Ｖ期を前後するころと思われる。前書で指摘したように、奈良時代の建物群は長原遺跡内ではほかに２個所存在する［京嶋覚1990 pp.304-305］が、現在までの整理作業の成果として、両建物群の出土遺物もその後半期のものを中心とすることが判明しつつあり、これが確定できれば、平城宮Ｖ期前後に各建物群が一斉に形成され、Ⅵ期には廃絶したとみることが可能となる。このように、長原遺跡内における奈良時代の建物群の形成を平城宮Ｖ期前後とするならば、同じころに想定される長原５層を堆積させた洪水との先後関係如何によって、建物群の評価について次の二通りの考え方ができる。すなわち、長原遺跡の水田を広範囲にわたって埋没させ、水田経営に壊滅的な被害をもたらした洪水が発生した直後に、その再開発の拠点としてこれらの建物群が形成されたとみるか、あるいは、飛鳥時代以来の水田経営の進展過程における経営形態の変化として建物群の形成をとらえ、その直後、洪水によって廃絶し、ある期間の荒廃期を経て、１０世紀ころに再び屋敷地となったとみるか、である。

今年度の調査で検出された建物遺構は構築された層位が不明であり、また、長原遺跡内の他の奈良時代建物群についても長原５層との関係が不明確である。したがって、今後、各建物群の時期と長原５層の堆積時期をより限定し、その先後関係を明らかにする必要があろう。

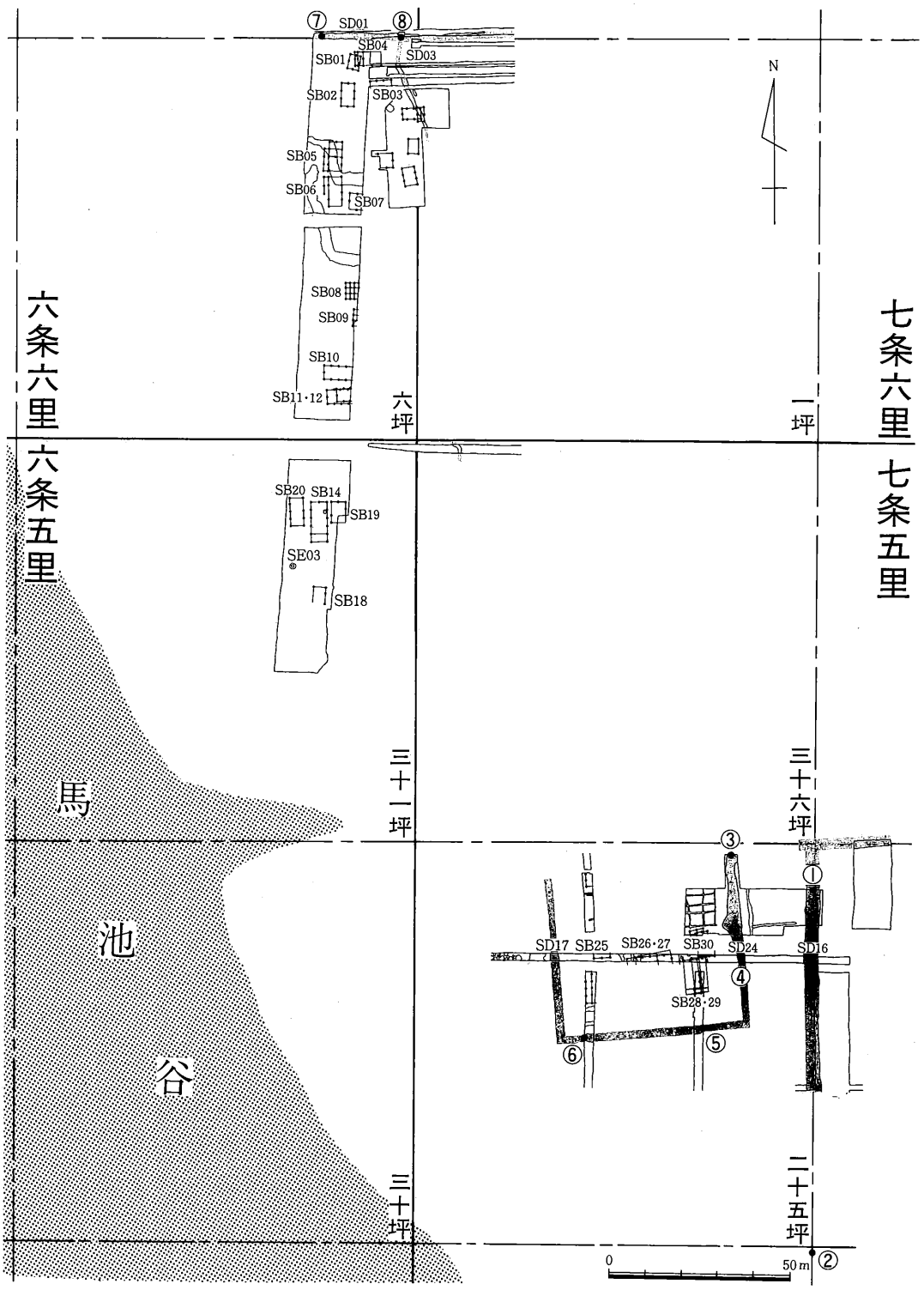


図97　西地区における奈良時代以後の遺構配置図

iv）平安時代（図97）

平安時代の遺構はおおむねB−Ⅱ期に属するもので、Ⅰ区北部・Ⅰ区南部・Ⅱ区・Ⅲ区北部で建物群を検出した。また、Ⅲ区西部の「馬池谷」肩部でも１棟の建物を検出した。

上記の５個所の建物群のうち、６条６里６坪にあるⅠ区北部の建物SB01・04からは９世紀代にさかのぼりうる遺物を出土していることから、９世紀から建物群の形成が開始された、B−Ⅱ−1期を中心とする建物群であると考えられる。一方、同じ坪のやや南に位置するSB05〜07の一群は、出土遺物から先の建物群に後出するものと思われる。

６条５里31坪北東隅のⅡ区の建物群は井戸SE03を伴い、南北棟建物SB14を中心とするものである。建物や井戸からはB−Ⅱ−2期新相の遺物が出土している。また、このⅡ区南部の「馬池谷」に面する地点にも、柱根が遺存するものを含めた柱穴が分布しており、建物が存在していたようである。ここではB−Ⅱ−2期古相に属する土器が出土したSK13・14があり、SB14を中心とする北側の建物群に先行して形成された遺構群であると思われる。

７条５里25坪北部に位置するⅢ区の建物群は、溝で区画した屋敷地を形成しており、北端が現存条里遺構の陌線とみれば、53m四方、約２.５段の正方形の屋敷地が想定できる。『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ［大阪市文化財協会1983B］で報告した屋敷地はその区画が不明瞭であるが、３段以上と推定されており、これに近い規模といえよう。屋敷地のほぼ中央部には桁行６間の東西棟建物が主屋として位置し、その左右に桁行４〜５間の南北棟建物や小規模建物が配置された、整然としたものである。屋敷地の北半部は89−15次調査で耕作溝と思われる小溝が縦横に検出されており、畠地であったと推定される。屋敷地の入口は建物配置からみて南側と考えられるが、未調査のため不明である。

主屋SB26とその東側の付属屋SB30は火災に遭っているが、その柱穴内には多くの焼土塊が混入しており、それらとともに鉛などからなる物質が内面に付着したトリベと思われる土師質小椀が１点出土した。しかし、それが１点のみであること、ほかにフイゴ羽口・炉壁など鋳造関係の遺物がまったく出土していないことから、屋敷地内で鋳造などの手工業生産が行われていたことを積極的に想定することはできない。

この屋敷地内で瓦器椀はほとんど出土しなかったが、1989年度調査の屋敷地を囲む溝からC−Ⅰ期の瓦器椀が出土していることから、この溝の最終的な埋没時期をC−Ⅰ期以後に下らしめることが可能で、建物群の廃絶期もその時期に近づけることができよう。

この屋敷地の溝を隔てた西側には、C−Ⅰ期の瓦器椀を出土した土壙群SK15〜30が存在するが、これらはこの屋敷地の廃絶期の遺構と考えることが可能である。

表8　条里関係遺構の座標値（①･･･は図97中の地点）

地点	X(m)	Y(m)	遺構	国土座標方位に対する偏度
①	−154,936.5	−39,479.9	SD16	N1°　0′　58″　E
②	−155,032.5	−39,481.5	南北	
③	−154,926.8	−39,501.1	SD24	N3°　24′　23″　W
④	−154,956.2	−39,499.4	南北	
⑤	−154,974.2	−39,510.2	85−16次調査溝	E3°　18′　55″　N
⑥	−154,976.1	−39,543.0	東西	
⑦	−154,701.1	−39,610.3	SD01	E1°　50′　51″　S
⑧	−154,701.8	−39,588.6	東西	

以上、出土遺物の内容からみて、古代における西地区の建物群の変遷をたどると、まず奈良時代後半にⅠ区で建物群が形成された。この建物群は本節で報告した資料についていえば平城宮Ⅴ期に中心があり、Ⅵ期に廃絶したようである。その後、9世紀後半から10世紀前半ころに、同じⅠ区北東部に建物群が形成され、それと同じころにⅡ区南部にも遺構が構築されたようだ。10世紀後半には、Ⅰ・Ⅱ区の同じ坪内で地点をかえて建物がつくられ、やや遅れて、Ⅲ区には溝で区画された建物群が出現する。Ⅲ区の建物群はC−Ⅰ期にその下限を求めることができ、瓦器出現直後に廃絶したとみられる。

次にこれらの建物群と条里地割との関係を検討しておきたい。Ⅰ・Ⅱ区の建物群はSB03・04・20を除いて北で東に振る方位を示しており、Ⅰ・Ⅱ区の奈良時代建物もすべて北で東に振る方位である（表7）。Ⅰ区北端部のB−Ⅱ−2期の遺物を出土したSD01は東で約1°51′南に振れており、建物方位の傾向と一致している。

一方、Ⅲ区の屋敷地を区画する溝SD17・24の方位は座標北に対して3°20′前後西に振る方位を示している（表8）。この屋敷地内の建物は1〜9°の範囲で北で西に振る方位であり、ややばらつきはあるものの北で西に振る点で一連の傾向を看取できる。しかし、Ⅲ区東部の坪境溝であるSD16は北で約1°東に振り、Ⅰ区北端部のSD01とともに座標北に対して1〜2°東に振れる方位を示しているため、Ⅲ区の建物群はSD16の方位に規制されなかったことになる。これは、SD16の掘削がⅢ区建物群の形成後であったためであると理解したい。

ところで、長原遺跡で検出されたB−Ⅱ〜C−Ⅰ期の建物群の分布傾向をみると、瓜破台地東縁にあたる南東から北西にのびる帯状を呈する範囲に立地している（図98）。遺構検出面の標高はおおむね8.5m以上であり、同一坪内に同時期の複数の屋敷地が存在した可能性をもつばあいがある。こうしたことから、この時期には、おもに上述の範囲内において屋敷地が選地され、移動・建替えなどが行われたと考えられる。さらに、図98に示した屋敷地のうち4地点の屋敷地が奈良時代の建物群と重複していることから、こ

の時期の屋敷地の選地要因は奈良時代の建物群のそれと共通していたと推察できる。いいかえれば、長原地域における平安時代の集落景観は奈良時代に形成の端緒があり、それが発展した結果を示しているということができる。

また、こうした奈良時代から平安時代の集落立地は積極的に条里地割と関連づけられるものではなく、むしろ、瓜破台地の形状や「馬池谷」の位置などの地形条件との関連を強く示唆しているように思われる。集落が条里地割に規制された配置を示す例は、［植木久1983 p.245］で示された南北3ヶ坪に集中した平安時代末から鎌倉時代の集落などであり、この時期以後に、条里地割に規制された集落形成があったといえよう。

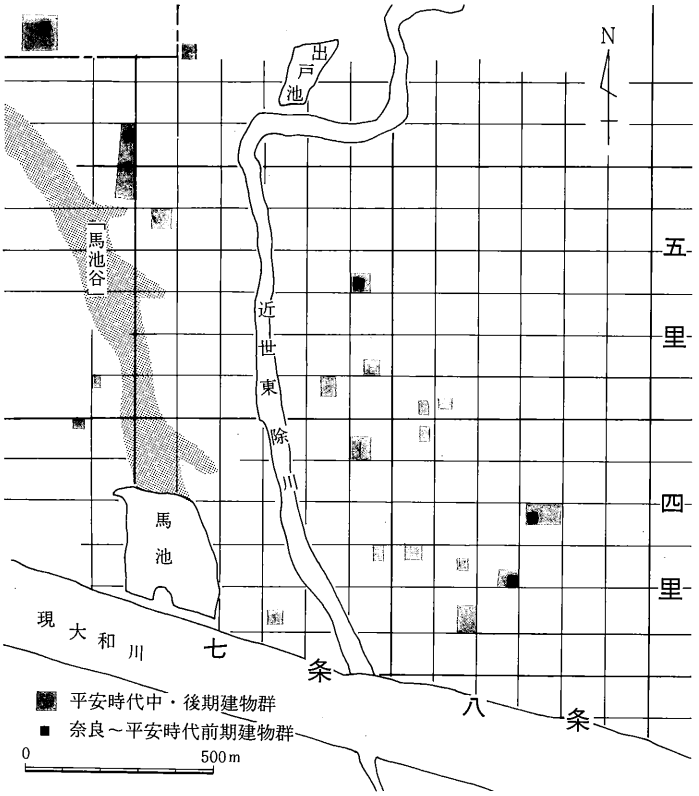


図98　奈良時代以後の建物分布

ところで、前述したように8世紀後半から9世紀初頭にかけて起った洪水は、飛鳥時代から奈良時代を通じて開発が進められてきた広大な水田地帯を砂礫によって埋没させ、この地域は一時的に荒地として放置されたと思われる。その後、平安時代を通じて実施されたこの地域の再開発についての実態は、発掘によっていまだ十分に明らかになしえていない。しかしながら、開発拠点としての屋敷地の分布傾向からみて、平安時代における再開発は奈良時代以来の開発計画や経営体制を継承したものであったということができよう。そして、これに対する評価は、前述したように奈良時代の建物群の成立を大規模な洪水以後と考えれば、洪水を契機とした再開発事業の開始が奈良時代末にあることになり、洪水以前に奈良時代の建物群の成立を認めるならば、奈良時代に成立した経営体制を復活・発展させることを目的としたものであるといえるだろう。

これに関して、注意しておきたいのは、長原遺跡において9世紀前半の遺構・遺物が、その前後の資料に比べてかなり少ない傾向があることである。このことを奈良時代と平安時代の建物群の間に断絶期があることを示唆する事実として理解すると、上述の二つの評価のうち後者の評価に、より妥当性があるように思われる（註12）。ここではそうした想定を提示し、今後さらに検討していきたい。

これ以後、12・13世紀においてこの地域にみられた集落景観の変化については、すでに詳述されているが、「安定した経営状態」［植木久1983 p.245］が確保された要因は、［鈴木秀典1982B］などで可能性を指摘しているような、外的要因（註13）にあると思われ、その点についての検討を通じて長原地域の古代から中世への具体的な歴史像が浮かび上がってくるものと思う。

（京嶋）

註）

（1）第Ⅰ章註1参照。また、条里遺制については服部昌之氏の復元図［服部昌之1975］を基本としたものである。

（2）層序の記載は第Ⅱ章に準じる。

（3）以下、古墳時代の須恵器については田辺昭三氏の編年［田辺昭三1981・1982］にしたがう。

（4）以下、中世土器については『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ・Ⅲで提示した分類・編年［鈴木秀典1982A・1983A］にしたがう。

（5）横田・森田両氏の分類［横田賢次郎・森田勉1978］にしたがう。

（6）第Ⅰ章図1の(6)の地点。

（7）有茎尖頭器はいわゆる有舌尖頭器と同義である。

（8）クサビに使用した際の剥離面の広がり方については奈良国立文化財研究所、松沢亜生氏の御教示を得た。観察の視点については『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ［大阪市文化財協会1991］に記載している。

（9）今回の報告にあたって、大阪市立自然史博物館樽野博幸氏より標本と比較のうえ数々の有益なご教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

（10）第Ⅰ章図1の(14)の地点でも土師質と瓦質の2点の塼が出土している。厚さはいずれも6cm、前者の両端が遺存する一辺は15cmである。

（11）分析にあたり奈良国立文化財研究所遺物処理研究室の施設を利用させていただいた。。

（12）［京嶋覚1990］で述べたように、長原6A層上面の水田経営時に小規模ながらも建物群が水田に面する位置に形成された事実を、古代におけるこの地域の開発の後半期の開始とみた。奈良時代末から平安時代初頭の大洪水による荒廃後の平安時代の再開発もまた、その延長上に位置付けうる事柄ではなかろうか。

（13）［鈴木秀典1982B p.124］［木原克司1982 p.309］で西琳寺領長原庄について触れている。「長原庄」は1378（永和4）年ころに成立した『西琳寺流記』や『河内国古市郡西琳寺領田畠目録』の1394（応永1）年の記事にみえるが、13世紀成立の『西琳寺文永注記』で引用された1171（承安1）年の記事によると桓武天皇が西琳寺に「長原郷田畠卅六町・池一町」を寄進したとしている。このことから、遅くとも12・13世紀には長原地域の一部が河内国西琳寺に寄進されており、少なくとも14世紀末までは西琳寺領であったと推測できる。（［清水正健編1978］などを参考にした。）

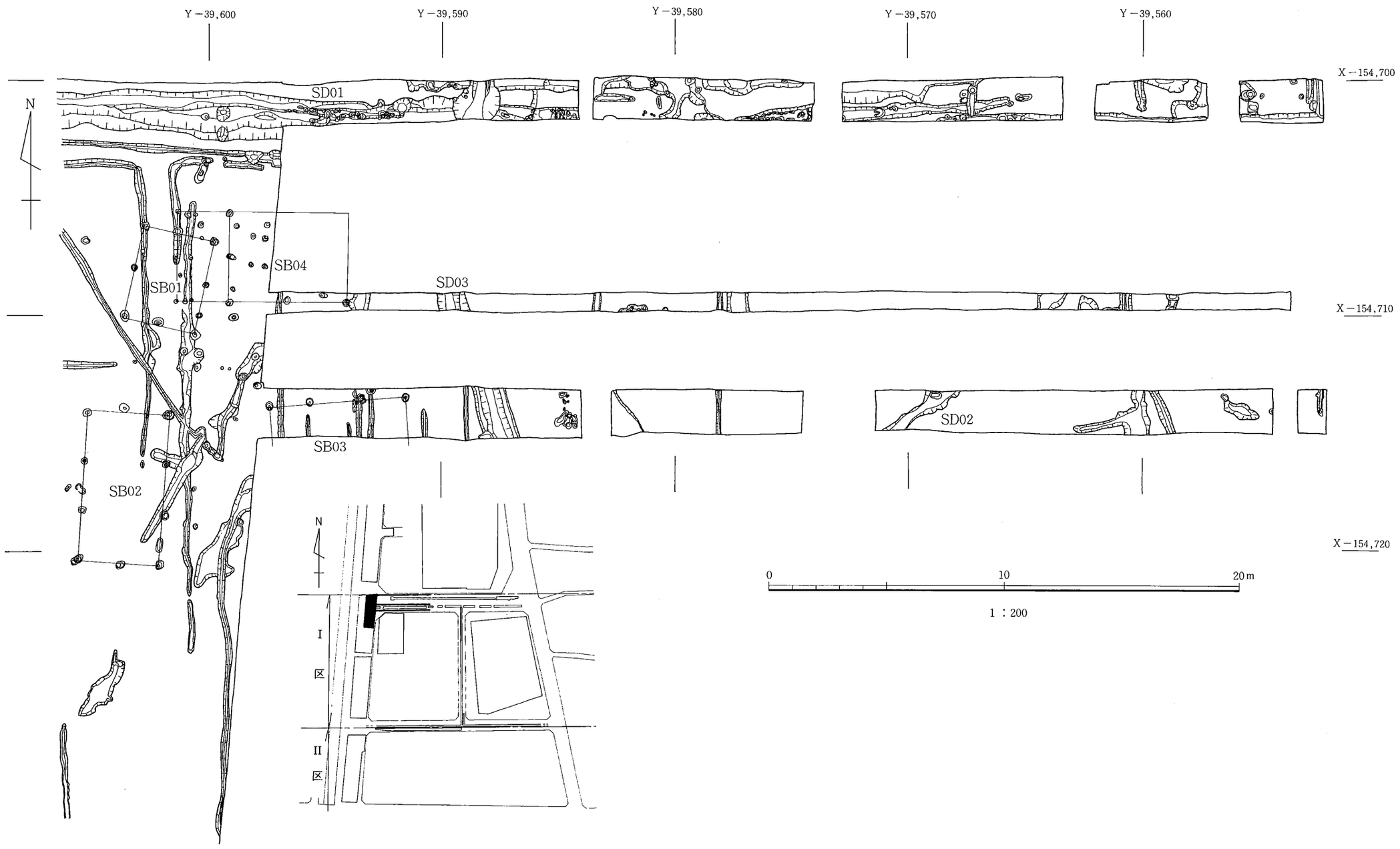


図99　Ⅰ区北部遺構実測図（1）

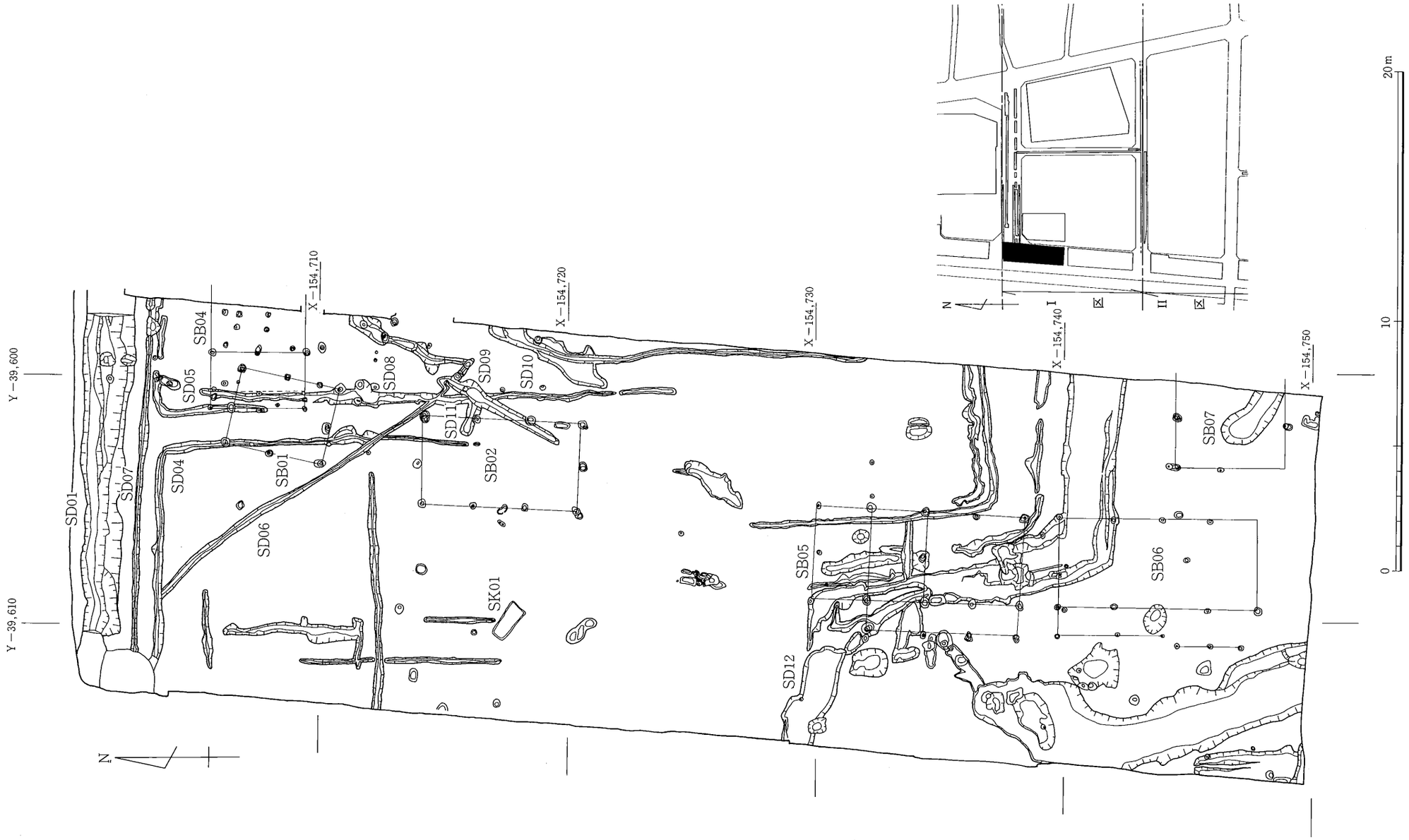


図100　Ⅰ区北部遺構実測図（2）

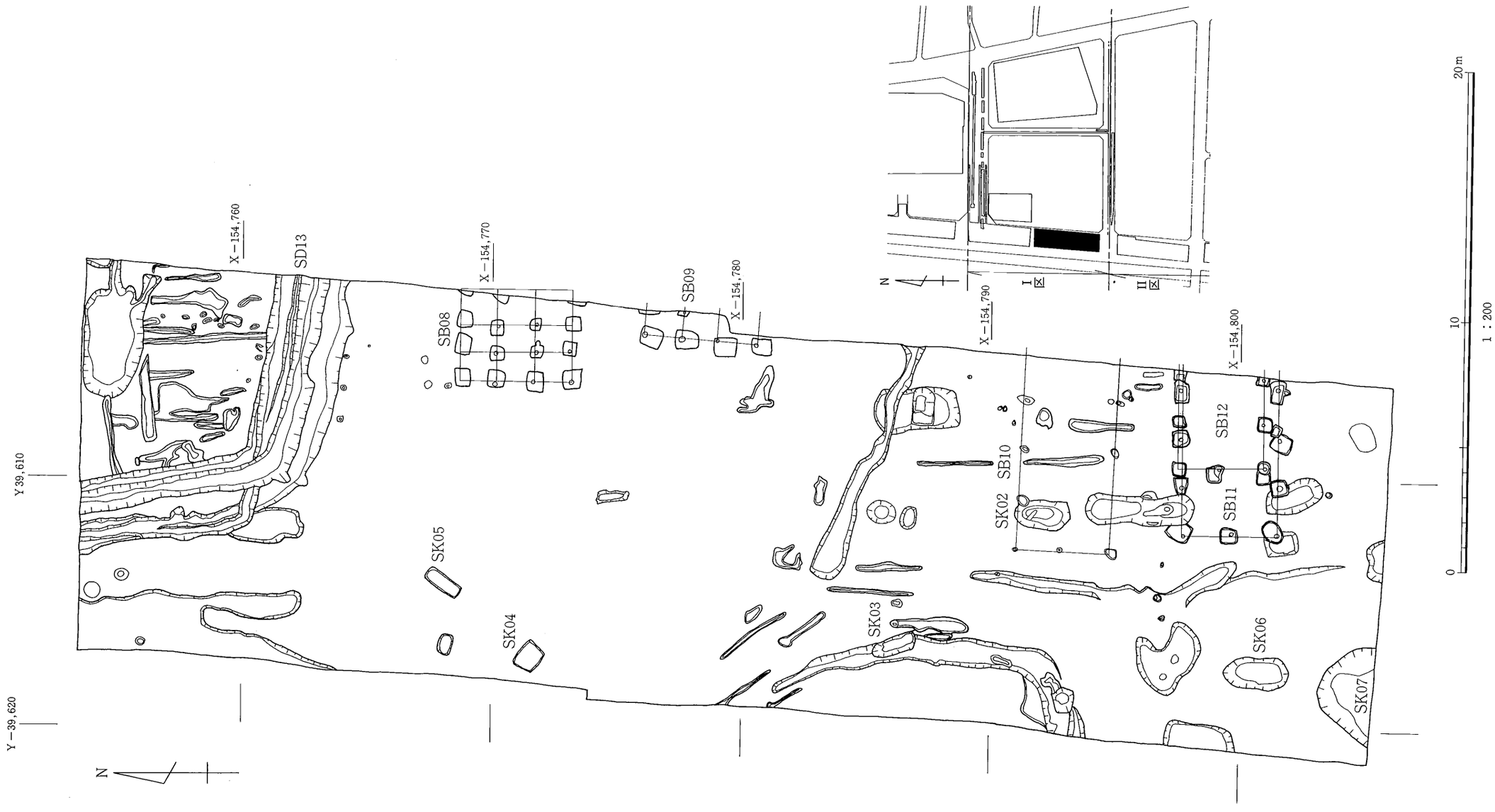


図101　Ⅰ区南部遺構実測図

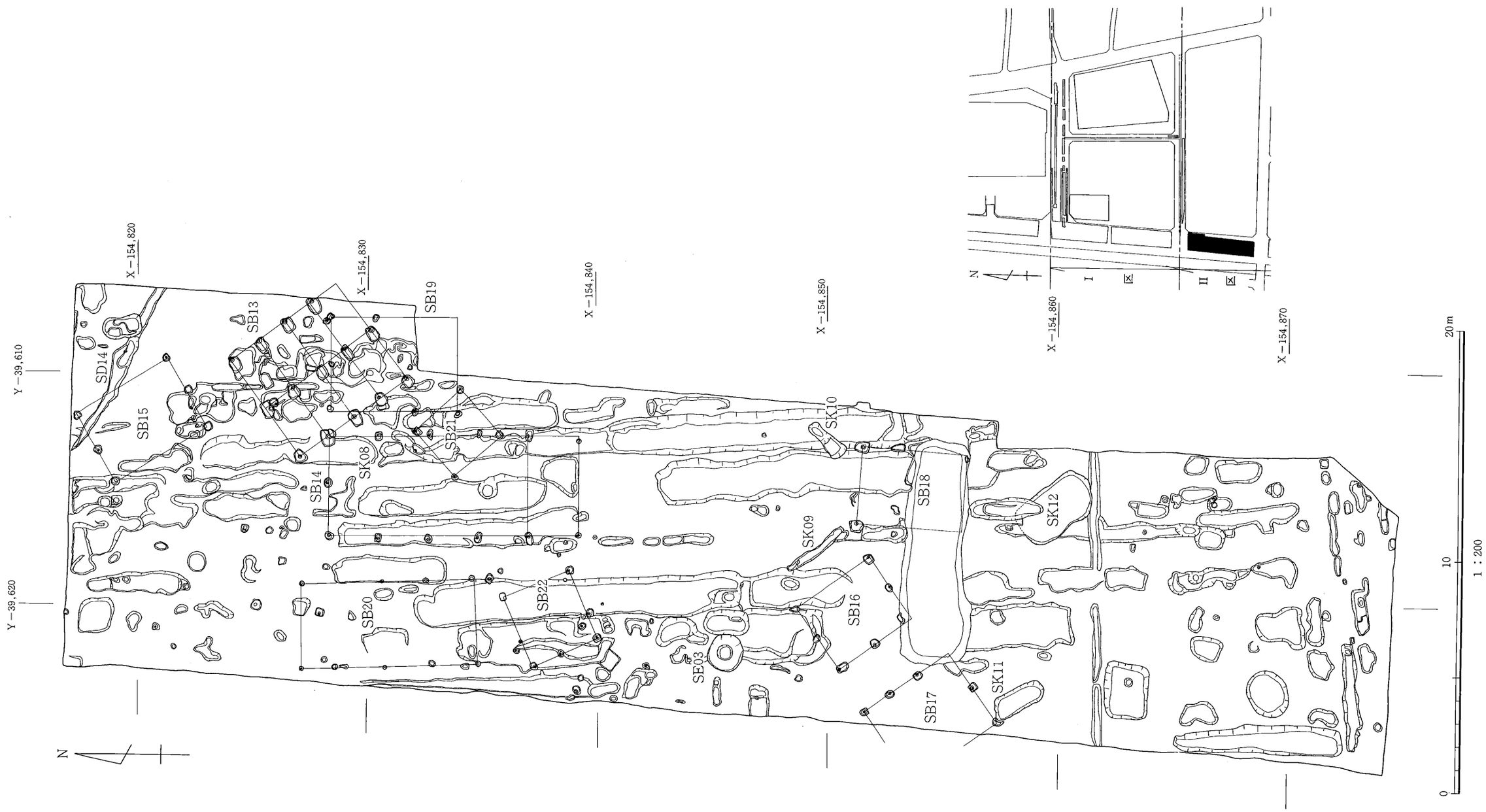


図102　Ⅱ区北部遺構実測図

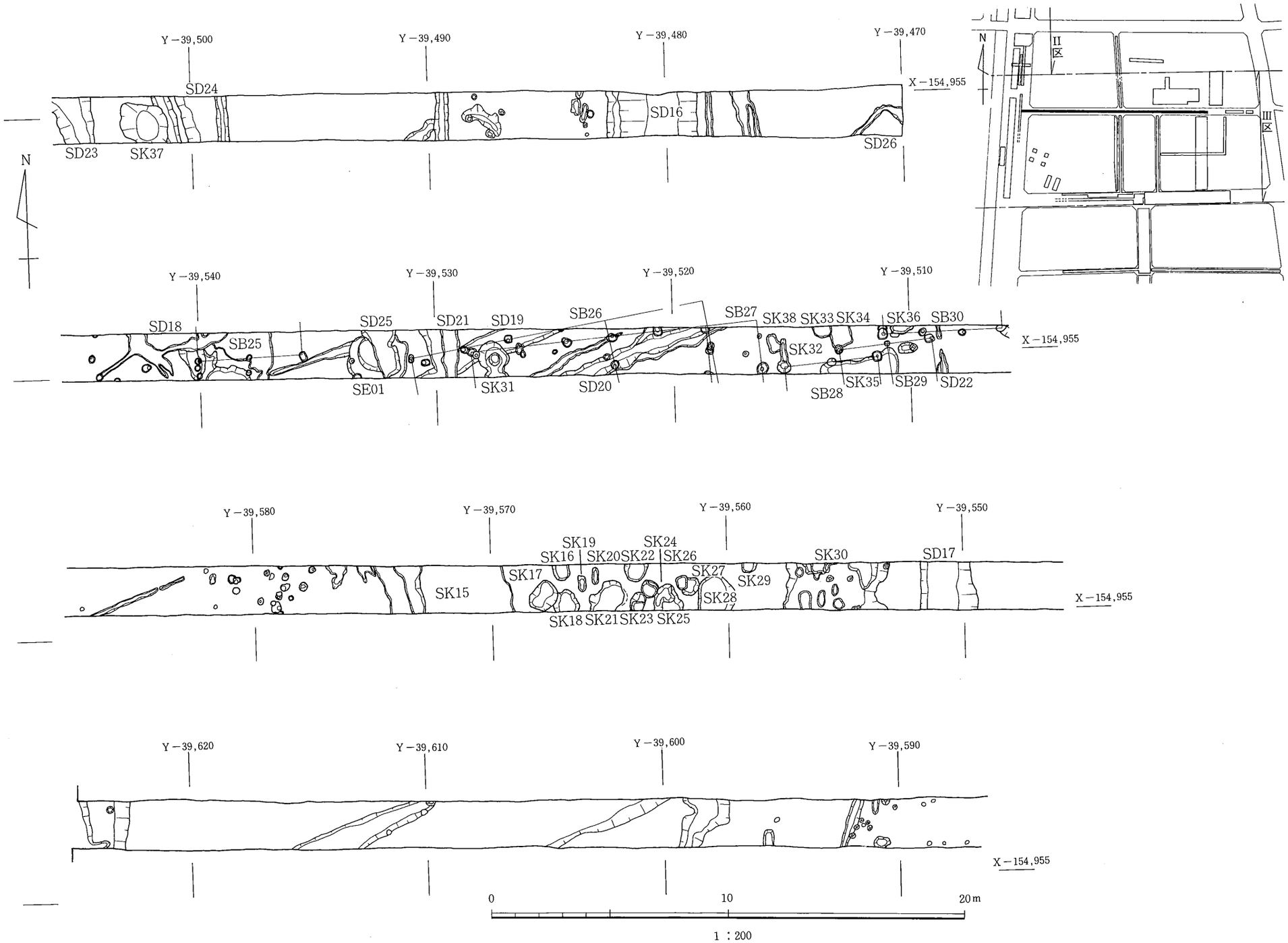


図103　Ⅲ区北部遺構実測図

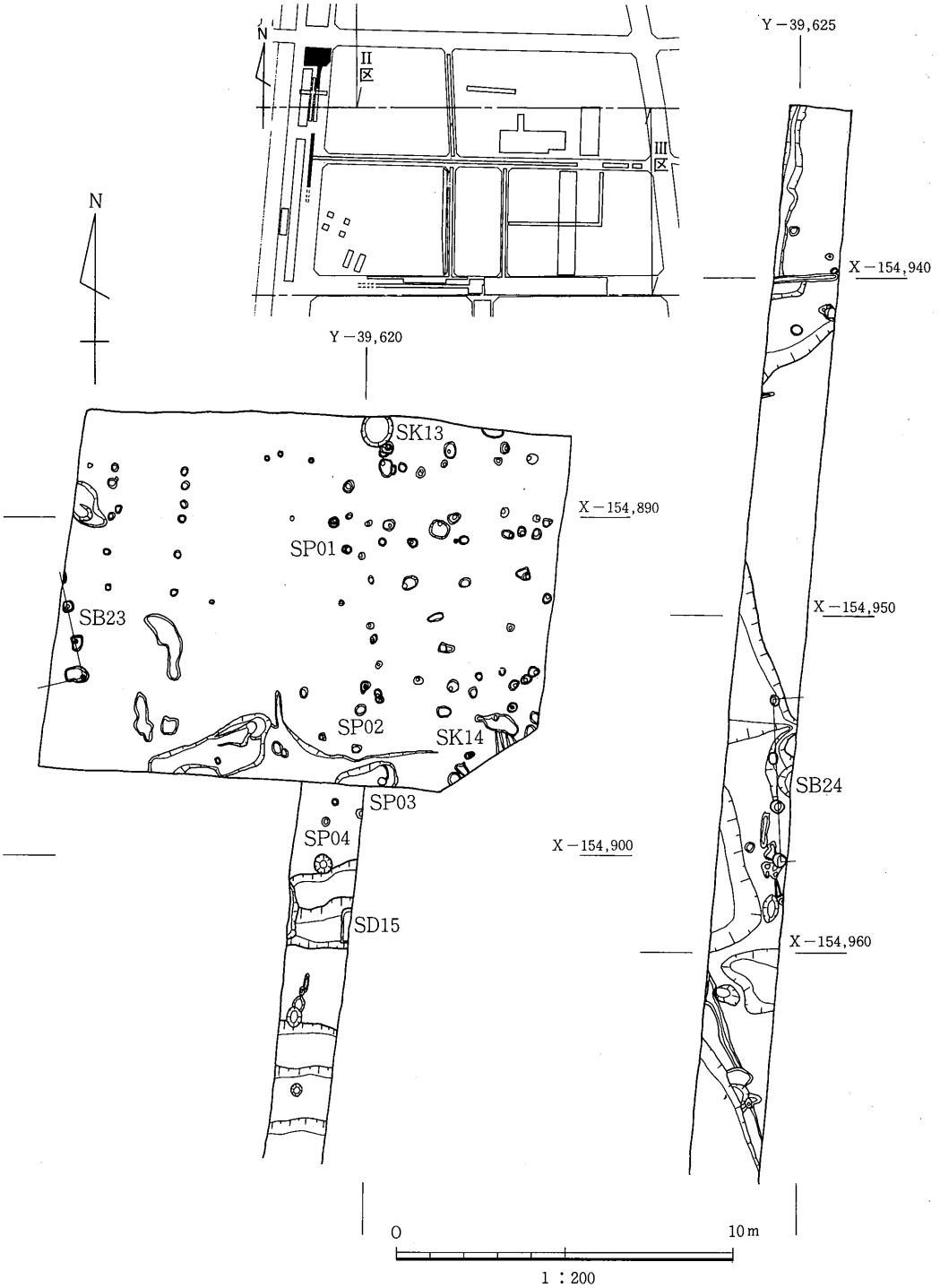


図104　Ⅱ区南部・Ⅲ区西部遺構実測図

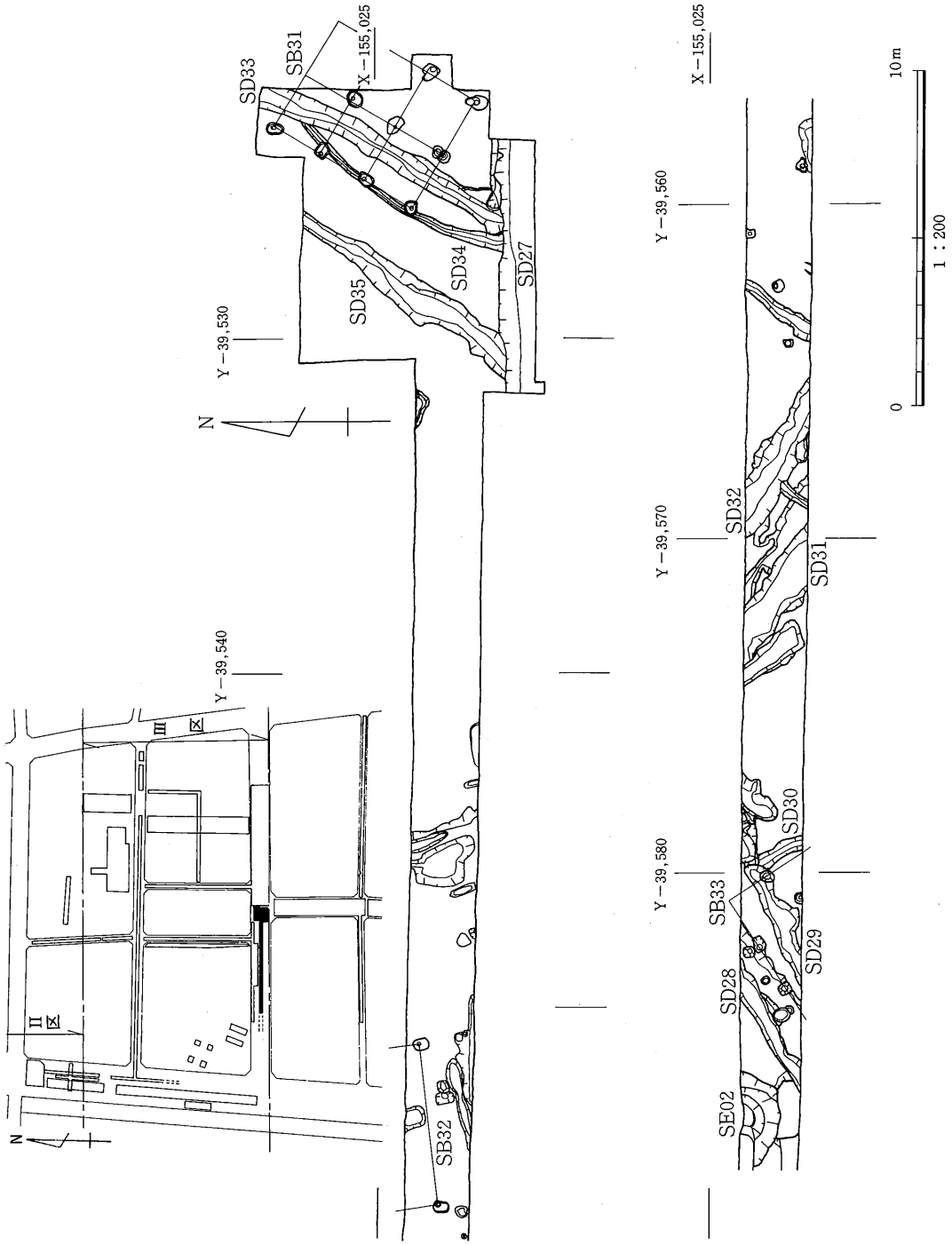


図105　Ⅲ区南部遺構実測図

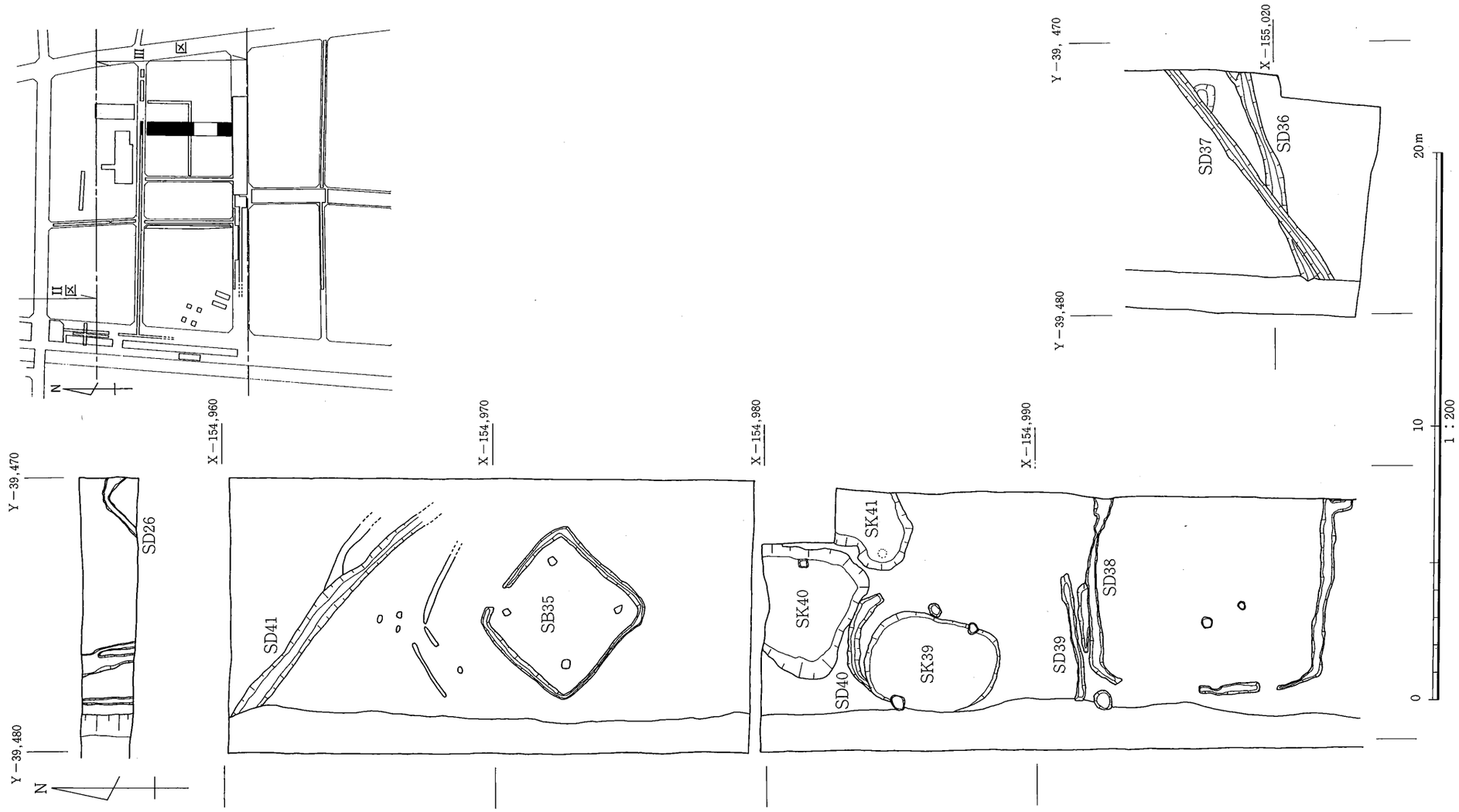


図106　Ⅲ区東部遺構実測図

第２節　瓜破遺跡東南地区の調査（83－44次調査）

１）東南地区の層序と遺物

調査地は羽曳野丘陵からのびる瓜破台地北部に位置し、現地表面・地山面ともに南から北に緩やかに傾斜して低くなる。当地は丹北郡条里の６条４里内（註１）に位置し、字名は大溝・墓ノ前・芝添である。

検出した遺構は７世紀代のものが多く、遺物は５世紀から近世にいたる。遺構番号はⅠ～Ⅴ区の順に、主要遺構のみに通し番号を付けたが、東西方向の調査区であるⅠ・Ⅲ区は東から西に、南北の調査区であるⅡ・Ⅳ・Ⅴ区は南から北に順に付した（図108）。

ｉ）調査地の層序（図109）

調査地の基本的な層序を、南北方向はⅤ区の東壁で、東西方向はⅢ区の南壁で示した。南部は、現代作土層直下が地山層となるなど、沖積層がほとんど存在しない。以下、現代の作土層を第１層、地山層を第５層として、今回の調査地に限定した層序を記述する。

沖積層上部層Ⅰ

第１層：現代の作土層である。層厚は10～35cmで、上面はTP＋11.5～12.9mである。

第２層：Ⅴ区南部や近年の攪乱を被ったⅤ区中央部以外は、調査地全域にわたって広く分布する明褐色砂礫混りシルト層で、層厚は5～30cmである。須恵器・土師器のほかに染付磁器・瓦器などを含み、Ⅳ・Ⅴ区北部の本層下面で図109に示したような、ほぼ南北方向の犂溝を検出し、永楽通寶などが出土した。

第3a層：やはりⅢ区やⅣ・Ⅴ区北部に、層厚5～25cmで堆積する明黄褐色細粒砂～砂礫混りシルト層であり、図106の須恵器のほか瓦器、布目瓦549などを含む。

第3b層：Ⅲ区やⅣ・Ⅴ区北部に、層厚5～20cmで分布する黄褐色～褐色粘土質シルト層である。本層の下面で検出されたⅤ区北部のSK18は、15世紀の遺物を含むことから、それ以降に形成されたと考えられる。

第４層：地山の凹地のみに分布し、明黄褐色～灰白色砂礫混りシルトからなる。層厚は最大で40cmである。凹地とはⅢ区中央部のSD06の両岸、Ⅳ区南部のSD10の北岸、Ⅳ区北部のSD17の南側などである。また土壙SK06の埋土として存在し、６世紀後半～７世紀後半の土器を多く含むことから、少なくとも７世紀後半には当地域に広く分布していたと考えられる。

沖積層下部層以下（地山層）

第５層：灰黄色砂礫～黄橙色シルト質粘土からなり、上面はTP＋10.9～12.7mで、南から北に低く傾斜している。

ii）各層出土の土器（図107、図版62）

第２～４層出土の遺物をまとめたが、地層の形成年代よりはるかに古い遺物と考えられるので、一括して記述する。

須恵器は把手付椀495、高杯496・497・500、杯蓋498、杯身499、甕503、瓶504がある。495は口径8.0cmで、球形の体部に粘土紐の把手が付けられ、体部上部に５条１単位の櫛による波状文が施されている。496は三方にスカシ孔をもつ高杯脚部で、上部はカキメ、下部は波状文を施す。497は四方にスカシ孔、体部に把手をもつ有蓋高杯で、体部中央に２本の稜線を作り、その下に７条１単位の櫛による波状文を描く。500は三方にスカシ孔をもつ。498は口径11.2cmで、かえりと宝珠つまみをもつ蓋である。499はふんばる高台をもち、504は体部最大径が9.0cmである。

土師器は把手501と高杯脚部502をあげた。502は縦方向のヘラケズリで13の面を取る。

495・497は５世紀後半、496・500・504は６世紀、498・499は７世紀後半と考えられる。（黒田）

iii）石器遺物（図110、図版65）

クサビ関係資料

505は素材の側縁に自然面を残す厚さ約8mmの板状の剥片である。両方の広い面は上方か

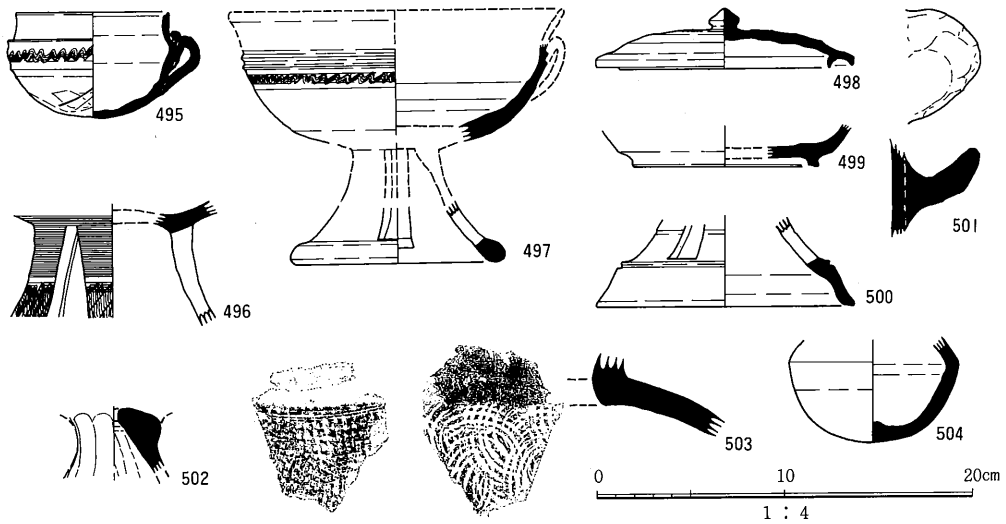


図107　各層出土遺物
第４層（500）、第3b層（496）、第3a層（495・497）、第２層（498・499・501～504）

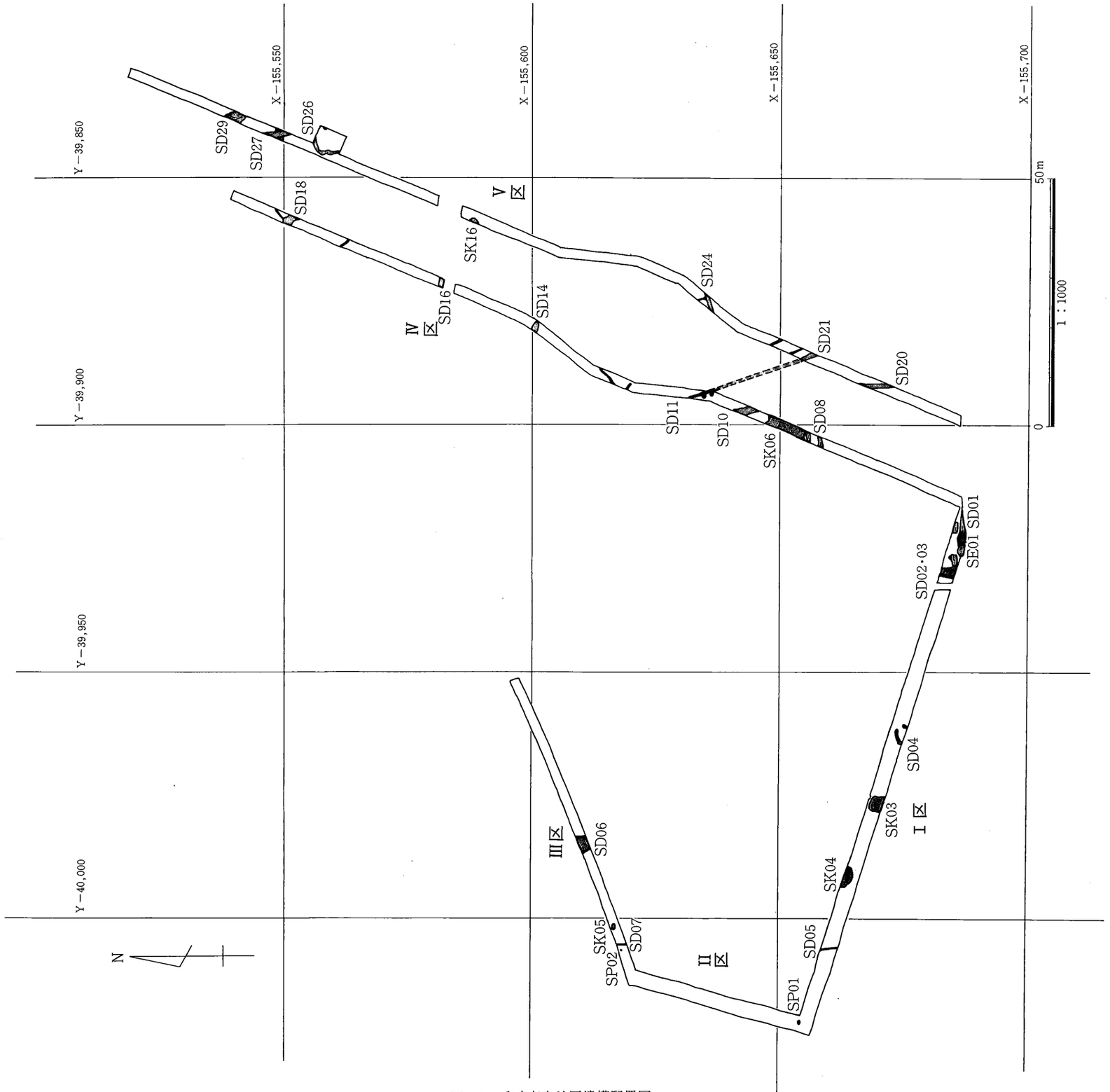


図108　瓜破東南地区遺構配置図

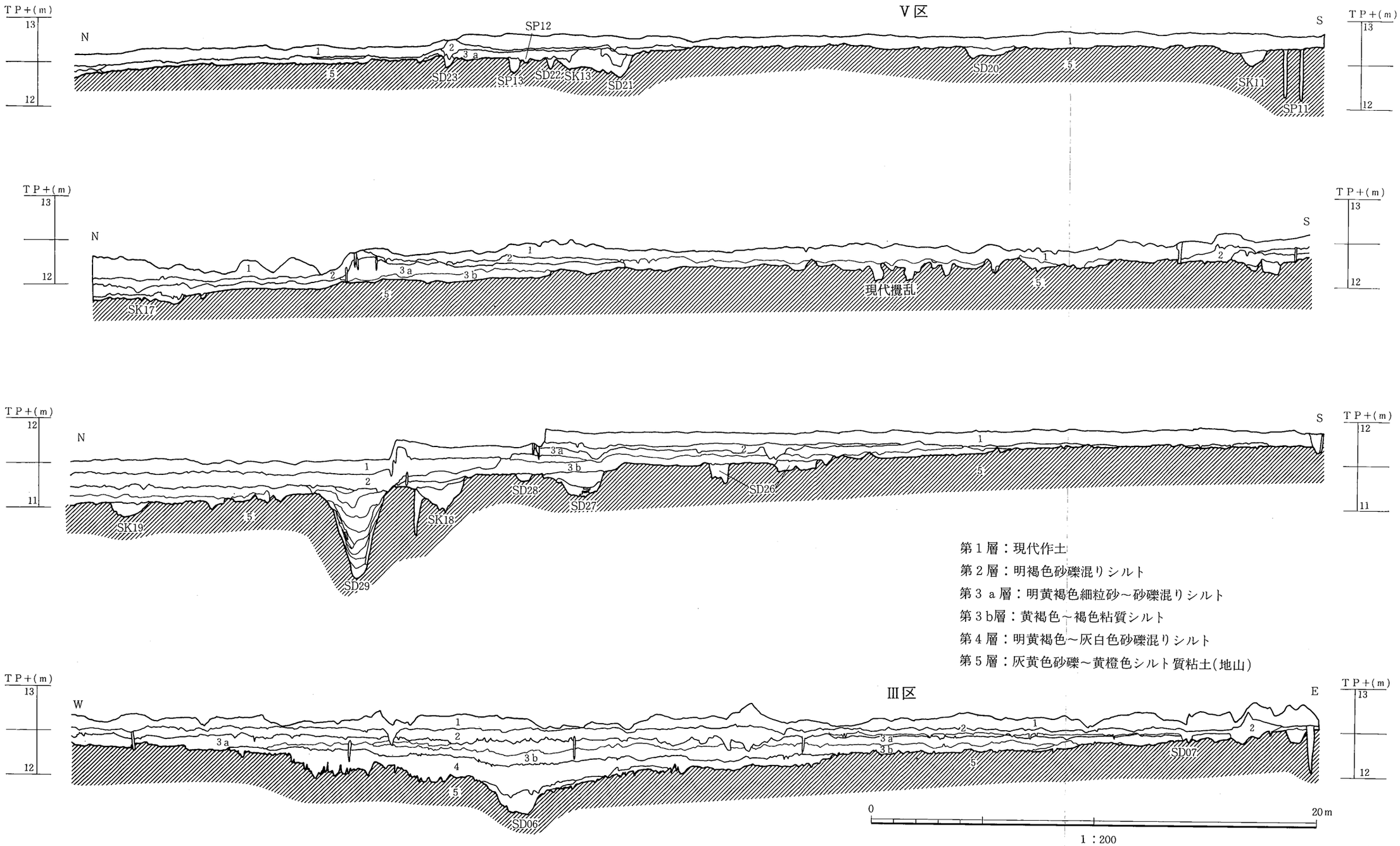

V区
TP+(m)
13
12
N
S
SP12
SD23
SP13
SD22
SK13
SD21
SD20
SK11
SP11
SK17
現代攪乱
11
SK19
SK18
SD28
SD27
SD26
SD29
III区
W
E
SD07
SD06
0
20m
1：200
第1層：現代作土
第2層：明褐色砂礫混りシルト
第3 a層：明黄褐色細粒砂～砂礫混りシルト
第3b層：黄褐色～褐色粘質シルト
第4層：明黄褐色～灰白色砂礫混りシルト
第5層：灰黄色砂礫～黄橙色シルト質粘土(地山)

図109　調査地の層序

らの加撃による剥離のようすを示し、リングが発達して段になっていることから、打面に対して垂直方向に打撃を加えて得られた剥片と考える。打面は折れによって失われているため、表裏は判断しがたい。上部がわずかにふくらんでいる方を主剥離面とすると、その下縁部には背面を打面とした約５枚の剥離面がみられる。さらに、それらを打面として背面側に剥片を２枚取っている。いずれも小さな剥離面であるが、両面に打分けて刃部を作っている。ほかに二次的な加工はない。主剥離面の左下には新しい折面があるが、縁に上方からつながる自然面が薄く残っていることから、もとの素材の形状を著しく損ねていないと考えられる。板状の剥片を利用し、粗い刃部を付けていることから、これがクサビである可能性がある。ただし、刃部のいたみがほとんどないことから、使用していない可能性が考えられる。長さ5.03㎝、幅5.00㎝、厚さ1.09㎝である。

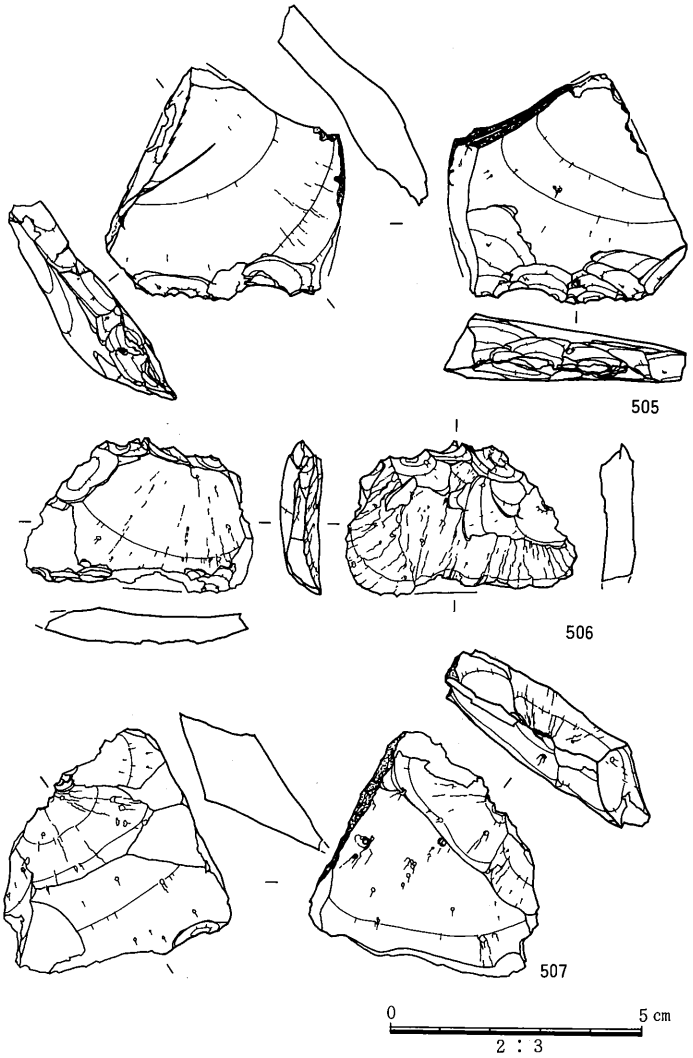


図110　クサビ・石核

506は厚さ約0.5㎝の板状の横長剥片である。上縁と下縁に不安定な剥離が取巻いており、一部は流理構造の中に亀裂が進んでいる。上縁・下縁の剥離とも、整形する意図は認められないことから、両極的な打撃を幾度か加えたことによって起きた剥離であろう。したがって、クサビに関係する資料と考えられる。剥片は背面・主剥離面ともほぼ同じ方向からの

加撃のようすを示すが、主剥離面はフィッシャーが発達しており、強い力が加わって剥離したようすを示している。クサビ本体を打込んだ際に剥落した剥片を素材として再利用した可能性が高い。長さ3.01cm、幅4.58cm、厚さ0.80cmである。

石核

507は自然面を側面に残す盤状の剥片である。背面のもっとも大きな剥離面と、主剥離面の加撃の方向はほぼ同じである。背面側の左下縁にみえる菱形の面は、すべての面を切る折面である。背面の左上縁には打面を準備するための剥離面があり、その打点付近を打面として主剥離面側に横長剥片を取っている。その時点で、この石核の使用は終っている。打面調整を挟んで、素材となる盤状の石核の主剥離面を底面にもつ横長の剥片剥離を行っていることから、瀬戸内技法的な石核と考えられる。長さ4.68cm、幅4.49cm、厚さ1.52cmである。（清水・松本）

2）飛鳥時代の遺構と遺物

Ⅲ～Ⅴ区の7世紀代の遺物を含む溝と土壙について記述するが、調査地の西側で検出された7世紀代の建物群［南秀雄1987］は、北で西に数度振る方位をもつものであったことから、今回報告する溝で、出土遺物のないものでも、層位的に古い遺構として矛盾がなく、この方位を示すものは本項で取上げた。ちなみに調査地西側の建物群は、7世紀前半の屋敷地を画する柵列においては、南北柵が北で8°西に振り、東西柵が東で10°30′北に振る方位を示し、建物群では6°30′～18°30′のバラツキはあるが、すべて主軸が北で西に振っている。また、7世紀後半の南北棟建物も主軸が北で5°西に振っている。

i）土壙

SK06（図111・112・115、図版63・64）

Ⅳ区中央部に位置する長さ9.6m、幅2.0m以上、深さ0.1～0.4mの不定形の土壙で、埋土は第4層の灰白色砂礫混りシルトである。人為的な土取りの跡なのか、土壙底部には高さ0.2mほどの高まりがみられる。出土土器は6世紀後半～7世紀後半のものが多い。

6世紀後半の遺物として、須恵器杯蓋520、横瓶532がある。また、7世紀前半の遺物として、土師器杯515、甑518、須恵器杯蓋521、杯身523～526、壺533、平瓶534があり、7世紀後半の遺物として、土師器皿516・517、須恵器杯蓋522、杯身527～530、甕531・535がある。

SK13（図111・113・116、図版31・65）

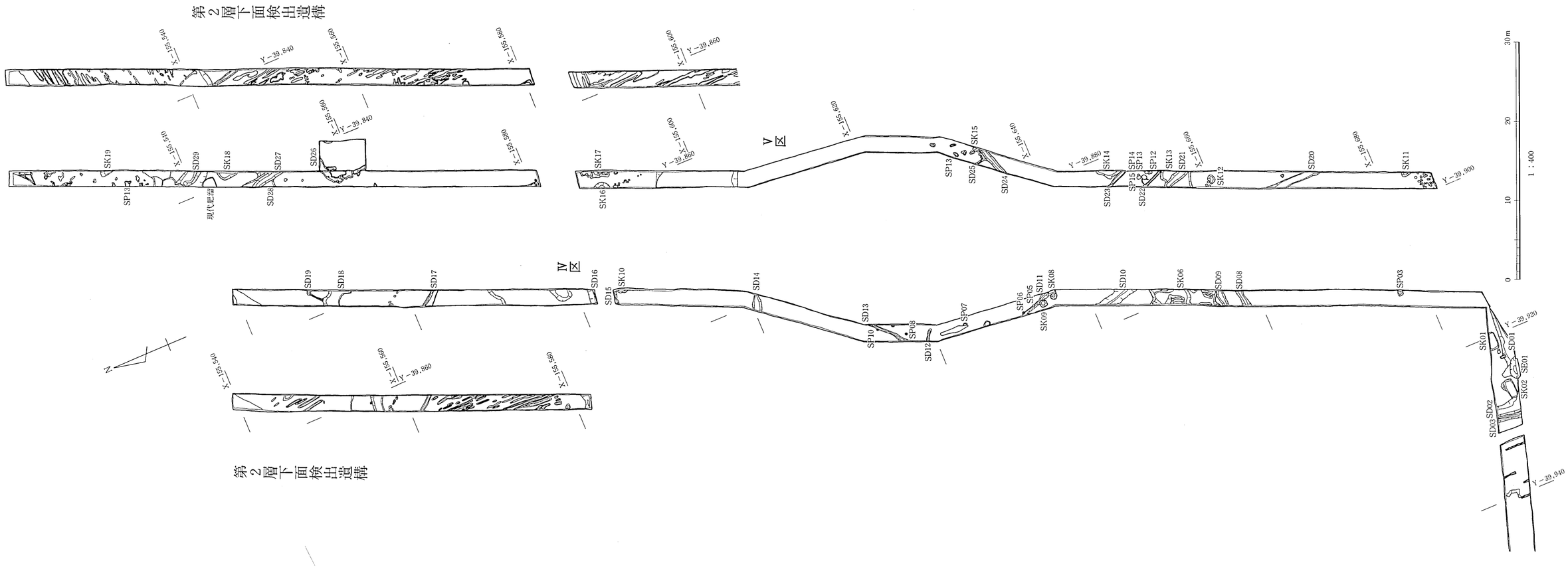


図111　Ⅳ・Ⅴ区遺構実測図

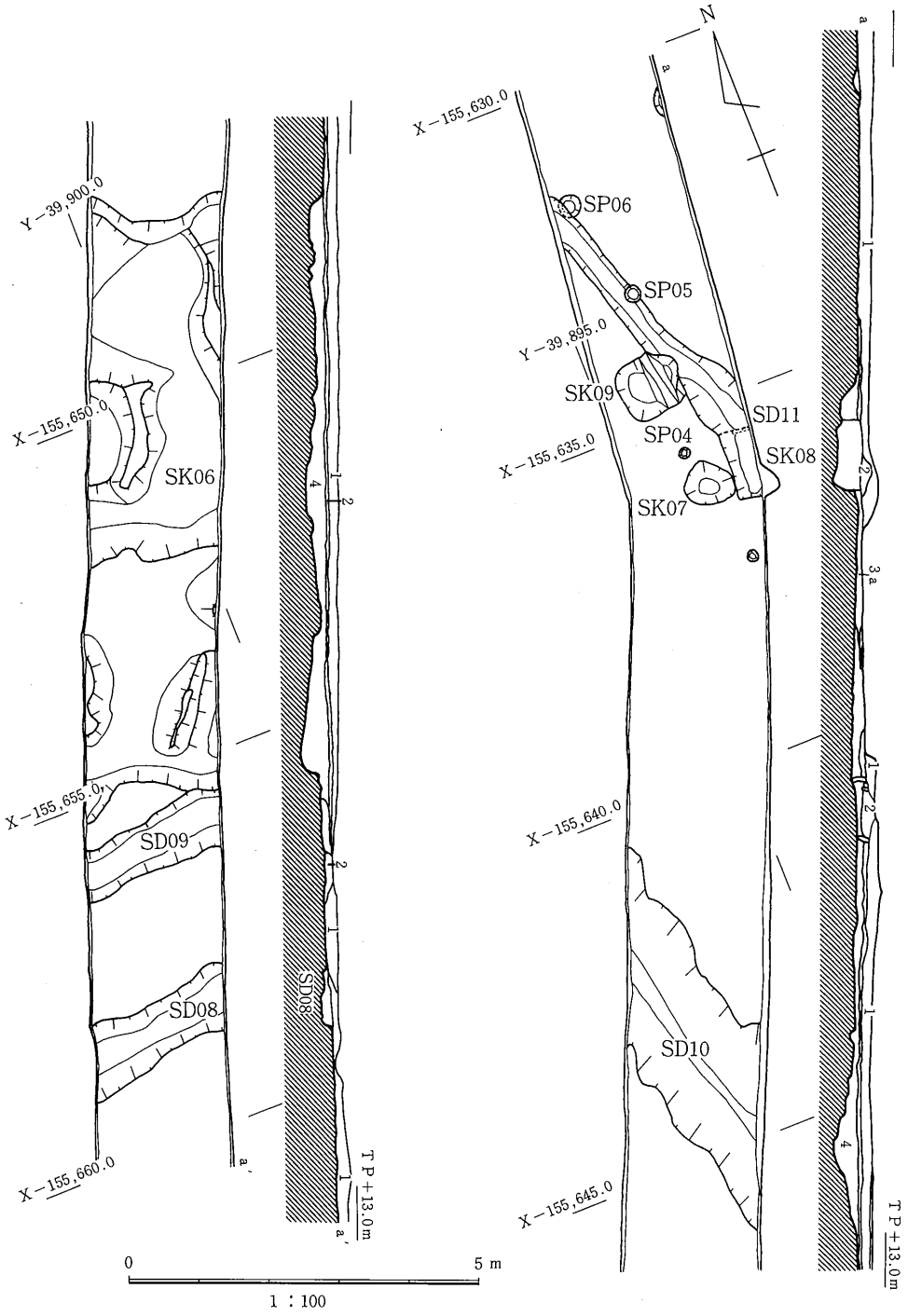


図112　Ⅳ区主要遺構実測図

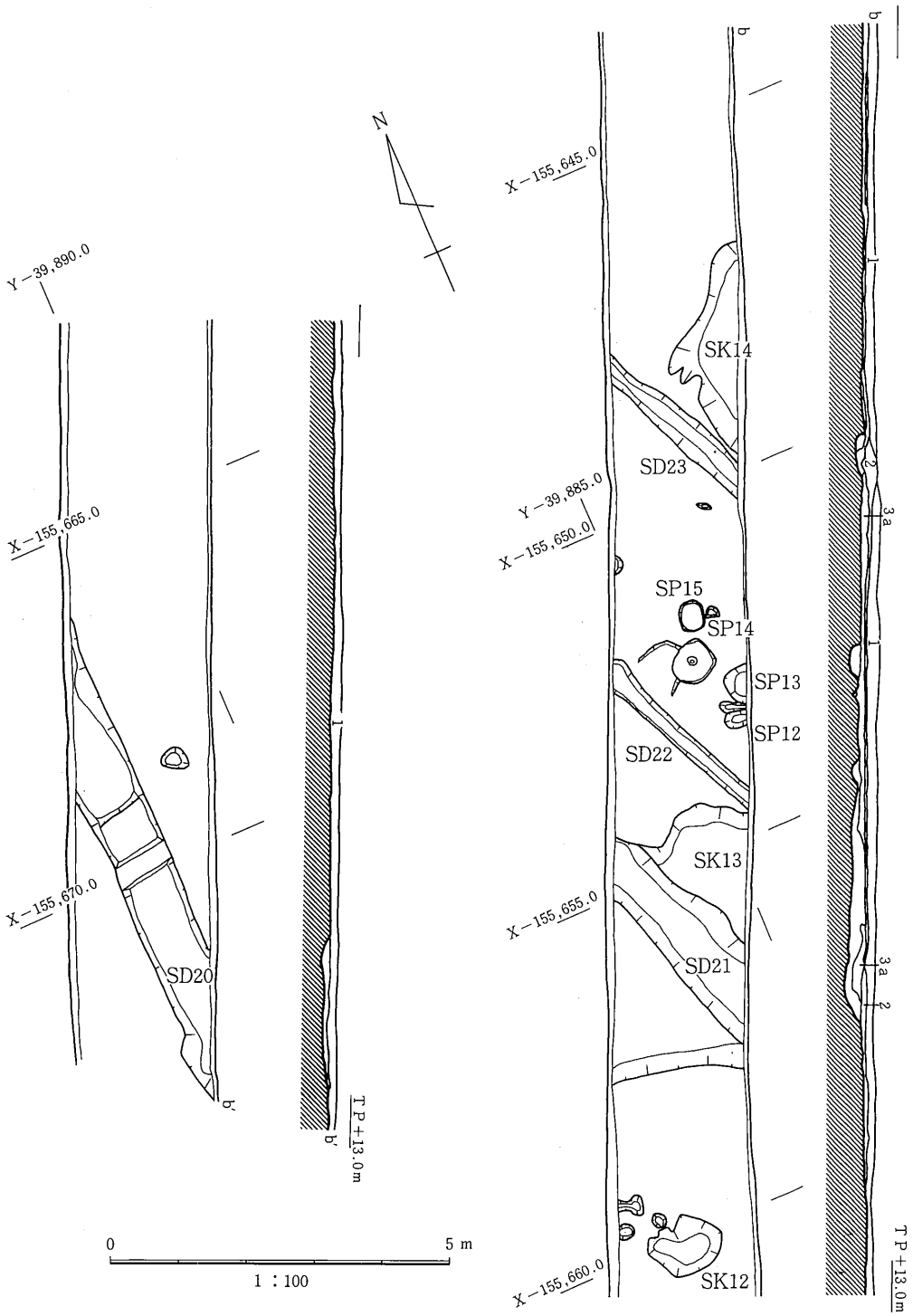


図113　Ⅴ区主要遺構実測図

Ⅴ区南部に位置し、灰白色砂混りシルトを埋土とする。SK13はSD21との切合いが断面で認められないため、SD21の肩部とも考えられる。７世紀の須恵器甕547が出土した。

ii）溝

SD06（図108、図版29）

Ⅲ区中央部に位置する幅3.0～3.6m、深さ0.3mの溝で、方位は北で19°西に振っている。黒色シルト質粘土を埋土とする。この溝を中心にして、東西幅27.5mの範囲が深さ0.10～0.35mの段をなして低くなっており、第４層で埋没している。この部分の第４層下面は踏込みによると思われる凹凸が著しい。溝埋土から遺物は出土していないが、段の埋土である第４層からは須恵器の高台をもつ杯片や土師器片が出土し、７世紀後半ころに完全に埋ったと考えられる。SD06の南延長上にあるⅠ区に同時代の溝はみられず、Ⅰ区とⅢ区の間で途切れることは確実である。

SD08・09（図111・112・115、図版63）

Ⅳ区南部に位置する溝で、両者は1.5mの間をおいて平行する。SD08は幅0.8m、深さ0.2m、断面台形で、方位は東で2°北に振る。灰白色砂混りシルトを埋土とし、出土遺物はない。SD09は幅0.7～1.0m、深さ0.3mで、方位は東で北に1°振る。灰白色砂礫混りシルトを埋土とし、７世紀代の土器が出土した。７世紀前半のものとして土師器高杯509・510、須恵器杯511・512があり、７世紀後半のものとして土師器杯508がある。

SD10（図111・112・115、図版63）

Ⅳ区中央部に位置する幅1.7m、深さ0.35mの南北溝で、北で16°西に振っている。灰白色砂礫混りシルトを埋土とする。層序の項でも述べたが、溝の北側に溝を横溢した土砂が第４層として分布している。溝内から７世紀中葉の須恵器杯513、平瓶514が出土した。

SD11（図111・112、図版29）

Ⅳ区中央部に位置する幅0.4～0.8m、深さ0.25mの南北溝で、北で17°西に振っている。灰白色粗粒砂混りシルトを埋土とする。出土遺物はないが、SD10と同じ方位を示す。

SD21～23（図111・113・116、図版31・64）

Ⅴ区南部に位置する平行して掘られた南北溝群である。SD21は幅0.7～1.0m、深さ0.3mで、方位は北で17°西に振る。埋土は灰色細粒砂混りシルトで、７世紀代の土師器羽釜539、甕542、把手540・541、須恵器杯536・537、壺538などが出土した。SD22は幅0.2～0.4m、深さ0.15mで、方位は北で23°西に振っている。埋土は灰色細粒砂混りシルトで、須恵器片を含む。SD23は幅0.4m、深さ0.15mで、北で24°西に振っている。埋土は灰色粘土

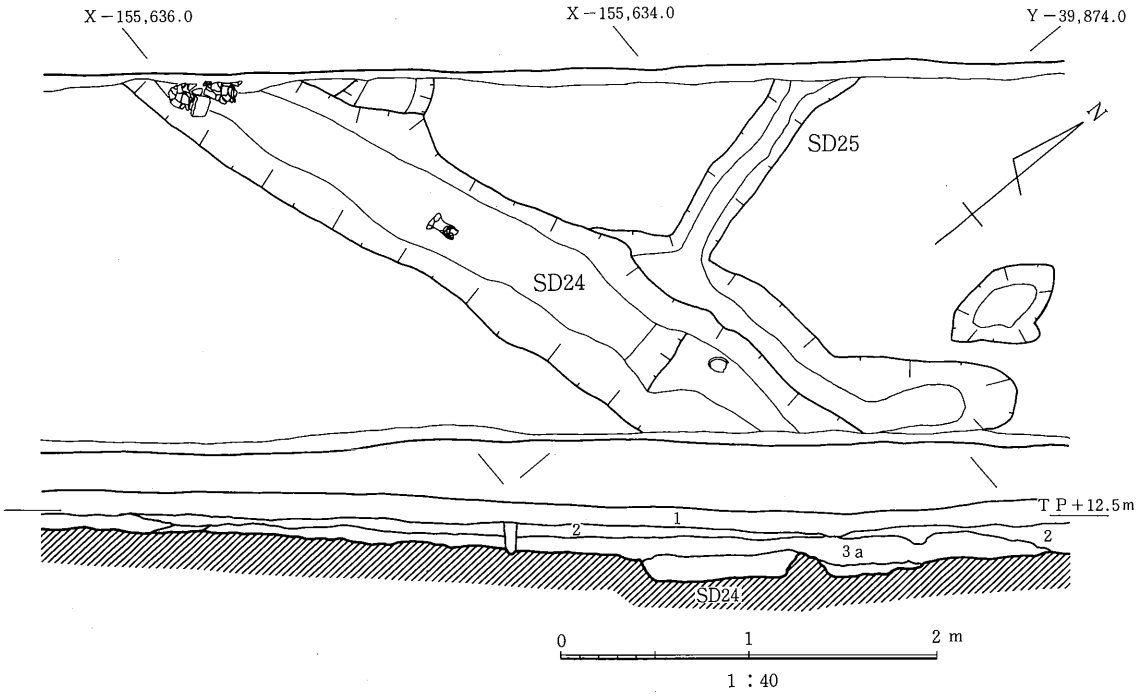


図114　SD24・25実測図

質シルトで、出土遺物はない。

SD24・25（図111・114・116、図版30・64・65）

Ⅴ区中央部に位置し、幅の広い東西溝SD24に南北方向の小溝SD25が取付いている。SD24は幅0.7m、深さ0.15mで、方位は東で17°北に振る。灰色粘土質シルトを埋土とし、7世紀後半ころの土師器鍋545、須恵器長頸壺543、壺の底部544が出土した。特に545は図版30に示したように12cm×8cm×7cmの河原石が上にのった状態で出土し、なんらかの理由でほかから運んできた石を鍋とともに投棄したと思われる。SD25は幅0.3m、深さ0.06～0.10mで、SD24との合流地点における溝底はSD24に比べて0.15mほど高い。方位は、北で12°西に振っている。埋土は灰色粘土質シルトで、遺物の出土はない。

SD27・28（図111）

Ⅴ区北部に位置し、交差する2条の溝である。南北溝SD27は東側にテラスをもち、幅1.2m、深さ0.3mを測る。方位は北で8°西に振る。埋土は下部が灰色砂混りシルトで、上部は明黄褐色シルトと灰色シルトが混在する。出土遺物はない。東西溝SD28は幅0.7m、深さ0.1mで、溝底はSD27より0.15～0.20mほど高い。方位は東で4°北に振っている。灰色砂混

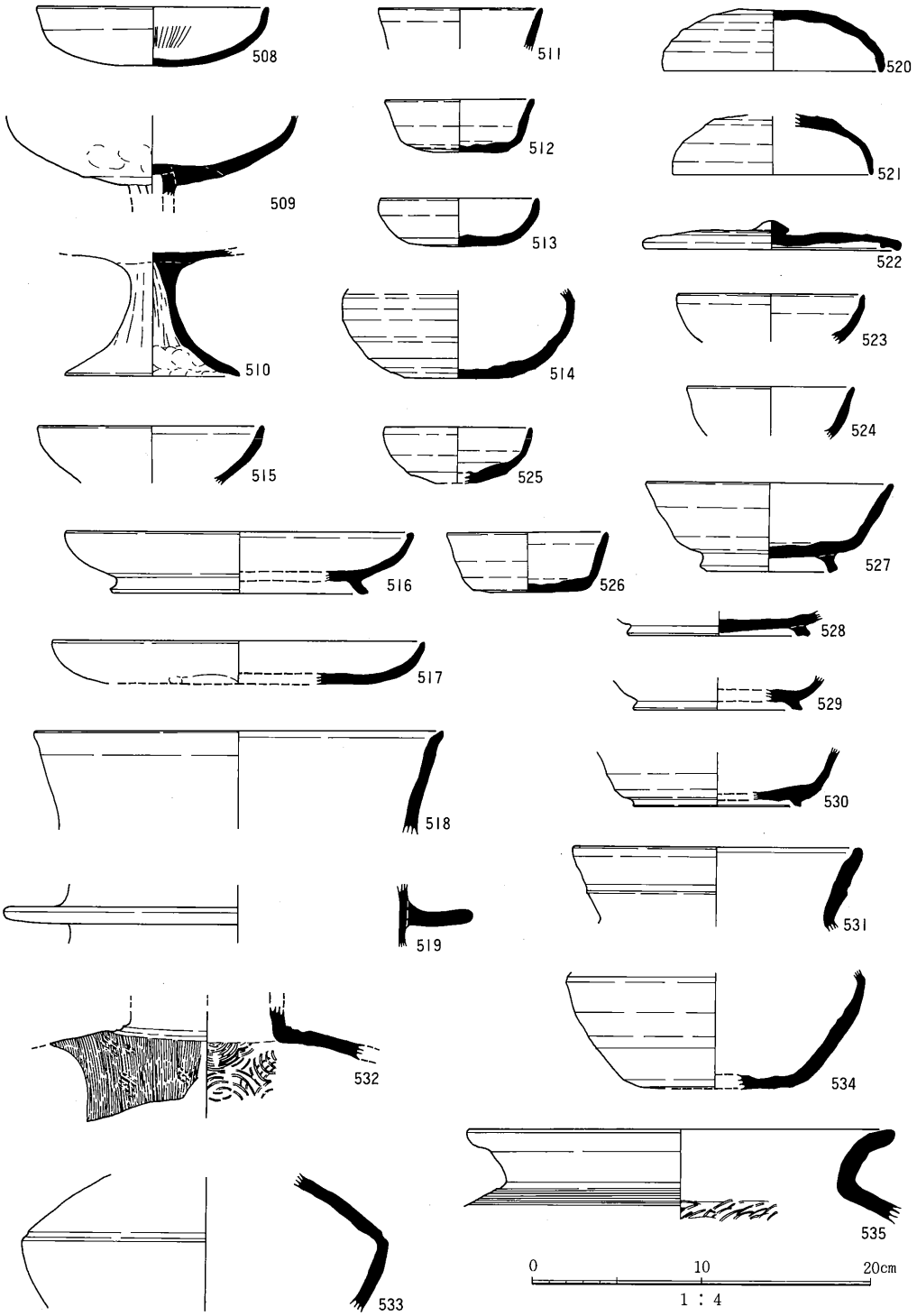


図115　Ⅳ区出土遺物
SD09（508～512）、SD10（513・514）、SK06（515～535）

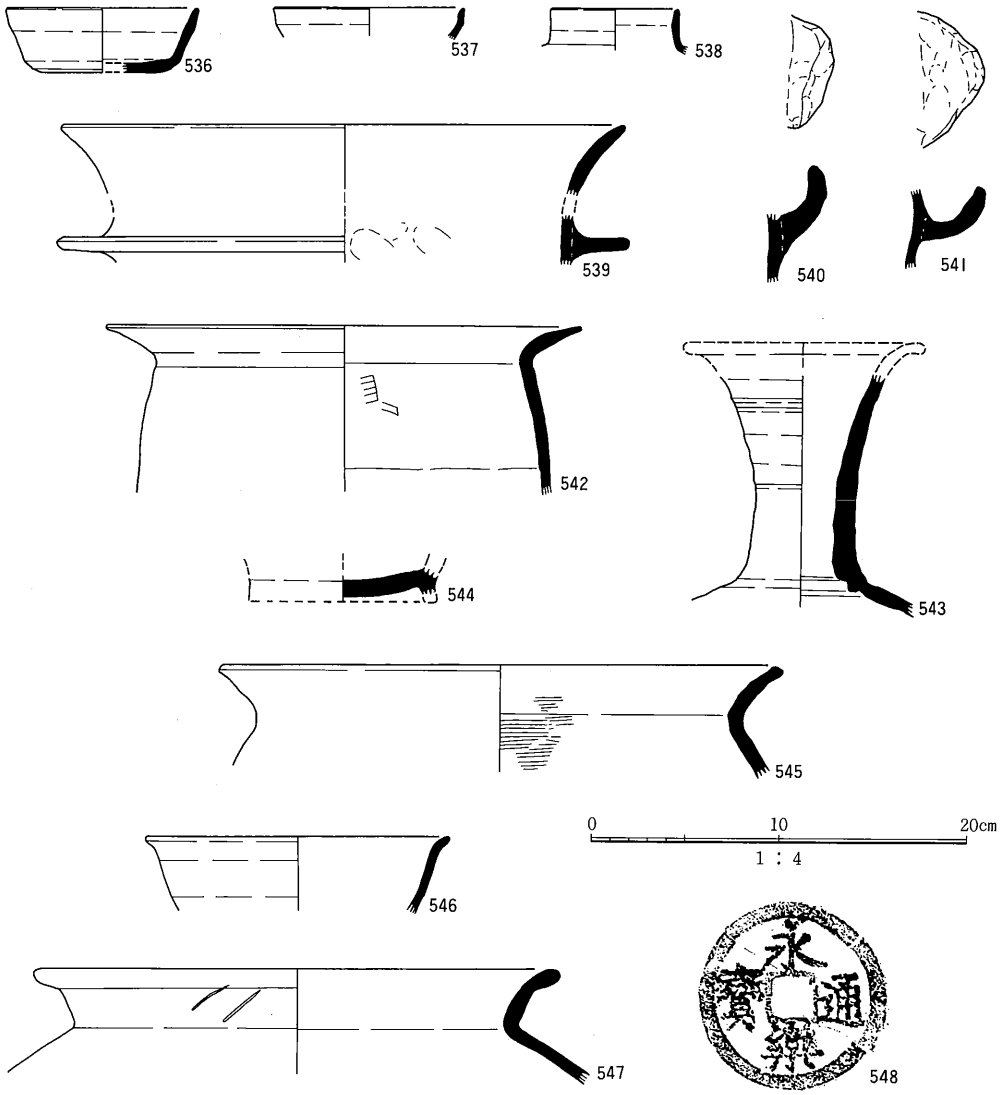


図116　Ⅳ・Ⅴ区出土遺物
SD21（536～542）、SD24（543～545）、SD20（546）、SK13（547）、Ⅳ区北部第２層下面犂溝（548［実大］）

りシルトを埋土とする。

3）中世の遺構と遺物

近世の溝SD01に切られる井戸SE01、15世紀ころの遺物を含む土壙SK18、14世紀後半～15世紀前半の青磁片を検出したSD20などがこの時期に属する可能性が高い。

SE01（図117、図版28）

Ⅰ区東部に位置する直径約3mの円形掘形の井戸で、深さは1.2m以上である。埋土は灰褐

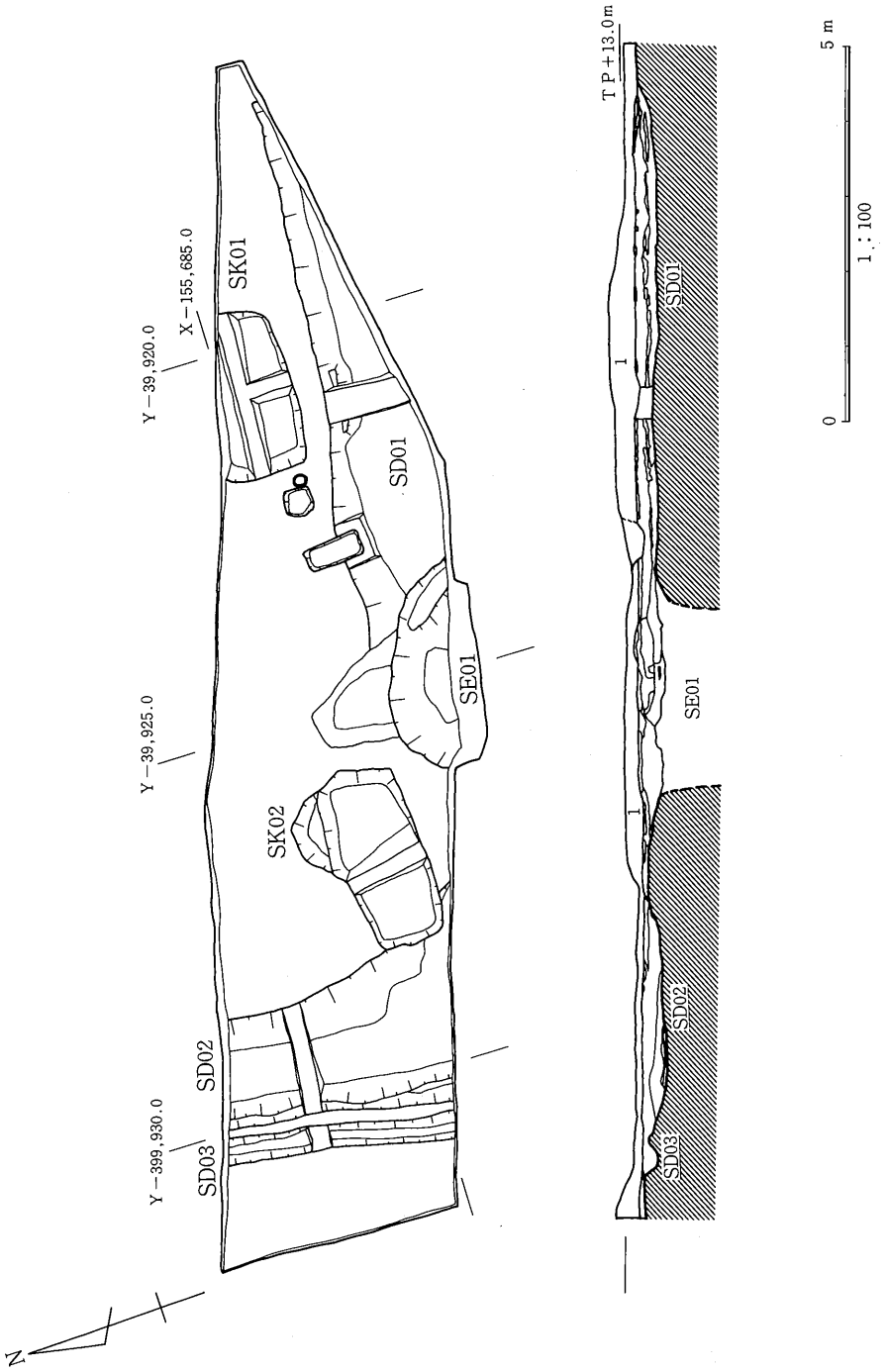


図117　Ⅰ区主要遺構実測図

写真16　SD20（南から）

色砂礫混りシルトと灰色シルト質粘土の互層で、布目瓦が出土した。埋没後に東西溝SD01に切られる。

SK18（図111）

Ⅴ区北部、第3b層下面で検出した直径2.0m、深さ0.3mの不定形の土壙で、埋土の下部は黄橙色粗粒砂混りシルト質粘土と暗褐色シルトが混り合い、上部は明黄褐色粘土質シルトである。遺物に瓦質羽釜、三足羽釜の足、丹波捏鉢、石製容器の破片、瓦器片がある。

SD20（図111・113・116・写真16、図版65）

Ⅴ区南部に位置する幅1.0m、深さ0.15mの南北溝で、北で1°西に振る。埋土は灰色細粒砂混りシルトで、14世紀後半～15世紀前半の青磁碗546のほか土師器・瓦器片が出土した。

4）時期不明の主要遺構

第4層を埋土として遺物が出土しなかった土壙と、Ⅳ・Ⅴ区の飛鳥時代の溝に伴う可能性のある土壙・ピット群、および地山層上面で確認された大きく湾曲する溝について記述する。

i）土壙

SK03・04（図108、図版28）

いずれもⅠ区中央部に位置する土壙で、第4層である灰白色砂混りシルトを埋土とし、出土遺物はない。SK03は長さ3.0m、幅2.5m以上の方形を呈し、深さは0.05～0.10m、SK04は長さ1.8m、幅0.8m以上、検出した範囲では半円形で、深さは0.10～0.25mを測る。

SK07～09（図111・112、図版29）

いずれもⅣ区中央部のSD11の南側に位置し、SK08・09はSD11の埋没後に掘られてい

る。埋土は灰色～灰褐色砂礫混りシルトで、遺物は出土しなかったが、埋土が第４層に似ていることから、SD11との関連が考えられる。SK07は直径0.7mの円形で、深さは0.2m、SK08は一辺1.0mの方形で、深さ0.4m、SK09は1.0m×0.8mの隅丸方形で、深さ0.9mである。

SK11・12（図111・113）

Ｖ区南部に位置し、灰白色砂混りシルトを埋土とする。SK11は直径1.2mの不定形で、すり鉢状を呈する。深さは0.2mである。SK12は0.9m×1.1mの楕円形で、深さは0.1mである。土師器片が出土した。

SK15（図111、図版30）

Ｖ区中央部のSD24の北に位置し、直径1.0m、深さ0.2mで、SD24の埋土と同じ灰色粘土質シルトを埋土とする。

SK19（図111）

Ｖ区北部に位置する。長さ1.5m以上、幅1.0m、深さ0.2mで、第４層の灰色砂礫混りシルトを埋土とし、出土遺物はない。

ii）溝

SD04（図108）

Ｉ区中央部の第3a層基底面で検出された。直径2.5mの円を描くように掘られた幅0.5m、深さ0.15mの溝で、北東部が幅1.0mにわたって途切れている。黒褐色粘土質シルトを埋土とし、出土遺物はない。

SD26（図111、図版31）

Ｖ区北部の第3b層基底面で検出された。幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.2mの溝で、北で1°東に振る方向の南北溝が屈曲して、東で30°北に振る方向にのびるようである。橙色シルト質粘土（地山層）と灰色粗粒砂混りシルトの混合土を埋土とする。拡張して調査したが、遺物は出土しなかった。

iii）ピット

SP01（図108）

Ｉ区西端に位置する一辺0.20～0.28m、深さ0.2mの隅丸方形を呈するピットである。埋土は黒褐色砂混りシルトである。遺物は出土しなかったが、西側約50mに位置する７世紀後半の建物群（NG84－24次調査）、南西25mの調査地でも検出した柱穴（UR86－11次調査）との関連が注意される。

SP03（図111）

Ⅳ区南部に位置する一辺0.2m、深さ0.2mの隅丸方形のピットで、灰褐色シルトを埋土とする。土師器片が出土した。

SP04～07（図111・112、図版29）

Ⅳ区中央部に位置する直径0.15～0.40mのピットである。SP05・06は1.5mの間隔をおいてSD11の北肩に接して存在することから、SD11に伴う杭跡と考えられる。

SP11～15（図111・113、図版31）

Ⅴ区南部のSD22・23の間に存在する直径0.2～0.4m、深さ0.10～0.15m、埋土が灰色細粒砂混りシルトのピットである。

5）近世の遺構と遺物

上記以外の遺構番号を付した遺構は、近世のものである可能性が高い。主要な遺構のみを記述する。

SK01・02（図117、図版28）

Ⅰ区東部の第2層下面で検出した長方形を呈する土壙である。SK01は長さ2.2m、幅1.2m、深さ0.85mであり、底面は平坦である。埋土は灰色砂混りシルトで、布目瓦・土師器片が出土した。SK02は長さ2.5m、幅1.2mの長方形を呈し、深さは0.50～0.75mでやや中央が深くなっている。埋土は灰色砂混りシルトで、近世瓦・須恵器片が出土した。両者とも素掘りの野壺と思われる。

SD01～03（図117、図版28）

いずれもⅠ区東部の第2層を埋土とする溝である。SD01は幅1.5m以上、深さ0.2mの東で1°南に振る東西溝で、灰色砂礫混りシルトに灰色粗砂が挾在する埋土をもち、近世瓦・須恵器片が出土した。SD02は幅1.3～2.1m、深さ0.35mで、北で6°東に振る南北溝である。下部に灰褐色砂礫が堆積し、上部は灰色砂礫混りシルトで埋っている。SD03は幅0.3m、深さ0.2mで、北で10°東に振る南北溝である。調査区内ではSD02に沿うように掘られている。埋土は灰色砂礫混りシルトで、遺物は染付磁器のほかに布目瓦・須恵器片がある。

SD29（図111）

Ⅴ区北部に位置し、第3a層上面で検出した。上端幅3.0m、下端幅0.6m、深さ1.0mで、断面は台形を呈する。方位は北で35°西に振る。埋土は灰色シルト混り粘土と黄橙色粘土の互層である。遺物は出土しなかった。

６）小結

すでに述べたように調査地は丹北郡条里の６条４里内にあたり、周辺に正方位方向の地割が多く残る。この地割の始源は漠然と古代の条里地割の遺存と考えられるだけで、考古学的に検証されたものではなかった。最近の調査成果では遺物・遺構などから、少なくとも７世紀代の地割の方向は北で西に振っていることが確認されている。

図118は1688（貞享５）年の『東瓜破村下絵図』を写したもので、調査地は東西方向の道と水路に挟まれている。これによっても正方位の地割は近世前期まではさかのぼりそうである。今回の調査で溝が30条近く検出されたので、溝の方位をもとに地割の方位の変遷をみておきたい。

表9は出土遺物や検出した層準などによって、溝を時代ごとに括ったものである。中世の溝SD20はほぼ正確な南北方向に掘られた溝とみてよいから、15世紀には現在の地割の方位が成立していた可能性はある。近世の溝で正方位から大きくずれたものとして、SD12～14・17～19・29があるが、SD18・29以外はいずれも幅0.5m以下と細く、灌漑用に便宜的に掘られた溝の可能性が高いので無視できると思われる。一方、SD18とSD29は標高の高い水田と低い水田の間の段に沿って掘られた溝であることから、自然地形の規制による振れと思われる。近世はSD01やSD02にみられるように、全体として15世紀以来の正方位の地割を踏襲したと考えられる。

15世紀以前の遺構としては、大きくさかのぼって７世紀代のものしか残っていない。これは、調査地における中世末～近世の開発

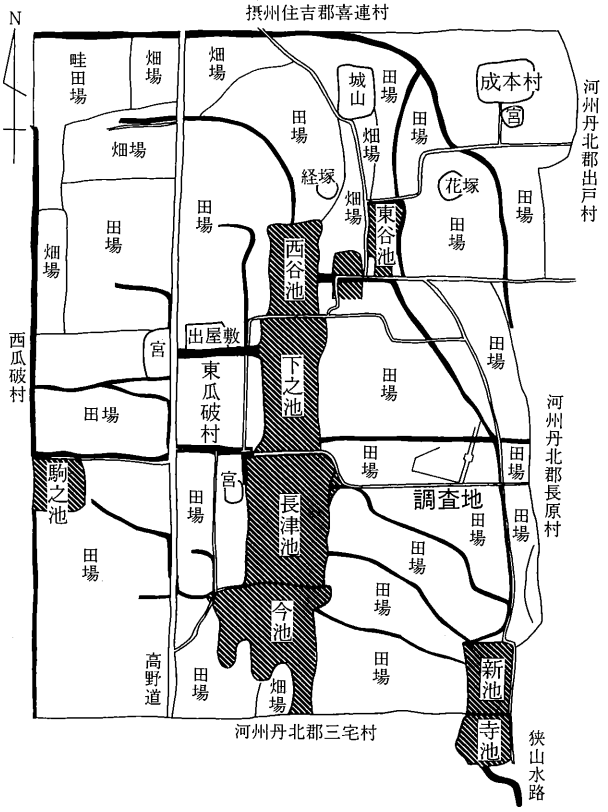


図118　近世前期灌漑水系と調査地
1688（貞享5）年『東瓜破村下絵図』

表9　瓜破東南地区溝一覧表

	地区	方　位	幅(m)	遺　　物	備　　考
SD06	Ⅲ	N19° W	3.0～3.6	土師器、須恵器片	7世紀後半に埋没
SD08	Ⅲ	E2° N	0.8	なし	SD09と平行
SD09	Ⅳ	E1° N	0.7～1.0	土師器高杯509・510・杯508、須恵器杯511・512	7世紀後半に埋没
SD10	Ⅳ	N16° W	1.7	土師器片、須恵器杯513・平瓶514	7世紀中葉に埋没
SD11	Ⅳ	N17° W	0.4～0.8	なし	SD10と平行
SD21	Ⅴ	N17° W	0.7～1.0	土師器羽釜539・甕542・把手540・541、須恵器杯536・537・壺538	7世紀後半に埋没
SD22	Ⅴ	N23° W	0.2～0.4	須恵器片	SD21と平行
SD23	Ⅴ	N24° W	0.4	なし	SD21と平行
SD24	Ⅴ	E17° N	0.7	土師器鍋545、壺543・544、河原石	7世紀後半に埋没
SD25	Ⅴ	N12° W	0.3	なし	SD24に合流、同時存在
SD27	Ⅴ	N8° W	1.2	なし	SD28と交差
SD28	Ⅴ	E4° N	0.7	なし	
SD20	Ⅴ	N1° W	1.0	青磁546、土師器、瓦器片	1層基底面検出
SD01	Ⅰ	E1° S	1.5以上	近世瓦、須恵器片	埋土は2層
SD02	Ⅰ	N6° E	1.3～2.1	瓦器、土師器、須恵器、布目瓦片	埋土は2層
SD03	Ⅰ	N10° E	0.3	染付磁器、須恵器、布目瓦片	埋土は2層
SD05	Ⅰ	N5° W	0.1	須恵器片	3a層上面検出　埋土は灰褐色細砂混りシルト
SD07	Ⅲ	N1° E	0.2	瓦器、土師器、須恵器片	2層下面検出　埋土は灰褐色砂礫混りシルト
SD12	Ⅳ	E38° S	0.2	なし	1層基底面検出　埋土は灰色シルト
SD13	Ⅳ	E42° N	0.2	なし	3a層下面検出　埋土は灰色シルト
SD14	Ⅳ	E21° S	0.5	須恵器片	3a層下面検出　埋土は灰褐色砂礫混りシルト
SD15	Ⅳ	E11° S	0.3以上	なし	埋土は2層の灰褐色砂礫混りシルト
SD16	Ⅳ	E10° S	0.9以上	土師器、須恵器、近世瓦片	3a層上面検出　埋土は灰色砂礫混りシルト
SD17	Ⅳ	N37° W	0.3	なし	3b層下面検出　埋土は灰色シルト
SD18	Ⅳ	N45° W	1.8	須恵器片	3b層下面検出　埋土は灰色砂混り粘土質シルト
SD19	Ⅳ	E40° N	0.4	なし	3b層下面検出　埋土は灰白色シルト
SD29	Ⅴ	N35° W	3.0	なし	3a層上面検出
SD04	Ⅰ	円形を描く	0.5	なし	3b層基底面検出
SD26	Ⅴ	N1° E・E30° N	0.6～1.0	なし	3b層基底面検出

によって、古代～中世の浅い遺構が消滅したことによると思われる。そこで7世紀代の地割の様相をながめると、東の長原遺跡でみつかったほぼ正確に東西方向を示す大畦畔は7世紀後半に築かれたと考えられ［黒田慶一1986、京嶋覚1990］、近隣地では7世紀後半ころ、すでにほぼ正確な東西方向の地割は成立していたと思われる。当調査地でも7世紀後半の遺物を伴う溝としてはSD09などがこの方向に近い。しかし、一方で調査地西側の建物群では7世紀後半の南北棟建物が北で西に5°振っているなど、はたして正確な南北方向の地割が広範囲に成立していたと確言するには、調査区の狭隘さもあり、根拠に乏しい気がする。ただ、7世紀前半の建物群が北で西に6°30′～18°30′振っているのに比べて、7世紀後半の建物は5°というように、振れが小さくなっているのも注意される。

ゆえに瓜破遺跡においても将来の発掘調査によって、正確な南北方向の地割の成立が7世紀代にさかのぼることを証明できる遺構が検出される可能性は高いと思われる。

（黒田）

註）

（1）第Ⅰ章第1節の註1参照

第３節　長原遺跡南地区の調査（83－46・52次調査）

１）南地区の層序と遺物

調査地は第Ⅰ章の図5で示したようにⅠ～Ⅳ区に区分し、以下の記述を行う。Ⅰ・Ⅱ区は83－46次調査、Ⅲ・Ⅳ区は83－52次調査である。

ｉ）Ⅰ・Ⅱ区の層序（図119）

第Ⅱ章に示した長原遺跡標準層序に対比させ、以下にⅠ・Ⅱ区の層序を述べる。

沖積層上部層Ⅰ

長原１層：現代の作土層である。

長原２～３層：黄褐色砂礫層・灰茶色礫混りシルト層で、本層下面で南北方向の素掘り小溝群が多数検出されたことから、水田もしくは畠の作土層と思われる。Ⅱ区東半部は層厚40～60cmの水成の黄褐色細粒砂～砂礫層となる。

長原4B層：灰茶色粘土質シルトの作土層で、層厚はⅠ区で10～38cm、Ⅱ区で20cmである。上面には部分的に薄く長原4A層相当の細粒砂層がみられるが、おおむね上位層に同化している。

長原５層：Ⅰ区においては黄色極細粒砂層で、上部が作土層である長原4B層に同化したため、層厚は5～10cmと薄く、西南端部に部分的にみられるのみである。Ⅱ区では黄灰色砂礫～粗粒砂層で、層厚は15～20cmである。

長原6A層：緑灰色細粒砂～シルト層であり、層厚は5～10cm程度である。

長原6B層：暗灰色粘土層で、層厚は10～15cmである。

長原7A層：黒灰色シルト質粘土層である。部分的に残存するが、ほとんどは長原6A・６B層の水田作土によって掘削されている。

沖積層下部層

長原13層：Ⅰ区ではTP＋10.5m、Ⅱ区はTP＋10.9m前後で検出される灰白色シルト～粘土層である。

ⅱ）Ⅳ区の層序（図119）

沖積層上部層Ⅰ

長原１層：現代の作土層である。

長原２～３層：茶灰色～黄灰色の砂混りシルト層である。

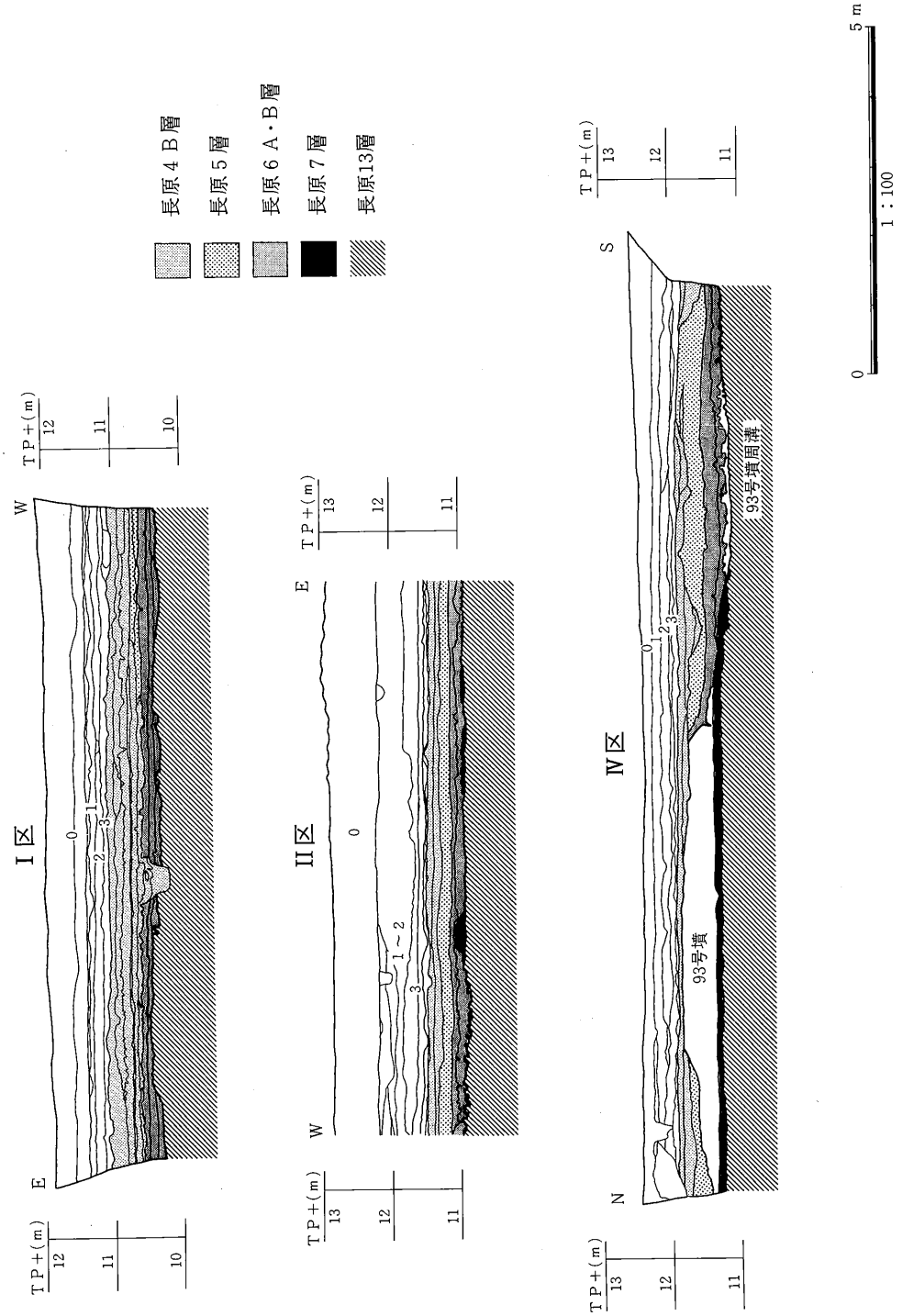

長原４Ｂ層
長原５層
長原６Ａ・Ｂ層
長原７層
長原13層
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅳ区
W
E
S
N
TP+(m)
93号墳周溝
93号墳
0
5 m
1：100

図119　調査地の層序

長原4B層：茶灰色砂混りシルト～淡灰黄色砂混り粘土質シルト層である。古代末～中世にかけての作土であったと思われ、上部は酸化鉄が沈着し、橙色をおびている。古墳の墳丘はこの時の耕作により基底部を残して削平されている。

長原５層：暗茶灰色粗粒砂～砂礫層で、層厚が30～40cmの水成層である。

長原6A層：層厚20cmの淡灰色粘土層で、作土層である。上面で畦畔が検出された。

長原6B層：灰色粘土層である。上面は攪拌されており、明確な遺構は検出できなかった。古墳の周溝内には、最大厚10cmで黒灰色粘土層が堆積している。

沖積層上部層Ⅱ

長原7B層：固くしまった層厚10cmの黒褐色シルト層である。本層は長原６A・６B層の耕作により掘削されている個所が多く、古墳の墳丘盛土の下以外には残っていなかった。

沖積層下部層

長原13層：灰白色砂混りシルト層で、TP＋11.2m前後で検出された。

iii）長原４層出土遺物（図120）

Ⅰ区の長原４層から551～554が出土した。須恵器高杯553は脚端部の復元径約11.0cmで、緩やかに開いた裾部および脚端部に断面三角形の突帯を巡らせる。杯554は高台の復元径が11.8cmである。色調はいずれも灰色～灰白色を呈し、焼成は良好である。土師器皿551は復元径8.9cm、器高1.5cmで、口縁端部を軽く外反させる。底部外面はユビオサエで形を整えている。黒色土器A類椀552は底径8.0cmである。下部がやや肥厚した断面台形の高台をもつ。焼成は良好で、外面は灰黄色を呈する。

Ⅳ区の長原４層から出土した550は口径7.2cm、器高2.8cmの土師質の手捏ね土器である。外面は全体をユビオサエとし、内面はナデで形を整えている。口縁はやや細めに丸くおさめる。焼成は良好で、ややにぶい橙色を呈する。

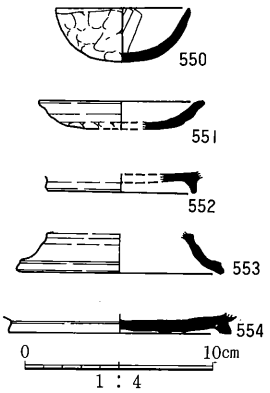


図120　長原４層出土遺物
Ⅰ区（551～554）、Ⅳ区（550）

２）古墳時代の遺構と遺物

i）90号墳（図121・122・123、図版32・66）

Ⅰ区北半部に位置する。墳丘の一辺が約6.7mの方墳である。長原６層の水田耕作により、墳丘の各辺はともに1.5m程度内側まで削平されている。さらに墳丘中心部も平安時代

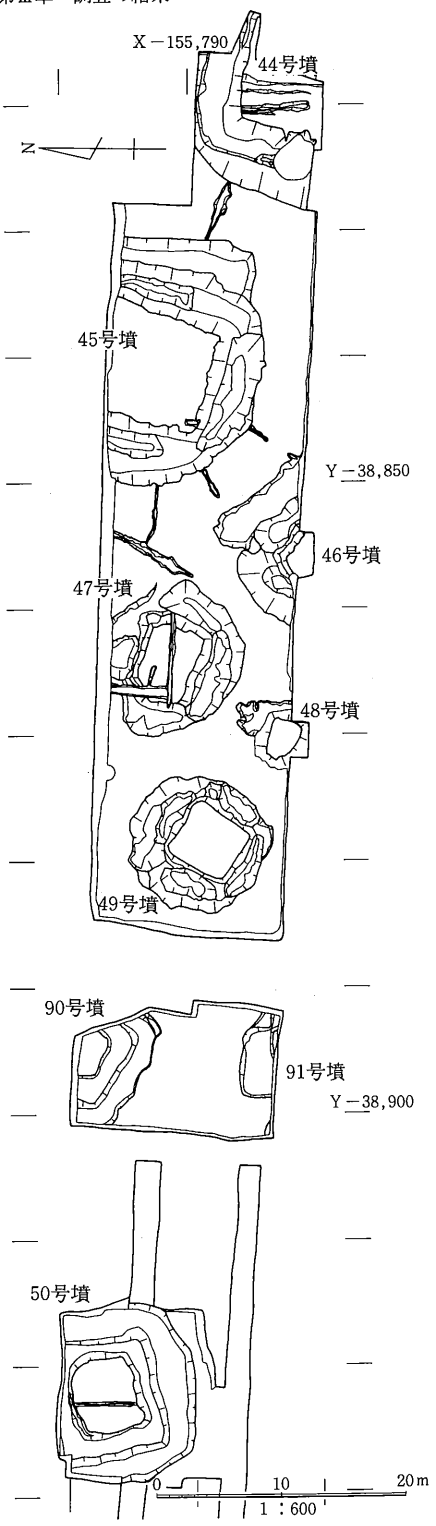


図121　Ⅰ区周辺古墳配置図

以降（長原4B層）の耕作により完全に削平されており、厚さ15～20cmの盛土が残されているのみであった。周溝は幅1.5～2.0mで、深さは0.10～0.15mである。出土遺物は円筒埴輪がほとんどであるが、ほかに朝顔形埴輪や須恵器の甕が出土している。

555は墳丘上面から出土した須恵器甕で、二つの破片を図上で復元したものである。口径14.1cmで、口縁部は緩やかに外方に開き、端部付近とその下方に断面三角形の稜線を引き出す。体部は器表面を平行タタキで成形したのちヨコナデ調整し、内面はていねいなナデで同心円当て具痕を消す。胎土は精緻で焼成もよい。色調は青灰色を呈する。

円筒埴輪は多数出土したが、いずれも小片であった。接合できるものもほとんどなかったが、口径20～25cm、底径10～17cm程度の小型のものが多いようである。外面調整は5～6条／cmのタテハケのみのもの556～559・563と、二次調整として6条／cmのB種ヨコハケ［川西宏幸1978］を施すもの561がある。562はタガの上方は18～20条／cmの細かいヨコハケであるが、下方は左上方へのナデのみである。

口縁部を残す560は左上がりのナナメハケ（7～8条／cm）を全面に施したのち、上部をヨコナデする。また、ヘラによる線刻および先の尖った工具による刺突がみられる。内面調整はユビナデのもの556・558・559・562、タテハケのもの557・561のほかに、ヨコハケののちにナデを施す560や、タテハケののちにナナメハケを併用す

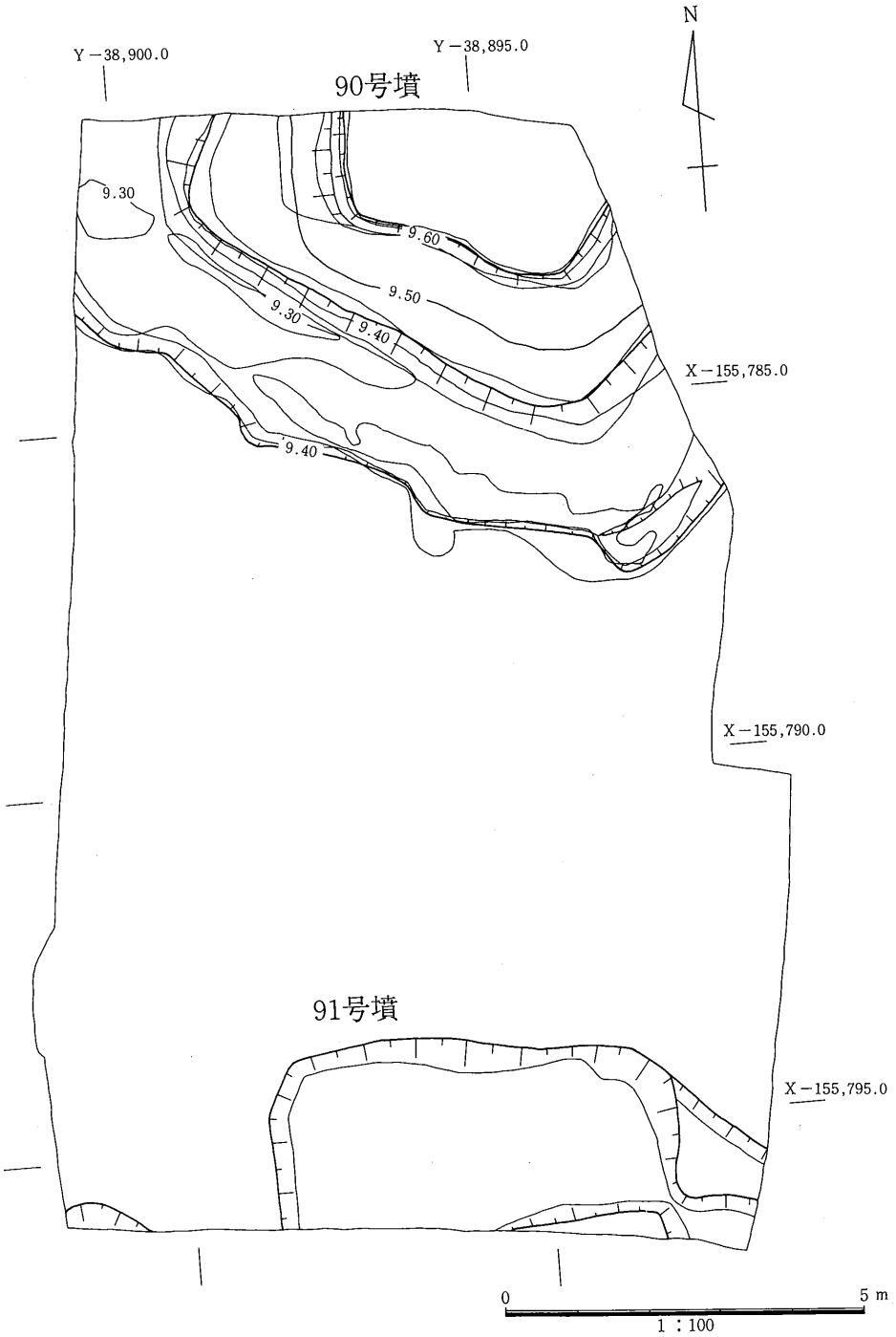


図122　90・91号墳実測図

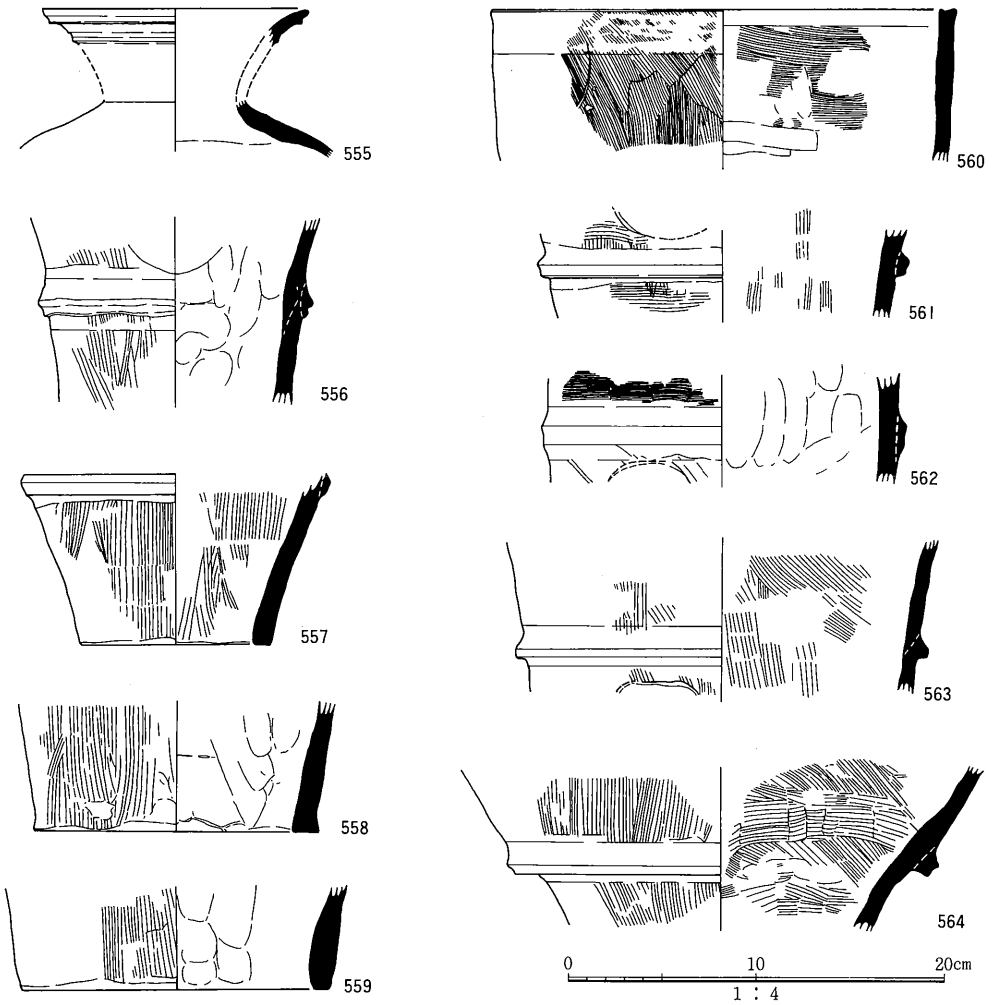


図123　90号墳出土遺物

る563などがある。タガはいずれも「M」字形もしくは低い台形の断面形で、ヨコナデにより接合している。スカシ孔は556・561～563にみられ、直径5～6cm程度の円形のものである。胎土はいずれも長石を含み、557が灰白色を呈するほかは淡黄色～にぶい橙色を呈する。焼成は557と563がややあまいが、他はおおむね良好である。

また、朝顔形埴輪の口縁部564が１点のみ出土した。外面調整は5～6条／cmの粗いタテハケのみであるが、タガの接合部はヨコナデとする。内面調整は左上方へのナナメハケののち、一部にヨコハケやナデが認められる。焼成・胎土ともに円筒埴輪とよく似ているが、1点で、しかも上位の長原６層からの出土である点を考慮に入れれば、この古墳に伴うも

のとは断定できない。

ii）91号墳（図121・122、図版32）

Ⅰ区南端部に位置する古墳で、北周溝を検出した。周溝の幅は2.2～3.0mである。長原６層の水田耕作によって削平されているため深さは明確でないが、最深部で0.07m程度である。ただし、コーナー部分は浅くなっており、特に西北隅はほとんど凹みが検出できなかった。墳丘のほとんどが調査地外にあるため、規模は明らかでないが、周溝の東西幅から推測して、90号墳よりやや大型になるものと思われる。明確に91号墳に伴うと断定できる遺物は出土していない。

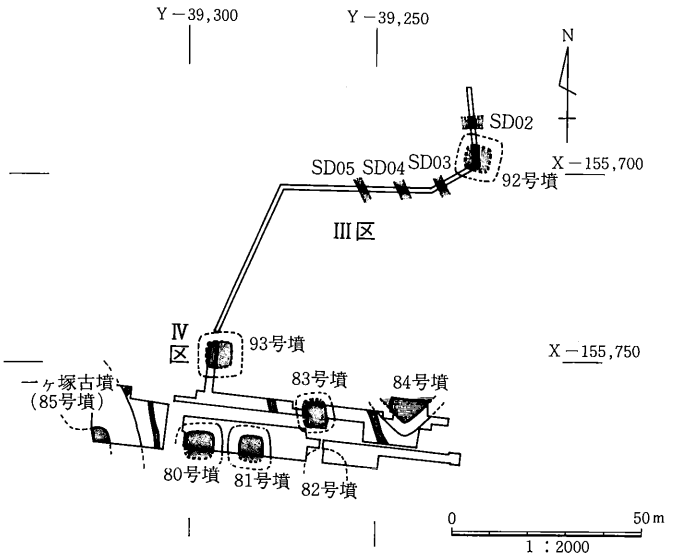


図124　Ⅲ・Ⅳ区周辺古墳配置図

iii）92号墳（図124）

Ⅲ区東端部に位置する。下水道工事の掘削時に墳丘の盛土が確認できただけであるため、正確な規模は明らかでないが、墳丘の一辺が8m程度の方墳と思われる。長原7B層の上面に厚さ20～25cmの墳丘盛土が残存していた。北でやや東に振った方位をもつ。古墳に伴う遺物が採集されていないため、正確な時期は明らかでない。

iv）93号墳（図124・125・127、図版34）

Ⅳ区南端部に位置する。墳丘上面は中世以降の耕作による削平を受けており、盛土は0.5m程度が残されているのみであった。また、長原６層の水田耕作によって墳丘周囲はかなり削り込まれており、検出された墳丘は不整形を呈している。墳丘盛土のベースとなる長原7B層は、水田耕作により削平されていたため墳丘部以外はほとんど残っていなかった。また、周溝も深さ0.05m程度のわずかな凹みが残っていただけであるが、これによると、墳丘の示す方位はほぼ正方位である。墳丘斜面から、円筒埴輪の小片が１点のみ出土した。

565は口径18.2cmに復元される円筒埴輪の口縁部片である。外面には左上がりのきわめて

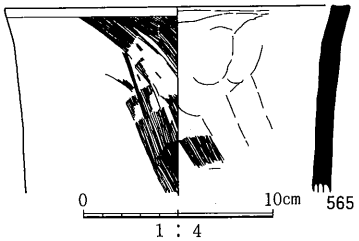


図125　93号墳出土遺物

細かいハケもしくはナデの痕跡が認められる。内面は指で縦方向にナデ調整しており、端部付近はユビオサエとする。口縁部はまっすぐにのびて、上端部はヨコナデにより浅く凹んでいる。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。１点のみの出土であるため、この古墳に伴うものかどうかは不明である。

前年度に行われた南隣接地の82－27次調査では、一ケ塚古墳と命名した東西長45mと推定される古墳を中心に、５基の小方墳が検出されている［大阪市文化財協会1990D pp.83-136］。93号墳もこのグループに属するものであろう。

３）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

ｉ）水田（図126・127・130、図版33・34）

Ⅰ・Ⅱ区で、長原6A層と長原6B層の２層の作土層が確認されたが、遺構として検出できたのはⅠ区の長原6A層上面の水田畦畔のみである。

南北の畦畔は、北端がやや東方に湾曲しながら91号墳の西南隅に取付き、東西の畦畔とは調査地のほぼ中央で交差している。畦畔の規模はほぼ同じで、下端0.3～0.5m、上端0.15～0.20m、高さ0.07～0.12mの台形断面を呈する。東西方向の畦畔は一直線には通らず、ややくい違いをみせている。交点部分は意図的に低く踏み荒された状況を呈する。水口を意識したものであろう。

Ⅳ区では、長原6A層を作土とする水田遺構が検出された。畦畔は93号墳の墳丘南西隅に取付き、南西方向にのびている。下端0.6m、上端0.25～0.30m、高さ0.1m前後の台形の断面をもつ畦畔である。長原6A層の上面には足跡と思われるおびただしい凹みがみられた。南隣接地の調査では、長原6A・6B両層の上面で水田畦畔や溝が検出されている（図128）。

Ⅱ区南トレンチから形象埴輪の小片568が、またⅡ区北トレンチから須恵器杯569および甕570が出土した。

568は形状からみて、衣蓋形埴輪の立飾りと思われる。外縁に沿って２条の線刻がなされ、その内側にさらに２条が交差するように加えられている。焼成は良好で黄褐色を呈する。569は底部の１／４程度が出土した。断面台形の高台で、復元高台径は11.8cmである。570は口縁の復元径が17.2cmで、端部はやや尖りぎみに丸くおさめ、直下に稜線を１本巡らす。内面には自然釉がかかる。569・570ともに焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。

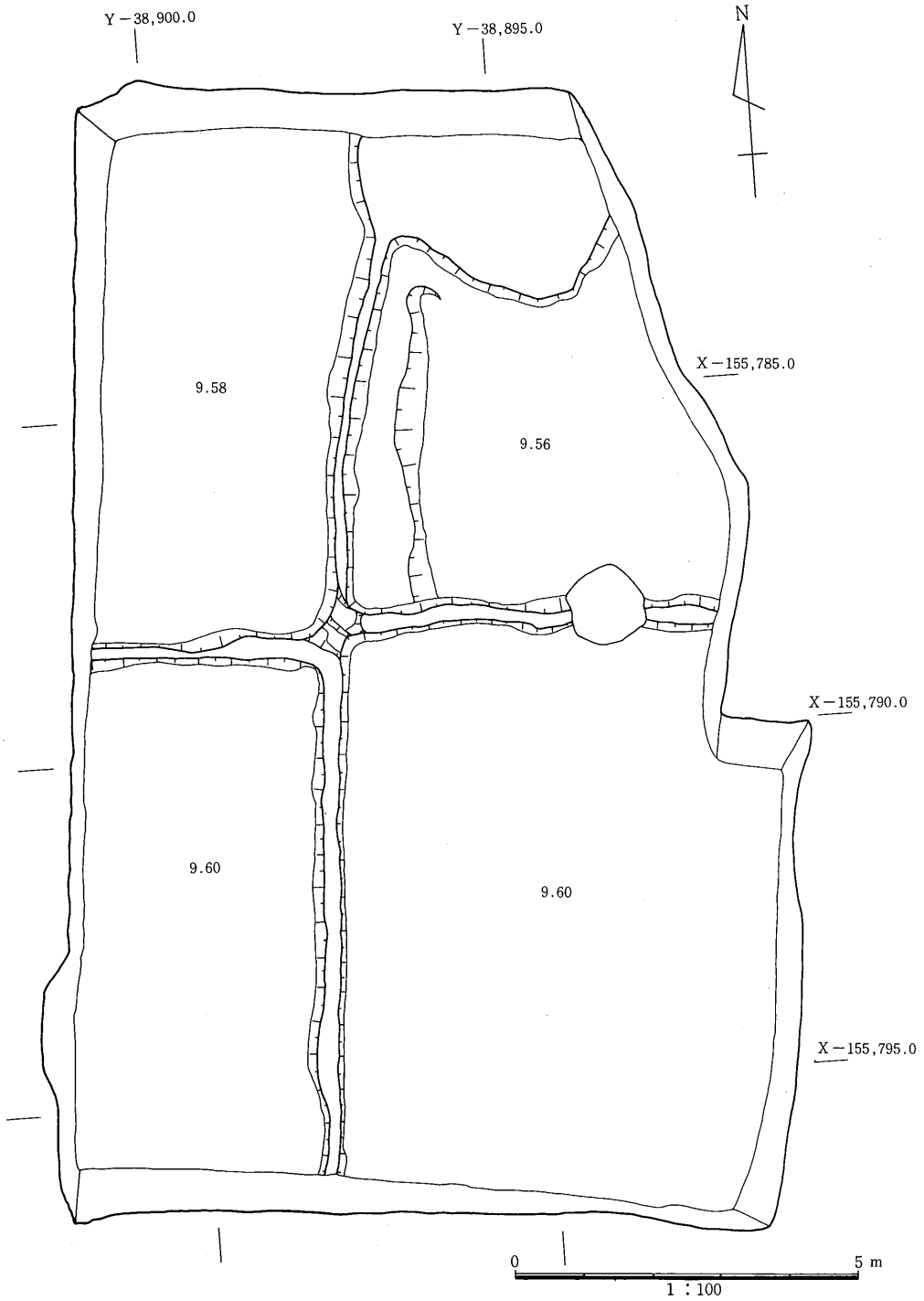


図126　Ⅰ区水田遺構実測図
（数値は水田面の平均高度）

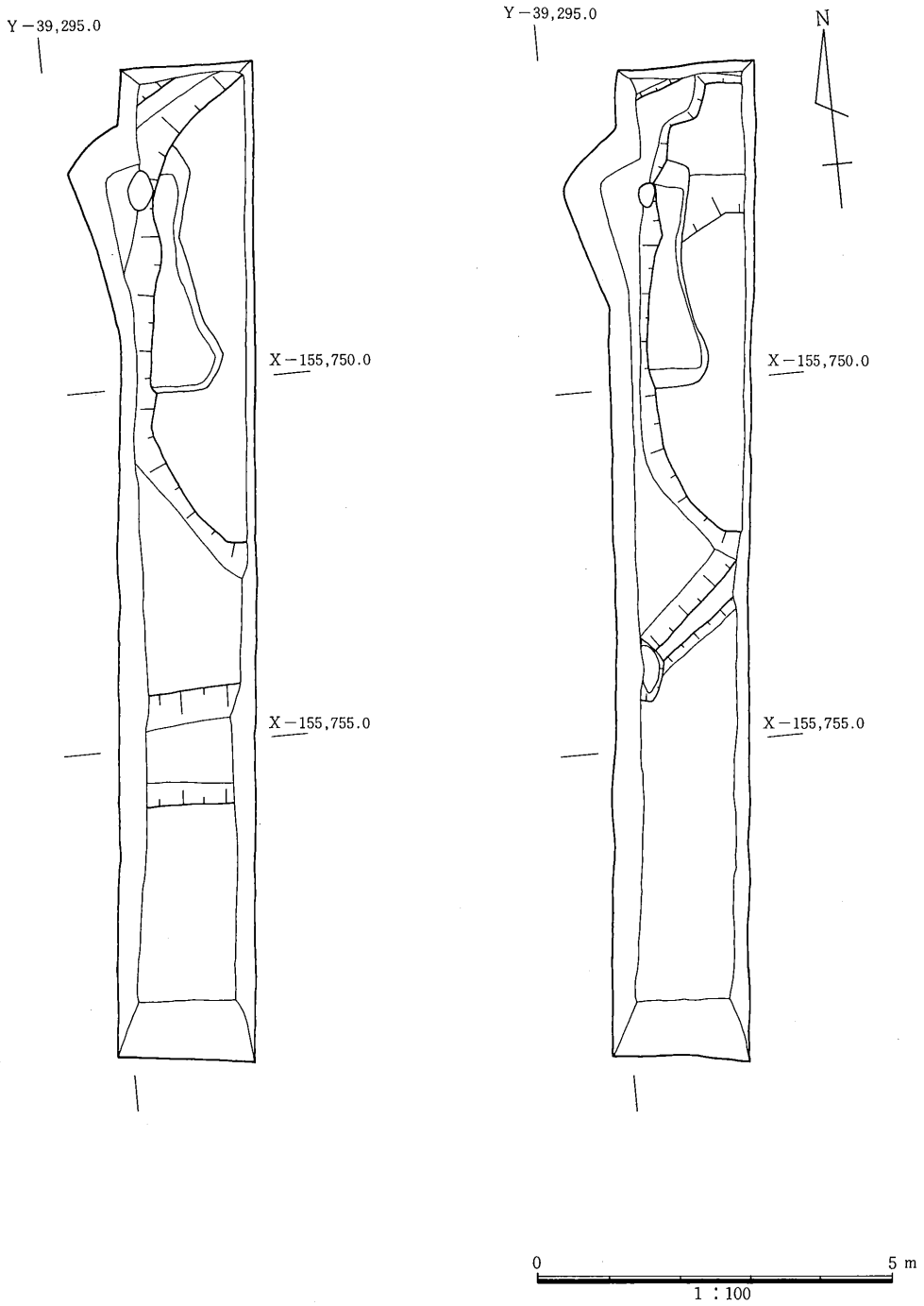


図127　Ⅳ区遺構実測図
（左：93号墳，右：水田遺構）

ii）溝

SD01（図129・130、図版33・66）

Ⅱ区の両トレンチ西端の長原６Ａ層下面で検出された南北溝である。北でやや東に振れた方位を示す。上端0.5～0.8m、下端0.4～0.5m、深さ0.25mのＵ字形断面を呈する。粘性の強い緑灰色粘土を埋土としており、一部に炭化物が混在している。長原６Ｂ層の水田に伴う給排水の溝と思われる。

SD01から須恵器杯身566と土師器甕567が北トレンチで出土した。566は復元径11.2cmで、立上がりはやや内傾し、端部を軽く外方につまむ。色調は灰白色で、長石粒を含む。567は口径12.4cm、高さ11.0cmで、ほぼ完形に復元できる。外面調整は胴部の上半はユビオサエであるが、下半は6条／cmのヨコハケメが残る。内面はユビナデである。口縁部は内外面ともにヨコナデとし、端部は丸くおさめる。焼成は良好で、胎土には長石・雲母を含む。

SD02・04（図124）

Ⅲ区東半部の工事立会時に確認した。長原６層を埋土としていることから、長原6B層の水田に関係した給排水の溝と推定される。

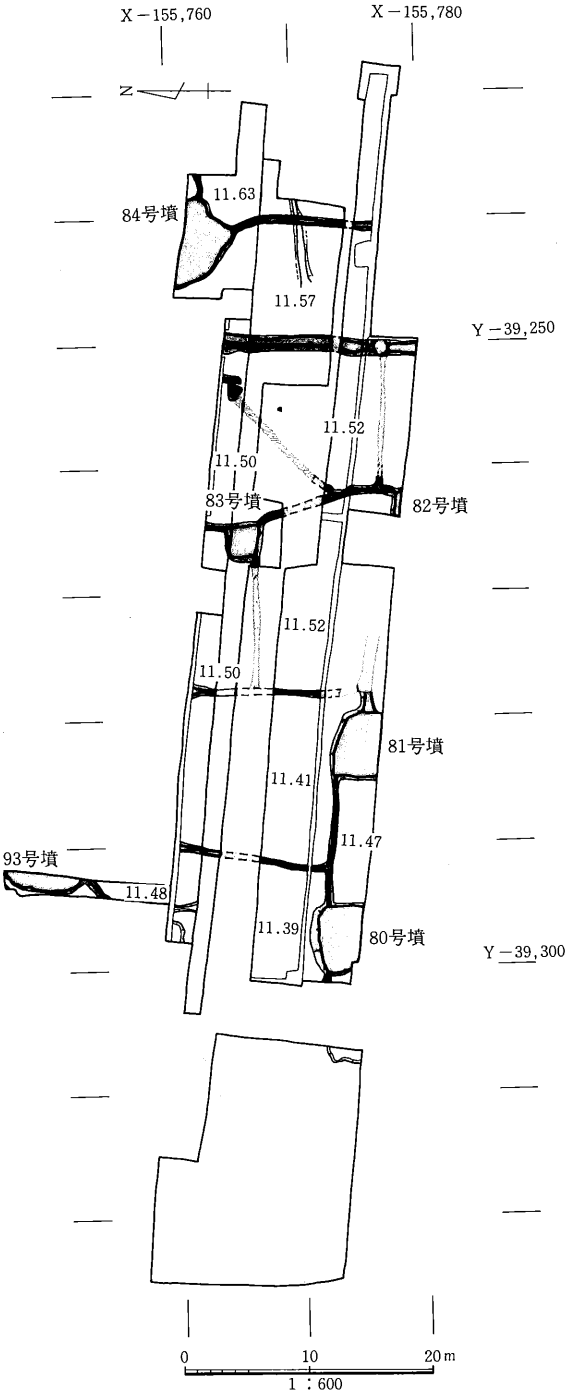


図128　Ⅳ区周辺水田遺構（長原6A層上面）
（数値は水田面の平均高度）

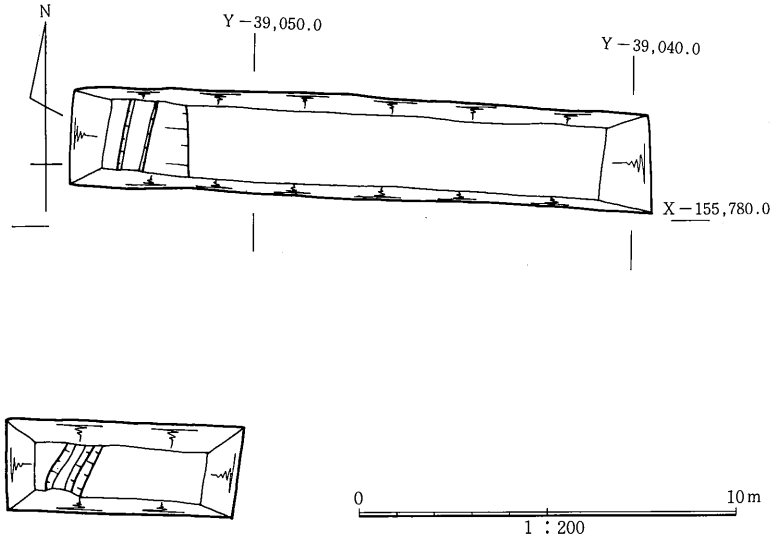


図129　SD01実測図

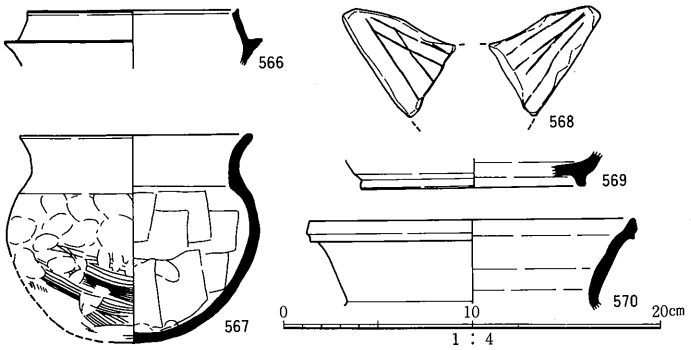


図130　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
SD01（566・567）、長原６層（568～570）

SD03・05（図124）

Ⅲ区東半部で確認した南東から北西方向に平行する溝である。いずれも長原５層に対比できる黄褐色砂礫によって埋没している。

４）小結

今年度の長原南地区における発掘調査は小規模なものであり、十分な成果が得られたとはいいがたい。しかし、古墳４基、長原6A層上面の水田遺構や6A・６Ｂ層上面水田に伴う溝などを検出し、既存の資料に新たな資料を追加することができた。続刊の報告書によって、この地区の各時代における様相がさらに明らかにされるであろう。

（植木）

第４節　長原遺跡中央地区の調査（83－23次調査）

１）中央地区の層序（図131）

近代に埋められた池が存在するＩ区東半部を除いて、Ⅰ・Ⅱ区ともに長原１～6B層を確認することができた。Ⅰ区では、部分的にではあるが、長原13層まで調査した。しかし、Ⅱ区では長原6B層まで調査したが、それ以下の調査はできなかった。以下にⅠ・Ⅱ区の層序について記述する。

沖積層上部層Ⅰ

長原１層：現代の作土層である。Ⅱ区の本層下面では耕作に係る小溝が平行して検出される。

長原２層：灰褐色細粒砂層である。層厚7～15cmであり、Ⅱ区の本層下面で耕作に係る小溝などが検出される。

長原３層：淡褐色～暗灰褐色シルト混り細粒砂層である。層厚15～24cmで、Ⅰ区では上下２層に分離できるようである。本層下面で耕作に係る小溝が検出される。

長原4Ａ層：水成の黄褐色細粒砂層である。層厚10～20cmで、Ⅱ区で4B層上面の水田遺構を被覆する。

長原4B層：層厚15～18cmの灰色シルト層で、上面はⅠ・Ⅱ区ともTP＋約9.5mである。Ⅱ区の本層上面で水田畦畔が検出された。

長原５層：暗青灰色シルト混り中粒砂・黄色粗粒砂からなる水成層である。層厚はⅠ区で10cm、Ⅱ区で20cmである。

長原6A層：6A層は6Ai・６Ａii層が確認できた。6Ai層は淡黒褐色細粒砂混りシルト層で層厚2～4cmである。Ⅰ区の本層中から奈良時代の土器が出土した。6Aii層は層厚2～10cmの水成の青灰色極細粒砂層で、Ⅰ区では6B層上面の水田遺構を覆う。

長原6Ｂ層：黒色粘土からなる作土層である。上面はⅠ区でTP＋8.8m、Ⅱ区でTP＋8.5mを測る。Ⅰ区の本層上面で水田畦畔とこれに伴う溝が検出された。層厚10～12cmである。

沖積層下部層

長原13層：灰白色シルト層である。Ⅰ区で検出された。

以下におもな検出遺構について略述する。

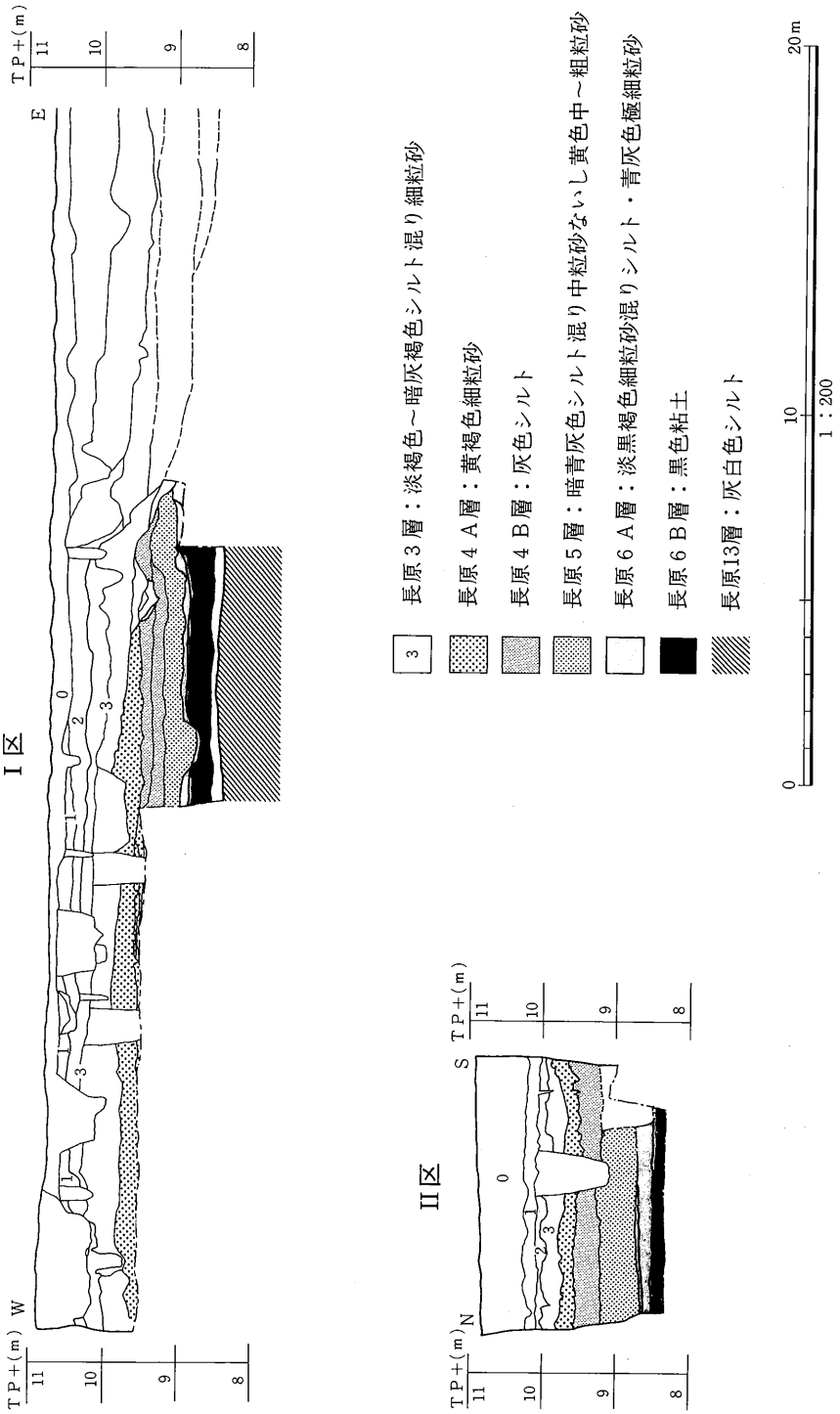

I 区
II 区
W
E
S
N
TP+(m)
11
10
9
8
0
1
2
3
長原３層：淡褐色～暗灰褐色シルト混り細粒砂
長原４Ａ層：黄褐色細粒砂
長原４Ｂ層：灰色シルト
長原５層：暗青灰色シルト混り中粒砂ないし黄色中～粗粒砂
長原６Ａ層：淡黒褐色細粒砂混りシルト・青灰色極細粒砂
長原６Ｂ層：黒色粘土
長原13層：灰白色シルト
0
10
20m
1：200

図131　調査地の層序

２）飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

ｉ）水田遺構（図132、図版35）

Ⅰ・Ⅱ区で長原６層相当の作土層が確認された。Ⅰ区中央部の深掘り部では、長原6B層上面で畦畔および東西溝SD01が検出された。

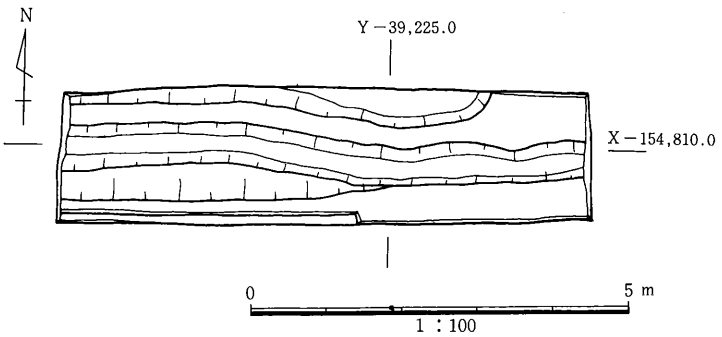


図132　Ⅰ区水田遺構実測図（長原６Ｂ層上面）

水田畦畔は上端0.25～0.30m、下端0.6m、高さ0.03～0.05mの断面が台形を呈する。調査区の東端は幅が大きくなっていることからみて、南北方向の別の畦畔と接続するようである。

SD01は上幅0.4～0.6m、下幅0.25～0.30m、深さ0.17～0.30mの、断面が浅いＵ字状を呈する溝である。北側の水田畦畔に平行しており、さらに南側にも平行する畦畔の存在が予想されることから、水田に付随する灌漑用の溝と考えられる。水田およびSD01は長原6Aii層と思われる水成の極細粒砂層で埋没していた。後述する長原6Ai層から奈良時代中葉の土器が出土していることから、それ以前の遺構と考えられる。

ii）出土遺物（図133、図版67）

Ⅰ区の長原6Ai層（淡黒褐色細粒砂混りシルト）から少量の土器片が出土した。これらの土器には土師器杯Ａ・皿Ａ、須恵器杯Ｂなどがあり、平城宮Ⅲ期の土器群に近いものと思われる（註１）。

571は土師器杯Ａで口径19.8cm、器高4.4cmである。底部外面はヘラケズリで、内面には斜行する放射状暗文が認められる。内底面の螺旋状暗文の有無は不明である。572は土師器皿Ａで口径25.4cm、器高2.5cmに復元できる。口縁部はやや外傾ぎみである。底部外面はヘラケズリで、口縁内面には斜行する放射状暗文が施される。573は口径16.0cmに復元できる椀Ａである。内面にヨコナデの擦痕がよく残る。571・572に比べて胎土はやや粗い。574は須恵器杯Ｂの底部片である。底部外面は不調整である。575～577は製塩土器で、長石を非常に多く含み、二次的な加熱により淡赤灰色に変色している。外面はユビオサエに

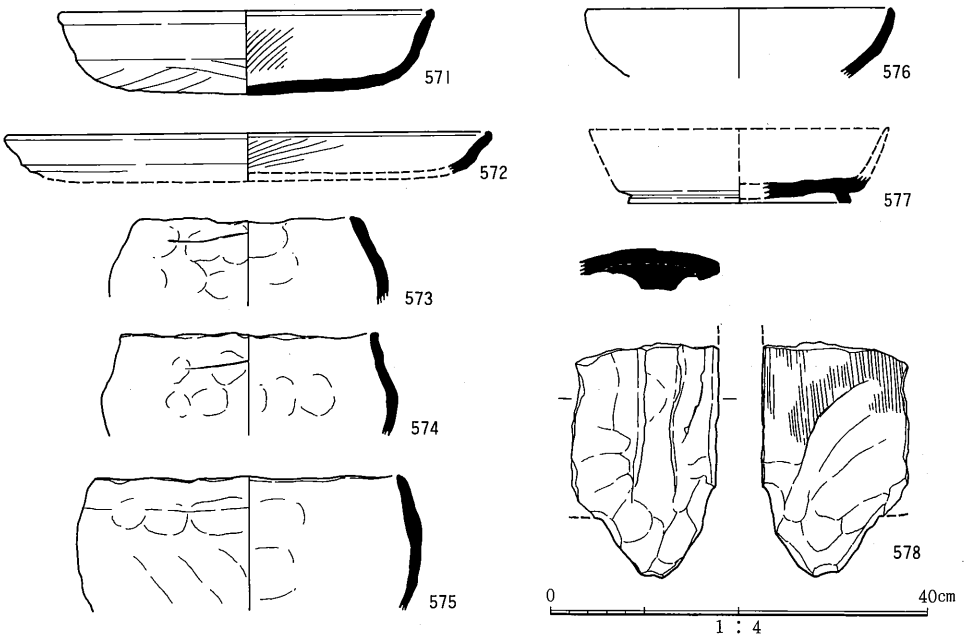


図133　Ⅰ区出土遺物

よる凹凸が顕著であり、接合痕が残るものがある。全体の形状は不明だが、岩本氏のⅠa類［岩本正二1983］に相当するものと思われる。578は移動式竈の支柱下端部片である。支柱は、断面が2.5㎝×1.5㎝の長方形をなす粘土を焚口に沿って内面に貼付けたもので、地中に埋込み、竈を固定するための突出部が最下端部にある。胎土は長石・雲母を多く含み、褐色を呈する生駒西麓産である。

3）平安～室町時代の遺構と遺物

i）柱列（図135、図版36）

Ⅱ区の長原4B層内で北で2°西に振れる掘立柱列を検出した。柱間寸法は約2.1m等間で、3間分を確認した。掘形は径0.26～0.32mの円形を呈し、柱径は0.14mである。上部は削平されて、深さ0.03～0.15mを残すにすぎない。また、遺構の性格についても、建物あるいは柵のいずれなのか現状では判断しがたい。年代については、出土遺物がないため断定しかねるが、検出層準からみて、平安時代中・後期の建築遺構と推定できる。

ii）土壙（図134、図版35）

Ⅰ区中央付近の長原3層下面で検出したSK07は長径5.0m、短径 1.5m 以上で、深さ約0.6m の平面が楕円形を呈する土壙である。埋土は灰褐色シルトであり、埋土内から瓦器

椀・瓦質羽釜・土師器小皿・巴文軒丸瓦が出土した。これらの遺物は後述するように14世紀末に位置付けられよう。

iii）水田畦畔（図135）

Ⅱ区の長原4B層上面で検出した東西方向の水田畦畔である。畦畔は下端0.4～0.6m、上端0.1～0.2m、高さ0.01～0.04mの断面が低い台形を呈する。この水田の年代については、水田面を覆う長原4A層（黄褐色細粒砂～中粒砂）の堆積時期が、後述する出土遺物から13世紀後半～末と考えられるため、これを下限とする。

iv）Ⅱ区 長原４層出土土器（図136、図版68）

Ⅱ区長原4A層出土土器は、瓦器椀におけるⅢ－３～Ⅳ－１期に属する。これは長原遺跡の他の地点における長原4A層の年代観と矛盾しないものである。

589～594はⅡ区の長原4A層出土の土師器皿である。589は口径11.3cmの大型で、他は8cm前後である。594はやや深い器形となる。601～607・609はⅡ区の長原4A層出土の瓦器椀である。いずれも内面にヘラミガキが施されているが、外面には認められない。604・605・607の内底面には平行ミガキが施されている。603・605・607の外底面には小さいながらも断面三角形の高台が付く。609は小型の瓦器椀である。

585はⅠ区の長原4B層から出土した小型の瓦器椀である。口径10.2cmで断面三角形のしっかりした高台が付く。内外面ともに密なヘラミガキを施している。高台の形状や調整からⅡ期の範疇に入ると考えたい。

v）Ⅰ・Ⅱ区 長原３層・Ⅰ区SK07出土土器（図136、写真17、図版68）

Ⅰ区の長原３層およびSK07出土土器は瓦器椀におけるⅤ期［鈴木秀典1982A］に、Ⅱ区の長原３層出土土器はⅣ－２～３期に属するものである（表10）。したがって、Ⅰ・Ⅱ区の長原３層の年代に若干の差が認められるため、両者を同一

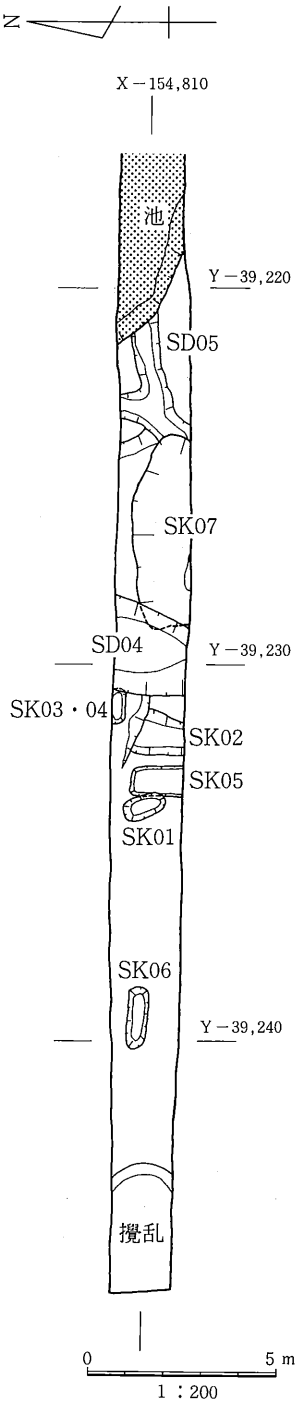


図134　Ⅰ区遺構実測図

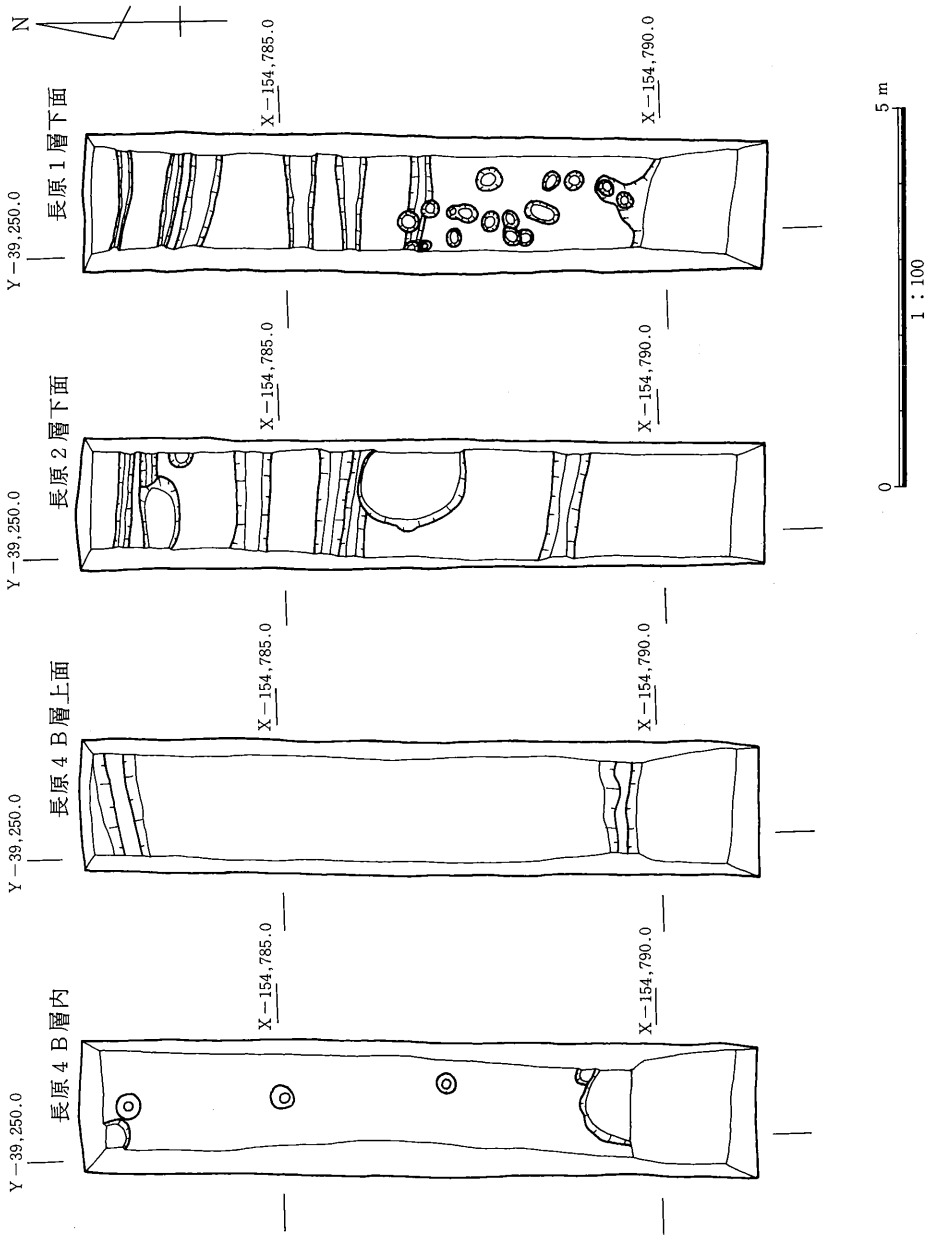


図135　Ⅱ区遺構実測図

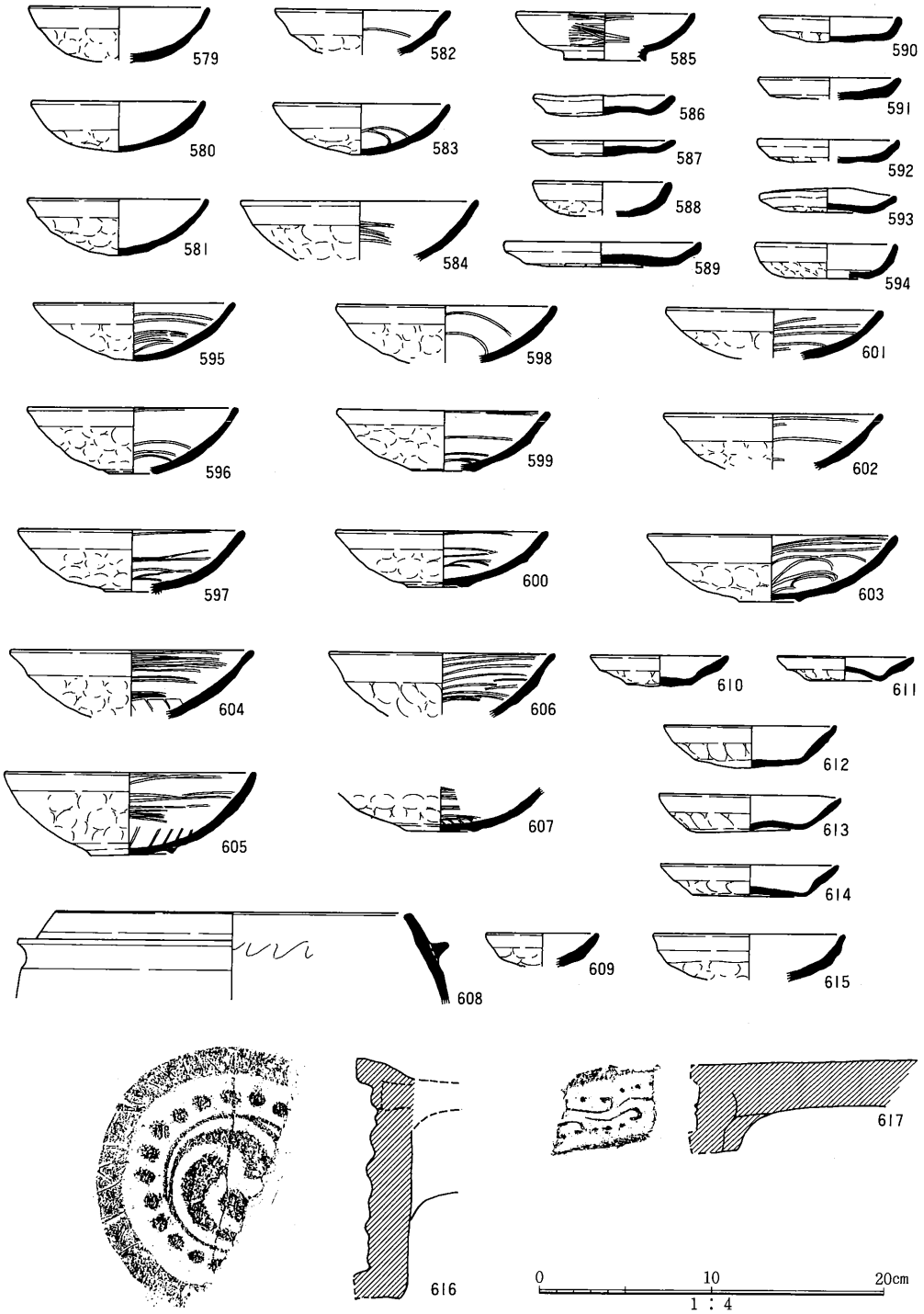


図136　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物
SK04（584）、SK07（610・616）、Ⅰ区長原４Ｂ層（585）、Ⅱ区長原４Ａ層（589～594・601～607・609）、Ⅰ区長原３層（579～583・617）、Ⅱ区長原３層（586～588・595～600・608）

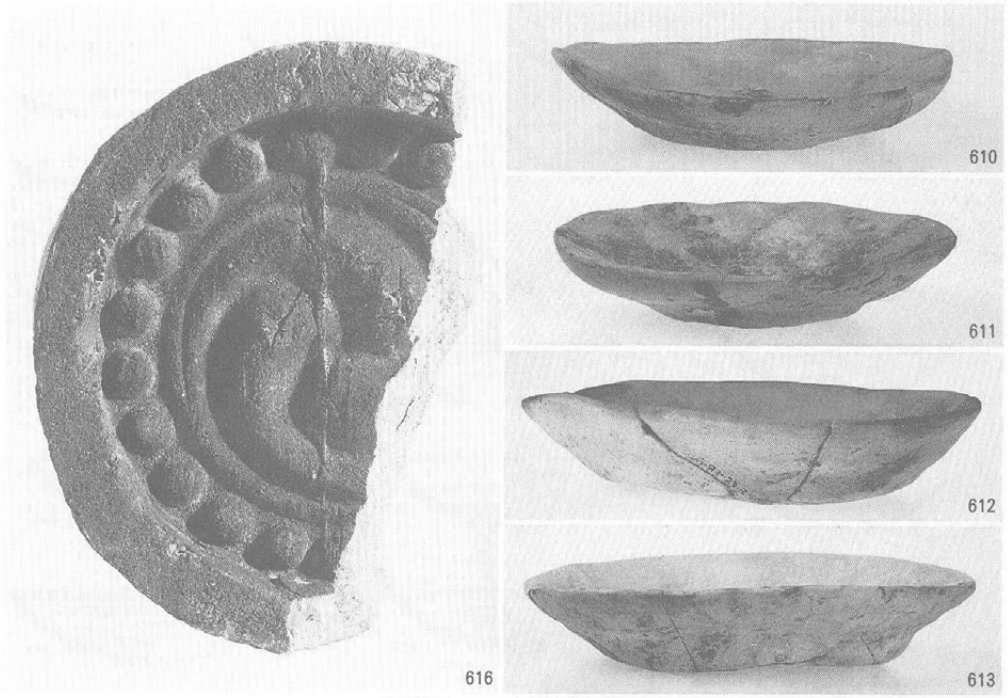


写真17　SK07出土遺物

層準とすることには問題もあるが、長原３層の年代幅を大きくとり、瓦器椀におけるⅣ－２～Ⅴ期の間に長原３層の上限があると考えておきたい。

579～583はⅠ区の長原３層から出土した瓦器椀である。底部に高台がなく、体部外面の調整はユビオサエで、内面にはヘラミガキは認められない。口径は10cm前後である。582・583は同じく高台のない瓦器椀であるが、内面にヘラミガキがある。610～616はⅠ区長原4B層検出時に確認されたSK07から出土した遺物である。610～614は土師器皿で、610・611は口径7.9cm、612～614は9.9～10.5cmである。いずれも底部を平底ないしは中凹みにしている。体部外面はユビオサエ、その他はヨコナデないしナデ仕上げである。615は瓦器椀で底部を欠くが、高台をもたないものと思われる。内面にヘラミガキはなく、口径は10.9cmに復元できる。長原３層出土の瓦器椀579～581と同じ時期のものである。616は三巴文軒丸瓦である。巴頭部は太く、尾は珠文の内側の圏線に連結する。やや大きめの珠文が密に配される。617はⅠ区の長原３層内検出のピットから出土した唐草文軒平瓦で、圏線を介さずに珠文が上

表10　瓦器椀の編年（C期）

11世紀	Ⅰ	
12世紀	Ⅱ	1
		2
		3
13世紀	Ⅲ	1
		2
		3
14世紀	Ⅳ	1
		2
		3
	Ⅴ	

下に配される。

586～588はⅡ区の長原３層から出土した土師器皿である。586・587は平底を呈するもので、588はやや深い器形である。595～600・608はⅡ区の長原３層および長原２層下面の畠遺構とした溝から出土した瓦器椀・瓦質羽釜である。瓦器椀はいずれも内面に疎なヘラミガキを施し、底部にはほとんど機能を果さない小さな高台を貼付けている。口径は12㎝前後である。

４）江戸時代以後の遺構（図134、図版36）

長原２層下面の遺構としては、Ⅰ区で溝２条（SD04・05）、土壙６基（SK01～06）を検出した。これらの埋土からは、いずれも伊万里系の染付磁器が出土しており、遺構の時期を江戸時代に比定することができる。Ⅱ区では幅0.2～0.5m、深さ0.04～0.10mの東西方向の浅い小溝が平行して検出された。埋土は長原２層の灰褐色細砂であり、畠作の痕跡と考えられる。

また、Ⅰ区の長原１層下面では、幅0.2～0.3m、深さ0.1m未満の東西および南北方向の小溝、Ⅱ区の同一面では、幅0.10～0.45m、深さ0.02～0.03mの東西方向の浅い小溝や径0.1～0.3mのピット群がある。いずれも現代作土層である長原１層を埋土としており、明治時代以降の畠作の痕跡および杭跡である。

５）小結

今回の調査では、長原6A層（淡黒褐色細粒砂混りシルト）から８世紀中葉の土器などが出土し、長原6A層の時期が少なくとも奈良時代中葉まで下ることを確実なものとしえた。

また、Ⅰ・Ⅱ区とも、長原３層中から14世紀代の土器が比較的まとまって出土したことから、この時期には東除川に接するこの地点が集落内もしくはそれに近接していたことが想定できる。しかも、Ⅱ区では層準からみて平安時代にさかのぼると思われる柱列が検出されているため、この付近の集落形成の端緒は平安時代にさかのぼると考えられよう。

さらに、Ⅰ区の東半部で検出した池は、Ⅰ区北断面の地層からみると長原4A層の堆積後に人為的に掘下げられた兆候が認められ、底まで掘削できなかったが、中世までさかのぼる可能性がある。本調査地で長原２層および３層とした地層が水成の砂層を基調としていることは、これらが旧東除川の氾濫に起因する堆積層で構成されていることを示しており、長原３層が東除川の埋立て以前に形成された地層であり、２層は埋立て前後に形成された

地層であると考えられる。そして、東除川の埋立てと前後するころには、周辺が畠地として利用されていたことも明らかにすることができた。

（木原・京嶋）

註）

（1）器種名・編年は『平城宮跡発掘調査報告』Ⅶ［奈良国立文化財研究所1976］にしたがう。

第Ⅳ章　遺構と遺物の検討

第１節　長原遺跡の地層をめぐる諸問題

１）長原遺跡の地層の年代

ｉ）沖積層上部層Ｉの年代

現代の作土層（長原１層）の直下にある長原２層は伊万里系の染付磁器や唐津・美濃・備前などの国産陶磁器を包含する［大阪市文化財協会1983B］。包含遺物の下限は17世紀以後にある。

長原３層の出土遺物には、土師器・瓦器・瓦質土器や東播系鉢などの国産陶器・中国製磁器がある。本層から出土した瓦器椀は、その終末期に近いC－Ⅳ期からC－Ⅴ期に属する［鈴木秀典1982A］（以下同様）。その年代観から本層の下限は14世紀後半となるが、さらに15・16世紀まで下る可能性がある。

長原４Ａ層は水成層であるので、包含される遺物は下位の長原4Bｉ層上面以下に由来するものと考えられる。本層出土遺物の中で最新の年代観を与えるものはC－Ⅲ期からC－Ⅳ期の瓦器椀であり、13世紀後半から14世紀初頭と考えられる。

長原4Bｉ層は上面で水田遺構が検出され、包含される遺物には下位層に由来するものが含まれている。土師器・黒色土器のほかにC－Ⅱ期からC－Ⅲ期の瓦器椀があり、12世紀から13世紀を中心とする年代が与えられる。下限は上述の長原4A層中の遺物の年代観をあてることができる。

長原4Biii層出土の遺物は、本層の検出例が少ないこともあって、ごく少量が確認されているにすぎない。遺物には黒色土器のほかC－Ⅰ期ないしC－Ⅱ期の瓦器椀があり、下限は平安時代末期の11世紀後半から12世紀に求めることができる。また、4Biii層の下位にあって、遺跡東南部でのみ検出されている長原4Cii層も水田の作土層であり、８～９世紀の年代が与えられている［鈴木秀典1983B］。

長原５Ａ層は水成層であり、包含される遺物は下位層に由来すると考えられる。長原４

層下面では９世紀代までさかのぼる遺構が検出されており［大阪市文化財協会1983D］、それ以前に堆積したものといえる。本層から出土した遺物でもっとも新しい年代を与える遺物は平城宮Ⅴ・Ⅵ期の土器であり、８世紀後半から９世紀初頭に発生した洪水による堆積と考えることができる［京嶋覚1990］。

長原5B層は5A層と同様に水成層であり、内部構造の変化は少なく、上面の遺構も希薄であるので、5A層の堆積直前に堆積したものと考えられる。

水田の作土層である長原６Ａｉ層に包含される遺物には、本書中央地区の資料にみられるように平城宮Ⅲ期の遺物があるが、下限は上位の長原5A層中の遺物に求められ、８世紀末から９世紀初頭ということになる。

長原６Ｂｉ層に包含される遺物には飛鳥Ⅱ～Ⅳ期の７世紀後半から末の土器がある［京嶋覚1990］。本層上面を覆う長原6Aii層の出土遺物に飛鳥Ⅳ期ころの土器があることから、長原６Ｂｉ層上面の水田遺構は飛鳥Ⅳ期、すなわち７世紀末葉に長原6Aii層で埋没したと考えられる。6Ｂｉ層は淘汰が不良であるため、耕作時期は６Ａｉ層に比べて短かかったと考えられる。

長原7A層ないし長原７層から出土した遺物は、飛鳥Ⅰ期の遺物が最新のものであるが、本層上面の水田遺構を被覆する長原6Bii層から飛鳥Ⅲ期の土器が出土しているため（註１）、下限は飛鳥Ⅲ期まで下るものと思われる。また、上限は古墳の造営が終わる６世紀後半から飛鳥Ⅰ期の間にある。

以上のように、当地域の沖積層上部層Ⅰは、古墳時代後期の６世紀後半から現代までの年代を与えられると推定され、地層の累重性と遺物の型式学的編年観とは比較的よく一致する。すなわち、長原7A～6Aii層は古墳時代後期（６世紀後半）～飛鳥時代末（７世紀末）、長原６Ａｉ層は奈良時代前半（８世紀前半）～末（８世紀末）で、これを埋めた長原5A・5B層は奈良時代末（８世紀後半）～平安時代初頭（９世紀初頭）にかけての洪水で堆積した水成層ということになる。また、長原4Biii～ii層は平安時代前半（９世紀）～平安時代末（12世紀）、長原4Bi～４Ａ層はおおむね鎌倉時代（13～14世紀前半）の地層と考えられる。さらに、厳密な検討を必要とするが、長原３層は室町時代（14～16世紀）、長原２層はほぼ江戸時代に形成された地層であると考えられる。

ii）沖積層上部層Ⅱの年代

長原7Ｂｉ層上面に構築された長原古墳群は、主として埴輪の分類に基づいて４期に区分されている［京嶋覚1989］。長原古墳群１期に属する塚ノ本古墳の埴輪は［川西宏幸1978］

（註２）のいうⅡ期に編年されており、古墳時代前期末の４世紀後葉の年代が与えられている。また、長原古墳群４期に属する七ノ坪古墳の横穴式石室から出土したＭＴ15型式の須恵器は、［田辺昭三1981］の編年観に基づいて古墳時代後期の６世紀前半の年代が与えられる［高井健司1987A］。

以下の庄内式土器と弥生土器の編年観は［森岡秀人1985］に基づいて述べる。

長原7Ｂiii層からは年代を与える遺物は出土していないが、本層に対比される八尾南遺跡の地層に包含される遺物の中で、最新の年代を与える庄内式土器は、その編年観から３世紀の年代が与えられる。また、本層より下位では出土しない畿内第Ｖ様式の土器は、その編年観から１世紀後半～３世紀初頭の年代が与えられる。

長原8B層上面に構築された方形周溝墓は、共伴した畿内第Ⅲ～Ⅳ様式土器の編年観から、紀元前２世紀末～１世紀前半の年代が与えられる。

長原8C層は水成層であるので、本層に包含される遺物は下位層に由来するものと考えられる。

長原9A層に包含される遺物の中で、もっとも新しく編年される土器は畿内第Ｉ様式新段階の土器であり、その年代観から紀元前３世紀後半の年代が推定される。

また、長原９A層に包含される長原式土器は、刻み目突帯をもつ縄文時代晩期のもっとも新しい土器型式であり［家根祥多1982］、晩期船橋式に後出するものとされている［松尾信裕ほか1983］。また、長原式土器には籾や米の圧痕がついているものがある［松尾信裕ほか1983］。

長原9Bii層に包含される貼付け突帯壺は、畿内第Ｉ様式新段階に型式分類される土器であり、上述のように紀元前３世紀後半の年代が推定される。また、9Bii層からは木製の竪杵が出土している。

長原9Ｂiv層に包含される長原式土器は、上述のように縄文時代晩期最後の土器とされている。

以下の縄文土器の編年観は［小林達雄ほか編1983］と［安孫子昭二1988］に基づいて述べる。

長原9Ci層上面からは、縄文時代晩期前半の滋賀里Ⅳ式土器が出土しており、その編年観から、3.0～2.3千年前の前半の年代が推定される。

長原遺跡で長原9Cii層から出土した遺物はないが、本層に対比される八尾南遺跡の自然河川の埋積層からは、縄文時代後期前葉に属する磨消縄文のある福田ＫⅡ式土器が出土し

ている（註３）。本層は水成層であるので、この土器は下位層上面以下に由来すると考えられる。また、細分しがたい長原９C層には縄文時代後期中ごろに属する四ツ池式土器が包含されており、４～３千年前の中ごろの年代が推定される。

以上のように、当地域の沖積層上部層Ⅱは、縄文時代後期の４千年前から古墳時代後期の６世紀前半までの年代が与えられると推定され、地層の累重性と土器の型式学的編年観とはよく一致する。すなわち、長原９Ciii～９Cii層は縄文時代後期（約４.０～３.０千年前）、９Ci～９Biii層は縄文時代後期（ないし晩期）～晩期（ないし弥生時代前期）（約３.０～２.２千年前）、９Bii～８Ci層は弥生時代前期後葉～中期前葉（約２.２～２.１千年前）、８B～８A層は弥生時代中期（約２.１～１.９千年前）、７Biii～ii層は弥生時代後期～古墳時代前期（約１.９～１.６千年前）、７Bi層は古墳時代前期～後期（約１.６～１.４千年前）の年代が、それぞれ与えられると考えられる。したがって、本亜部層は難波累層上部砂層の下半部に対比され、本亜部層最下部層準の長原10層は難波累層上部砂層堆積開始期の砂礫層にあたると考えられる。

iii）沖積層中部層の年代

長原10層は水成層であるので、本層から出土した縄文時代前期の爪形文土器は、下位層に由来するものと考えられる。

長原12A層上面付近から出土した北白川C式土器は、縄文時代中期後半に比定されており、縄文土器の年代観からは、５～４千年前の後半の年代が与えられる。

長原12A層から得られた２点の腐植土壌の放射性炭素年代値は、上位が4740±110年前（GaK－14942）、下位が4900±140年前（GaK－14941）である。また12A～12BC層一括の腐植土壌の放射性炭素年代値は4020±110年前（GaK－11323）である。

長原12Bii～iii層から出土した船元Ⅱ式土器は縄文時代中期前半に比定され、５～４千年前の前半の年代が与えられる。

長原12Bv層から得られた炭化物の放射性炭素年代値は、4900±100年前（GaK－14940）である。

長原12C層はその堆積状況から、上位層堆積直前に堆積した地層である。

以上のように、当地域の沖積層中部層は縄文時代中期の５～４千年前の年代が与えられ、地層の累重性と土器の型式学的編年観とはよく一致する。すなわち、長原12Bi～12C層は縄文時代中期前半の、長原12A層は縄文時代中期後半の年代が、それぞれ与えられると考えられる。したがって、本部層は難波累層中部海成粘土層の上部層準に対比できる。

ⅳ）長原12／13層漸移帯（仮称）から沖積層下部層の年代

長原12／13層漸移帯からは、縄文時代早期（あるいは草創期）から前期にわたる多時期の遺物が包含されており、１万数千～５千年前の年代が推定される。

長原12／13層漸移帯あたりに降灰層準が求められる横大路火山灰層は、７.０～６.７千年前の放射性炭素年代値が与えられている［吉川周作ほか1986］。

長原13Ａ層に包含される小型のナイフ形石器をはじめとする石器遺物は、近畿地方のナイフ形石器群の最終段階に属すると考えられている［佐藤良二1989］。

長原13Ａⅱ層に含まれる火山ガラスは、偏平型に混って少量の中間型から多孔質型のものが含まれる。ガラスの屈折率は、1.500前後のものと1.503前後のものがある。前者の屈折率を示す火山ガラスは下位の平安神宮火山灰層に由来すると考えられ、後者の屈折率は中間型から多孔質型の火山ガラスのものと考えられる。

平安神宮火山灰層とは不整合を挟んで上位にあって、火山ガラスの形状と屈折率の特徴が一致する火山灰層は、［吉川周作ほか1986］の火山灰層層序によれば、阪手火山灰層である。阪手火山灰層の降灰時期は１万数千年前（１.５万年前の前後）と推定されている。

後述するように、阪手火山灰層の年代は最終氷期の晩氷期にあたり、また、石器遺物が後期旧石器時代後半に属するものであることから、13Ａ層の形成時期は晩氷期前半の約１.７～１.３万年前と推定される。したがって、長原13Ａ層と下位の13Ｂ層との不整合期は、最終氷期を通じてもっとも寒かった亜氷期Ⅲの時期と考えられる。ただし、石器遺物は不整合期にまでさかのぼってもかまわない。

以上のように、この層準の地層は後期旧石器時代後半の約１.７万年前から縄文時代前期の５千年前までの年代が与えられると推定される。識別される地層の数と厚さに比べて、年代幅が大きく、層位学的な調査のむずかしい層準といえる。

ⅴ）低位段丘構成層上部層・下部層の年代

長原13Ｂⅰ～ⅱ層から出土したと確実にいえる遺物はないが、13Ｂⅰ層は暗色帯を構成する。

長原13Ｂⅱ層である平安神宮火山灰層は、２.５～２.１万年前の放射性炭素年代値が与えられている［吉川周作ほか1986］。また、この火山灰層に対比される火山灰層を姶良Tn火山灰層と記載した［松本英二ほか1987］は、24720±290年前の年代を与えており、また参考値として24000±2000年前をあげている。

長原13Ｃ層は暗色帯を構成し、下位層とは部分不整合の関係にある。

長原14層は下位層上面の凹みに堆積した粗粒から上方細粒化がみられる地層である。14層の石器遺物は台形様石器群に属すると考えられており、後期旧石器時代初頭の年代が与えられるものと推定されている［松藤和人1992］。

長原15層は下位の低位段丘構成層下部層を部分不整合で大きく下方侵食し、上方で細粒化する大局的には2堆積サイクルを示す地層である。15層の下部層準に対比される地層から得られた木材の放射性炭素年代値は27890±480年前（GaK－6977）である（図11）。

本地域の低位段丘層下部層を構成する長原16A～16B層およびその下位に続く未命名層は、粗粒から上方へ細粒化し、再びやや粗粒化する地層である。16A～16B層から産出した植物遺体は、極端な寒冷気候は示していない（註4）。大和川の河床でみつかった化石林の層準である長原16B層から得られた木材の放射性炭素年代値は24940±670年前（GaK－15851）と31120±1380年前（GaK－15852）である。

放射性炭素年代は試料が埋没したのちの地下水などによる新しい炭素の汚染を考慮するならば、原則として古い測定値を採用すべきであると考える。そこで、古い方の放射性炭素年代値を用いれば、平安神宮火山灰層である長原13Bii層は約2.5～2.4万年前のある時期、15層は約2.8万年前以前、16B層は約3.1万年前以前の年代が与えられると推定される。

ところで、図11の八尾南B地点のTP－2.8～－4.4mには、植物遺体を含有する暗褐色シルト層が分布する。図10の断面図からは、このシルト層は最終間氷期を通して堆積した中位段丘構成層（上町累層）中部のMa12海成粘土層・海成砂層の上位にある同層上部の泥炭層・泥炭質粘土層の層準にあたると推定され、約10万年前の年代が予想される。図10で推定した不整合はこの泥炭層・泥炭質粘土層の層準の上位数mにあり、不整合面から上位が低位段丘構成層と考えられる。低位段丘構成層の堆積時期は最終氷期である。

最終氷期には3回の亜氷期と相対的に温暖な2回の亜間氷期、および晩氷期が知られている［熊井久雄ほか1982］（註5）。古い方から亜氷期Ⅰ（7.0～4.5万年前）、ゲトワイゲル亜間氷期（4.5万～3.3万年前）、亜氷期Ⅱ（3.3～2.9万年前）、パウドルフ亜間氷期（2.9万～2.2万年前）、最寒冷期（約2万年前）を挟む亜氷期Ⅲ（2.2～1.7万年前）、晩氷期（1.7～1.0万年前）である。

約2.5～2.4万年前の平安神宮火山灰層を挟む長原13C層と13Bi層は暗色帯であり、年代的にはパウドルフ亜間氷期のある時期に形成されたと推定される。そこで、暗色帯の形成時期が亜間氷期であったと考えることができる。侵食基準面が上昇した亜間氷期には

陸上の相対的な安定化に伴い、植物の繁茂も相対的に促進されたのであろう。

長原13Ｃ層より下位にある暗色帯は、15層基底の部分不整合の下位にあり化石林の層準である長原16Ｂ層である。16Ｂ層に整合に重なる水成の16Ａ層の下部層準から産出した植物化石は、化石林の層準から由来したと考えられ、最終氷期の中にあって、極端な寒冷気候を示さない。しかも、この層準より下位の低位段丘構成層下部層中には暗色帯は認められず、下部層準ほど粗粒物質が優勢となる。したがって、16Ｂ層はゲトワイゲル亜間氷期のある時期の地層と考えることができる（註６）。

低位段丘構成層下部層を部分不整合で覆う長原15層下部の砂礫層は、下方侵食量が大きく、堆積条件の急激な変化があったことが推定される。長原15層相当層の約２.８万年前の放射性炭素年代値は、試料が礫層から出土しており、やや新しい年代値が測定されていると考えられる。したがって、長原15層はゲトワイゲル亜間氷期に続く亜氷期Ⅱの地層であると考えることができる。

長原14層は下位層堆積後の凹地に堆積しており、上位層との部分不整合は軽微であるため、上位層の年代に近い年代が推定される。

以上のことから、本地域の低位段丘構成層上部層の長原13Ｃ～13Ｂｉ層はパウドルフ亜間氷期の２.９～２.４万年前ごろのある時期の年代が与えられると考えられ、長原14層はそれ以降３万年近く前までのある時期、長原15層は亜氷期Ⅱの３.３～２.９万年前のある時期の年代が与えられる可能性がある。また、低位段丘構成層下部層の長原16Ｂ～16Ａ層はゲトワイゲル亜間氷期の４.５～３.３万年前のある時期、その下位の未命名層の少なくとも下部層準は、４.５万年以前の亜氷期Ｉのある時期の年代が与えられる可能性がある。

２）長原遺跡の遺構・遺物の年代論に係る層位学的知見

ｉ）旧東除川の開削年代について

長原遺跡の台地部の低い稜線付近を北流した旧東除川は、1704年の大和川の開削に伴ってその機能を失い、埋立てられた。その名残りは条里と不調和な地割として地籍図から読取ることができる。長原遺跡を流れた旧東除川が人工の河川であることは周知の事実に属している。また、その開削年代については６世紀後半や７世紀初頭などのいくつかの議論がある［木原克司1982、広瀬和雄1983など］。ここでは層位学的資料からその年代を整理しておく。

長原古墳群を構成する多数の古墳は、長原7Ｂｉ層の上面に構築されている。古墳群の分

布する台地部の7Bｉ層は12／13層漸移帯に属する7.0～6.7千年前のある時期に降灰した横大路火山灰層を母材とする黒ボク土（古土壌）である。遺跡の平野部では長原10層や8C層などの顕著な水成層は、縄文時代から古墳時代前期の間に8層準ある。しかし、台地部の黒ボク土層は厚いところで35cmもあるが、水成層を挟在していない。また、過去に地下水位が高かったといえるグライ化の証拠も直下の地層からはみつかっていない。

黒ボク土の形成にはイネ科植物の繁茂が必要条件であるとされている［加藤芳朗1983］。したがって、黒ボク土の分布する台地部は、縄文時代から古墳群が構築された4世紀末～6世紀前半にいたるまで、ススキなどのイネ科草本が一面に覆う林の希薄な草原の微高地であったと思われる。古墳群はこのような立地を利用して造られたのであろう。

長原古墳群を最初に覆う長原7A層は、下位層を母材とする水田の作土層である。河川がなく、地下水位も低い微高地で水田を営むためには、灌漑水の外部からの供給が不可欠である。また、台地部における7A層から5層までの地層には氾濫性の水成層が少なくとも4層挟まれる。これらのことから、台地部の7A層形成（水田化）時の灌漑用水路は、東除川本流に源を発すると考えられる。

［京嶋覚1990図180・181］に図示されるように、6層や5層の主要な分布は台地稜線部の旧東除川の位置とも重なっている。長原7A層の水田の広がりはよくわかっていないが、水田区画は台地の大半に広がりをもつ上位の6B・A層上面の区画と調和的であるため［鈴木秀典1983B］、これらと同様の広がりをもち、灌漑水が共通の施設から導水されていたと推定される。したがって、7A層の形成時には灌漑を目的として台地稜線部の旧東除川の位置にも水路が開削されていたと考えられる。この時期は古墳群築造後、7A層形成直前であり、古墳時代後期（6世紀）後半のある時期と推定される。

台地稜線部の流路は台地全域を灌漑できることから、当時の支配者階級と結び付き、まもなく、旧東除川の形態をもつにいたったものと思われる。

ｉｉ）長原最古の水田の年代について

長原遺跡最古の水田の作土層（長原9A′層）は、水田面を覆う砂層（長原8Cｉ層）から出土した木葉形石鏃の年代観から、弥生時代中期（弥生Ⅱ－Ⅲ期？）［農耕文化研究振興会1988］、あるいは中期かそれより古い時期［永島暉臣慎1988］と推定されている。

最近の層位学的知見によれば、この作土層は長原9A層を母材としており、作土層の上面は長原9A層と同地面であると判定される。したがって、水田の耕作時期は9A層上面および上面付近から出土した畿内第Ⅰ様式土器の使用時期と並行していると考えられる。

また、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器を伴う長原８B層とは８Ｃｉ・ii層を挟んで下位にあり、弥生時代中期中葉よりは古いと判定される。これらのことから、９A′層の水田の耕作時期は弥生時代前期後葉か、遅くともせいぜい中期前葉までのある時期と推定される。

ところで、この水田は古地形的には微高地上にあって導水路をもち、かつ水口など給排水に対する配慮がなされている。また、上面には乾痕が観察されている。さらに、その作土層の母材である９A層のもとの暗色は脱色し、灰白色を呈している。水田作土の灰色化は、地下水位が相対的に低い水田で耕作開始後１～２年の作土にみられる特徴であるとされる［本村悟1978］。したがって、この水田は弥生時代の登呂遺跡に象徴される湿田のイメージとは異なり、灌漑水稲耕作の方法が完成された中間田か乾田であったと推定される。

iii）長原式土器の下限の年代について

長原遺跡を名祖とする長原式土器には、籾や米の圧痕のあるものがみつかっており、当時の人間が稲を知っていたことをうかがわせている。しかし一方で、長原式土器は縄文時代晩期の土器の特徴をもち、石棒などの共伴遺物が縄文時代の特色を色濃くもつことから、土器についた籾や米の圧痕をもって稲作の証拠とするにはあたらないとされてきた［松尾信裕ほか1983］。

畿内第Ⅰ様式の貼付け突帯の施された土器が出土した長原９Ｂii 層の形成期は、土器の年代観から弥生時代前期新段階であり、土器とともに出土した木製の竪杵は、その時期に当地域でも稲作が行われていたことを考えさせる。畿内第Ⅰ様式土器はその上位にある９A層からも出土している。一方、長原式土器は、長原９Ｂiv 層と９A層から出土が確認されている。しかも、９A層から出土した長原式土器は畿内第Ⅰ様式土器と共伴している。したがって、少なくとも９A層から出土した長原式土器は弥生時代前期新段階に属する土器であると考えられる。換言すれば、９A層から出土した長原式土器は、弥生時代の縄文土器であり、縄文時代のレリックといえよう。

なお、［大阪市文化財協会1983C］で報告された微高地の墓地を構成する多数の土器棺墓は、長原７層基底面で検出されたものであり、棺に用いられた土器には長原式壺や深鉢のほかに弥生第Ⅰ様式の古い段階と考えられる大型壺があるものの、墓地が長原９Ｂiv 層から９A層のある層準に位置付けられるのか、全層準を通して利用されたものかは明らかでない。また、低地部の長原９層から長原式土器とともに出土した弥生土器や紡錘車も、出土層準の詳細が不明なため、層位学的資料としては不十分である。

ⅳ）旧人の遺跡の可能性について

ナウマンゾウのものと考えられる長鼻類の足跡化石が検出された長原15層下部層準と、16B層の下位にあって大型動物の足跡状の凹みが認められた未命名の地層は、上述のように4万数千～3万年前の年代が与えられる地層である。旧石器時代の区分では中期（あるいは前期）の終盤にあたる旧人の最後の時代である。興味深いことに、その間の16A層下部層準の砂層の中からサヌカイトの細片がみつかっている。

旧人段階の遺跡は日本列島の各地からみつかってきており、ことに長野県野尻湖立ヶ鼻遺跡では旧人から新人段階の人間がナウマンゾウを狩りし、解体した証拠がみつかっている［地団研専報第32号編集委員会1987］。長原遺跡でも、これらの層準のどこかに、ゾウを追い求めた旧人の証拠が発見される可能性がある。

（趙・京嶋・高井）

（註）

（1）長原遺跡87-35次調査で長原7A層上面を覆う6Bii層から飛鳥Ⅲ期の土器が出土している。

（2）塚ノ本古墳は［川西宏幸1978］では長原5号墳として記載されている。

（3）大阪府教育委員層会の宮野淳一・山田隆一両氏のご教示による。

（4）大阪市立自然史博物館の那須孝悌氏の御教示による。

（5）亜氷期・亜間氷期の年代は［新堀友行編1986－1988］によった。

（6）長原16A層下部層準の植物遺体を同定していただいた那須孝悌氏からは、この植物遺体は近畿地方の中位段丘構成層の最上部付近にみられる植生の要素と類似するとのご意見をいただいている。また、シキシマブナとコナンキンハゼがゲトワイゲル亜間氷期に生存した証拠は知られていないとのことである。

第２節　古墳時代後半期における土師器の器種構成

１）はじめに

５～６世紀代の土師器は良好な資料が各遺跡とも少なく、須恵器出現以前の古式土師器に比べて、器種構成や形態上の地域的特徴についての検討作業が充分なされていない。本書で報告した資料も、精密な検討がなしえるほど良好な資料とはいえないが、既存の未報告資料を加えて、長原・瓜破遺跡における古墳時代中・後期の土師器の器種や調整手法の特徴について検討し、今後の編年的研究に備えたい。

２）土器資料の概要

まず、長原遺跡の変遷を概述しておくと、弥生時代中期から後期にかけて集落が遺跡東部で発展し、その後、出土遺物に最古式の須恵器や韓式系土器（註１）がみられるようになる５世紀中葉まで分布域を広げながら継続して営まれている。しかし、５世紀後半になって遺跡西部の瓜破台地東部に新たに集落が形成されはじめ、それ以後、瓜破台地を中心にした集落景観が定着する。

本書第Ⅲ章第１節で報告した古墳時代に属する遺構群は、５世紀後半以後に、瓜破台地東部の西地区で形成された新たな集落の一部を構成するものである。

西地区の集落域で出土する須恵器は、ＴＫ73型式を最古型式として、ＴＫ216型式以後に出土量の増加がある。そして、ＴＫ23～ＴＫ10型式をその頂点としているようである。

この地区の資料としては、本書報告のSK39の資料などがＴＫ216型式からＴＫ208型式の須恵器を含む資料であり、遺跡東部の低地部の集落で出土するＴＫ73型式を中心とする資料に後出するものである。

次に、本書報告のSK11・12からはＴＫ23型式の須恵器を含む資料を出土している。この時期の資料は西地区では広い範囲に分布し、「東谷」斜面における瓜破遺跡の調査（第Ⅰ章図1の10の地点）で大量の土器が出土しているのもＴＫ23型式が大半である。これより新しいＴＫ47～ＴＫ10型式の須恵器を含む資料は西地区の集落域でも南部で多く出土している。当該期の井戸からの出土遺物に木製の当て具や叩き板とみられるものがあることから、「馬池谷」ないしはこれにつながる小開析谷の斜面を利用して須恵器窯が構築されていたことは確実である。

3）土師器の器種分類

長原・瓜破遺跡で出土した当該期の土師器の器種は杯・高杯・鉢・壺・甕・甑・鍋・羽釜で、関連遺物として移動式竈がある。以下に各器種別に検討する。また、これらが須恵器を共伴するばあい、その須恵器の型式名のあとに「期」を付け、この地域において、かかる型式の須恵器が使用された時期と理解して、土師器の時期区分にも用いたい。

i）食器類

杯（図137－1～6）

当遺跡における杯の出土量はきわめて少なく、数点しかない。このため、類型を設定することはできないが、形態では後述する高杯Ａの脚部を欠いた形態のもの1と、高杯とは異なった形態のもの2・3がある。後者の杯はＴＫ23型式期には存在する。現状では、それを前後する時期には認められない。形態は丸底で口縁端部を外方に短く屈曲させる。調整は内外面ともナデであるが、2の底部外面は工具を用いて、ヘラケズリに類した痕跡を残す。

河内におけるこの時期の杯には柏原市大県・大県南遺跡（註２）や船橋遺跡（註３）で出土する精良な胎土の小型杯があるが、長原・瓜破遺跡ではいまのところ確認していない。柏原市域出土の資料には、この精良な胎土の杯とやや粗い胎土の杯が共存しており（註４）、一様ではないようだ。いずれにせよ、出土量の少なさからみて、柏原市域に比べて当該地域では土師器杯があまり使用されなかったと考えられる。

ところで、柏原市域の土師器杯は飛鳥地域における飛鳥Ⅰ期の杯Ｃ（図137－4～6）（註５）の祖形であるとする考え［坪之内徹1989 p.60］があるが、飛鳥時代の精製された土師器食器類からなる独特の土器様式が河内地域で生れたとする前提に立てば、これを支持することができよう。

一方、須恵器における杯は初期の段階から長原・瓜破遺跡において多量に出土しているが、これらが土師器杯の普及を妨げたことは否定できない。古代における土師器生産地と考えられる土師の里遺跡周辺地域に

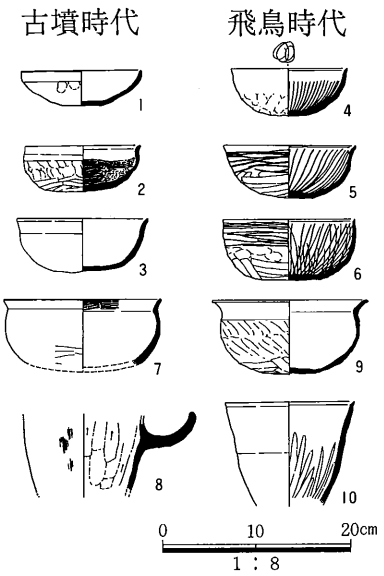


図137　古墳時代と飛鳥時代の杯・鉢

おける須恵器の出土比率の低さは、泉州地域と河内地域の相異点として指摘（註６）されることが多いが、長原・瓜破遺跡においては数値として提示できないものの、かならずしも土師器の優位を示していない。むしろ、調理用の器種としての甕・羽釜・甑・鍋を土師器が占め、食器類としての杯・高杯、貯蔵容器としての壺・鬲に須恵器が多いといった、器種による選択がなされているといえる。長原・瓜破遺跡は中・南河内の土師器生産地に隣接するとともに、陶邑古窯址群の位置する泉北丘陵から北にのびる河内台地の先端部に位置しており、西除川・東除川の流れる谷筋を通じて、泉北地域との交通も可能であった。こうしたことから、須恵器の入手が容易であったと考えられること、また、前述のように遅くとも６世紀代にはこの地域で独自の須恵器窯が営まれていたことなどから、食器類が須恵器に求められたことは当然といえよう。

ただ、５世紀後半～６世紀初頭ころまで、後述する土師器高杯が比較的多く出土しており、須恵器高杯とは別に、土師器高杯も主要な食器として位置付けることができる。以下に、高杯の分類とその変遷を検討したい。

高杯（図138）

高杯には杯部の形態の違いから３類に分類できる。杯部が椀形のものには、口縁部が内湾ぎみに立上がり、端部は丸くあるいは面をつくっておわるＡ類（14～16）、口縁端部を外反させるＢ類（11・17・18）がある。前者の杯部内面には暗文を施すものがある。後者の形態については布留式期に特徴的なものである。また、平底の底部をつくり、体部との区分が可能な杯部をもつものをＣ類とするが、大型（13・20・22・23）と小型（12・19・21）の２種がある。Ｃ類はＡ・Ｂ類の高杯に比べて脚部の柱状部から裾部の広がりが大きく、その境界が明瞭なものが多い。須恵器出現期の資料は、布留式期のそれに比べ、杯部が深くなる傾向がある。Ａ類と同じく、杯部内面に暗文を施すものがある。

以上３類の高杯の変遷をたどると、須恵器出現の直前、布留式の新相期においては高杯Ｂ・Ｃ類が主体であり、須恵器の出現直後はＢ・Ｃ類を含みつつも、Ａ類が増加する。おもに、ＴＫ216型式からＴＫ23型式期においてはほとんどがＡ類で占められていたようだ。本書で報告した当該期の土師器高杯がすべてＡ類であったこともこのことを示唆している。

高杯の器種に変化がみられるのはＴＫ23型式期で、Ａ類に比べＢ・Ｃ類が目立つようになる。Ｃ類の杯部はＡ類の影響からか23のように口縁部が内湾ぎみとなり（註７）、船橋Ｏ－Ⅳ・Ⅴ［原口正三ほか1962］には、Ｃ類の小型品にＢ類と同じく端部を外方に屈曲

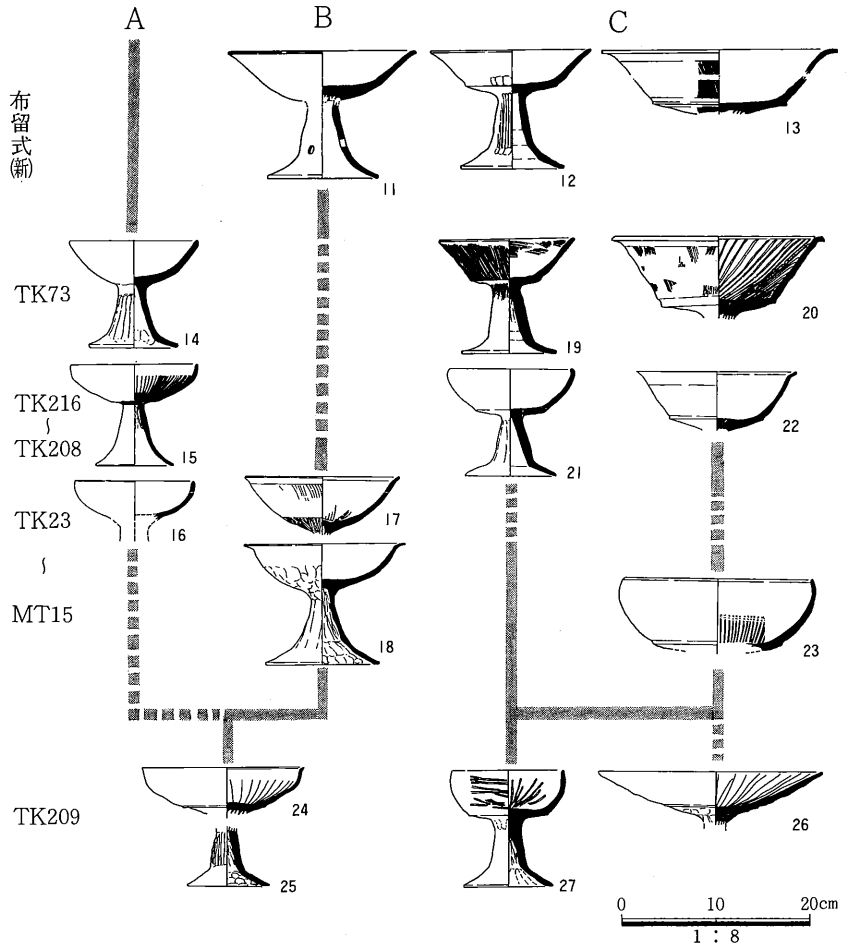


図138　高杯の変遷

させる特徴をもつものがある。

脚部に注目すれば、18にみられるように、柱状部内面の絞り痕や、裾内面の成形時のユビオサエ痕をそのまま残し、裾端部内面に地面に接してできた平坦面が残されるなど、脚部内面の仕上げ調整が省略されるようになる。この特徴は飛鳥時代の高杯にもみられるものである。

また、布留式以後の高杯にみられた杯部と脚部の接合部内面の棒による刺突様の痕跡が、この時期に消失しており、上述の脚部内面の仕上げ調整の省略と関連した変化といえよう。

以上の高杯の変遷過程の大要はすでに船橋遺跡の報告で同様な変遷が示されており（註8）、ここではそれを補足したにすぎない。6世紀代の高杯の資料は、MT15型式期以後は少なく、B・C類のその後の変遷は明らかでないが、6世紀を通じて、B・C類が相互

に影響しあいながらＴＫ209型式期（飛鳥Ⅰ期）にみられる高杯をうみだしたと考えられる。

鉢（図137－7～10）

本書で報告した7は長原・瓜破遺跡において確認されているほとんど唯一の古墳時代の資料である。この鉢は底部外面をヘラケズリして丸底に整形している。胎土は高杯Ａと同様の精良なものである。６世紀代の資料は得られていないが、船橋Ｏ－Ⅲ～Ｏ－Ⅴでは数点が報告されており（註９）、ＭＴ15型式ころまで存在する。さらに、飛鳥Ⅰ期の資料中にもこれと類似した形態の鉢9がある。この資料は器高の低い甕の形態で、底部外面をヘラケズリする手法は7と共通している。

ＴＫ23型式期ないしＴＫ47型式期に把手付鉢が出現する。この器種は飛鳥Ⅰ期まで存続するもので、形態や調整は飛鳥時代のもの（図137－10）とまったく同じである。しかし、古墳時代においては出土量は少なく、長原西地区の85－16次調査の井戸出土品（図137－8）にみられるのみである。また、船橋遺跡ではＯ－Ⅳ・Ⅴに大小２種の類例がある。

大型の鉢として山陰系の口縁部を呈する土器が須恵器出現直前まで存在しているが、それ以後は認められない。

なお、韓式系土器に小型平底鉢と呼ばれる器種があるが、この土器の外面にはほとんど例外なく煤が付着しているため、用途としては小型甕であって、食器としての鉢とは区別しておきたい。

壺（図141－55～62）

土師器の壺はほぼ中・小型の直口壺に限定できるが、大型品として口縁部が二重口縁に類似し、体部が球形をなす壺がある。これはＴＫ２３型式期のもので、生駒西麓産の胎土である。外面がヘラミガキやナデによってていねいに仕上げられた精製品と、やや粗い胎土で外面をハケで調整し、器形も前者に比べていびつなものがある。こうした製作手法と胎土の異なる二者の壺は飛鳥時代においても共存する。

ii）調理用土器

主要な調理用土器としては中・小型甕、長胴甕、甑、鍋がある。これらの器種は６世紀になって、共通の調整手法で製作されるようになるため、以下にその調整手法を示す（図139）。

ａ手法：外面ハケ調整で、内面もハケ調整する。内面には外面のハケ調整時に内面に指をあてがったためにナデ痕を残すことがある。口縁部内面もハケ調整することが

多い。

b手法：外面ハケ調整で、内面をヘラケズリする手法である。内面の下半部のみをヘラケズリするb－1手法とほぼ全面をヘラケズリするb－2手法がある。口縁部内面はハケ仕上げすることがある。前者はハケ調整後に下から上にヘラケズリする。ナデ調整のばあいもある。後者も少なくとも上半部はハケ調整してからヘラケズリしたものと思われるものがある。ヘラケズリは大型品においては上半部が横方向、下半部が縦方向である。

c手法：外面ハケ調整で、内面調整をおもにナデで行う。内面のナデは板状の工具によることが多い。また、まれに外面もナデ仕上げするものがある。口縁部および頸部内面に粗いハケメが残ることがあるが、板状工具によるナデと区別できない部分もある。

このように、調整手法を3種に分類したが、体部内外面の調整手法はハケ調整を基調とするものが多く、内面の最終調整にヘラケズリするものとナデ仕上げするものを分離したにすぎないとも思われる。しかし、内面全体をヘラケズリするb－2手法やナデ調整するc手法はハケ調整を主体とする手法とは異なる系譜を想定することも可能であろう。

以下に、上述の手法を用いた各器種の概要を記述しておきたい。

中・小型甕

小型品は球形に近く、中型品はやや長胴ぎみの体部である。調整はa手法・b－2手法・c手法がある。TK73型式期からTK208型式期にはc手法も多くみられるが、その後、a手法・b－2手法の2種類にほぼ限定される。

a手法は6世紀の後半代には衰退すると思われ、飛鳥時代の資料には確認できない。b－2手法は飛鳥時代以後もこれを用いた甕が主要な器種を構成する（註10）。外面のハケ調整はa手法に比べて、b－2手法がより細かくていねいなものが多く、胎土も後者がより精選された感がある。

c手法を用いた6世紀代の資料は少ないが、外面をユビオサエやナデで仕上げ、内面を工具により平滑にナデ仕上げする中・南河内の特徴的な甕の手法（註11）につながる可能性がある。

長胴甕

長胴甕はTK73型式期に体部外面にタタキを施す韓式系土器として登場する。形態上の変化はあまりない。土師器としての長胴甕の内外面の調整にはa手法、b－1・2手法、

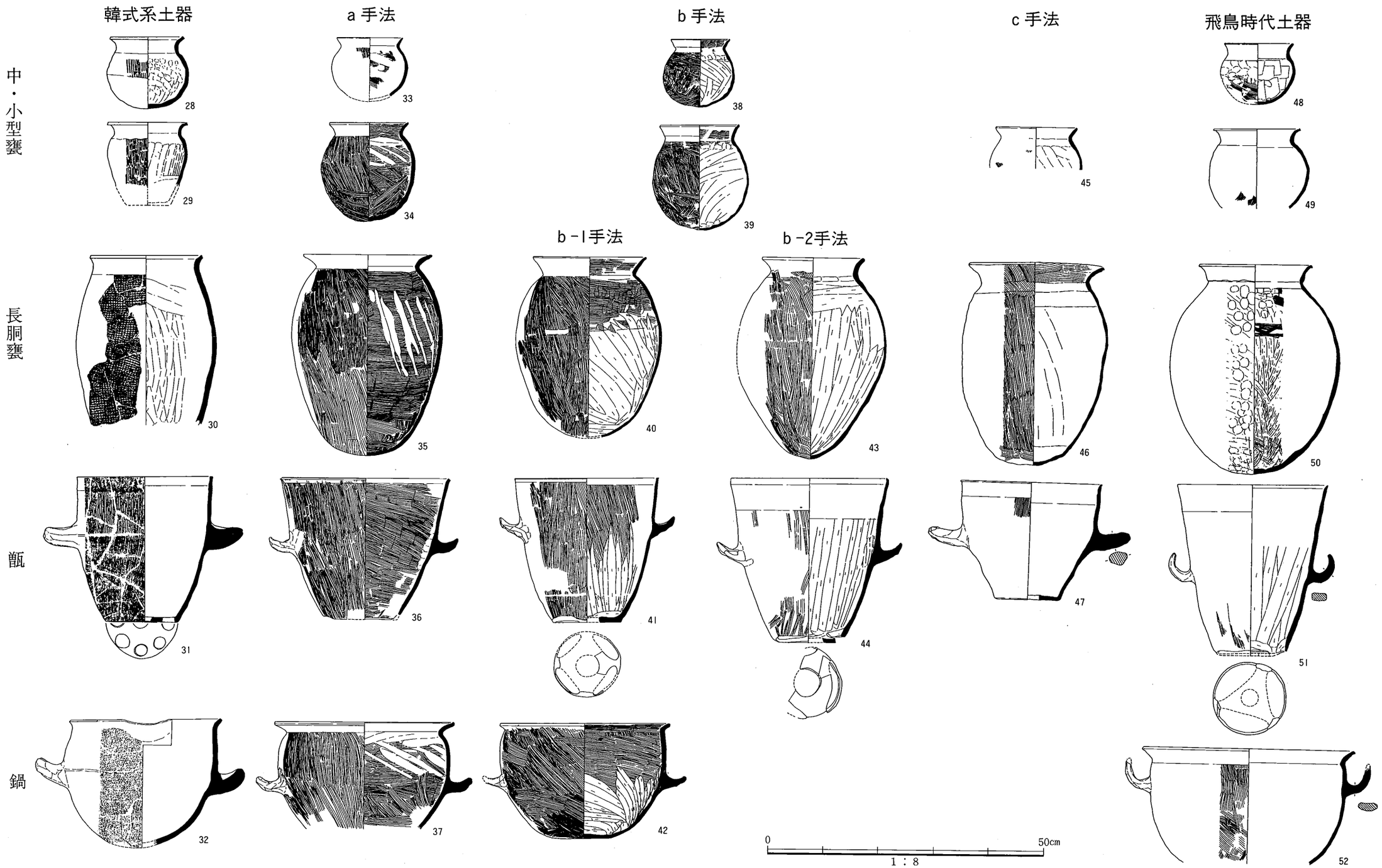


図139　調理用土器の調整手法

ｃ手法がある。ＴＫ73型式期以後、ｃ手法が中心であるが、外面がナデ調整の資料もある。これは韓式系土器の体部内面が例外なくナデで最終的に仕上げていることから、その手法が踏襲されているとみることもできる。

しかし、ＴＫ23型式期以後はａ手法・ｂ－１手法を中心として、ｂ－２手法・ｃ手法も少数例認められる。

体部外面の最終調整は底部を中心とする下半部のハケ調整で、上半部に残る最初のハケ調整と異なる原体を用いている資料がある。胎土は砂粒の少ない精良なものが多いが、ｃ手法の資料にやや粗い胎土のものがある。

飛鳥・奈良時代においては羽釜とともに出土しており、両者が併用されていたようである。体部の調整は古墳時代と同じくａ手法、ｂ－１手法が多い。

甑

甑は韓式系土器の系譜をひく器種である。平底からやや外方に直立する形態がほとんどであるが、丸底のものもある。底部の蒸気孔はＴＫ73型式期には小円孔を多数配するものであるが、ＴＫ216型式期ころには中央に円孔を配し、外周に４～３個の楕円形孔を配するものが現われ、時期が新しくなるほど外周を３孔とするものが主流になる。口縁部形態は初期の段階では口縁部を大きく外反させたり、短く直角に屈曲させ、端部に面をつくるものなどがあるが、のちには上端部に内傾する面をつくって、内面にやや肥厚させる布留式甕の口縁端部に近い形態をとるものと、やや内湾ぎみで端部内面を丸く肥厚させるもの、やや外反させ、端部は面をつくるものなどが主流となる。把手の形態上の変化は大きいため、以下に詳述しておきたい（図140）。

韓式系土器の把手は根元部分と先端部分の太さに大きな差がない棒状のもので、先端を面取りするものがある。上部にヘラによる切込みをもつもの（Ａ）とナデによって凹みをつくるもの（Ｂ）がある。ＴＫ216～ＴＫ208型式期には外面調整がハケとなるが、把手の形状は根元が太く、先端部が細くなる傾向がある（A_1・A_2）。また、この時期に体部に挿入した把手の粘土棒を指で軽く押潰し、中央が若干凹む偏平な把手に整形するものが現われる（B_1）。この把手の偏平化はおもに韓式系土器にみられた把手上部をナデによって凹ませる手法に由来するものと思われる。しかし、この段階の偏平な把手は先端を尖らせたり、上部に湾曲させるなどの意識はまだみられず、平面的には円形に近い形状である。ＴＫ23型式期以後は、全体的に幅を細くして、上部に屈曲させる傾向が顕著となる（B_2）。そして、飛鳥Ｉ期の資料においては上方への湾曲がさらに顕著となり、先端を尖らせた細

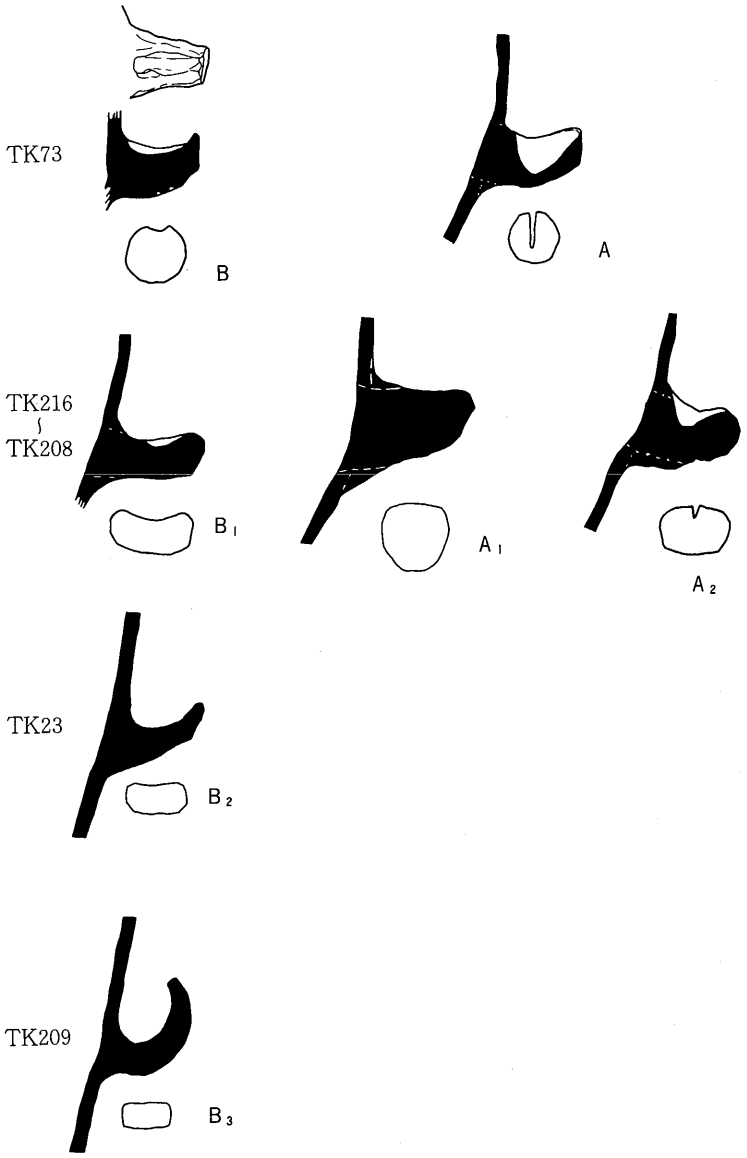


図140　把手の変化

身のものとなる（B_3）。以上がこの地域の主流をなす把手形態の変化であるが、ほかに、ＴＫ23型式の須恵器を共伴した図49－136のように、細身でなく幅が広いものや偏平な把手上部に切込みを１ないし２条施すものもある。また、把手の体部への接合はほとんどが挿入によるものであるが、貼付けによるものも少量みられる。この地域で出土する甑・鍋の把手は完全に偏平になった飛鳥時代においても挿入法が多く、貼付け法によるものは例外的といえそうだ。

体部の調整手法はａ～ｃ手法のすべてがあるが、ａ手法・ｂ－１手法が多く、ｂ－２手法・ｃ手法の資料は少ない。小型品が少数あるが、ほとんど同一の大きさである。また、飛鳥Ⅰ期の資料も内面下半部をヘラケズリするｂ－１手法を用いるが、内外面のハケメが顕著でなく、把手の屈曲が顕著である。

胎土はＴＫ23型式期以後、雲母の細粒を含む、精良なものが多くなる。東大阪市池島・福万寺遺跡では生駒西麓産の資料があるが［江浦洋1991］、長原遺跡では認められない。

鍋

鍋は出土量が甕・甑に比べてやや少ないが、各時期の資料があるので、その変遷をたどることができる。鍋は初期須恵器に伴う韓式系土器として出現する。これらは平行あるいは格子タタキを外面に残すものである。形態には、口径が器高に比べて大きいいわゆる鍋と、口径と器高が等しい把手付甕というべきものがあるが、ここでは両者を鍋として扱いたい。

口縁部の形態は各時期の資料とも甕に共通しているが、口縁部が短いもの（図139－42）など長胴甕にみられない口縁部形態を示す資料もある。また、片口を作るものがある。把手の形状の変遷は甑と共通している。調整手法はａ手法・ｂ－１手法そして内面の下半部をヘラケズリして上半部がナデ調整のものがある。飛鳥Ⅰ期の資料中には外面をハケとナデ、内面を板状工具でナデ仕上げするｃ手法の範疇に属する手法がみられる。

ⅲ）その他の調理用土器

布留式系甕（図141－63～66）

口縁部の形状から布留式甕の系譜をひくと思われる甕である。体部が球形に近く、口縁端部に内傾する面をつくる。体部内面はヘラケズリとユビオサエだけでなく、ＴＫ23型式期にはハケやナデのものもある。これらは、石英・長石などの砂粒を多く含む他の甕と異なる独特の胎土をもつことが多い。

羽釜（図141－67・68）

長原・瓜破遺跡ではＴＫ23型式期からＴＫ47型式期の資料が最古で、その後、ＴＫ10型式期および飛鳥Ⅰ期の資料がある。いずれも生駒西麓産の胎土で、それ以外の胎土の資料はない。ふくらみのない長胴形の体部から外反する口縁部をもつもので、外面の頸部のすぐ下に鍔がつく。外面の調整は口縁部から鍔部がヨコナデ、それ以下の体部は縦方向のハケ調整である。内面は口縁部を横方向のハケで仕上げ、鍔接合部の内面が横方向のナデ、体部内面はナデないしユビオサエである。ｃ手法に近いが、器壁が非常に薄く仕上げられている。いずれの資料も調整・形態がほとんど同じで、時期による差異をみいだしがたい。

この地域における、古墳時代の竈用の主要な炊飯具は長胴甕であり、羽釜の出土量は少ない。羽釜の出土量が増加するのは飛鳥時代以後であると考えられる。

移動式竈

竈は土器というより土製品とすべきであるが、製作手法や胎土において土器と共通する

点が多いため、ここで触れておく。今回の報告資料にはないが、西地区で出土している資料はＴＫ208～ＴＫ23型式期ごろの資料がもっとも古いように思われる。これらはいわゆる付け庇系（註12）のもので、胎土は甕や甑と変わらない。この地区で確認された竪穴

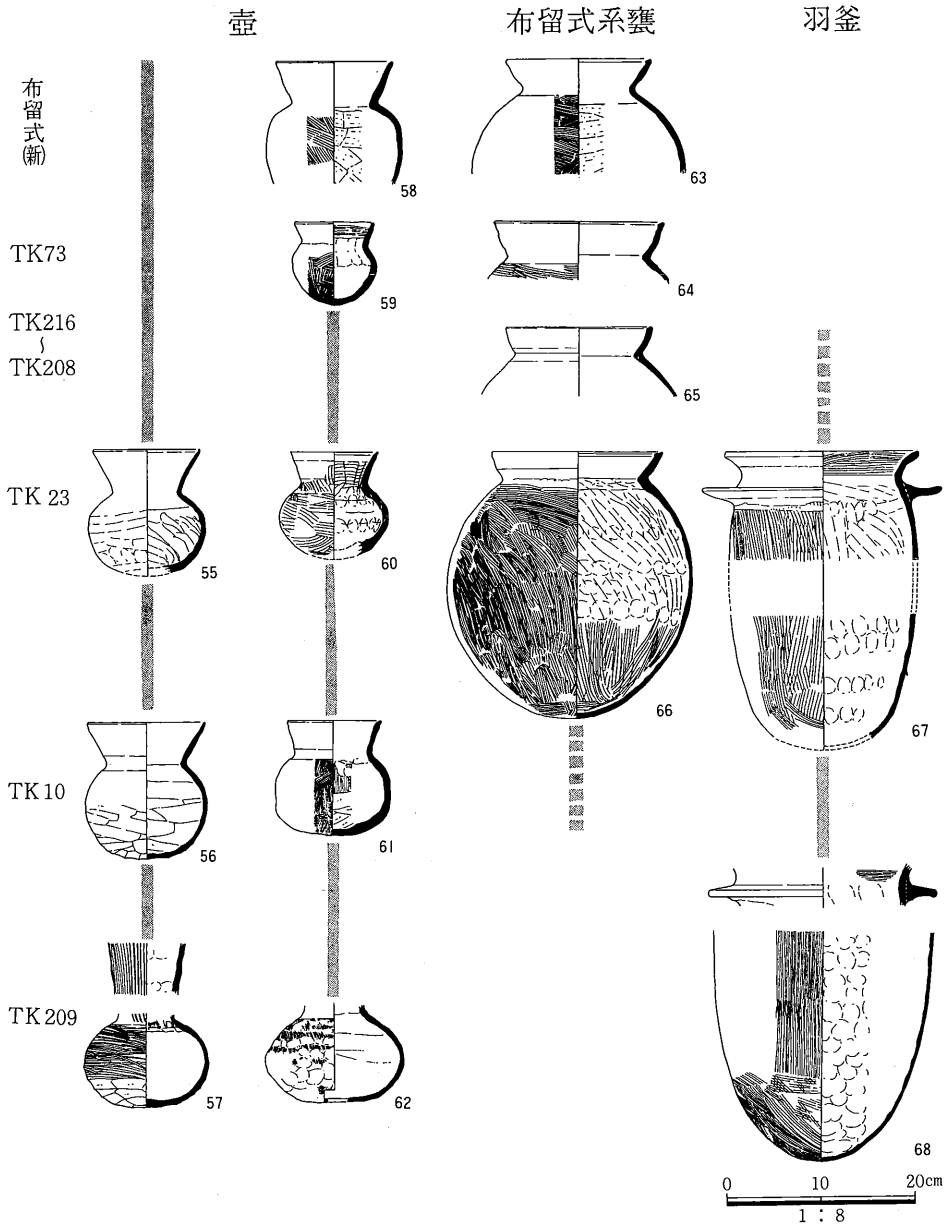


図141　各器種の変遷

住居には造付けの竈をもつものはないが、通常、造付け竈が築造される床面の北西側の壁際付近に焼土が集中していたり、床面が焼けている例がある。また、この付近に土師器高杯を逆位に置いていた例もある。このことから、長原遺跡西地区における５世紀後半代の竪穴住居は住居内で付け庇系の移動式竈を使用していた可能性が考えられる。なお、生駒西麓産の胎土の曲げ庇系の移動式竈は飛鳥Ⅰ期の資料に初めてみられる。

古墳時代の竈が付け庇系に限られることは、前述した羽釜の出土量が少なく、長胴甕がこの時期の主要な炊飯具であることと関連すると思われ、稲田氏が指摘された、両系統の竈に本来組合う「釜形土器」の差異［稲田孝司1978 pp.55-56］を裏付けているようである（註13）。

４）器種と調整手法の消長

以上、５・６世紀の土師器の器種についてみてきたが、須恵器出現期から飛鳥Ⅰ期における土師器の変遷を器種と調整手法の消長の両面から検討したい。

まず、器種は須恵器・韓式系土器の登場とともに新しい器種構成が形成されるが、それは布留式土器の系譜と韓式系土器の系譜の二者に分けられる。

前者の器種には高杯Ａ・Ｂ・Ｃ、鉢、壺、布留式系甕があり、ＴＫ23型式期ころには消滅する布留式系甕を除けば、食器に限定され、特に、高杯は主要な器種として前述の変化を辿り、飛鳥時代まで主要な食器の一つとして存在する。その他の食器類も量的には少ないが、飛鳥時代まで存続している。

後者の器種には把手付鉢、長胴甕、甑、鍋、羽釜、竈がある。これらは把手付鉢を除けばすべて調理具である。

ＴＫ73型式からＴＫ216型式期に多くみられる韓式系土器の小型平底鉢は小型甕といえるが、この時期以後はみられなくなる。これにかわる中・小型甕は長胴甕などと同じ調整手法であるが、形態上は前者の系譜とすべきだろう。大型品では、量的には長胴甕や甑が多く、これに対して鍋や羽釜は少ない。量的な違いはあるが、ほとんどすべての器種が飛鳥時代まで形態や手法の伝統を残している。

一方、調理用土器の調整手法についてみると、ＴＫ73型式期からＴＫ216型式期における内面調整は韓式系土器と同じく、ナデ調整のｃ手法あるいは布留式甕からの系譜を想定可能なｂ－２手法が多い傾向が認められる。しかし、この段階では初期須恵器のそれと同じく、各器種の形状・調整手法はまだ固定せず、須恵器と役割を分有して新しい土器様

式を模索する段階であったといえよう。

次に、ＴＫ23型式からＴＫ47型式期以後には、ａ手法・ｂ手法が基本的な手法として確立し、６世紀代を通じてこの地域の土器様式を規定する要素となっている。ｂ手法のうち長胴甕・甑・鍋の大型器種は体部内面の下半部のみをヘラケズリし、上半部にハケメを残すｂ－１手法がほとんどである。ａ・ｂ手法を通じて、内面調整にハケ調整を多用することがこの段階の特徴ということができる。

甕の口縁部内面にハケメを残すことが庄内式甕・布留式甕にしばしばみられることや、甑の口縁部に布留式甕の口縁端部に通じるものがあること、雲母の細粒を含む精良な胎土が布留式甕に類似していること、高杯・鉢などの食器類が布留式土器の系譜であることなどは、これらの調理用土器が布留式土器の系譜により近いことを示している。

しかし、内面調整にハケ調整を多用する手法は須恵器・韓式系土器・布留式土器にはみられないものであり、これら以外の系譜をひく手法であろう。そこで、内面にハケメを残す手法が庄内式期に存在する第Ｖ様式の系譜をひく甕にみられるものであり、これを在地産の土器とみて、布留式期にみられなくなった在地的な土器製作の手法が復活したものと評価することもできよう。

５）まとめ

既述のように柏原市船橋遺跡、大県・大県南遺跡や藤井寺市津堂遺跡［大阪府教育委員会1987］などでも長原・瓜破遺跡の資料にみられるのと同様の手法や器種が存在していることから、本遺跡の土師器は中・南河内地域を中心とする広い地域において成立した古墳時代後半期の土器様式の一端をなすものといえよう。

これらは、須恵器とともに、新しい土器様式を構成するものとして位置付けるべきものであり、器種や製作手法の系譜は前代の布留式土器や韓式系土器を基調としながらも、各地域の時代背景に依拠した多様な要素を包括しうるものであっただろう。特に、この地域の新しい調理用の土師器の開発は、祖形となる韓式系土器の出土量が豊富な河内平野部に近い地域でなされたと考えることが自然であるが、それは新しい器形に対応した新しい製作手法の開発をも伴うものと推定できる。そして、その系譜の由来は、本節で述べたように、前代の布留式土器の様式に限定することはできず、在地的な土器生産の伝統の中に求めることも可能であると思われる。

また、飛鳥時代にみられる土師器の形状・調整手法の祖形となる器種構成は、ＴＫ23

表11　土師器資料一覧

	発掘次数	出土遺構	参考文献		発掘次数	出土遺構	参考文献
1	NG85－16	井戸		34	NG84－25	井戸	
2	NG85－16	柱穴		35	UR1	包含層	
3	UR1	包含層		36	UR1	包含層	
4	NG12	溝		37	UR1	包含層	
5	NG12	溝		38	NG84－25	井戸	
6	NG12	溝		39	NG84－25	井戸	
7	NG83－70	土壙	本書報告161	40	UR1	包含層	
8	NG85－16	井戸		41	UR1	包含層	
9	NG12	溝		42	UR1	包含層	
10	NG12	溝		43	UR1	包含層	
11	瓜破北	包含層	［大阪市文化財協会1980］	44	UR1	包含層	
12	瓜破北	包含層	［大阪市文化財協会1980］	45	NG83－53	溝	本書報告262
13	瓜破北	包含層	［大阪市文化財協会1980］	46	NG82－41	井戸	［田中1987］
14	NG82－41	井戸	［田中清美1987］	47	NG82－41	井戸	［田中1987］
15	NG83－53	井戸	本書報告114	48	NG83－46	溝	本書報告567
16	NG83－32	土壙	本書報告130	49	NG12	溝	
17	UR1	包含層		50	NG1	溝	［長原遺跡調査会1979］
18	NG84－25	掘立柱建物柱穴		51	NG12	溝	
19	NG84－6	溝		52	NG12	溝	
20	NG84－6	溝		53	UR1	包含層	
21	八尾南	土壙	［八尾市文化財調査研究会1985］	54	NG85－16	溝	
22	八尾南	土壙	［八尾市文化財調査研究会1985］	55	NG12	包含層	
23	NG86－70	溝		56	瓜破北	包含層	［大阪市文化財協会1980］
24	NG12	包含層		57	NG84－4	包含層	［田中1987］
25	NG12	包含層		58	UR1	包含層	
26	NG12	包含層		59	NG85－16	溝	
27	城山その１	流路	［大阪文化財センター1986］	60	NG12	溝	
28	NG82－41	井戸	［田中1987］	61	瓜破北	包含層	［大阪市文化財協会1980］
29	NG16	土壙	［田中1987］	62	NG82－41	井戸	［田中1987］
30	NG16		［田中1987］	63	NG83－70	土壙	本書報告170
31	NG83－1		［田中1987］	64	UR1	包含層	
32	NG86－91	古墳	［高井健司1987Ｂ］	65	UR1	包含層	
33	NG83－53	掘立柱建物柱穴	本書報告111	66	NG12	溝	

型式からＴＫ47型式期に萌芽しており、この時期に、飛鳥時代の土器様式に発展する古墳時代後半期の土師器の様式が確立したと評価できるのではなかろうか。

（京嶋）

註）

（１）韓式系土器の概念については植野浩三氏の定義［植野浩三1987］にしたがうものであるが、本節では便宜的にタタキ成形による軟質土器に限定して用い、それ以外の資料で韓式系土器と呼ばれている軟質土器は、韓式系土器系譜の初現的な土師器として位置づけうるとみて土師器と呼称したい。

（２）大県・大県南遺跡［柏原市教育委員会1986］の図21掲載の37～41の土器など。

（３）船橋遺跡の報告［原口正三ほか1962］の第5図掲載の425・426の土器など。

（４）柏原市教育委員会、北野重氏のご教示による。

（５）器種名は『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』Ⅱ［奈良国立文化財研究所1978］にしたがう。

（６）たとえば、広瀬和雄氏の「中世への胎動」［広瀬和雄1986 p.317］でも指摘されている。

（７）TK73～TK216型式の須恵器と共伴した八尾南遺跡の21・22の土器にすでにこの傾向がみられる。

（8）船橋遺跡の報告［原口正三ほか1962］の巻末「船橋遺跡出土土器編年表」に示されている。

（9）船橋遺跡の報告［原口正三ほか1962］の第4図掲載の311～314の土器など。

(10) 小笠原好彦氏のいう「河内型」の中・小型甕Ａがこれにあたる［小笠原好彦1980 pp.55-56］。

(11) この種の甕は平安時代には藤井寺市はさみ山遺跡や北岡遺跡で生産されたものと思われるが、飛鳥・奈良時代にも存在しており、飛鳥Ⅰ期ころが初現期であると思われる。

(12) 稲田孝司氏による「付け庇系」と「曲げ庇系」の分類［稲田孝司1978 pp.54-55］にしたがう。

(13) 中西克宏氏は生駒西麓産の羽釜が同じ胎土の曲げ庇系の移動式竈と組合うことを両者の共伴関係から指摘されたが［中西克宏1988 pp.16-17］、長原遺跡の資料は逆に長胴甕と付け庇系の移動式竈の組合わせを示唆するものといえよう。

引 用・参 考 文 献

・安孫子昭二1988、「縄文土器の型式と編年」：大塚初重・戸沢充則・佐原眞編『日本考古学を学ぶ』（１）日本考古学の基礎（新版）、pp.183-202

・市原実1960、「大阪、明石地域の第四紀層に関する諸問題」：『地球科学』49　地学団体研究会、pp.15-25

・稲田孝司1978、「忌の竈と王権」：『考古学研究』第25巻第1号　考古学研究会、pp.52-69

・岩本正二1983、「７～９世紀の土器製塩」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.401-418

・植木久1983、「まとめ」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.237-246

・植野浩三1987、「韓式系土器の名称」：韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』Ⅰ、pp.1-2

・江浦洋1991、「河内玉作り遺跡と竈形土器・羽釜・甑」：韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』Ⅲ、pp.138-150

・大阪市文化財協会1980、『瓜破北遺跡』

1981、『瓜破北遺跡』Ⅱ

1982A、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1982B、「長原遺跡南部の層序」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.13-20

1983A、『瓜破遺跡』

1983B、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1983C、「縄文時代晩期から弥生時代」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.35-90

1983D、「奈良時代から室町時代」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.124-189

1989A、『長原遺跡発掘調査（NG89－67）現地説明会資料』

1989B、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ

1989C、「調査地の基本層序と遺物」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.21-30

1990A、「基本層序」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.19-20

1990B、「長原遺跡西地区の調査」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.166-182

1990C、「瓜破遺跡東南地区の調査」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.204-250

1990D、「長原遺跡南地区の調査」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.25-165

1990E、「長原遺跡東南地区の調査」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.183-203

1991、「層序」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.9-13

・大阪府教育委員会1987、『津堂遺跡発掘調査概要』86-1区調査

1991、「層序」：『八尾市若林町所在八尾南遺跡発掘調査概要』Ⅱ－大正川流域調節池築造に伴う－、pp.5-6

・大阪府教育委員会・大阪文化財センター1986、「層序」：『城山』（その３）、pp.8-13

・大阪文化財センター1978、『長原』

1986、『城山』（その１）

・小笠原好彦1980、「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」：『考古学研究』第27巻第2号　考古学

研究会、pp.53-65
・柏原市教育委員会1986、『大県・大県南遺跡』柏原市文化財概報1985－Ⅲ
・梶山彦太郎・市原実1972、「大阪平野の発達史－14C年代データからみた－」：『地質学論集』7号　日本地質学会、pp.101-112
・加藤芳朗1983、「火山灰土の生成メカニズム」：『火山灰土－生成・性質・分類』　博友社、pp.5-30
・川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会、pp.95-164
・関西大学考古学等資料室1985、『馬野繁蔵氏寄贈　瓜破遺跡採集資料報告』［Ⅰ］
1986、『馬野繁蔵氏寄贈　瓜破遺跡採集資料報告』［Ⅱ］
1987、『馬野繁蔵氏寄贈　瓜破遺跡採集資料報告』［Ⅲ］
・木原克司1982、「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.287-316
・京嶋覚1986、「長原古墳群とその造営集団」：大阪文化財センター主催『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』
1989、「長原古墳群の概要」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘報告』Ⅰ、p.17
1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294-306
・京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990、「喜連東遺跡の奈良時代建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』24号
・京都市埋蔵文化財研究所 1990、「平安時代前期の土器」：『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、pp.99-109
・熊井久雄・北川芳男・赤羽貞幸1982、「第四紀の古地理的変遷」：新堀友行・柴崎達雄編『第四紀』第2版　共立出版、pp.144-186
・黒田慶一1986、「長原（城山）遺跡出土の「冨官家」墨書土器」：『ヒストリア』111号　大阪歴史学会
・建設省国土地理院1965、「河内低地とその周辺」：『土地条件調査報告書（大阪平野）』第3編Ⅱ、pp.69-76
・小林達雄・泉拓良編1983、「縄文土器編年表」：『世界陶磁全集』1日本原始　小学館、pp.313-314
・佐藤良二1989、「近畿地方におけるナイフ形石器群の変遷」：旧石器文化談話会編『旧石器考古学』38、pp.121-132
・清水正健編1978、『荘園志料』上巻　角川書店
・新堀友行編 1986－1988、「第四紀（人類紀）の編年表」：『カラーシリーズ日本の自然』第1～10巻　平凡社
・杉原荘介・神沢勇一1961、「大阪府瓜破遺跡」：日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』、pp.325-337
・鈴木秀典1982A、「瓦器椀の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
1982B、「古代～中世における長原遺跡の性格」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.122-124
1983A、「古墳時代から奈良時代の遺構と遺物の検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.219-237
1983B、「水田について」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.219-223

1984、「長原遺跡の飛鳥時代以降」：大阪市立博物館・大阪市文化財協会編『発掘された大阪』、pp.32-35
・高井健司1987A、「城下マンション（仮称）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-23）略報」：大阪市教育委員会文化振興課編『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.149-185
1987B、「長原古墳群で埋葬施設を確認」：大阪市文化財協会編『葦火』8号
・田中清美1987、「長原遺跡」：韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』Ⅰ、pp.35-41
・田辺昭三1981、「須恵器の変遷」：『須恵器大成』　角川書店、pp.34-45
1982、「初期須恵器について」：『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社、pp.417-429
・樽野博幸1978、「長原遺跡出土の哺乳動物遺体」：長原遺跡調査会編『長原遺跡発掘調査報告』（大阪市文化財協会　1982改訂）、pp.196-199
・地団研専報第32号編集委員会1987、「野尻湖の発掘４（1984-1986）のまとめと今後の課題」：野尻湖発掘調査団編『野尻湖の発掘４』地団研専報32、pp.195-204
・趙哲済1983、「遺構検出面の便宜的な呼称」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.31-33
1990、「大阪市長原遺跡の地層と古地形」：『日本文化財科学会第6回大会研究発表要旨集』、pp.4-5
・坪之内徹1989、「韓式系土器と７世紀の土器」：韓式系土器研究会編『韓式系土器研究』Ⅱ、pp.53-63
・中西克宏1988、「生駒西麓産の羽釜」：『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.4,No.1　東大阪市文化財協会、pp.7-18
・永島暉臣慎1978、「縄文・弥生の接点」：大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第１巻、pp.304-306
・長原遺跡調査会1978、「長原遺跡の歴史的環境」：長原遺跡調査会編『長原遺跡発掘調査報告』（大阪市文化財協会　1982改訂）、pp.3-10
・那須孝悌・天白俊馬1987、「中～上部更新統」(1)・(2)：『日本の地質』６近畿地方　共立出版、pp.157-160
・那須孝悌・樽野博幸1979、「大阪平野におけるウルム氷期以降の層序」：文部省科研費総研『ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究』昭和53年度報告書、pp.78-79
1981、「河内平野の生いたち」：大阪市立自然史博物館編『河内平野の生いたち』、pp.4-26
・奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
1978、『飛鳥藤原宮発掘調査報告』Ⅱ
1989、「土器埋納遺構の性格」：『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第46冊、pp.198-201
・農耕文化研究振興会1988、「大阪府長原遺跡」：『水田遺構集成』、p.68
・野島稔1984、「河内の馬飼」：『万葉集の考古学』　筑摩書店、pp.402-408
・服部昌之1975、「古代の直線国境について」：『歴史地理学紀要』17　歴史地理学会
・羽曳野市教育委員会1984、『古市遺跡群』Ⅴ　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書9

・林田重幸・山内忠平1957、「馬における骨長より体高の推定法」：『鹿児島大学農学部学術報告』6　鹿児島大学農学部、pp.146-156
・林良博ほか1977、「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」：『日本獣医学雑誌』第39巻第2号　日本獣医学会、pp.165-174
・原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真1962、『船橋遺跡の遺物の研究』（Ⅱ）　平安学園考古学クラブ
・広瀬和雄1983、「古代の開発」：『考古学研究』第30巻第2号　考古学研究会、pp.35-69
1986、「中世への胎動」：『岩波講座日本考古学』6変化と画期　岩波書店、pp.295-356
・藤田幸夫1987、「長原遺跡から出土した古墳時代の木製品について」：大阪市文化財協会編『葦火』6号
・松井章1986、「亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体の分析」：大阪文化財センター編『亀井』（その2）、pp.423-479
1991、「家畜と牧－馬の生産」：石野ほか編『古墳時代の研究』第4巻　生産と流通Ⅰ　雄山閣、pp.105-119
・松尾信裕・森毅・山中一郎1983、「縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.193-218
・松藤和人1992、「大阪平野部における旧石器編年研究に寄せて」：『旧石器考古学』44号　旧石器文化談話会、pp.11-23
・松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史郎1987、「姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代」：『第四紀研究』第26巻第1号　日本第四紀学会、pp.79-83
・南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号
・本村悟1978、「水田土壌の灰色化」：川口桂二郎編『水田土壌学』2.6　講談社、pp.90-93
・森岡秀人1985、「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第Ⅴ様式の時間幅」：『信濃』第37巻第4号、pp.243-264
・八尾市文化財調査研究会1985、『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和59年度』
・家根祥多1982、「縄文土器」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.142-157
・山本博1940、「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて」（一）：『考古学雑誌』第30巻第11号　日本考古学会、pp.14-41
1941A、「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて」（二）：『考古学雑誌』第31巻第2号　日本考古学会、pp.21-36
1941B、「続大和川床出土の弥生式遺物に就いて」：『考古学雑誌』第31巻第7号　日本考古学会、pp.42-62
・横田賢次郎・森田勉1978、「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」：『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館、pp.1-26
・吉川周作・那須孝悌・樽野博之・古谷正和1986、「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」：『地球科学』第40巻第1号　地学団体研究会、pp.18-38

あ と が き

本書は長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う1983年度の発掘調査報告である。いまから８年も前の発掘成果をまとめたわけで、出土資料に対する当時の新鮮なイメージを復元し、盛込むことが十分できたとはいえない。現在、1991年度の区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、それらの資料をできるだけ早く報告するためにも、今後の報告書作りを急がねばならない。

そのため今年度は、本書の作製だけではなく次年度以降の報告書作りの体制を整え、これまでの既報告資料についての種々の情報を区画整理関係資料として一括整理・管理することにも力を入れた。今後の研究への利用を容易にするための作業である。こうした作業はミニコンおよびこの報告書作りのために導入したMacintosh IIsiを利用し、本文の版下作製は、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳと同様に当協会で行った。

ところで、本書の巻末には英文目次を加えた。当協会は諸外国の研究者との交流にも努めてきたが、そうした人達の要請に、ほんの僅かではあるが応えられた思う。コンピュータ等の「ハード」部分だけではなく、こうした「ソフト」面からも充実をはかっていきたい。

（永島暉臣慎）

おもな使用機器：Apple製Macintosh™ IIcx・IIsi

ソフト（原稿入力）：エルゴソフト製 EGword バージョン4.2

（文字編集）：エルゴソフト製 EGword バージョン4.2

（索引作製）：マーキュリー・ソフト Solo Writer バージョン1.2

（割付作業）：Aldus PageMaker®　バージョン3.5J

索　引

索引は、遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞に分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

A　a手法　76, 78, 191, 192, 193, 194, 198
B　b－1手法　78, 84, 192, 193, 194, 198
b－2手法　78, 83, 84, 192, 193, 194, 197
B－Ⅱ期（土器）118, 120, 122, 124, 126, 133, 134
B－Ⅱ－1期（土器）118, 133
B－Ⅱ－2期（土器）118, 120, 122, 124, 126, 133, 134
B種ヨコハケ　158
C　c手法　78, 83, 84, 88, 90, 192, 193, 194, 195,197
C－Ⅰ期（瓦器）21, 39, 114, 122, 126, 133, 134, 177
C－Ⅱ期（瓦器）20, 21, 39, 114, 126, 177
C－Ⅱ－1期（瓦器）126
C－Ⅱ－2期（瓦器）114
C－Ⅲ期（瓦器）20, 39, 171, 177
C－Ⅳ期（瓦器）20, 171, 174, 177
C－Ⅴ期（瓦器）20, 129, 171, 177
M　Ma12（海成粘土層）15, 182
Ma13（海成粘土層）15, 18
MT15（型式）39, 179, 190, 191
O　ON46（段階）129
T　TK10（型式）187, 195
TK208（型式）37, 68, 77, 78, 86, 88, 92, 129, 130, 131, 187, 192, 193, 196
TK209（型式）191
TK216（型式）68, 78, 80, 86, 88, 92, 129, 130, 131, 187, 189, 193, 197, 199
TK23（型式）77, 78, 80, 92, 129, 131, 187, 188, 189, 191, 193, 194, 195, 196, 197, 198
TK47（型式）78, 129, 187, 191, 195, 198, 199
TK73（型式）86, 187, 192, 193, 197, 199
あ　姶良Tn　181
朝顔形埴輪　158, 160
足跡　20, 21, 23, 29, 31, 162, 186
亜間氷期　182, 183, 186
亜氷期　181, 182, 183, 186
飛鳥Ⅰ期（土器）22, 178, 188, 191, 193, 194, 195, 197, 200
飛鳥Ⅱ期（土器）178
飛鳥Ⅲ期（土器）21, 178, 186
飛鳥Ⅳ期（土器）21, 178
当て具　4, 37, 78, 124, 158, 187
暗文　39, 80, 90, 169, 189
い　生駒西麓産　40, 77, 102, 116, 124, 170, 191, 194, 195, 197, 200
石庖丁　4, 40
移動式竈　170, 188, 195, 197, 200
糸切り　118
井戸枠　110
イネ科植物　184
イノシシ　72, 93, 94
伊万里（焼）20, 129, 175, 177
入口　67, 133
う　上町累層　15, 182
ウマ　71, 72, 73, 78, 93, 94
え　永楽通寶　139
円筒埴輪　4, 158, 160, 161
お　押圧剥離　40, 41, 42, 43, 55
凹基式（石）鏃　40, 41, 42
鬼瓦　5
か　灰釉（陶器）114, 118, 120, 122, 124
火災　133
火山ガラス　24, 25, 28, 181

火山灰層　24, 25, 28, 29, 181, 182, 184
化石林　182, 183
火葬骨　115
竈　170, 188, 195, 197, 200
唐草文軒平瓦　174
唐津（焼）　20, 177
灌漑　2, 153, 169, 184
環濠　3, 114
韓式系土器　76, 84, 88, 90, 187, 191, 192, 193, 195, 197, 198, 199
完新統　19, 25
が　瓦器　20, 21, 37, 39, 112, 113, 114, 122, 126,127, 129, 133, 134, 139, 150, 170, 171,174, 175, 177
瓦質土器　20, 127, 177
瓦質羽釜　150, 171, 175
き　北白川C式（土器）　25, 180
（畿内）第Ⅰ様式（土器）23, 179, 185
（畿内）第Ⅲ様式（土器）23, 179, 185
（畿内）第Ⅳ様式（土器）23, 179, 185
（畿内）第Ⅴ様式（土器）22, 40, 179, 198
衣蓋形埴輪　162
旧人　186
鋸歯文　84
切出し形ナイフ形石器　46, 51
く　杭　152, 175
クサビ　40, 43, 44, 45, 59, 136, 140, 141, 142
屈折率　28, 29, 181
黒ボク　22, 28, 184
け　蛍光X線分析　118
硅素　108, 118
畦畔　22, 36, 127, 154, 157, 162, 167, 169, 171
こ　格子タタキ　88, 195
更新統　25
小型平底鉢　76, 90, 191, 197
黒斑　4
甑　70, 73, 78, 84, 88, 142, 188, 189, 191, 193, 194, 196, 197, 198
古式土師器　187
捏鉢　150
木葉形石鏃　23, 184
ご　五輪塔文軒丸瓦　5
さ　細部調整剥片　51
阪手火山灰層　181
柵　4, 142, 170
山陰系　191
し　滋賀里Ⅳ式（土器）24, 179
篠窯系　118, 124
周溝　3, 4, 23, 157, 158, 161, 179
周壁溝　67, 68, 75, 88
焼土　108, 109, 110, 112, 114, 115, 133, 197
庄内式（土器）　22, 179, 198
じ　地鎮　111, 115
縄蓆文　68, 75
縄文土器　40, 179, 180, 185
条里　5, 6, 33, 112, 113, 127, 133, 134, 135, 136, 139, 153, 183
す　水田　20, 21, 22, 23, 32, 36, 127, 129, 131, 135, 136, 153, 155, 157, 161, 162, 165, 166, 167, 169, 171, 177, 178, 184, 185
須恵器窯　4, 187, 189
犂　20, 139
素掘り　68, 69, 152, 155
せ　製塩土器　4, 72, 73, 74, 86, 99, 169
青磁碗　39, 150
正方位　153, 161
石錐　40, 43
石鏃　3, 23, 25, 28, 40, 41, 42, 184
石斧　3, 4, 24, 40
石核　3, 45, 47, 49, 51, 52, 53, 142
瀬戸内技法　29, 51, 52, 53, 59, 142
塼　39, 104, 118, 136

阡線 33, 113
尖頭器 28, 40, 43, 136
そ 双孔円板 76, 92
総柱（建物） 61, 64, 94, 95, 109
算盤玉形 86
た 叩き板 4, 187
立飾り 162
竪穴住居 3, 4, 8, 40, 61, 63, 67, 68, 74, 75, 76, 88, 129, 130, 196
建替え 96, 134
縦長剥片 47, 53, 55, 58
樽形瓹 88
炭化物 22, 23, 24, 70, 72, 165, 180
炭化木 72, 73
だ 大畦畔 154
打面調整剥片 51, 53
ち 中型馬 93
柱根 108, 109, 116, 133
沖積層下部層 28, 140, 155, 157, 167, 181
沖積層上部層 1, 19, 22, 33, 35, 139, 155, 157, 167, 177, 178, 180
沖積層中部層 24, 180
鋳造 133
長胴甕 77, 78, 83, 84, 90, 191, 192, 195, 197, 198, 200
長鼻類 29, 186
つ 束柱 65, 94, 95
造付け竈 197
付け庇系 196, 200
坪境溝 113, 124, 129, 134
爪形文土器 24, 180
て 低位段丘構成層下部層 29, 31, 182, 183
低位段丘構成層上部層 28, 181, 183
手捏ね土器 157
と 砥石 39, 76, 90
巴文軒丸瓦 171, 174
トリベ 133
ど 銅 108, 118
土器埋納遺構 115, 126
土壙墓 71, 72, 93, 94
な ナイフ形石器 3, 28, 29, 40, 45, 46, 47, 49, 51, 59, 181
ナウマンゾウ 186
長原式（土器） 23, 24, 179, 185
７世紀代の建物群 4, 9, 142, 151, 154
鍋 78, 86, 146, 188, 189, 191, 194, 195, 197, 198
鉛 108, 118, 133
縄タタキ 39, 116
難波累層 15, 18, 19, 22, 24, 28, 180
ぬ 布目 39, 116, 139, 150, 152
は 羽釜 100, 102, 109, 116, 118, 124, 145, 150, 171, 175, 188, 189, 193, 195, 197, 200
陌線 33, 112, 113, 127, 133
畠 20, 133, 136, 155, 175, 176
蛤刃石斧 3, 40
貼付け突帯 179, 185
ば 晩氷期 181, 182
ひ 飛雲文（瓦） 5
庇 101, 102, 103, 104, 109
平瓦 39, 100, 116
び 備前（焼） 20, 177
ふ ファースト・フレイク 51, 55
福田ＫⅡ式（土器） 179
船橋Ｏ－Ⅲ～Ｏ－Ⅴ 191
船橋Ｏ－Ⅳ・Ⅴ 189, 191
船橋式（土器） 179
船元Ⅱ式（土器） 25, 180
布留式（土器） 77, 78, 83, 84, 90, 189, 190, 193, 195, 197, 198
へ 平安神宮火山灰層 29, 181, 182
平基式（石）鏃 42

平行タタキ　37, 84, 86, 88, 92, 124, 158
平城宮Ⅲ期（土器）21, 169, 178
平城宮Ⅴ期（土器）21, 99, 131, 134, 178
平城宮Ⅵ期（土器）21, 99, 131, 134, 178
偏平な把手　78, 84, 193, 194
ほ　方形周溝墓　3, 23, 179
放射状暗文　90, 169
放射性炭素年代　180, 181, 182, 183
方墳　4, 157, 161, 162
ほぞ穴　110
掘立柱建物　4, 8, 20, 22, 61, 76, 94, 99, 129, 130
ぼ　紡錘車　73, 76, 86, 185
ま　曲げ庇系　197, 200
間仕切り　102, 108, 109
み　溝で区画された屋敷地　106, 107, 109, 124, 133, 134
水口　162, 185
美濃（焼）　20, 177
め　面取り　86, 97, 140, 193
も　茂呂型ナイフ形石器　47
や　屋敷地　5, 107, 109, 122, 124, 131, 133, 134, 135, 142
弥生土器　2, 21, 40, 179, 185
ゆ　ユーズド・フレイク58
よ　翼状剥片　45, 46, 47, 49, 51, 52, 53, 59
横穴式石室　179
横大路火山灰層　28, 181, 184
四ツ池式（土器）　24, 180
ら　螺旋状暗文　169
り　龍泉窯系　39
流理構造　49, 51, 53, 58, 59, 141
れ　列点文　88, 90

〈地名・遺跡名など〉

い　池島・福万寺（遺跡）194
一ヶ塚古墳　162
う　「馬池谷」　2, 4, 5, 33, 35, 39, 40, 69, 74, 75, 88, 127, 130, 133, 135, 187
瓜破台地　1, 2, 3, 5, 6, 15, 33, 129, 134, 135, 139, 187
瓜破廃寺　2
お　大県・大県南（遺跡）188, 198, 199
か　河内台地　1, 15, 189
河内平野　15, 18, 93, 198
き　喜連東（遺跡）4, 5
こ　高野街道　4, 5
古川辺川　24, 25, 32
「古長瀬川」　15, 18
「古平野川」　15, 18
ご　ゴマ堂山古墳　4
さ　西琳寺　136
狭山池　18
し　七ノ坪古墳　179
す　陶邑古窯址群　189
つ　塚ノ本古墳　178, 186
津堂（遺跡）　198
と　登呂（遺跡）　185
な　長原古墳群　4, 22, 178, 179, 184
長原庄　136
に　「西谷」　2, 4, 5
の　野尻湖立ヶ鼻（遺跡）186
は　土師の里（遺跡）　188
花塚山古墳　4
羽曳野丘陵　1, 139
ひ　「東谷」　2, 3, 4, 5, 187
東除川　1, 11, 19, 175, 176, 183, 184, 189
ふ　船橋（遺跡）　188, 190, 191, 198, 199, 200
へ　平安京　118, 122
平城京　115
や　八尾南（遺跡）19, 22, 179, 182, 199
大和川　2, 15, 18, 182, 183

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume Ⅲ

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1983

March 1992

Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Preface
Acknowledgements

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari Sites.....1
1 Archaeological environments of the Uriwari Plateau.....1
1) Introduction.....1
2) Excavations on the Uriwari Plateau.....2
2 Progress of research work.....7
1) West Sector of the Nagahara Site.....7
2) South-eastern Sector of the Uriwari Site.....9
3) Southern Sector of the Nagahara Site.....10
4) Central Sector of the Nagahara Site.....11
5) South-eastern Sector of the Nagahara Site.....12

Chapter II Stratigraphy of the Nagahara Site.....15
1 Topographical and geological outline of the Nagahara Site.....15
2 Standard stratigraphy of the Nagahara Site.....19
1) Holocene series.....19
2) Upper Pleistocene and the lower part of Holocene series.....25

Chapter III Results of excavations.....33
1 Western Sector of the Nagahara site (site code: NG83-32, 53 and 70)....33
1) Western Sector and its stratigraphy.....33
2) Artefacts earlier than the Kofun Period.....39
3) Features of the Kofun Period.....61
4) Artefacts of the Kofun Period.....76
5) Features and artefacts of the Nara Period.....94
6) Features of the Heian Period.....99
7) Artefacts of the Heian Period.....116
8) Features and artefacts after the Heian Period.....127
9) Conclusion.....129

2 South-eastern Sector of Uriwari Site (UR83-44).....139
1) Stratigraphy and artefacts.....139
2) Features and artefacts of the Asuka Period.....142
3) Features and artefacts of the Medieval Period.....148
4) Principal unidentified features.....150
5) Features and artefacts of the Pre-modern Period.....152
6) Conclusion.....153
3 Southern Sector of the Nagahara Site (NG83-46 and 52).....155
1) Stratigraphy and artefacts.....155
2) Features and artefacts of the Kofun Period.....157
3) Features and artefacts of the Asuka and Nara Periods.....162
4) Conclusion.....166
4 Central sector of the Nagahara site (NG83-23).....167
1) Stratigraphy.....167
2) Features and artefacts of the Asuka and Nara Periods.....169
3) Features and artefacts from the Heian to Muromachi Periods.....170
4) Features of the Pre-modern and Modern Periods.....175
5) Conclusion.....175

Chapter IV Discussion.....177
1 Stratigraphical problems at the Nagahara Site.....177
1) Chronology of strata at the Nagahara Site.....177
2) Stratigraphical perspectives on the dating of features and artefacts from the Nagahara Site.....183
2 Constitution of Haji ware of the Later Kofun Period.....187
1) Introduction.....187
2) Description of Haji ware.....187
3) Typological classification of Haji ware.....188
4) Change in types and surface finishing techniques of Haji ware.....197
5) Conclusion.....198

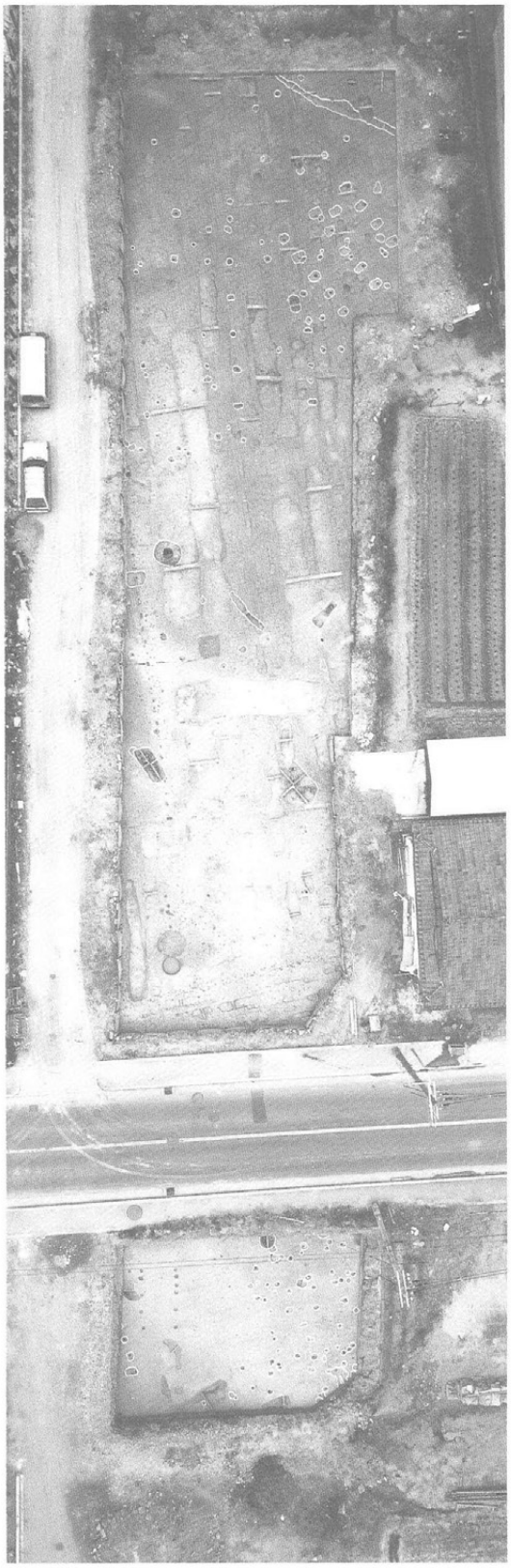
References.....201

Postscript
Index

図　　版

図版一　長原西地区　Ⅰ・Ⅱ区全景

Ⅰ区



Ⅱ区

図版二　長原西地区　Ⅰ区北部全景

Ⅰ区北部(南から)

Ⅰ区北部(西から)

図版三　長原西地区　Ⅰ区南部全景

Ⅰ区南部(北から)

Ⅰ区南部(南から)

図版四　長原西地区　Ⅱ区全景

Ⅱ区(北から)

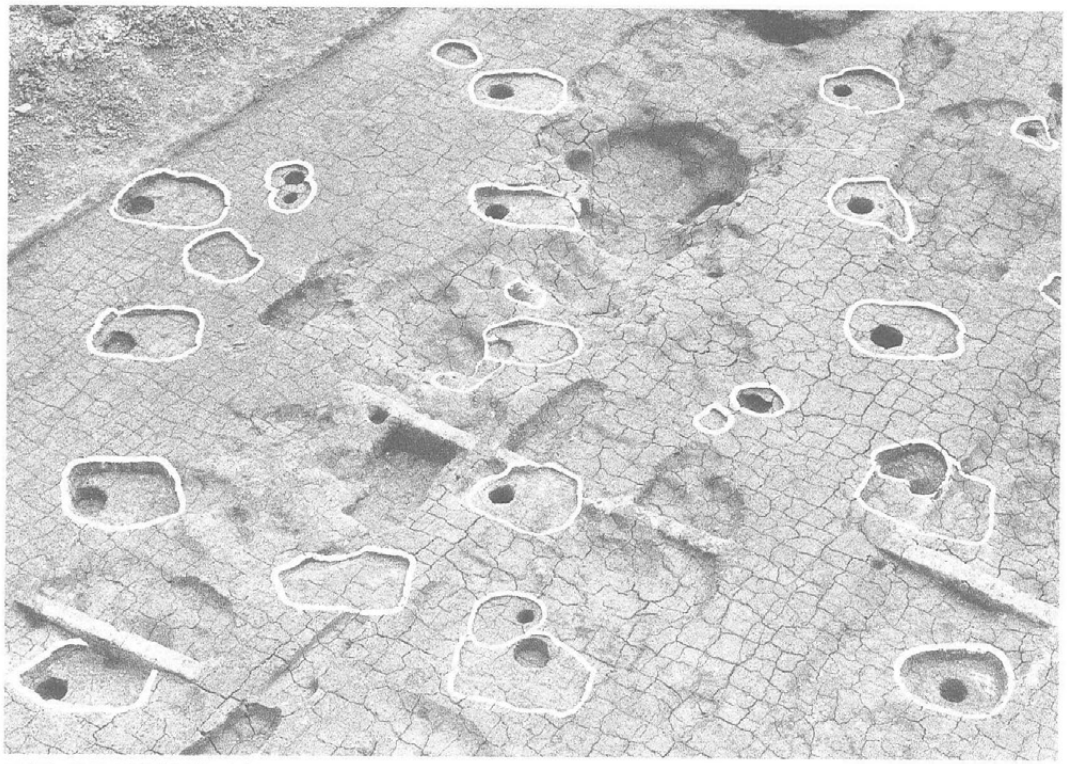
Ⅱ区南部(西から)

図版五　長原西地区　Ⅲ区全景

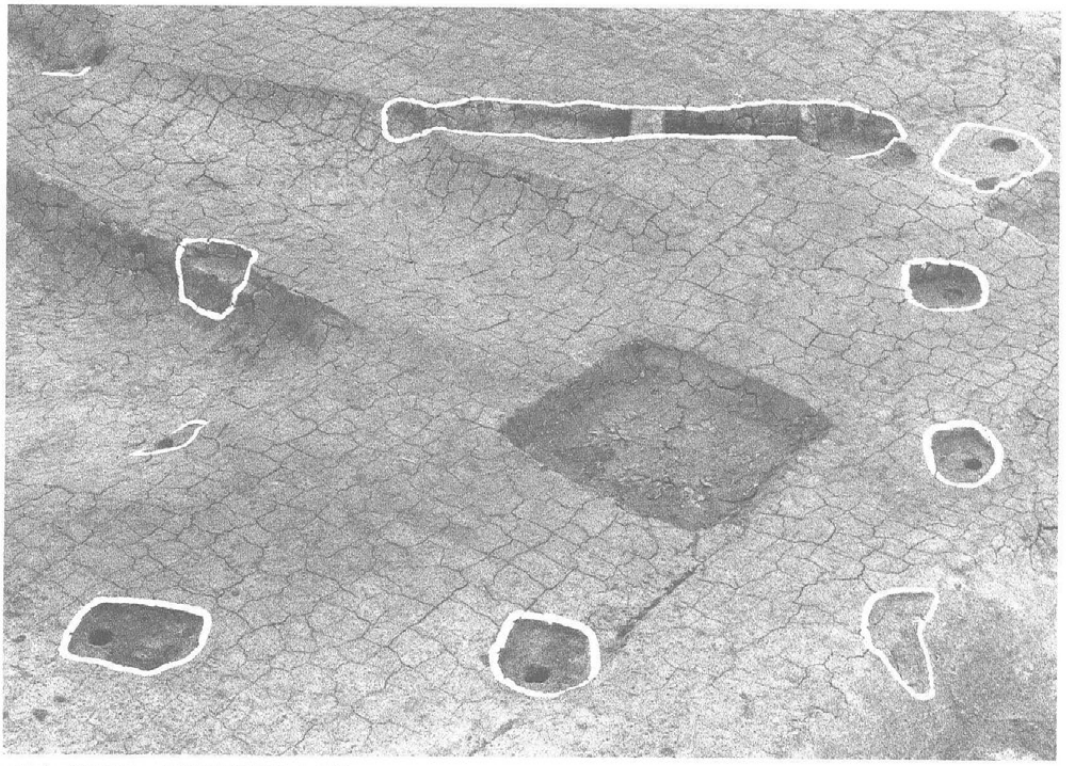
Ⅲ区北部（東から）

Ⅲ区南西部（東から）

図版六　長原西地区　古墳時代建物

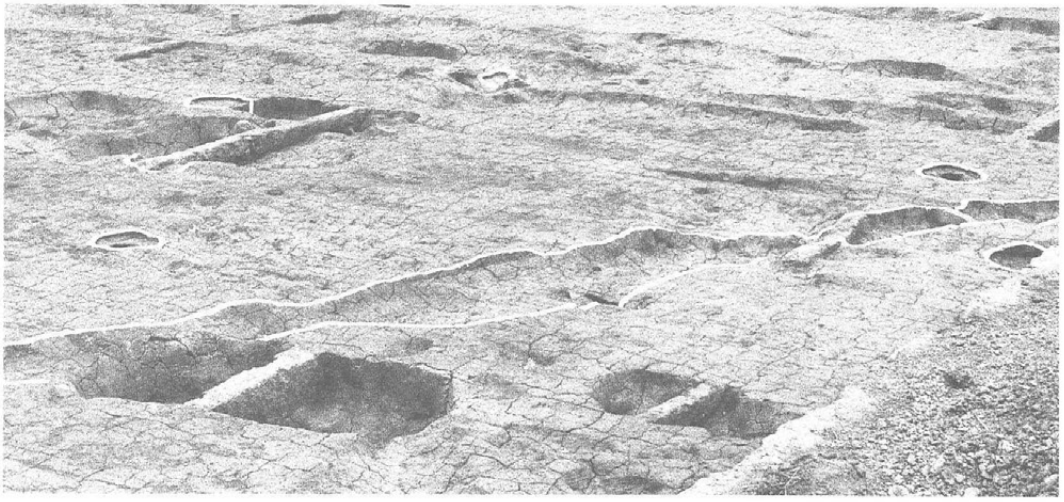


Ⅱ区　ＳＢ13(北西から)



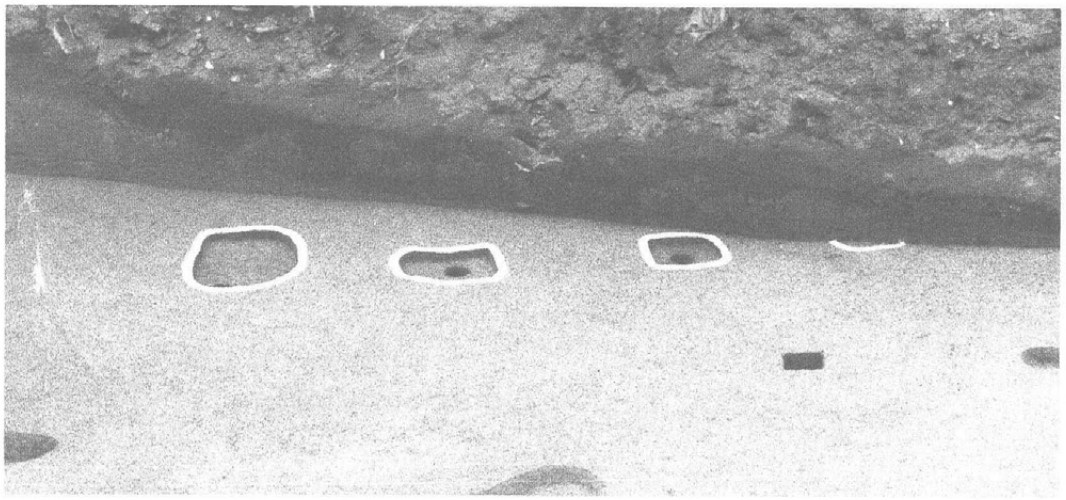
Ⅱ区　ＳＢ16・ＳＫ09(南西から)

図版七　長原西地区　古墳時代建物



Ⅱ区　ＳＢ15(北東から)

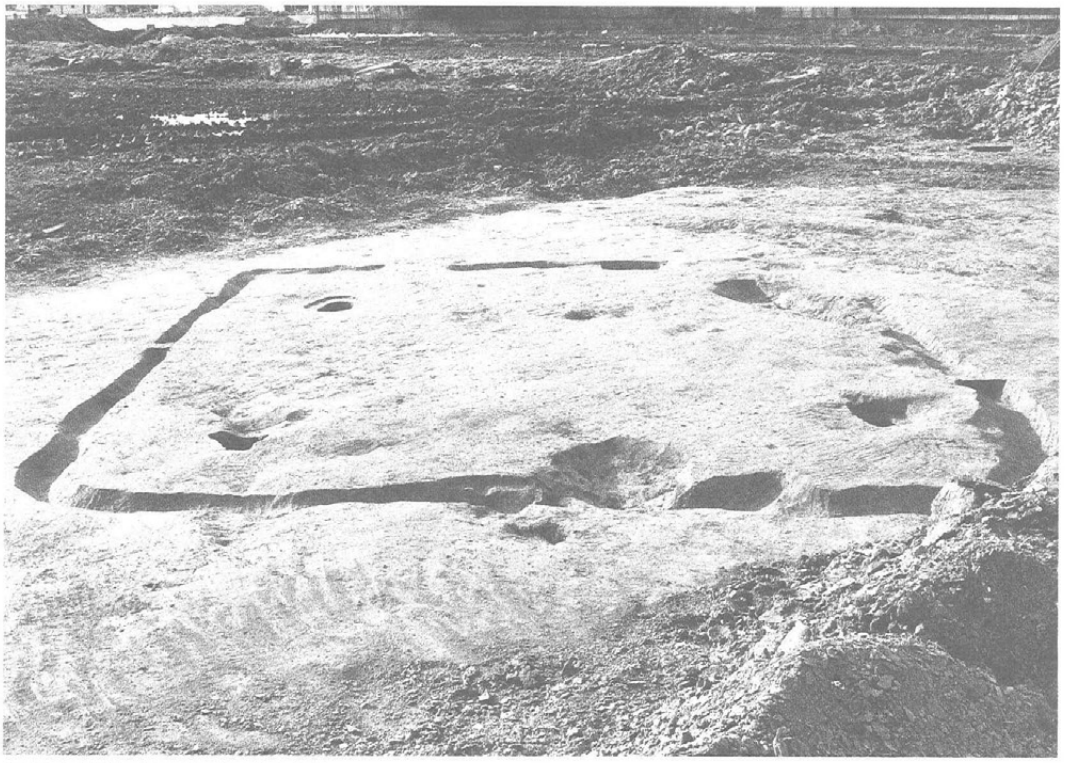
Ⅱ区　ＳＢ17(南東から)



Ⅱ区南部　ＳＢ23(東から)

図版八　長原西地区　古墳時代建物

Ⅲ区南部　ＳＢ31(西から)



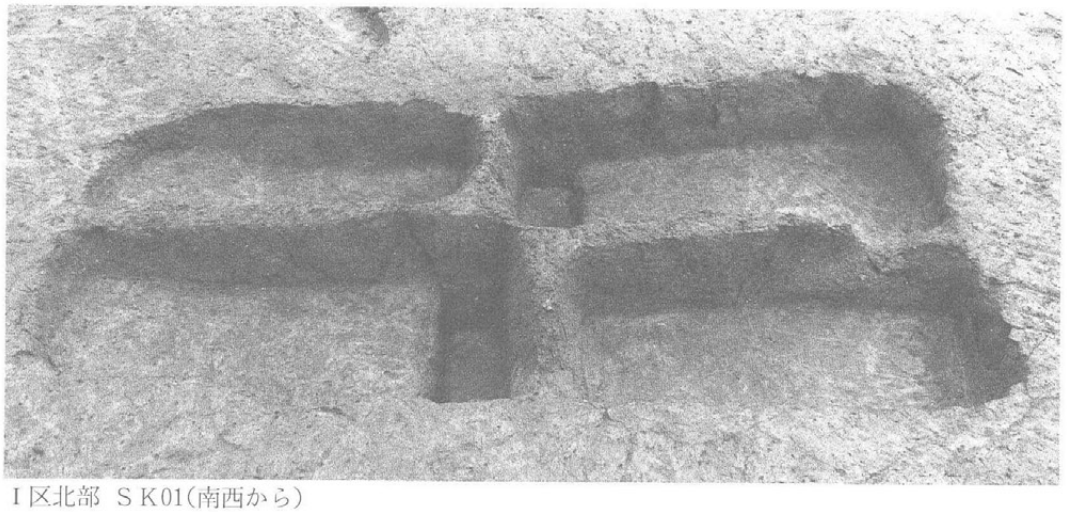
Ⅲ区北東部　ＳＢ35(南東から)

図版九　長原西地区　古墳時代井戸

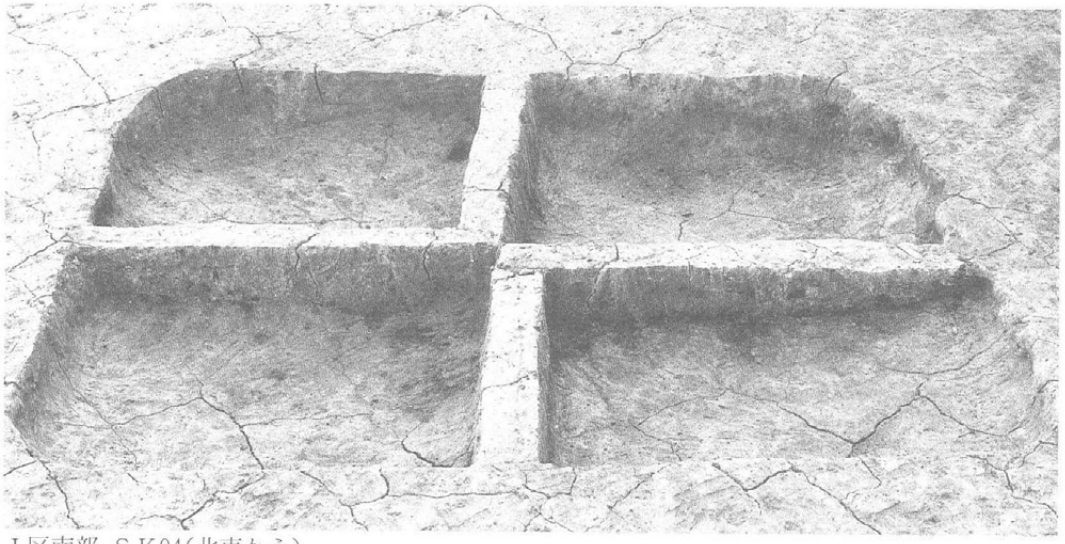
Ⅲ区北部　ＳＥ01(南西から)

Ⅲ区南部　ＳＥ02(南から)

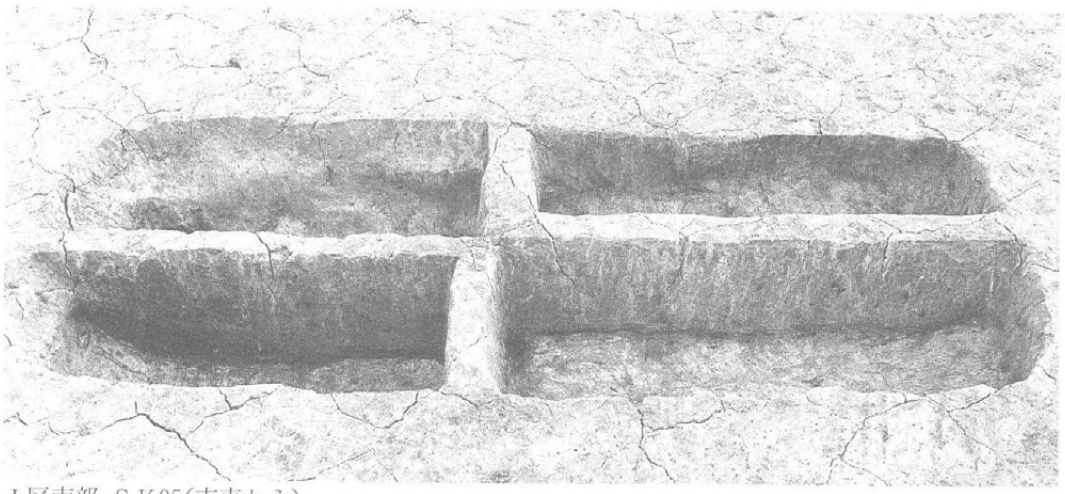
図版一〇　長原西地区　古墳時代土壙



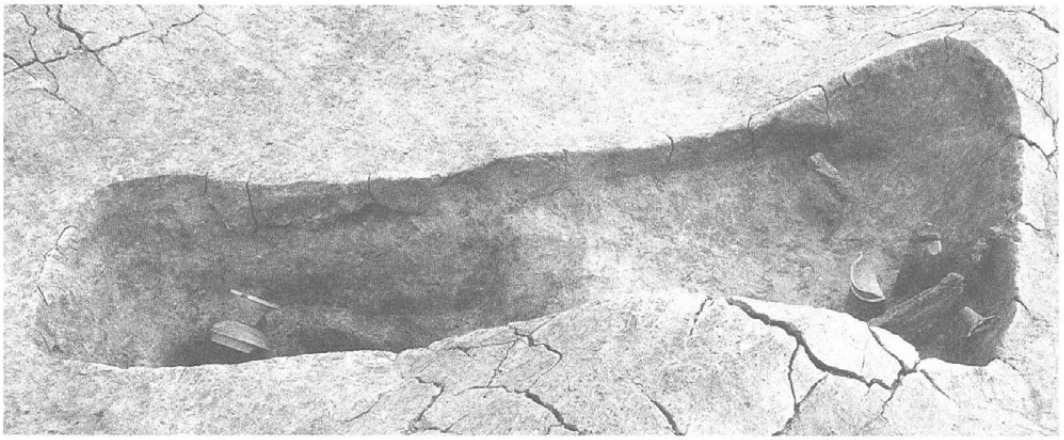
Ⅰ区北部　ＳＫ01(南西から)



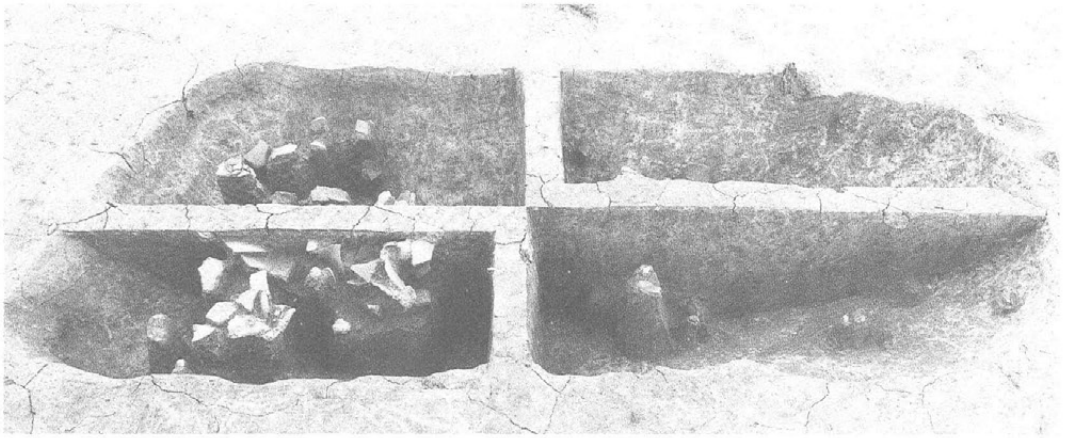
Ⅰ区南部　ＳＫ04(北東から)



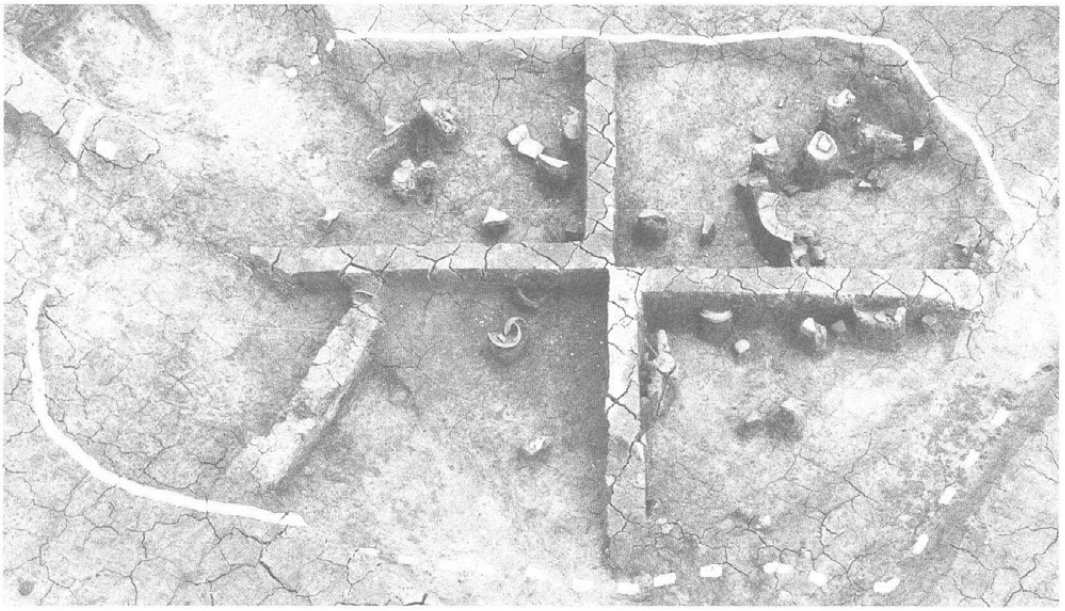
Ⅰ区南部　ＳＫ05(南東から)



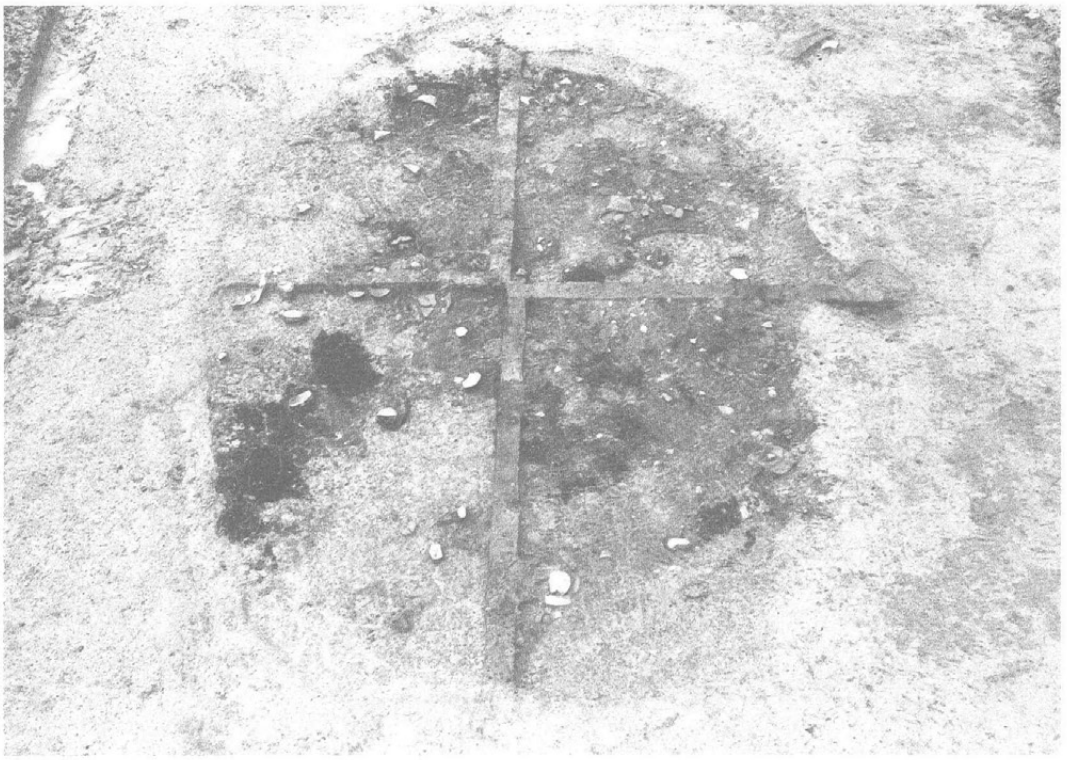
Ⅱ区　ＳＫ10(北西から)



Ⅱ区　ＳＫ11(南西から)



Ⅱ区　ＳＫ12(南西から)

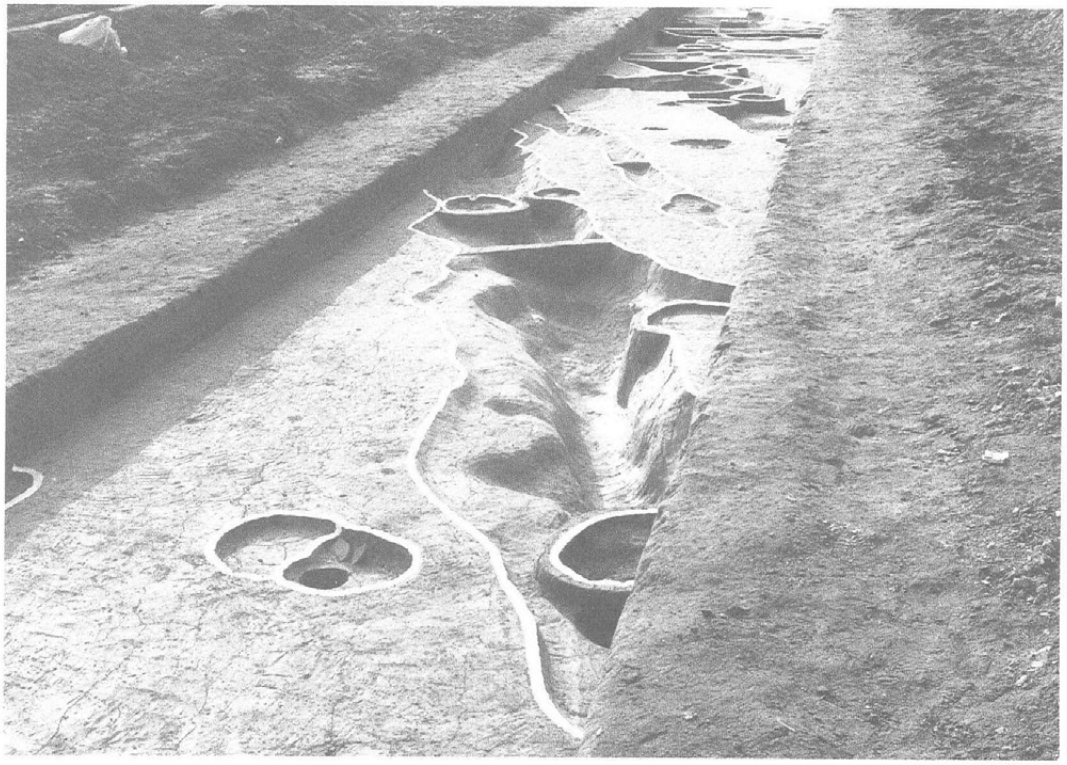


Ⅲ区東部　ＳＫ39(南から)

Ⅲ区東部　ＳＫ39(東から)

図版一三　長原西地区　古墳時代溝

Ⅲ区北部　ＳＤ18(南から)

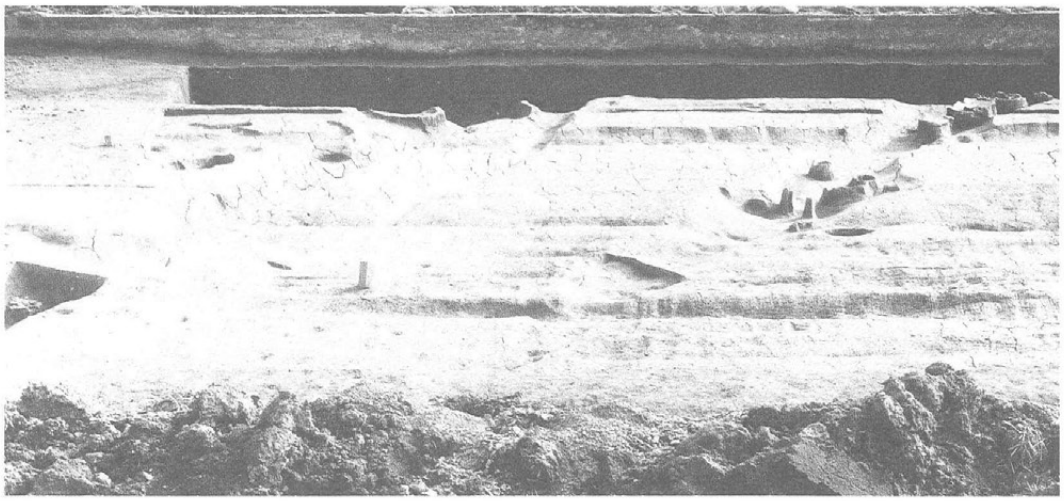


Ⅲ区北部　ＳＤ19・20(東から)

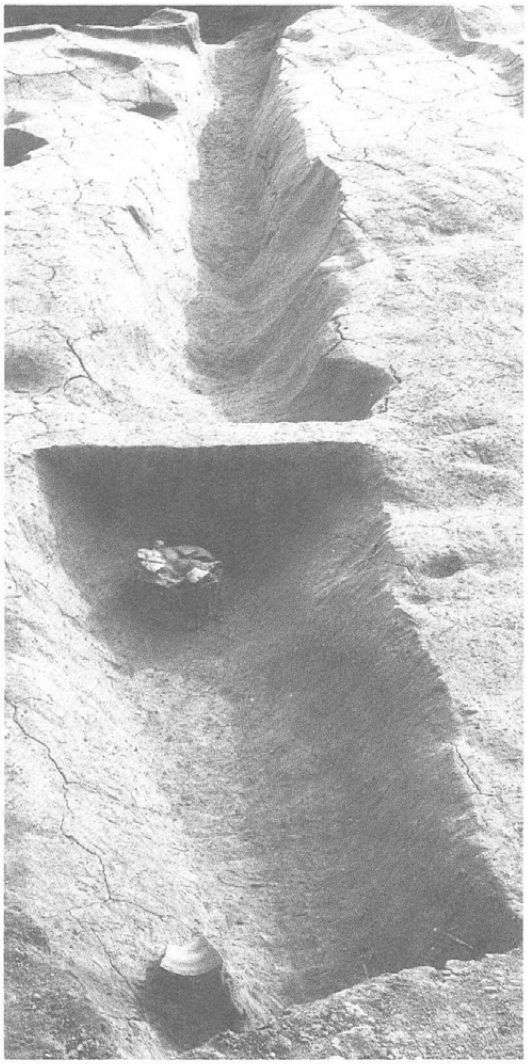
図版一四　長原西地区　古墳時代溝

Ⅲ区南部　ＳＤ28(西から)

Ⅲ区南部　ＳＤ31・32(西から)



Ⅲ区南部　ＳＤ33～35(北から)



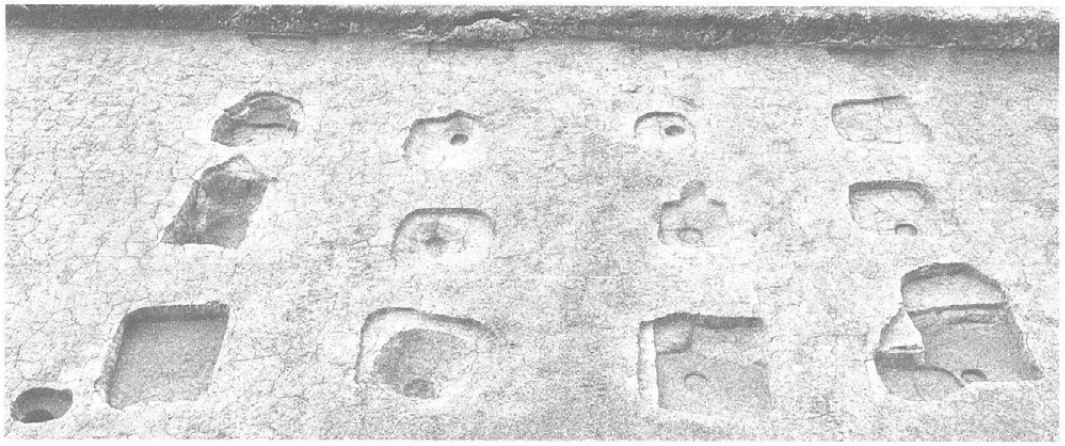
Ⅲ区　ＳＤ33(北から)

Ⅲ区　ＳＤ35(北から)

図版一六　長原西地区　古墳時代溝

Ⅲ区東部　ＳＤ36・37(東から)

Ⅲ区東部　ＳＤ38・39(南から)



Ⅰ区南部　ＳＢ08(西から)

Ⅰ区南部　ＳＢ09(西から)

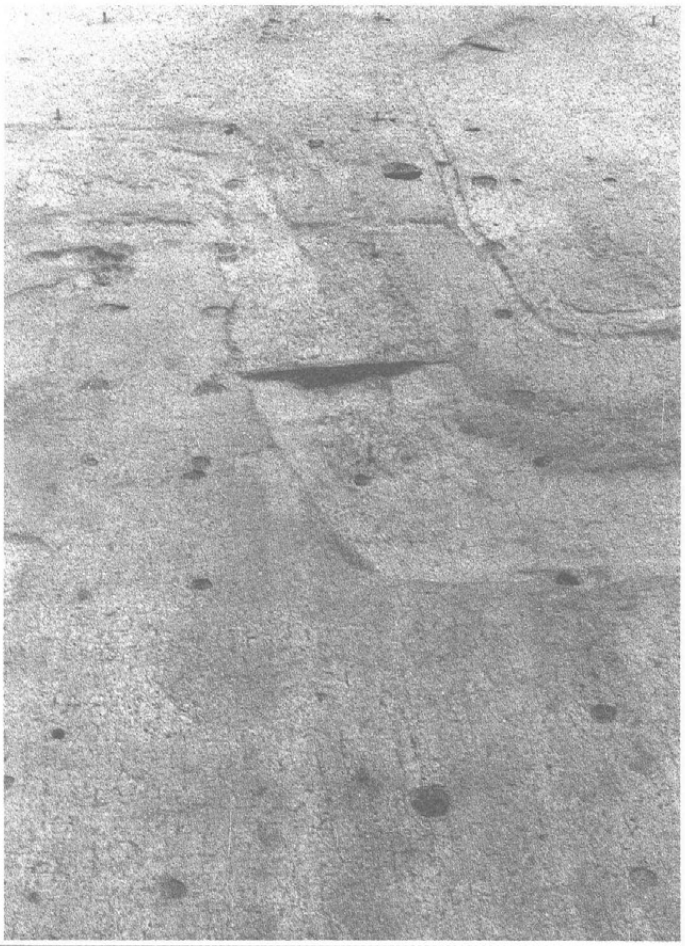
Ⅰ区南部　ＳＢ11・12(西から)

図版一八　長原西地区　平安時代建物

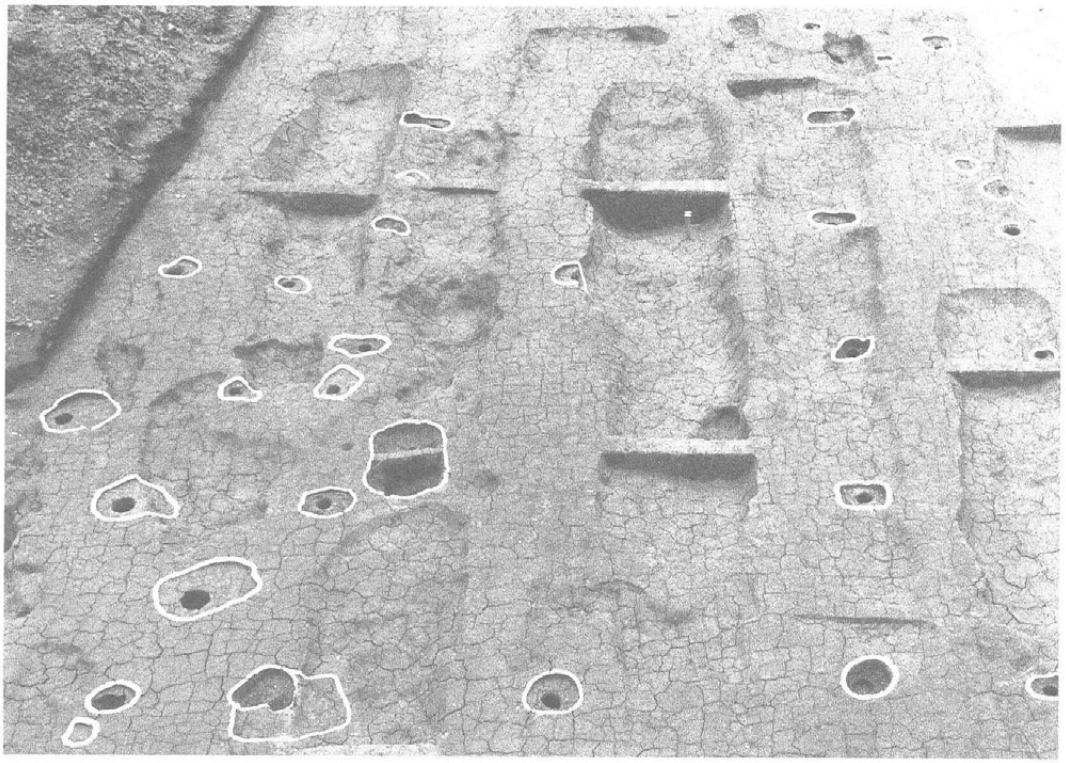
Ⅰ区　ＳＢ01・04(北から)

Ⅰ区　ＳＢ02(南から)

Ⅰ区　ＳＢ05・06(南から)



Ⅰ区南部　ＳＢ10(西から)



Ⅱ区　ＳＢ14(北から)

Ⅲ区西部　ＳＢ24(南から)